鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書14

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ

鳥取県東伯郡琴浦町

笠見（KASA　MI）第３遺跡Ⅱ

２００７

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

序

一般国道９号東伯中山道路の改築に伴う発掘調査は、平成１４年度から行われ、平成１８年度末時点で遺跡数は２３遺跡、調査面積は延べ２１万平方メートルに及んでいます。

この発掘調査は、平成１７年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち、琴浦町にある笠見第３遺跡では、弥生時代の集落跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。遺跡の営まれた丘陵上に立つと、弥生人も見ていたであろう日本海を臨むことができます。本書はその調査結果を報告書としてまとめたものです。

この報告書が、郷土の歴史を解き明かす一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

埋蔵文化財センターでは発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。笠見第３遺跡についても、現地説明会を開催したほか、ホームページ等で調査成果を速報的に紹介するなど、多くの方々にその素晴らしさを実感していただきました。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成１９年３月

鳥取県埋蔵文化財センター
所　長　久保　穰二朗

序　　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約６９１㎞の幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取―島根県境）までの９２．３㎞を管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡大山町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道９号のバイパス（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第９４条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成１８年度は、「梅田萱峯遺跡」、「箆津乳母ヶ谷第２遺跡」、「笠見第３遺跡」の３遺跡について鳥取県教育委員会と発掘調査の委託契約を締結し、鳥取県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「笠見第３遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成１９年３月

国土交通省　倉吉河川国道事務所

所　長　　嘉本　昭夫

例　　言

1．本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成18年度に行った笠見第３遺跡（Ｄ区）の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。
笠見第３遺跡（Ｄ区）：東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平730-31ほか　　調査面積：8,300㎡

3．本報告書で示す標高は、３級基準点H10-３-12を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。なお、Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。

4．本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の１/50,000地形図「伯耆浦安」「赤碕」、東伯町（現琴浦町）１/5,000地形図「新農業構造改善事業（東伯地区）№１」を使用した。

5．本発掘調査にあたり、鍛冶関連遺物の調査・整理について、たたら研究会委員　穴澤義功氏に指導助言をいただき、あわせて資料の分類及び観察表作成（第３章第３節）をお願いした。明記して深謝いたします。

6．本報告にあたり、調査前・調査後航空写真撮影、調査前・調査後地形測量、鍛冶関連遺物の金属学的分析、出土炭化材等の樹種同定、^{14}Ｃ年代測定、花粉分析、赤色顔料分析、遺構図浄書及び石器の実測・浄書の一部を業者委託した。

7．本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は、業者委託した分を除き、埋蔵文化財センター及び調査第一係（東伯調査事務所）で行った。

8．本報告書で使用した遺構・遺物写真は文化財主事・調査員が撮影した。

9．本報告書の執筆は調査を担当した職員が分担して行い、各文末に文責を記した。本書の編集は高尾・大川が行った。

10. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

11. 現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々・機関に御指導・御協力いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略・五十音順）
角田徳幸、琴浦町教育委員会、八幡浩二

凡　　例

1．遺物の注記における遺跡名には「カサミ」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
2．本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
　SI ：竪穴住居跡　SS：段状遺構　SB：掘立柱建物跡　SK：土坑　SX：木棺墓　SD：溝状遺構
　SA：柵列　P：柱穴・ピット
3．本調査（D区）における遺構番号は前回調査（A～C区）からの連番とせず、すべて新たに１・２・３…と付している。
4．発掘調査時における遺構名・番号と報告書記載時の遺構名・番号を、一部について変更したものがある。新旧遺構名対照表は第３章第１節に示した。
5．遺構図・遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下のとおりである。
　竪穴住居跡・段状遺構・掘立柱建物・溝状遺構・柵列：１/60、土坑・木棺墓・炭化材出土状況：１/40、遺物出土状況：１/20、土器：１／４、石器：２／３・１／２・１／４、土製品・鉄製品・鉄滓：１／２、玉製品：１／１・２／３
6．本書における土層名称・土器色調は、基本的には『新版　標準土色帳』による。
7．遺構図・遺物実測図に用いたトーン及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
　：地山・硬化面　：貼床　：焼土面　：炭化物集中層　：鉄滓付着範囲　：赤彩・赤色顔料付着範囲
　S：石器　F：鉄製品・鉄滓　J：玉製品
　●（土器・土製品）・□（石器）・▲（鉄製品・鉄滓）：遺物出土ポイント
8．遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、鉄器をトーンとし、それ以外のものは白抜きで示した。
9．遺構計測表・遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
10．本報告書における遺構・遺物の時期決定は下記編年対比表に基づいており、時期区分及び文章中の表記は前回調査に統一している。

編年対比表

	本書表記			清水1992	辻1999	濱田2003	松井1997	牧本1999	小口ほか2004
弥生時代	中期	中葉	Ⅲ-１期	Ⅲ-１					
			Ⅲ-２期	Ⅲ-２	Ⅲ-１		東伯耆Ⅰ期		
			Ⅲ-３期	Ⅲ-３	Ⅲ-２		東伯耆Ⅱ期		
		後葉	Ⅳ-１期	Ⅳ-１	Ⅳ-１ａ		東伯耆Ⅲ期		
			Ⅳ-２期	Ⅳ-２	Ⅳ-１ｂ				
			Ⅳ-３期	Ⅳ-３	Ⅳ－２		東伯耆Ⅳ期		
	後期	前葉	Ⅴ-１期	Ⅴ-１		Ⅴ-１期古層 Ⅴ-１期新層	東伯耆Ⅴ期		
		中葉	Ⅴ-２期	Ⅴ-２		Ⅴ-２期古層 Ⅴ-２期新層	東伯耆Ⅵ期		
		後葉	Ⅴ-３期	Ⅴ-３		Ⅴ-３期	東伯耆Ⅶ期		八橋Ⅰ期
	終末		Ⅵ-１期	Ⅵ-１			東伯耆Ⅷ・Ⅸ期		
			Ⅵ-２期	Ⅵ-２			東伯耆Ⅹ期		
古墳時代	前期	初頭					東伯耆Ⅺ期 東伯耆Ⅻ期	天神川Ⅰ期	八橋Ⅱ期
		前葉					東伯耆ⅩⅢ期	天神川Ⅱ期	
		中葉					東伯耆ⅩⅣ期	天神川Ⅲ期	
		後葉						天神川Ⅳ期	
	中期	前葉						天神川Ⅴ期	
		中葉						天神川Ⅵ期 天神川Ⅶ期	
		後葉						天神川Ⅷ期	
		末葉						天神川Ⅸ期	八橋Ⅲ期
	後期	前葉						天神川Ⅹ期	八橋Ⅳ期
		中葉							八橋Ⅴ期
		後葉							八橋Ⅵ期

【参考文献】
清水真一　1992「因幡・伯耆地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』木耳社、355～412頁
辻　信広　1999「第４章第１節　弥生中期中～後葉の土器について」辻　信広編『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会、147～151頁
濱田竜彦　2003「第Ⅶ章　大山山麓地域における弥生時代後期の土器編年」濱田竜彦編『史跡妻木晩田遺跡第４次発掘調査報告書―洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査』鳥取県教育委員会、222～235頁
松井　潔　1997「東の土器、南の土器―山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態―」『古代吉備』第19集、40～67頁
牧本哲雄　1999「第９章第１節　古墳時代の土器について」牧本哲雄編『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団、151～160頁
小口英一郎・北島大輔・原あづさ　2004「第５章第１節　八橋第８・９遺跡における６～７世紀の土器編年」小口英一郎編『八橋第８・９遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団、161～171頁
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店、34～72頁

目　　次

序
序文
例言
凡例

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過と方法 …… 2
　　（１）　調査の経過 …… 2
　　（２）　調査の方法 …… 3
　第３節　調査体制 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の成果と記録 …… 9
　第１節　遺跡の立地と層序 …… 9
　第２節　弥生時代の遺構・遺物 …… 12
　　（１）　概要 …… 12
　　（２）　竪穴住居跡 …… 13
　　（３）　段状遺構 …… 73
　　（４）　掘立柱建物跡 …… 77
　　（５）　土坑 …… 83
　　（６）　木棺墓 …… 102
　　（７）　溝状遺構 …… 102
　　（８）　柵列・土器溜り …… 107
　　（９）　ピット出土遺物 …… 108
　第３節　古墳時代の遺構・遺物 …… 109
　　（１）　概要 …… 109
　　（２）　竪穴住居跡 …… 109
　　（３）　掘立柱建物跡 …… 135
　　（４）　土坑 …… 135
　　（５）　溝状遺構・ピット …… 137
　　（６）　鍛冶遺構 …… 141

（７） 鍛冶関連遺物（分析資料） ……166
第４節　時期不明の遺構 ……171
（１） 掘立柱建物跡 ……171
（２） 土坑 ……182
（３） 柵列 ……189
第５節　遺物包含層及び出土遺物 ……192
（１） 谷部 ……192
（２） 尾根部 ……199

第４章　自然科学分析の成果 ……217
第１節　笠見第３遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 …（株式会社九州テクノリサーチ）217
第２節　笠見第３遺跡の自然科学分析 ……（株式会社古環境研究所）236
（１） 笠見第３遺跡出土炭化材の樹種同定 ……236
（２） 笠見第３遺跡の花粉分析 ……241
（３） 笠見第３遺跡出土資料の赤色顔料分析（蛍光Ｘ線分析） ……245
（４） 笠見第３遺跡出土資料の放射性炭素年代測定 ……264

第５章　総括 ……267
第１節　笠見第３遺跡における弥生～古墳時代集落の変遷と構造 ……267
第２節　笠見第３遺跡における赤色顔料関連遺物 ……273
第３節　まとめ ……280

巻末写真図版
抄録

挿図目次

第１図　琴浦町内一般国道９号（東伯中山道路）関連遺跡位置図……1
第２図　調査区位置図……2
第３図　琴浦町位置図……5
第４図　周辺遺跡分布図……8
第５図　調査区基本層序（尾根部）……9
第６図　調査前地形測量図……10
第７図　調査後地形測量図……11
第８図　SI2・SK8および出土遺物……14
第９図　SI3および出土遺物……16
第10図　SI4および出土遺物……17
第11図　SI5……18
第12図　SI5出土遺物……19
第13図　SI6（１）……21
第14図　SI6（２）……22
第15図　SI6出土遺物……22
第16図　SI7・８……23
第17図　SI8出土遺物……24
第18図　SI10（１）……25・26
第19図　SI10（２）……27
第20図　SI10（３）……29
第21図　SI10出土遺物（１）……30
第22図　SI10出土遺物（２）……31
第23図　SI10出土遺物（３）……32
第24図　SI11（１）……33
第25図　SI11（２）……34
第26図　SI11（３）……35
第27図　SI11出土遺物（１）……35
第28図　SI11出土遺物（２）……36
第29図　SI12（１）……37
第30図　SI12（２）および出土遺物……38
第31図　SI12出土遺物……39
第32図　SI13（１）……40
第33図　SI13（２）および出土遺物……41
第34図　SI14（１）……42
第35図　SI14（２）……43
第36図　SI14出土遺物……44
第37図　SI15（１）……45・46
第38図　SI15（２）および出土遺物……47
第39図　SI15出土遺物……48
第40図　SK35……49
第41図　SI17（１）……52
第42図　SI17（２）……53
第43図　SI17出土遺物……53
第44図　SI18および出土遺物……55
第45図　SI19および出土遺物……56
第46図　SI20……58
第47図　SI20出土遺物……59
第48図　SI21および出土遺物……60
第49図　SI23および出土遺物……61
第50図　SI23出土遺物……62
第51図　SI24（１）……63
第52図　SI24（２）……64
第53図　SI24出土遺物（１）……65
第54図　SI24出土遺物（２）……66
第55図　SI25および出土遺物……67
第56図　SI27（１）……68
第57図　SI27（２）および出土遺物……69
第58図　SI27出土遺物……70
第59図　SI29……71
第60図　SI30（１）……72
第61図　SI30（２）および出土遺物……73
第62図　SS1および出土遺物……74
第63図　SS2および出土遺物……75
第64図　SS3……76
第65図　SS3出土遺物……77
第66図　SS4および出土遺物……78
第67図　SB1……79
第68図　SB3……80
第69図　SB4および出土遺物……81
第70図　SB13……82
第71図　SK1……83
第72図　SK4および出土遺物……83
第73図　SK5および出土遺物……83
第74図　SK6および出土遺物……84
第75図　SK7および出土遺物……84
第76図　SK9および出土遺物……85
第77図　SK10……86
第78図　SK10出土遺物……86
第79図　SK14……87
第80図　SK14上層遺物出土状況および出土遺物……88
第81図　SK14上層出土遺物……89
第82図　SK14下層遺物出土状況……90
第83図　SK14下層出土遺物……91
第84図　SK18および出土遺物……92
第85図　SK19および出土遺物……92
第86図　SK20……93
第87図　SK20遺物出土状況……93
第88図　SK20出土遺物（１）……94
第89図　SK20出土遺物（２）……95

第90図　SK21・23および出土遺物 ……96
第91図　SK24 ……97
第92図　SK24出土遺物 ……98
第93図　SK25 ……99
第94図　SK26 ……99
第95図　SK38および出土遺物 ……100
第96図　SK39および出土遺物 ……101
第97図　SX1および出土遺物 ……102
第98図　SD1、SD2、SK15および出土遺物 ……103
第99図　SD3 ……104
第100図　SA3および出土遺物 ……104
第101図　土器溜り遺物出土状況 ……105
第102図　土器溜り出土遺物 ……106
第103図　ピット内出土遺物 ……107
第104図　SI1（１） ……110
第105図　SI1（２） ……111
第106図　SI1出土遺物（１） ……112
第107図　SI1出土遺物（２） ……113
第108図　SI1出土遺物（３） ……114
第109図　SI9（１） ……115・116
第110図　SI9（２） ……118
第111図　SI9出土遺物 ……119
第112図　SI16（１） ……120
第113図　SI16（２） ……121
第114図　SI16出土遺物 ……121
第115図　SI22b（１） ……123・124
第116図　SI22b（２） ……125
第117図　SI22b出土遺物 ……125
第118図　SI22a（１） ……126
第119図　SI22a（２） ……127
第120図　SI22a出土遺物（１） ……128
第121図　SI22a出土遺物（２） ……129
第122図　SI22上層遺物出土状況および出土遺物 ……130
第123図　SI26 ……131
第124図　SI26遺物出土状況 ……132
第125図　SI26出土遺物 ……132
第126図　SI28（１） ……134
第127図　SI28（２）および出土遺物 ……135
第128図　SB7 ……136
第129図　SK17、SK28および出土遺物 ……137
第130図　SD4 ……138
第131図　SD5～８ ……139
第132図　P184 ……140
第133図　鍛冶関連遺構・遺物分布図 ……141
第134図　鍛冶遺構 ……142
第135図　鍛冶炉 ……143
第136図　SK27 ……144
第137図　SK27出土遺物 ……144
第138図　鍛冶遺構周辺鍛冶関連遺物分布図 ……145
第139図　鍛冶関連遺物分類模式図 ……151
第140図　笠見第３遺跡鉄関連遺物構成図（１） ……152
第141図　笠見第３遺跡鉄関連遺物構成図（２） ……153
第142図　SK27・SK27-2出土鍛冶関連遺物 ……154
第143図　SI22出土鍛冶関連遺物（１） ……155
第144図　SI22出土鍛冶関連遺物（２） ……156
第145図　SI22出土鍛冶関連遺物（３） ……157
第146図　SI26・28、SD4出土鍛冶関連遺物 ……158
第147図　SD5・遺構外出土鍛冶関連遺物 ……159
第148図　遺構外出土鍛冶関連遺物 ……160
第149図　SB2 ……171
第150図　SB5 ……172
第151図　SB6 ……173
第152図　SB8 ……174
第153図　SB9 ……175
第154図　SB10 ……176
第155図　SB11 ……177
第156図　SB12b ……178
第157図　SB12a ……179
第158図　SB14 ……180
第159図　SB15 ……181
第160図　SB16 ……182
第161図　SK2・3・11 ……183
第162図　SK12および出土遺物 ……184
第163図　SK13 ……184
第164図　SK16 ……185
第165図　SK22 ……185
第166図　SK29 ……186
第167図　SK30 ……186
第168図　SK31 ……187
第169図　SK32・33 ……187
第170図　SK34・36・37 ……188
第171図　SA1 ……189
第172図　SA2 ……190
第173図　SA4 ……191
第174図　SA5 ……192
第175図　谷部基本層序位置図 ……193
第176図　谷部土層断面図（１） ……194
第177図　谷部土層断面図（２） ……195
第178図　遺構外出土遺物（谷部・褐色土ほか） ……196
第179図　遺構外出土遺物（谷部・暗褐色土） ……197
第180図　谷部出土石器 ……198
第181図　谷部出土鉄器 ……199
第182図　遺構外出土遺物（尾根部） ……200
第183図　Fe-O系平衡状態図および鍛造剥片３

層分離型模式図……225
第184図　笠見第３遺跡における花粉ダイアグラム……244
第185図　笠見第３遺跡出土遺物における鉄（Fe_2O_3）の含量（wt%）……247
第186図　Ｘ線スペクトル図（１）資料36……249
第187図　Ｘ線スペクトル図（２）資料36′……250
第188図　Ｘ線スペクトル図（３）資料37……251
第189図　Ｘ線スペクトル図（４）資料37′……252
第190図　Ｘ線スペクトル図（５）資料38……253
第191図　Ｘ線スペクトル図（６）資料38′……254
第192図　Ｘ線スペクトル図（７）資料39……255
第193図　Ｘ線スペクトル図（８）資料39′……256
第194図　Ｘ線スペクトル図（９）資料40……257
第195図　Ｘ線スペクトル図(10)資料40′……258
第196図　Ｘ線スペクトル図(11)資料41……259
第197図　Ｘ線スペクトル図(12)資料41′……260
第198図　Ｘ線スペクトル図(13)資料42……261
第199図　Ｘ線スペクトル図(14)資料43……262
第200図　Ｘ線スペクトル図(15)資料44……263
第201図　集落変遷図（１）……268
第202図　弥生時代中期後葉～後期後葉の鉄器組成……269
第203図　集落変遷図（２）……270
第204図　赤色顔料関連遺物（１）……277
第205図　赤色顔料関連遺物（２）……278
第206図　赤色顔料関連遺物（３）……279

挿表目次

表１　東伯中山道路関係の調査一覧……２
表２　新旧遺構名対照表……12
表３　SI6ピット一覧表……20
表４　SI10樹種同定結果……26
表５　SI11ピット一覧表……35
表６　SI12ピット一覧表……38
表７　SI14ピット一覧表……43
表８　SI15樹種同定結果……45･46
表９　SI17ピット一覧表……54
表10　SI24ピット一覧表……64
表11　SI9樹種同定結果……118
表12　SI22樹種同定結果……124
表13　鍛冶関連遺物組成一覧表……146
表14　鍛冶関連微細遺物出土地点別重量一覧表（１）……147
表15　鍛冶関連微細遺物出土地点別重量一覧表（２）……148
表16　鍛冶関連微細遺物出土地点別重量一覧表（３）……149
表17　鍛冶関連遺物出土遺構・地区別重量表……150
表18　鉄関連遺物観察表（１）……161
表19　鉄関連遺物観察表（２）……162
表20　鉄関連遺物観察表（３）……163
表21　鉄関連遺物観察表（４）……164
表22　鉄関連遺物観察表（５）……165
表23　笠見第３遺跡鉄関連遺物分析資料一覧表……167
表24　分析資料観察表（１）……168
表25　分析資料観察表（２）……168
表26　分析資料観察表（３）……169
表27　分析資料観察表（４）……169
表28　分析資料観察表（５）……170
表29　分析資料観察表（６）……170
表30　土器・土製品観察表（１）……201
表31　土器・土製品観察表（２）……202
表32　土器・土製品観察表（３）……203
表33　土器・土製品観察表（４）……204
表34　土器・土製品観察表（５）……205
表35　土器・土製品観察表（６）……206
表36　土器・土製品観察表（７）……207
表37　土器・土製品観察表（８）……208
表38　土器・土製品観察表（９）……209
表39　土器・土製品観察表(10)……210
表40　土器・土製品観察表(11)……211
表41　土器・土製品観察表(12)……212
表42　赤色顔料関連遺物観察表……212
表43　石器観察表（１）……213
表44　石器観察表（２）……214
表45　石器観察表（３）……215
表46　玉類観察表……215
表47　鉄器観察表……216
表48　供試材の履歴と調査項目……226
表49　供試材の化学組成……226
表50　出土遺物の調査結果のまとめ……227
表51　古墳時代前期・中期の鉱石系精錬・鍛錬鍛冶滓出土例……228
表52　笠見第３遺跡における樹種同定結果……238
表53　笠見第３遺跡における花粉分析結果……243
表54　笠見第３遺跡出土遺物の蛍光Ｘ線分析結果……248
表55　資料と方法……264

表56　測定結果 ……264
表57　SI・SBピット一覧表 ……266
表58　笠見第３遺跡主要要素一覧表 ……271
表59　赤色顔料関連遺物集計表 ……280

文中写真目次

写真１　調査風景……３
写真２　現地説明会風景……３
写真３　椀形鍛冶滓･鉄塊系遺物の顕微鏡組織…230
写真４　粒状滓の顕微鏡組織 ……231
写真５　粒状滓・鍛造剥片の顕微鏡組織 ……232
写真６　鍛造剥片・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 …233
写真７　椀形鍛冶滓（含鉄）の顕微鏡組織 ……234
写真８　EPMA調査結果　反射電子像(COMP)・特性Ｘ線像および定量分析値 ……235
写真９　笠見第３遺跡の炭化材１ ……239
写真10　笠見第３遺跡の炭化材２ ……240
写真11　笠見第３遺跡の花粉・胞子 ……244

写真図版目次

PL. 1　1　調査区遠景（調査前・西から）
　　2　調査区遠景（調査後・南から）
PL. 2　1　調査後全景（南から）
PL. 3　1　調査後完掘状況（南側）
　　2　調査後完掘状況（北側）
PL. 4　1　SI15炭化材・土器出土状況（北東から）
　　2　SI15炭化材および遺物出土状(南西から)
　　3　SI15垂木および遺物出土状況(北西から)
PL. 5　1　SK14遺物出土状況（北から）
　　2　SK20遺物出土状況（西から）
　　3　SK20高坏166出土状況（南から）
　　4　SK20遺物出土状況（南東から）
PL. 6　1　SI15炭化材および遺物出土状況(北から)
　　2　SI15高坏68出土状況（北から）
　　3　SK14甕148出土状況（西から）
PL. 7　1　SK14出土遺物
　　2　SK20出土遺物
　　3　SI15出土遺物
PL. 8　1　SI10炭化材出土状況（北から）
　　2　SI10南西側炭化材出土状況（北東から）
PL. 9　1　赤色顔料付着礫・石器
　　2　SI13台石出土状況（東から）
　　3　赤色顔料付着土器・石器
　　4　SI17出土壺69
　　5　SI9土層断面および炭化材・焼土出土状況（北から）
PL. 10　1　SI10土層断面および炭化材出土状況（南西から）
　　2　SI10南東側遺物出土状況（西から）
　　3　SI10出土遺物
PL. 11　1　鍛冶遺構完掘状況（北から）
　　2　SK27鉄滓出土状況（北西から）
　　3　SK27再結合滓検出状況（北西から）
PL. 12　1　SK27・鍛冶炉土層断面（北西から）
　　2　SI28炉検出状況（北東から）
　　3　SI28被熱粘土塊検出状況（北東から）
　　4　SK27出土遺物
　　5　鍛冶炉土層断面（北西から）
　　6　SK27土層断面（北西から）
PL. 13　1　鍛冶関連遺物
PL. 14　1　SI2完掘状況（北東から）
　　2　SI3完掘状況（東から）
　　3　SI4完掘状況（北西から）
PL. 15　1　SI5完掘状況（西から）
　　2　SI6完掘状況（西から）
　　3　SI10完掘状況（北から）
PL. 16　1　SI11床面検出状況（北から）
　　2　SI11　１層中甕出土状況（北西から）
　　3　SI11完掘状況（北から）
PL. 17　1　SI11出土土器
　　2　SI11出土土器
　　3　SI12出土土器
　　4　SI17出土土器
PL. 18　1　SI12b完掘状況（北東から）
　　2　SI12完掘状況（北から）
　　3　SI13完掘状況（東から）
PL. 19　1　SI14b完掘状況（東から）
　　2　SI14完掘状況（東から）
PL. 20　1　SI15完掘状況（北から）
　　2　SI17完掘状況（南から）
PL. 21　1　SI18完掘状況（北から）
　　2　SI21甕80出土状況（北東から）
　　3　SI21出土土器
　　4　SI21完掘状況（南から）
PL. 22　1　SI19・20・28完掘状況（北から）
　　2　SI20南北ベルト土層断面（西から）

	3	SI19・20北ベルト土層断面（西から）
	4	SI20床面遺物出土状況（南から）
PL. 23	1	SI20出土土器
	2	SI23完掘状況（南から）
	3	SI23器台81出土状況（南から）
	4	SI24周堤崩落土検出状況（北東から）
	5	SI23出土土器
	6	SI24完掘状況（北から）
PL. 24	1	SI25完掘状況（南から）
	2	SI25出土土器
	3	SI27遺物出土状況（北から）
	4	SI27完掘状況（南から）
PL. 25	1	SI29完掘状況（北東から）
	2	SI30完掘状況（西から）
	3	SI30出土土器
	4	SI30出土土器
	5	SI30遺物出土状況（西から）
PL. 26	1	SS1完掘状況（北から）
	2	SS2完掘状況（北から）
	3	SS2出土土器
	4	SS4完掘状況（西から）
	5	SS4土層断面（北西から）
PL. 27	1	SS3完掘状況（東から）
	2	SS3遺物出土状況（南東から）
	3	SS3遺物出土状況（南東から）
	4	SS3出土土器
PL. 28	1	SB1完掘状況（北西から）
	2	SB1-P3礫出土状況（北東から）
	3	SB1-P6柱痕内礫出土状況（南西から）
	4	SB3完掘状況（南から）
	5	SB4完掘状況（西から）
PL. 29	1	SK1完掘状況（西から）
	2	SK4完掘状況（北から）
	3	SK5炭化物・焼土塊検出状況（北から）
	4	SK7完掘状況（北から）
	5	SK6完掘状況（北西から）
PL. 30	1	SK9完掘状況（南東から）
	2	SK9土層断面（北東から）
	3	SK15完掘状況（東から）
	4	SK10遺物出土状況（南東から）
	5	SK10完掘状況（北から）
PL. 31	1	SK14床面遺物出土状況（北から）
	2	SK14完掘状況（北から）
	3	SK19完掘状況（北から）
	4	SK21完掘状況（南から）
PL. 32	1	SK20下層遺物出土状況（東から）
	2	SK20完掘状況（東から）
	3	SK23完掘状況（南から）
	4	SK25完掘状況（北から）
	5	SK24遺物出土状況（北から）
PL. 33	1	SK24完掘状況（西から）
	2	SK38焼成粘土塊出土状況（南から）
	3	SK38完掘状況（南西から）
PL. 34	1	SK39完掘状況（北東から）
	2	SX1土層断面（東から）
	3	SX1小口痕検出状況（南東から）
	4	SX1完掘状況（北から）
PL. 35	1	SD1・SA2完掘状況（北から）
	2	SD2完掘状況（北から）
	3	SD3完掘状況（北東から）
PL. 36	1	SI1土層断面（南東から）
	2	SI1遺物出土状況（北から）
	3	SI1c・d完掘状況（南から）
PL. 37	1	SI1完掘状況（東から）
	2	SI1a-P15半裁状況（北から）
	3	SI9炭化材出土状況（北東から）
PL. 38	1	SI7・８・９完掘状況（北から）
	2	SI8土層断面（南西から）
PL. 39	1	SI16完掘状況（東から）
	2	SI16遺物出土状況（南西から）
	3	SI16坏蓋229出土状況（北東から）
	4	SI16台石S75出土状況（北東から）
PL. 40	1	SI22b炭化材出土状況（北から）
	2	SI22b炭化材出土状況（北西から）
	3	SI22b完掘状況（北から）
PL. 41	1	SI22a礫出土状況（南から）
	2	SI22a床面付近石器出土状況(北東から)
	3	SI22a完掘状況（北から）
PL. 42	1	SI22上層遺物出土状況（北西から）
	2	SI22 ２層鉄床石出土状況 （北東から）
	3	SI22出土鍛冶関連石器
PL. 43	1	SI26 ３層上面遺物出土状況(東から)
	2	SI26床面付近遺物出土状況（南から）
	3	SI26完掘状況（南西から）
PL. 44	1	SI28完掘状況（北から）
	2	SI28被熱粘土塊断面（北東から）
	3	SI28床面直上坏身243出土状況(北から)
	4	SK17遺物出土状況（南東から）
PL. 45	1	SK17完掘状況（東から）
	2	SK28遺物出土状況（北から）
	3	SK28完掘状況（東から）
PL. 46	1	SD4完掘状況（北から）
	2	SD5・６完掘状況（南から）
	3	SB2完掘状況（西から）

PL. 47　1　SB7完掘状況（北から）
　　2　SB8完掘状況（北から）
　　3　SB10完掘状況（北から）
　　4　SB9完掘状況（北東から）
　　5　SB11完掘状況（北から）
PL. 48　1　SB12b-P1土層断面（南から）
　　2　SB12b-P4土層断面（北から）
　　3　SB12a南側掘り方土層断面（南から）
　　4　SB12a北側掘り方土層断面（東から）
PL. 49　1　SB12完掘状況（西から）
　　2　SB14完掘状況（東から）
　　3　SB15完掘状況（北から）
PL. 50　1　SB16・SK16完掘状況（北から）
　　2　SK2完掘状況（北から）
　　3　SK3完掘状況（東から）
　　4　SK11完掘状況（南東から）
　　5　SK12完掘状況（北から）
PL. 51　1　SK13土層断面（北から）
　　2　SK13焼土・炭化材検出状況（東から）
　　3　SK22土層断面（南から）
　　4　SK22完掘状況（北東から）
　　5　SK29完掘状況（北東から）
　　6　SK30完掘状況（北から）
PL. 52　1　SK31完掘状況（北西から）
　　2　SK32完掘状況（北東から）
　　3　SK33完掘状況（西から）
　　4　SK34完掘状況（東から）
　　5　SK36完掘状況（北から）
　　6　SK37完掘状況（東から）
PL. 53　1　SK35完掘状況（北から）
　　2　SK35土層断面（南西から）
　　3　SA4完掘状況（北から）
PL. 54　1　SA1完掘状況（北西から）
　　2　土器溜り検出状況（北から）
　　3　土器溜り検出状況（西から）
PL. 55　1　谷部東西ベルト土層断面（北西から）
　　2　谷部南北ベルト土層断面（北から）
　　3　谷部南北ベルト土層断面（北西から）
PL. 56　1　SS4出土土器
　　2　SK19出土土器
　　3　SK20出土土器
　　4　SK6出土土器
　　5　SK39出土土器
PL. 57　1　SK24出土土器
　　2　SK24出土土器
　　3　土器溜り出土土器
PL. 58　1　土器溜り出土土器
PL. 59　1　SI6・10・11出土土器
PL. 60　1　SI12・13・14、SB4・７、SA3出土土器
PL. 61　1　SI17～20・24・25出土土器
PL. 62　1　SI23～25・27出土土器
PL. 63　1　SK4～7・9・10・12・15・18出土土器
PL. 64　1　SK14・17・19・21・23・27・28出土土器
PL. 65　1　SS1～４、SK24・38、SD1・２出土土器
PL. 66　1　SI2～5・8出土土器
　　2　SK20出土粘土塊
　　3　SK39、P82・140・160・182出土土器
　　4　褐色土出土手づくね土器
PL. 67　1　SX1、土器溜り出土土器
　　2　剥片石器
　　3　SI10出土石器
PL. 68　1　SI26出土土器
　　2　SI16出土土器
　　3　SI28出土土器
　　4　SI9出土土器
　　5　SK17出土土器
　　6　SI22出土土器
　　7　P184出土土器
PL. 69　1　SI1・９出土土器
PL. 70　1　SI16・22・26・28出土土器
PL. 71　1　谷部褐色土、南側暗褐色土出土土器
PL. 72　1　谷部出土土器
PL. 73　1　谷部出土土器
　　2　遺構外出土土器
PL. 74　1　谷部暗褐色土出土土器
　　2　SI1出土石器
　　3　SI22a出土石器
PL. 75　1　調査区内出土石斧・石包丁・砥石
　　2　調査区内出土敲石・磨石・台石
　　3　調査区内出土石錘
　　4　SI22上層出土鉄床石
PL. 76　1　調査区内出土鉄器
　　2　鉄器Ｘ線写真
PL. 77　1　鍛冶関連遺物（１）
　　2　鉄滓等Ｘ線写真（１）
PL. 78　1　鍛冶関連遺物（２）
　　2　鉄滓等Ｘ線写真（２）

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

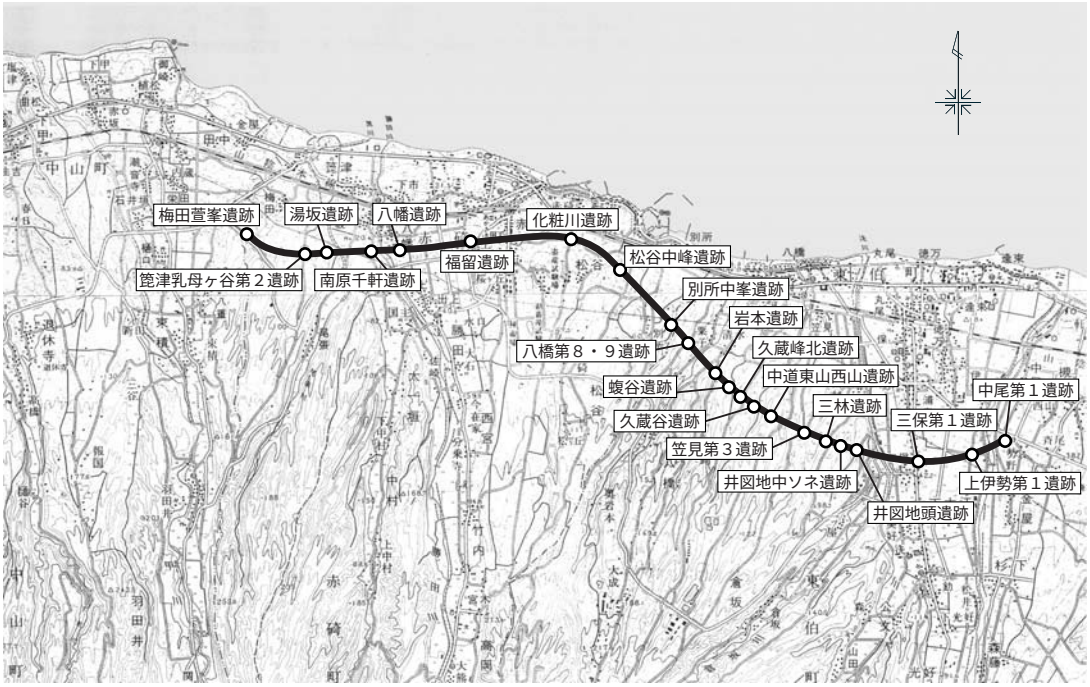
山陰地方を東西に貫く国道９号は、交通混雑の緩和を図ることに加え、将来の国土幹線道路としての役割を果たすべく、山陰自動車道の整備事業が進められている。鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画され、一部供用開始された区間もある。

このうち東伯中山道路の計画地内には多数の遺跡があり、平成11年度からの地元教育委員会による試掘調査を経て、平成14年度から本格的な発掘調査が行われている。その延べ面積は平成18年度末現在で約215,000㎡となっている（第１図・表１）。

笠見第３遺跡もこの計画地内に存在するため、平成12年度から平成14年度にかけて東伯町（現・琴浦町）教育委員会による試掘調査が行われた。試掘調査では竪穴住居跡、土坑などが検出され、弥生土器・土師器・須恵器が出土したことから弥生～古墳時代の集落跡が存在することが判明した。今回の調査地内でも竪穴住居跡が１棟確認されている。

この結果を受けて、国土交通省倉吉河川国道事務所と鳥取県教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを経て、平成14年度から平成15年度にかけて財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査を行った。この調査では約20,000㎡の範囲に、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての170棟もの竪穴建物跡が検出され、県内でも有数の集落遺跡であることが判明した。

その後、未買収であった西側隣接地も調査に着手できる見通しとなったため、平成18年度に鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を行ったものである。（湯村・高尾）



第１図　琴浦町内一般国道９号（東伯中山道路）関連遺跡位置図

表１　東伯中山道路関係の調査一覧

調査年度	遺　跡　名	所　　在　　地	調査面積
平成14年度	井図地頭遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか	6,000㎡
	井図地中ソネ遺跡	東伯郡琴浦町大字田越字井図地中ゾネ	12,000㎡
	笠見第３遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	16,206㎡
	笠見３号墳	東伯郡琴浦町大字田越字岩屋峯	
平成15年度	笠見第３遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	6,900㎡
	八橋第８・９遺跡	東伯郡琴浦町大字八橋字西二本松	11,732㎡
	井図地頭遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか	288㎡
	三林遺跡	東伯郡琴浦町大字田越字新三林	8,408㎡
	久蔵峰北遺跡	東伯郡琴浦町大字八橋字龍王頭	11,831㎡
	蝮谷遺跡	東伯郡琴浦町字蝮谷	3,705㎡
	岩本遺跡	東伯郡琴浦町字岩本	458㎡
	中尾第１遺跡	東伯郡琴浦町大字中尾字荒木田ほか	28,696㎡
	別所中峯遺跡	東伯郡琴浦町大字別所字中峯	3,175㎡
	松谷中峰遺跡	東伯郡琴浦町大字松谷字中峰	7,473㎡
平成16年度	上伊勢第１遺跡	東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山	7,523㎡
	三保第１遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字一本木	1,071㎡
	久蔵谷遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字加杖阪	3,245㎡
	化粧川遺跡	東伯郡琴浦町大字赤碕字小谷堤ノ上	6,672㎡
	八幡遺跡	東伯郡琴浦町大字八幡字八幡ノ後ロほか	11,929㎡
	南原千軒遺跡	東伯郡琴浦町大字光字壱本松ほか	2,917㎡
	中道東山西山遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字中道東山上	13,244㎡
	福留遺跡	東伯郡琴浦町大字赤碕字畑ノ東	4,030㎡
	湯坂遺跡	東伯郡琴浦町大字湯坂字ヒイガ谷東平	4,895㎡
平成17年度	梅田萱峯遺跡	東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯	6,350㎡
	箆津乳母ヶ谷第２遺跡	東伯郡琴浦町大字箆津字赤坂谷平ほか	4,500㎡
	南原千軒遺跡	東伯郡琴浦町大字光字大加布毛ほか	1,500㎡
平成18年度	梅田萱峯遺跡	東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯	5,450㎡
	箆津乳母ヶ谷第２遺跡	東伯郡琴浦町大字箆津字赤坂谷平ほか	8,914㎡
	笠見第３遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	16,600㎡
		計	215,712㎡

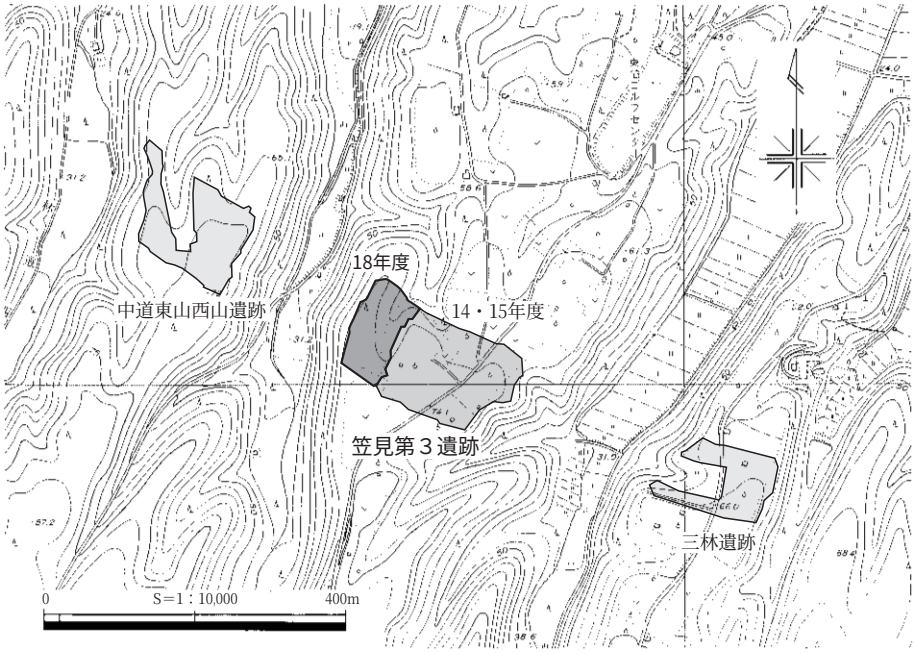
第２節　調査の経過と方法

（1）　調査の経過

平成14年度から平成15年度にかけての調査では、地形等の特徴から調査地をＡ区からＣ区に分けており、今回の調査区はＤ区と呼称した。

平成18年４月３日に調査前地形測量にかかる委託契約を締結し、調査を開始した。４月４日に航空写真撮影を実施し、４月10日から17日にかけて表土剥ぎを行った。その後、４月21日まで委託業者による現地での方眼測量を行った。発掘作業員の稼動は４月25日からで、休憩テントの設営など周辺整備を経て本格的な発掘作業に入った。

まず調査区全体の遺物包含層の掘り下げと遺構検出のための精査を行い、遺構数などの把握に努めた。その結果、前回



第２図　調査区位置図

の調査同様、多数の竪穴住居が存在することが判明した。

調査は尾根部で検出された遺構から着手し、全体の進捗状況をみながら谷部の遺物包含層の掘り下げを進めた。南端の尾根平坦面及び谷頭付近を除き、前回調査区のように梨の栽培等による撹乱を受けておらず、遺構の遺存状況は良好であった。複数回の建て替えを行っている住居や炭化材が良好に残る焼失住居もあり、掘り下げや図化に時間を要した。

夏場を迎え連日猛暑が続く中、焼失住居等の調査においては出土した炭化材の保護に十分な注意を払いながら掘り下げ・測量を進めた。調査区北側の精査中に不整楕円形を呈した焼土面と鍛冶滓を含む暗褐色土の広がりが確認され、鍛冶遺構が存在することが予想された。そのため、少量のサンプルを持ち帰り水洗した結果、微量ながら鍛造剥片が回収されたため、上記の焼土面・暗褐色土の広がりが鍛冶遺構でほぼ間違いないと認識した。また、谷に面した傾斜変換点付近に位置するSI22の上層掘り下げ中に小振りの鉄滓と表面に鉄滓が付着した鉄床石が出土し、同住居は鍛冶に伴う廃棄土坑として利用されたこと、北側に位置する鍛冶遺構との関連が強いことなどが推察された。

鍛冶遺構は古墳時代中期末に遡ると推定されるもので、操業空間の復元と微細遺物回収のためのメッシュを設定し、周囲の土を持ち帰り水洗選別作業を行った。この鍛冶炉は県内最古例であったため、10月８日に現地説明会を開催したところ、100名を超える参加者があった。

季節は氷雨降る初冬に変わり足元の悪い中で調査することもあったが、谷部の遺物包含層の掘り下げを進めた。谷部では古墳時代以降のものと思われる溝や弥生時代後期後葉の土器溜りを検出しており、鍛冶遺構から排出されたとみられる鉄滓等の鍛冶関連遺物も出土している。11月９日には検出した遺構全体の航空写真撮影を行い、その後委託業者による調査後地形測量や調査員による遺構測量を経て、12月11日に現地から撤収した。

その後の発掘調査報告書作成に伴う遺物の整理作業は、埋蔵文化財センター及び調査第一係（東伯調査事務所）で行った。

（２） 調査の方法

発掘調査はグリッド法により行い、世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系に基づく方眼杭を10m間隔で設定した。方眼杭には、南北軸は算用数字を東から、東西軸はアルファベットを北からそれぞれ付し、杭名は交差する軸線のアルファベットと数字を組み合わせたもの（「I21杭」など）とした。グリッド名は前回調査と同様に北東側杭からとっている。なお、南北・東西軸に付したアルファベッ

写真１　調査風景

写真２　現地説明会風景

ト・算用数字とも前回調査区に付されたものから連続させており、グリッドが網羅されていなかったＡライン以北については、南側から北側に向けてAA～AEラインを新たに設定している。前回調査時の日本測地系から、世界測地系への変換に伴いＸ・Ｙ値に端数が生じており、現地調査における誤測量を防ぐためにAE16杭を基点（Ｘ＝000.00、Ｙ＝000.00）とする仮数値をＸ・Ｙラインともに付した（第６図）。そのため、遺構等測量図に記載されたＸ・Ｙ値は仮数値となっている。

検出した遺構や遺物は、原則として光波トランシットにより記録した。出土遺物は時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構またはグリッド毎に一括して取り上げた。写真撮影は35㎜判と６×７判フィルムを使用し、適宜デジタルカメラにより補足した。

調査成果は積極的に情報発信し、埋蔵文化財センターのホームページで速報的に紹介した。また東伯中山道路関係の発掘調査について紹介する「発掘調査だより」を作成し、琴浦町内の小中学校に毎月配布したり、琴浦町報に遺跡紹介記事を掲載するなど、地元への普及啓発活動を行った。地元中学生の職場体験の一環として体験発掘も行った。（湯村・高尾）

第３節　調 査 体 制

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　久保　穣二朗
次　　長　戸井　　歩（兼総務係長）

総務係

副　主　幹　福田　高之

発掘事業室

室　　長　加藤　隆昭（兼調整係長）

調整係

文化財主事　濵　　隆造

調 査 第 一 係

係　　長　湯村　　功
文化財主事　恩田　智則
文化財主事　淺田　康行
文化財主事　高尾　浩司
文化財主事　前田　昌宏
文化財主事　大川　泰広
調　査　員　原田　克美
調　査　員　小田　秀光
調　査　員　戸羽　康一
調　査　員　岩垣　　命

第２章　遺跡の位置と環境

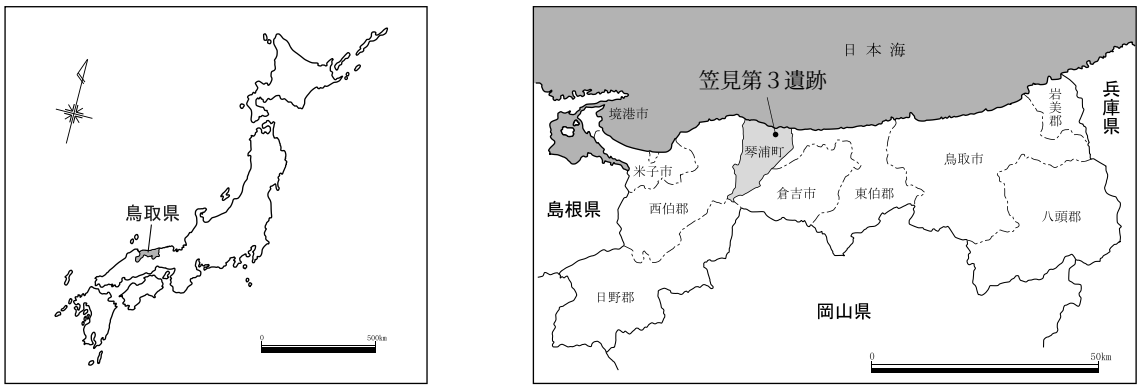
第１節　地理的環境

笠見第３遺跡が所在する琴浦町は、鳥取県中部地域の西端に位置する。平成16年９月１日に東伯町と赤碕町が合併して新町として誕生した。県庁所在地の鳥取市からは西に約60㎞、県西部の商都米子市からは東に約35㎞離れている。町域は大山山麓から北に向かって広がる三角形状で、東は北栄町、倉吉市と、西は大山町と、南は江府町と、北は日本海と接する。東西15.2㎞、南北18.5㎞、総面積は139.88㎢を測る。平成18年12月時点の人口は、20,201人である。

地勢は、大山山麓から派生する急峻な丘陵地が北に向かうほど緩やかとなり、町内を南北に流れる加勢蛇川、洗川、勝田川などの流域に平野部が広がっている。海岸線は単調であるが、良好な漁場となっている。

町の産業は日本海沿岸部と山間部、その中間部にそれぞれ特徴がある。日本海沿岸部は国道９号沿いを中心に、地酒、地ビール、和牛といった酒造や食品製造などの商工業が盛んである。また海岸部は赤碕港を中心とした沿岸漁場が有名である。中間部は県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、二十世紀梨は海外へも輸出されている。山間部は大山滝や南北朝期の動乱を描いた「太平記」の舞台となった船上山、国指定天然記念物の伯耆の大シイなどの風光明媚な自然に囲まれ、多くの観光客が訪れている。

笠見第３遺跡は町北部、旧東伯町域に位置する。日本海までは直線距離で約２㎞である。南側山塊から派生する丘陵先端付近に立地し、標高は約70mを測る。周囲の水田との比高差は約40mである。



第３図　琴浦町位置図

第２節　歴史的環境

ここでは琴浦町内を中心とした遺跡の概要を述べる。

旧石器時代　鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されており、位置づけがはっきりしない尖頭器類を含めても40遺跡を数えるに過ぎない。町内では三林遺跡（６）と梅田萱峯遺跡（22）でナイフ形石器の可能性がある資料が、笠見第３遺跡（７）では細石核の可能性がある資料が、本来の位置を遊離した状態で出土している。また水溜、松谷の両地点で槍先形尖頭器が採集されており、住吉第２遺跡（99）では有茎尖頭器が出土している。近年、隣接する大山町門前第２遺跡でAT下位から小型ナイフ形石器を主体とするブロックが出土しており、良好な火山灰堆積が見られる当町域でも、今後層位

的な出土例が期待される。

縄文時代　縄文時代については、集落像を明らかにしうる調査例は少ない。早期のものとしては、赤坂後ロ山遺跡（93）、退体寺飛渡り遺跡（101）、梅田萱峯遺跡（22）、上伊勢第１遺跡（２）で押型文土器が検出されている。中期以前では、松ヶ丘遺跡（66）、森藤第１・第２遺跡（37）、井図地中ソネ遺跡（５）、井図地頭遺跡（４）などで土器が出土している。後期段階では森藤第２遺跡と南原千軒遺跡（19）で石囲い炉をもつ竪穴住居跡が検出されている。森藤第２遺跡では、住居内から土器のほか土器片錘、打ち欠き石錘、土偶が出土している。御崎第２遺跡（80）では中津式に比定される土器片や晩期の浅鉢、深鉢が出土している。このほか後期から晩期の遺跡として、八重第１遺跡（81）、八重第３遺跡（83）、小松谷遺跡（97）、下甲抜堤遺跡（96）がある。

弥生時代　当地域の弥生開始期の様相は明らかではない。前期から中期前半の土器は丘陵上の遺跡で散見されることはあるが、近年の低地部の調査でこの時期の集落の一端が見え始めている。上伊勢第１遺跡では前期の竪穴住居跡が３棟確認され、中尾第１遺跡（１）と三保第１遺跡（３）では同時期の配石墓や土壙墓などの墓域が調査されている。これらの遺跡は加勢蛇川を挟んだ沖積平野内の微高地上に近接して存在している。樋口第１遺跡（86）、三谷遺跡（89）では前期の土器片が出土している。南原千軒遺跡では、中期初頭の土器が大量に出土している。また中尾第１遺跡は中期中葉の集落でもある。

中期後半から古墳時代初頭にかけては、丘陵上を舞台として集落が大きく展開する。森藤第１遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡（38）、井図地中ソネ遺跡、三保遺跡（49）、笠見第３遺跡、三林遺跡（６）、中道東山西山遺跡（８）、久蔵峰北遺跡（10）、福留遺跡（17）、箆津乳母ヶ谷第２遺跡（21）など枚挙に暇がない。各遺跡の中心時期は後期後葉であり、この時期に集落数が増える様相が窺える。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡、三林遺跡などは弥生時代中期から古墳時代中期まで長期的に集落が形成されるが、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡、森藤第１遺跡、中道東山西山遺跡などは後期後葉に集落の最盛期を迎えた後、生活の痕跡が少なくなり短期的な集落遺跡と考えられ、様相の違いをみることができる。

各種生産に関しては、玉作遺跡の調査例が増えている。南原千軒遺跡では中期初頭から後期までの土器を含む溝から施溝分割技法による管玉素材が多数出土している。また軟質な石材を用いて板状素材から施溝分割する「西川津技法」と同様なものがある点も注目される。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡では後期の玉作工房が検出されている。笠見第３遺跡では後期前半に属する管玉素材のひとつに島根県花仙山産の緑色凝灰岩が使用されていることが判明したほか、管玉の穿孔に鉄針が用いられていたことがわかる例もあった。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡ともに後期段階では施溝分割は行わず、打撃分割によっている。笠見第３遺跡では赤色顔料が付着した石杵、石皿が多数出土している。

墳墓では墓ノ上遺跡（65）、別所女夫岩峯遺跡（61）、梅田萱峯遺跡で中期の木棺墓が見つかっている。湯坂遺跡（20）では後期の小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。井図地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の区画溝を伴う土壙墓群が検出されている。

町内では銅鐸、銅矛、銅剣が出土している。八橋（56）では扁平鈕Ⅰ式銅鐸のほか、同一丘陵（57）で銅矛も見つかっている。また田越（51）では円墳の箱式石棺下30㎝の位置から中細形銅剣が４本出土している。

古墳時代　町内には４基の前方後円墳がある。別所１号墳（笠取塚古墳、53m）(63)、八橋狐塚古墳（町史跡、62m）(60)、大塚古墳（34m）、竜ヶ崎３号墳（21m）(48）で、このうち前期に属すると思われるのは別所１号墳である。

中期から後期にかけては群集墳が築かれる。大高野古墳群（30)、塚本古墳群（31)、斎尾古墳群（32)、公文古墳群（45)、竜ヶ崎古墳群（48)、別所古墳群（64)、箆津古墳群（75)、坂ノ上古墳群（74)、梅田古墳群（73）などである。大高野３号墳では金銅製耳環、青銅製鈴、鉄刀などが副葬されていた。中期後半の高塚古墳は現在は消滅しているが、朝顔形埴輪、形象埴輪などが出土している。後期以降採用される横穴式石室には、大法３号墳（41)、三保６号墳などのように竪穴系横口式石室と呼ばれる構造をもつものがある。槻下古墳群（27)、大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態もその系譜に連なるものであることから、加勢蛇川流域に石室形態を同じくする集団が存在したことを示している。終末期に属すると思われる切石積石室は山田１号墳（町史跡）（46)、出上岩屋古墳（県史跡）(67）に認められる。

集落の様相は不明な部分が多い。三保遺跡、上伊勢第１遺跡、笠見第３遺跡、蝮谷遺跡（前期から後期）(11)、三林遺跡、久蔵峰北遺跡（前期から中期)、中尾第１遺跡、三保第１遺跡、松谷中峰遺跡（中期）(15)、井図地中ソネ遺跡（中期から後期)、別所中峯遺跡（前期と後期）(14)、八重第３遺跡、住吉第２遺跡（99）など集落遺跡の調査例は多いが、実態は必ずしも明らかではない。そのような中で注目されるのは笠見第３遺跡と八橋第８・９遺跡（13）である。笠見第３遺跡では今のところ県内最古例となる中期末の鍛冶炉が検出された。鉄床石や羽口など鍛冶関連遺物も出土している。八橋第８・９遺跡では６世紀から７世紀代の竪穴住居跡23棟などが調査されたほか、椀形鍛冶滓や流動滓も出土しており、周辺における鉄・鉄器の生産の様相が明らかになりつつある。箆津乳母ヶ谷第２遺跡では丘陵斜面を造成した段状遺構が、古墳時代後期から奈良時代にかけて多数築かれている。そのうち１棟は鍛冶炉を伴っていた。

古代　町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺（34）がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定され、近くには出土した炭化米を根拠に正倉または郷倉と考えられる総柱礎石建物群がある大高野遺跡（29）や伊勢野遺跡（35)、水溜り・駕籠据場遺跡といった掘立柱建物群や墨書土器を伴う遺跡がある。やや南には墨書土器や金属器写しの須恵器が出土した森藤第１・第２遺跡、大法古瓦出土地（40）がある。このほか、旧箆津郷に位置する八幡遺跡（18）では掘立柱建物群や赤色塗彩土師器が多数出土している。田中川上遺跡（79）では埋没河川が確認され、その川辺の一部から須恵器や赤色塗彩の土師器が集中して投棄された状態が検出されており、川辺での祭祀行為が想定されている。

墳墓の関係では、笠見第３遺跡と三林遺跡で火葬墓が見つかっている。笠見第３遺跡では土坑を掘り蔵骨器と考えられる土師器坏と火葬骨を木櫃に納めていた。三林遺跡では土坑を掘った中に石槨を設け、その中に土師器を組み合わせた蔵骨器に火葬骨を納めていた。金屋（36）と上法万（42）では経塚が見つかっており、金屋では銅経筒が納められていた。

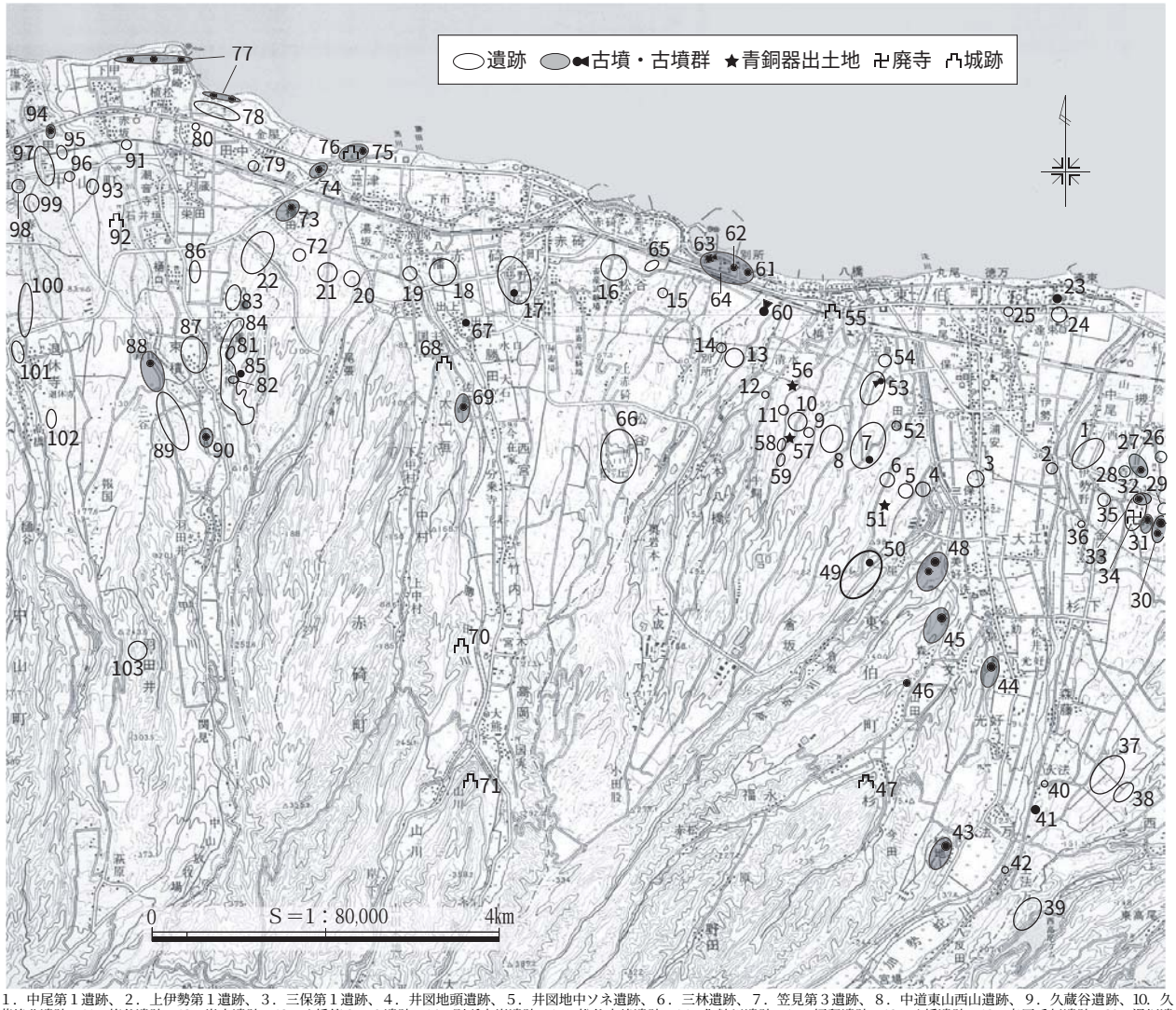
生産関係では、上伊勢第１遺跡で９世紀から13世紀と考えられる畠跡が見つかり、中道東山西山遺跡では９世紀代に位置づけられる鍛冶炉などの鉄関連遺構や遺物が検出されている。

中世　南原千軒遺跡では平安後期の鍛冶関連遺構や遺物が大量に出土した。鍛冶炉や廃棄土坑のほか

鉄滓や鍛造剥片などの微細遺物も豊富で、鉄素材から製品まで生産していたと考えられる。

井図地頭遺跡では平安時代末頃の方形区画溝が検出されており、居館跡の可能性がある。槻下豪族館跡（町史跡）（26）は40m四方の主郭のほか、周囲に土塁や壕を巡らせた郭をもつ複郭式と考えられる。鎌倉時代に岩野弾正の居城であったと伝えられるが詳細は不明である。

町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡（国史跡）がある。赤碕港から船上山にかけては、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔（県保護文化財）があることでも知られている。大山町赤坂集落には赤坂大五輪塔（91）がある。元弘３（1333）年、後醍醐天皇を迎えて鎌倉幕府方と戦った船上山合戦の際に、名和軍に加勢したといわれる土豪赤坂掃部助幸清の墓と伝えられる。中世城館は町内各地に見られる。南北朝期に西伯耆で勢力をもっていた行松氏が築城し、後に毛利氏の伯耆支配の拠点の一つと伝える八橋城跡（町史跡）（55）のほか妙見山城跡（47）、箆津城（槇城）跡（町史跡）（76）、條山城跡（68）、大仏山城跡（70）、山川城跡（71）がある。　（湯村・大川）



１．中尾第１遺跡、２．上伊勢第１遺跡、３．三保第１遺跡、４．井図地頭遺跡、５．井図地中ソネ遺跡、６．三林遺跡、７．笠見第３遺跡、８．中道東山西山遺跡、９．久蔵谷遺跡、10．久蔵峰北遺跡、11．蝮谷遺跡、12．岩本遺跡、13．八橋第８・９遺跡、14．別所中峯遺跡、15．松谷中峰遺跡、16．化粧川遺跡、17．福留遺跡、18．八幡遺跡、19．南原千軒遺跡、20．湯坂遺跡、21．箆津乳母ヶ谷第２遺跡、22．梅田営峯遺跡、23．逢束双子塚古墳、24．逢束遺跡、25．逢束第２遺跡、26．槻下豪族館跡、27．槻下古墳群、28．下斎尾２号遺跡、29．大高野遺跡、30．大高野古墳群、31．塚本古墳群、32．斎尾古墳群、33．下斎尾１号遺跡、34．斎尾廃寺、35．伊勢野遺跡、36．金屋経塚、37．森藤第１・第２遺跡、38．大峰遺跡、39．西高尾谷奥遺跡、40．大法古瓦出土地、41．大法３号墳、42．上法万経塚、43．杉地古墳群、44．下光好古墳群、45．公文古墳群、46．山田１号墳、47．妙見山城跡、48．竜ヶ崎古墳群、49．三保遺跡、50．三保６号墳、51．田越銅剣出土地、52．田越第４遺跡、53．笠見第２遺跡・笠見１号墳、54．笠見第１遺跡、55．八橋城跡、56．八橋銅鐸出土地、57．久蔵峰銅矛出土地、58．八橋第２遺跡、59．八橋第４遺跡、60．八橋狐塚古墳、61．別所女夫岩峯遺跡、62．別所２号墳、63．別所１号墳（笠取塚古墳）、64．別所古墳群、65．墓ノ上遺跡、66．松ヶ丘遺跡、67．出上岩屋古墳、68．條山城跡、69．太一垣古墳群、70．大仏山城跡、71．山川城跡、72．梅田所在遺跡、73．梅田（栄田）古墳群、74．坂ノ上古墳群、75．箆津古墳群、76．箆津城跡、77．御崎古墳群、78．御崎第１遺跡、79．田中川上遺跡、80．御崎第２遺跡、81．八重第１遺跡、82．八重第２遺跡、83．八重第３遺跡、84．八重第４遺跡、85．岩屋平ル古墳、86．樋口第１遺跡、87．樋口第２遺跡、88．三谷古墳群、89．三谷遺跡、90．束積古墳群、91．赤坂大五輪塔、92．岩井垣城跡、93．赤坂後ロ山遺跡、94．曲松古墳群、95．林之峯遺跡、96．下甲抜堤遺跡、97．小松谷遺跡、98．住吉第１遺跡、99．住吉第２遺跡、100．退休寺遺跡、101．退休寺飛渡り遺跡、102．退休寺第１遺跡、103．羽田井遺跡

第４図　周辺遺跡分布図

第３章　調査の成果と記録

第１節　遺跡の立地と層序

笠見第３遺跡は大山東麓にあたる標高約61～74mの丘陵上に位置する。遺跡が立地する丘陵一帯は古期大山の噴出物からなる溝口凝灰角礫岩の上に、新期大山が噴出した降下テフラが累積した台地状地形であり、浸食作用によって大小の谷が開析されている〔岡田ほか1995〕。

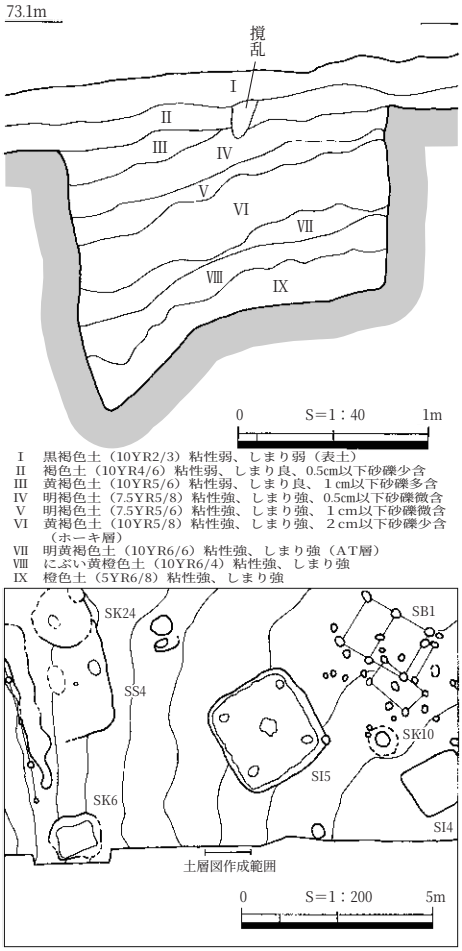
今回の調査地であるＤ区は、台地状地形を呈し良好な平坦面をもつ東側の前回調査区（Ａ～Ｃ区）と浅い谷によって画されており、一部を除き未調査となっていた谷の大部分と、西側を南北に伸びる尾根が調査範囲となっている。Ｄ区が立地する尾根は幅25～35mを測り、北側ほど幅狭となって痩せ尾根状を呈す。調査区東側を南北に縦走する谷と尾根平坦面との比高差は最大で約９ｍとなる。調査区西側は急峻な斜面となっており、谷を隔てた西側丘陵上に弥生時代後期の集落跡と平安時代前期の鍛冶遺構が検出された中道東山西山遺跡が位置する。調査の結果、Ｄ区南側では頂部平坦面から谷頭の傾斜変換点付近、北側では谷に面し傾斜変換ラインとなる標高69～70mの等高線上に遺構が集中することが明らかとなった。

Ｄ区は前回調査区であるＡ～Ｃ区とは異なり、谷部西斜面裾（Ｅ・F20グリッド）などの一部を除き二十世紀梨の栽培に伴う肥料穴の撹乱が及んでおらず、植林も行われていなかったため、遺構の検出は比較的容易で遺存状況も良好であった。谷部の層序については本章第５節で詳述することとし、ここでは尾根部の基本層序と概要を説明する。

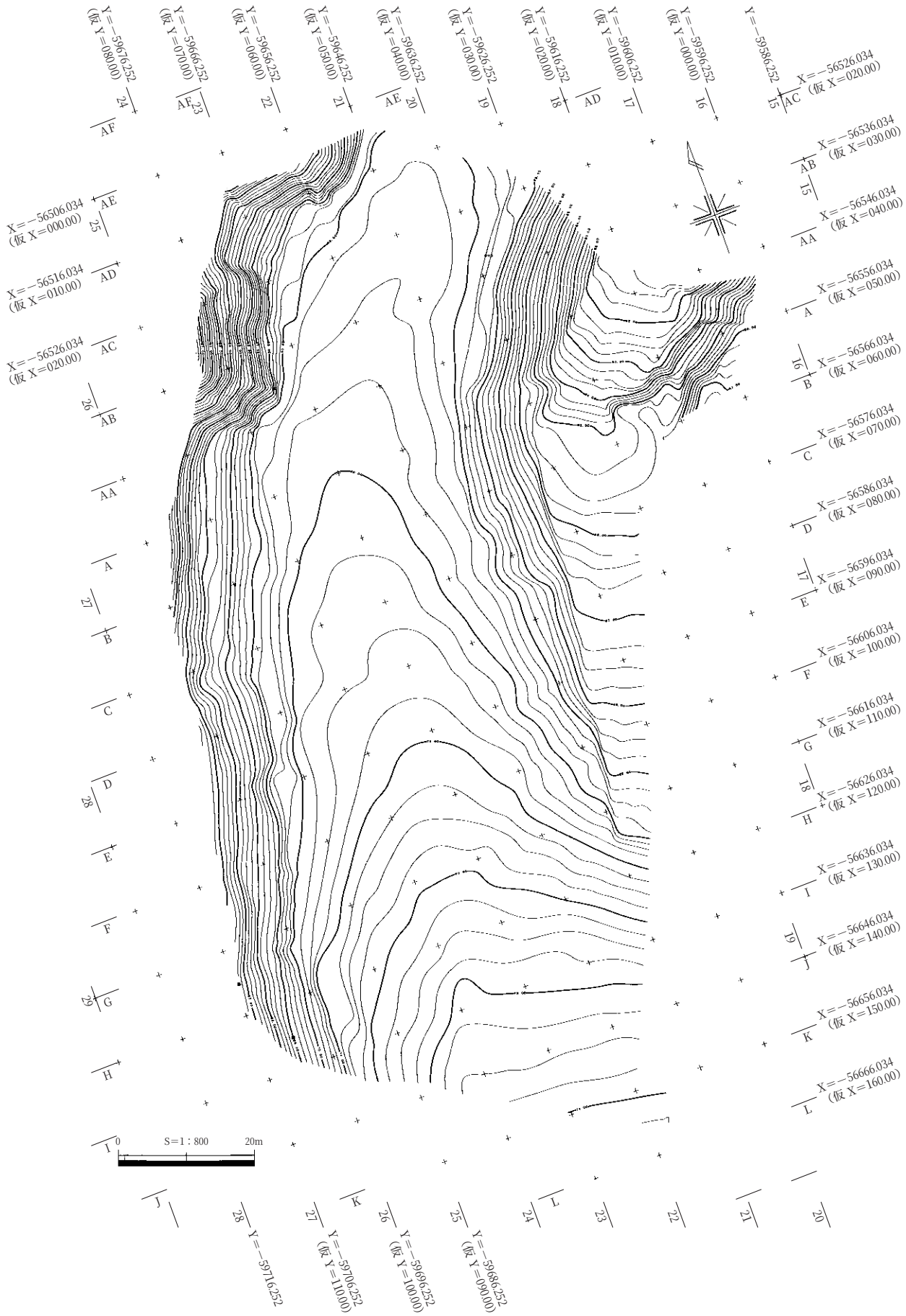
Ⅰ層：黒褐色土（10YR2/3）。表土。調査区全体に約20㎝程度の厚さで堆積する。

Ⅱ層：褐色土（10YR4/6）。主に基本層序を記録した調査区南端付近は色調がやや明るくなっており、北側の大半が暗褐色を呈す。そのため、尾根部遺構外の遺物については「暗褐色土」として記録・取り上げを行っている。層厚は約20㎝で、調査区南端のJ21～J23グリッド周辺は芝畑による撹乱がⅢ層まで及んでおり、Ⅱ層は遺存していなかった。縄文時代～古墳時代の遺物を包含するが出土量は少ない。出土遺物の多くが弥生時代後期の土器で、その割合も丘陵上に展開する弥生集落の消長を概ね反映しているといえよう。

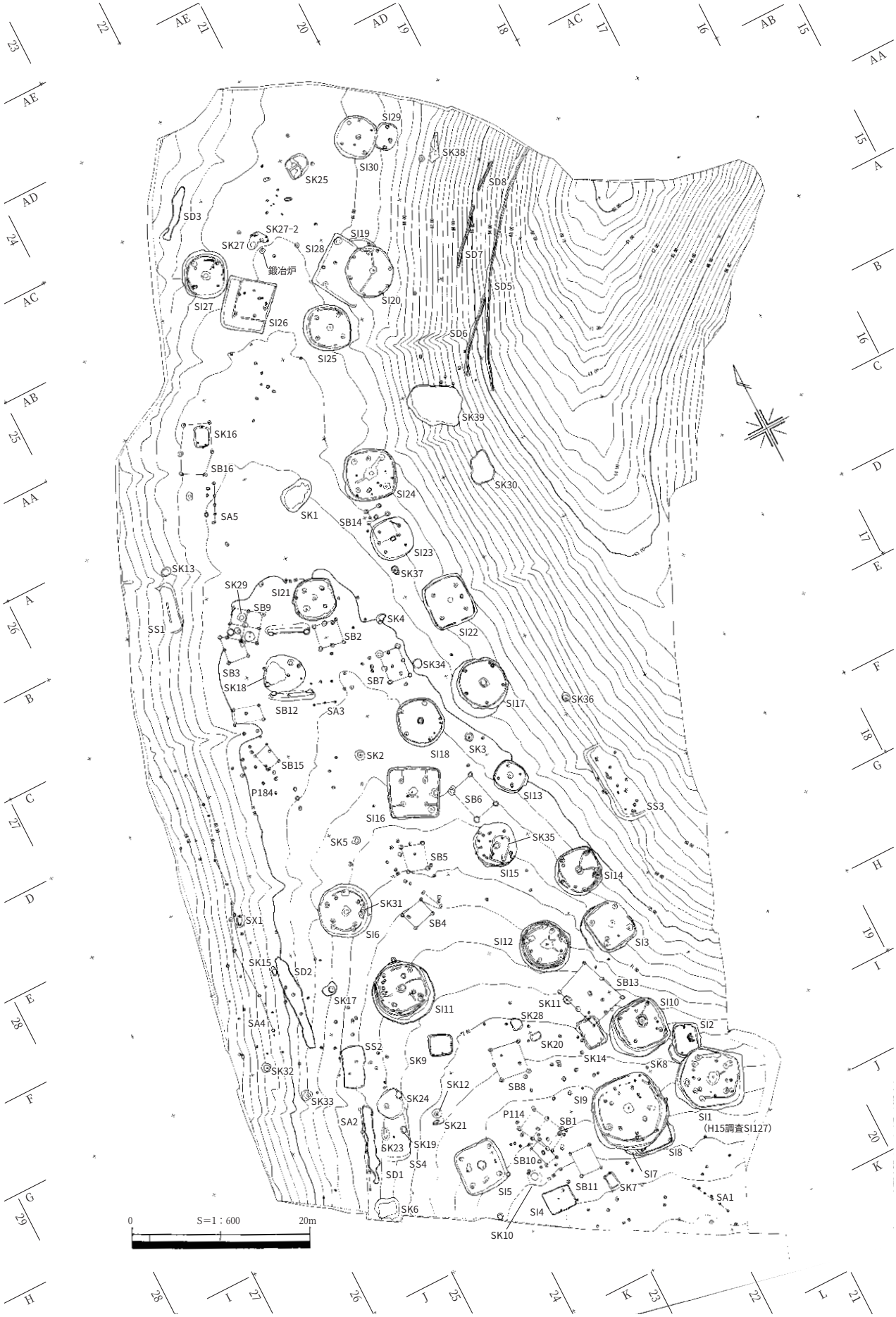
Ⅲ層：黄褐色土（10YR5/6）。Ⅳ層に近似するが黄色味の強い層で、砂礫を多く含む。遺物は含まれず、Ⅲ層以下が無遺物層である。谷頭周辺を含む調査区南側に主に広がっており、SS2・４などは同層上面で検出している。調査区北側では流失したためか確認されていない。



第５図　調査区基本層序（尾根部）



第６図　調査前地形測量図



第７図　調査後地形測量図

Ⅳ層：明褐色土（7.5YR5/8）。斜面部では流失している箇所もみられるが、基本的に同層上面を遺構検出面としている。地点によって砂礫の含有量やしまりで差異がある。谷頭に近いG～J21グリッド周辺ではⅡ層が厚く、谷部南側③層の堆積と重複しており遺構の全体形を掴むことが困難であったため、一部Ⅵ層上面まで掘り下げて検出を行っている。

Ⅴ層：明褐色土（7.5YR5/6）。層厚約10～20㎝で、含有物はほとんどなく粘性・しまりともに強い。

Ⅵ層：黄褐色土（10YR5/8）。層厚約20～30㎝で主に上半部に径10㎝大の青灰色の砂質ブロックを含んでいる。いわゆる「ホーキ層」と呼ばれるもので、多くの竪穴住居が同層まで掘削されており、同層によって床を構築している。斜面部ではⅣ・Ⅴ層が流失している箇所も散見され、一部でⅡ層除去後にⅥ層が露出する。

表２　新旧遺構名対照表

遺構名（新）	遺構名（旧）
SI3	SI31
SI6	SI13
SI7	SI34
SI13	SI17
SI17	SI19
SI19	SI33
SI20	SI29
SI29	SI32
SS2	SI3
SS4	SI7
SK6	SI6
SK18	SI20
SK22	SK6
SK39	SS2

Ⅶ層：明黄褐色土（10YR6/6）。しまりはあるが粘性は弱い。姶良丹沢火山灰層（ＡＴ層）で、層厚は約10㎝前後ながらもほぼ尾根全体で確認されている。

Ⅷ層：にぶい黄橙色土（10YR6/4）。層厚約10～20㎝で、粘性・しまりともに強い。

Ⅸ層：橙色土（5YR6/8）。Ⅷ層に同じく粘性・しまりともに強い。上部のみ記録しており、本来の層厚は不明である。掘り方の深い竪穴住居などは同層まで掘削が及ぶ。（高尾）

【参考文献】

岡田昭明ほか　1995『野外研修案内書　大山テフラと蒜山原』日本地学教育学会第49回全国大会実行委員会

第２節　弥生時代の遺構・遺物

（1）　概要

本調査において、竪穴住居24棟、掘立柱建物３棟、土坑19基、段状遺構４基、木棺墓１基、溝状遺構３条、柵列１条、土器溜り１ヶ所、ピット多数を検出した。前回の調査成果と合わせると、弥生時代の主要な遺構の総数は竪穴住居136棟、掘立柱建物10棟、土坑45基、段状遺構11基、木棺墓１基、溝状遺構４条、土器溜り２ヶ所となる。

遺構は弥生時代中期後葉のものからみられ、集落規模が最も拡大する後期後葉段階にかけて遺構数も漸次増加する。中期後葉段階には竪穴住居が尾根平坦面に２棟存在するほかは段状遺構、貯蔵穴と想定される土坑が調査区南端の平坦面～傾斜変換点に築かれる。後期前葉段階で住居数が増加し、谷部に面した傾斜変換点にあたるラインに沿うように竪穴住居が一定の間隔をおいて分布するようになり、同様の傾向は続く後期中葉段階にも看取される。後期後葉の遺構は調査区南半部に集中する傾向にあり、竪穴住居や掘立柱建物が近接して築かれる一方、浅い溝状遺構や段状遺構を除き北半部には広がっていない。終末期に比定できる遺構は調査区南東隅に位置する住居１棟のみで、具体的な様相は明らかでない。

検出遺構の大部分が弥生時代のものであることを考えれば、平坦面の幅が30m弱程しかない痩せ尾根上に分布する遺構の密度は比較的高いといえる。（高尾）

（２） 竪穴住居跡

SI2（第８図、PL. 14・66・76）

H21～I21グリッド、標高約72.0mの谷頭付近にあり、SI10の南東側に位置する。南側壁面部分でSI1、SK8と重複しており、本遺構がSI1に先行し、SK8を切る。

Ⅱ層を除去したところで、SI1の検出プランと接した状態で炭化物粒を包含する暗褐色土の広がりを確認した。プランが不明瞭であったため、遺構の規模とSI1との重複関係を確認するためにトレンチを設定したところ、床面、壁溝および壁面の立ち上りを確認したため竪穴住居を想定して調査を行った。

平面形は長軸3.7m、短軸3.1mの隅丸方形を呈し、床面積は7.13㎡である。壁高は南東側で検出面から最大35㎝を測る。地形的に低い北側では16㎝と浅い。床面には幅５～10㎝、深さ３㎝前後の壁溝がめぐり、南側で部分的に途切れる。床面はⅦ層で、ほぼ平坦になっている。南側でⅧ層とⅨ層からなる貼床が部分的に存在する。ピットは５基検出し、このうちP1、P2が主柱穴と考えられる。規模はP1（22×20－30）㎝、P2（22×21－24）㎝で、主柱間距離は2.9mを測る。P2の掘り方北側肩口には貼床が施される。P3は中央ピットであり、規模は（49×47－27）㎝を測る。掘り方断面は逆台形を呈し、地山から削り出した１～３㎝程度の高さの周堤がＣ字状にめぐる。P4、P5は規模がそれぞれ（15×12－24）㎝、（18×14－40）㎝を測る。これらはP2を挟みほぼ同一直線状に位置することから、P2に対する補助的な柱穴としての機能を想定する。

埋土は主に暗褐色土からなり、８層に分層できる。１～４層には炭化物粒が混じり、いずれもⅥ層ブロックを包含する。これらの層がレンズ状の堆積を呈することから、自然堆積による埋没と考えられる。遺物は検出面で袋状鉄斧F1が出土し、埋土１、４層からは土器片が数点出土している。土器の中で図化できたものは２点である。

１、２は甕の口縁部である。１は１層中からの出土である。口縁部にヨコナデ後ミガキが施される。２は４層から出土している。口縁部に多条平行沈線をめぐらせた後７条の波状文を施す。これらは埋没過程で流入したものと思われる。F1は袋状鉄斧である。遺構の埋没がほぼ終了し、わずかに窪地状になった部分へ１層の流入と同時に混入したものであろう。最大長6.6㎝、最大幅2.3㎝、最大厚0.5㎝を測る。袋端部を５～７㎜幅で折り返すタイプの袋状鉄斧で、袋部横断面は一部欠損箇所があるが、略円形を呈す。刃部には研ぎ減りが見られ、偏刃となる。

出土土器がⅤ-３期に比定されることから、本遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

（淺田）

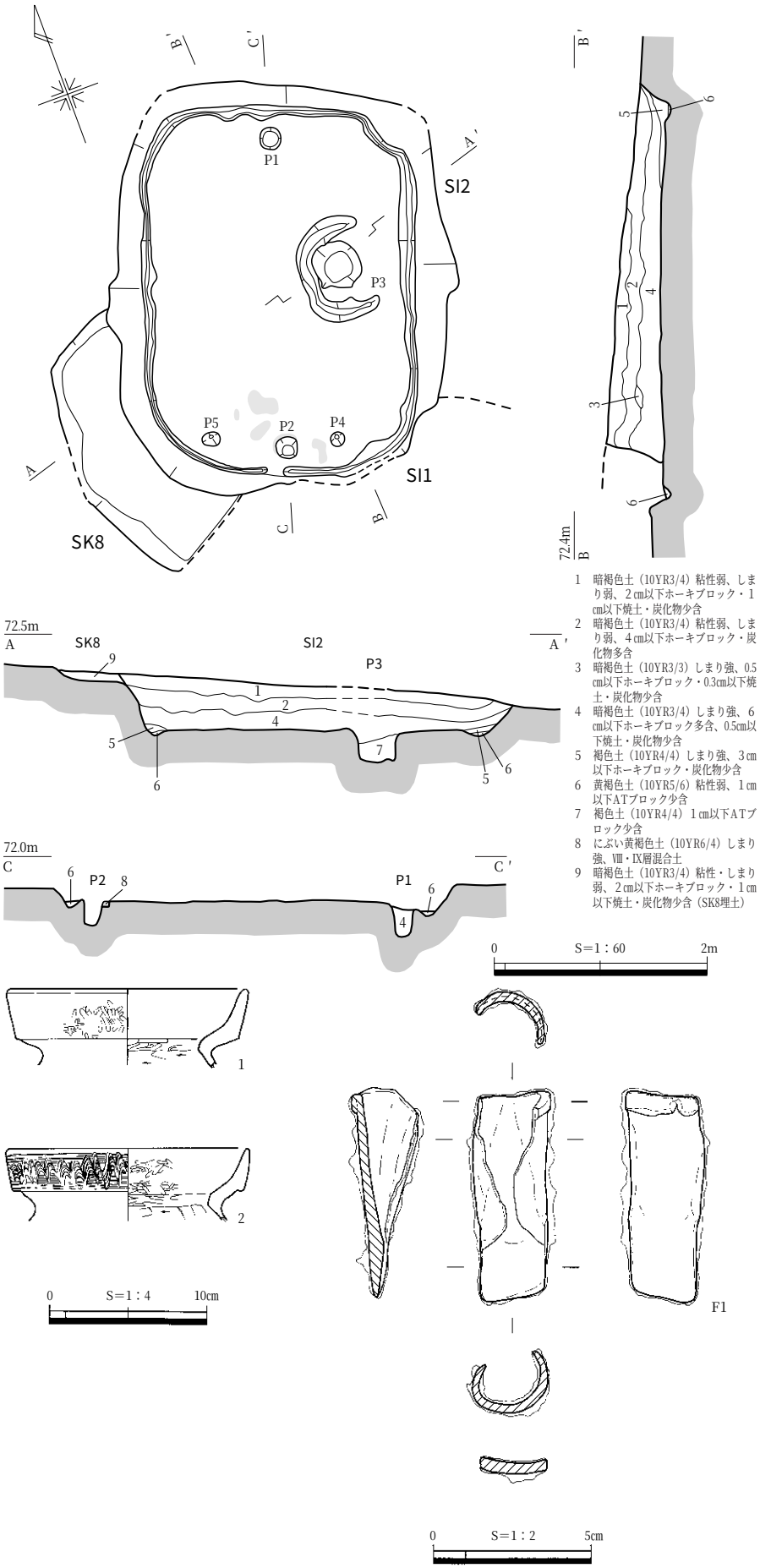
SK8（第８図）

H21～I21グリッド、標高約72.2mの谷頭の平坦面に位置する。SI1・２に切られる。

Ⅱ層除去後検出した。当初はSI2のテラス部分と考えられ、SI2の埋土と共に掘り下げたところ、当遺構とSI2の平面形が大きくずれることが判明した。SI2のトレンチの断面精査を行ったところ、重複関係が確認できため別の遺構として扱った。

検出した規模は長軸2.2m、短軸0.7mで、深さは南西側で最大21㎝である。本来の平面形は方形を呈するものと思われる。床面はⅤ層で平坦になっている。壁溝、ピットなどは検出されなかった。

埋土はSI2の１層に似た暗褐色土の単層である。遺物が皆無のため、詳細な時期は不明だが、SI1・



第８図　SI2・SK8および出土遺物

SI2との切り合い関係から、弥生時代後期後葉以前のものと推測される。（淺田）

SI3（第９図、PL. 14・66）

調査区南側のG21グリッド、標高約71.2～70.4mの緩斜面に立地する。

規模は長軸5.4m、短軸4.6mの隅丸方形を呈し、西側にテラスを伴う。検出面から床面までの深さは最大50㎝である。東側の壁面が流失しており、遺存状態はあまりよくない。床面積は17.92㎡である。

床面において壁溝、７基のピット、南東部に被熱面１ヶ所を検出した。壁溝は北東側で途切れており、C字状にめぐる。幅は８～13㎝で、断面形はU字状を呈し、床面からの深さは４～10㎝を測る。主柱穴は竪穴のコーナー付近に掘削されている。P1～４の４本柱になり、主柱間距離はP1-P2、P2-P3の順に3.0m、3.2m、3.0m、3.3mを測る。P5は中央ピットであり床面中央に位置し、周囲の床面には炭化物が薄く広がっている。P6はP2とP3のほぼ中間、P7はP3の南東に位置し、どちらも補助的な柱穴と考えられる。

埋土は暗褐色土と褐色土が主体をなし、４層に分層

される。いずれもⅥ層ブロックの混入が見られ、２層にはⅦ層ブロックの混入が見られる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

P3は、床面から約10㎝の深さまで空洞になっていた。これはP3の柱が残った状態で本遺構が埋没し、その後柱部分が腐植したためと考えられる。

遺物は１～２層から出土したものが多く、遺構が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。遺物密度は、南西から北東に向かって低くなる。３は甕の口縁部で、２層から出土した。

本遺構の時期は、出土土器から、弥生時代後期後葉と考えられる。（小田）

SI4（第10図、PL. 14・66）

I23グリッドの南端、標高73.0～73.2mの尾根平坦面に位置し、北側にSK10、SB10、SB11が隣接する。検出面はⅣ層上面で東西にやや長い長方形を呈し、長軸3.1m、短軸2.5m、深さは南東側で最大18㎝を測る。周囲は芝畑による撹乱を受けており、掘り方上部は削平されている。床面は長軸2.9m、短軸2.5mを測り、Ⅳ層を掘り込んで形成され、壁溝、貼床はない。床面積は7.21㎡を測る小型の住居跡である。４基のピットが確認され、底面のレベルが揃わないが、P1、P2が主柱穴と考えられる。主柱間距離は2.2mを測る。中央南寄りの位置に長軸1.5m、短軸0.75m、厚さ５㎝の焼土層が皿状に広がっている。焼土は色調の違いから３、４層に分層され、３層は暗赤褐色、４層は赤褐色を呈する。

埋土は全体で11層に分層された。床面を覆う埋土は１、２層に分かれ、遺物は床面付近の２層中から出土した。４は甕の口縁部で口縁外面に多条の平行沈線をめぐらせる。５は高坏の口縁部である。

出土遺物から本遺構の時期は弥生時代後期後葉であろう。（大川）

SI5（第11・12図、PL. 15・66）

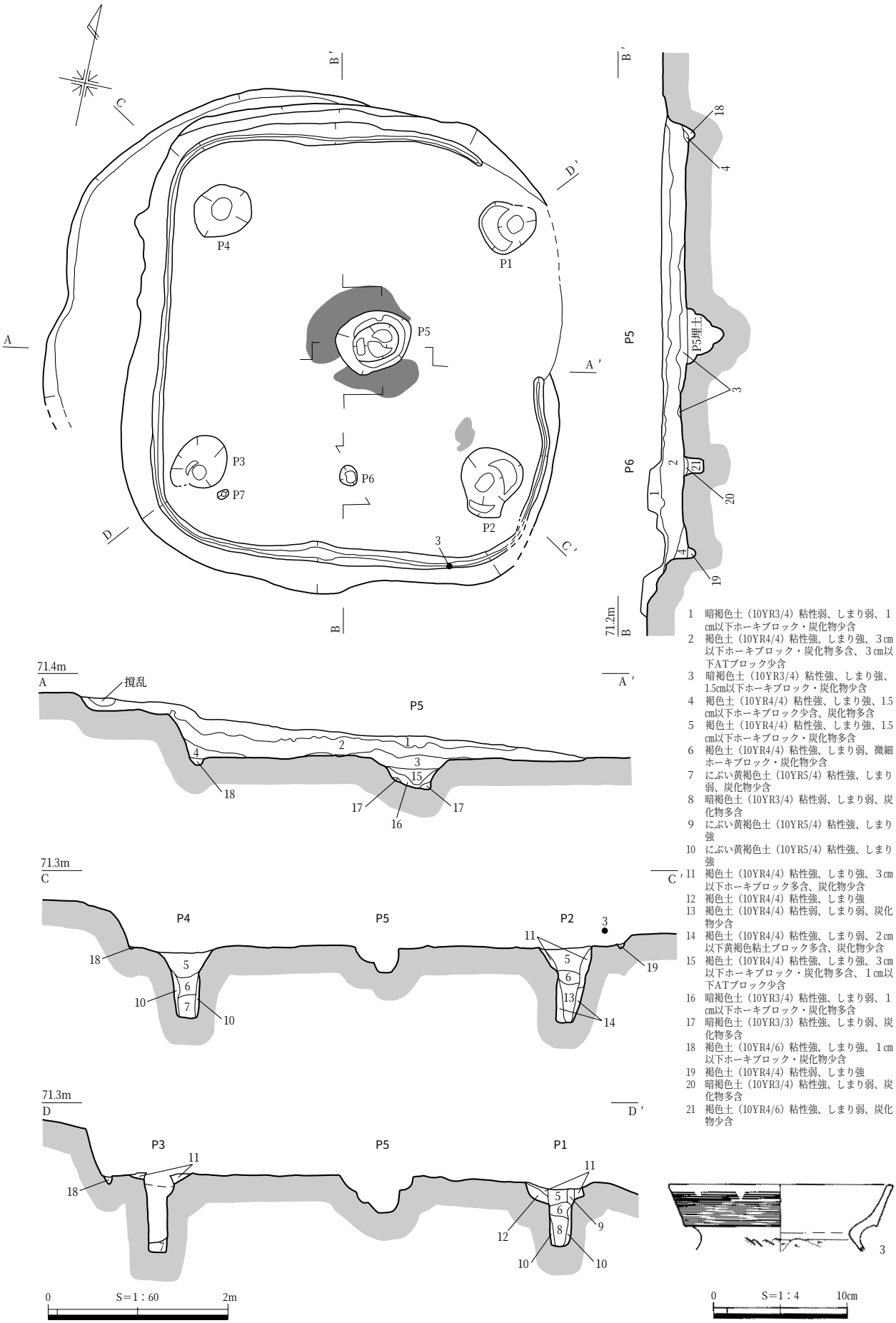
H～I23・24グリッド、調査区南側、標高72.5～72.7mの尾根部平坦面に位置する。住居南東隅をP108に切られる。

平面形は長軸5.9m×短軸5.3mの隅丸方形を呈する。床面積は20.6㎡である。検出面から床面までの深さは最大79㎝を測る。床面において検出されたピットは９基で、P1～P4が主柱穴と考えられる。主柱間距離はP1-P2間からP4-P1間の順に、3.4m、3.5m、3.3m、3.5mを測る。主柱穴は竪穴コーナー付近に配置されている。P5は地山削り出しの周提を持つ中央ピットである。周提の幅は５～20㎝、高さは２～４㎝を測る。P5周辺には非常に薄い炭化物層が広がっていた。P6、P7の機能は断定できないが、主柱穴間のほぼ中間に位置することから、補助的な柱穴として使用された可能性がある。P8、P9は浅いが、同様のものと考えたい。壁溝は断面U字形で、北壁沿いと南西隅で途切れるが、ほぼ全周する。幅は５～20㎝、深さは４～11㎝を測る。

埋土はピットを含め21層に分層される。まず、周堤・壁体崩落土とみられる６層、８層で埋まり、主柱穴、中央ピット埋没後３～５層が堆積する。２層は中央部分に落ち込むように、局所的に認められることから、埋没途中に人為的に土を投棄したと考えられる。P6、P7は地山ブロックを多量に含む土であり、柱穴として使用後、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は１、３層といった上層からの出土が多く、埋土下層からはほとんど出土しなかった。

検出面から甕６、２層から甕７、３層から甕８、１層から壺９が出土した。壺10については１層と３層出土の土器片が接合している。そのほか、砥石S1を図化した。



1　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり弱、1㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、3㎝以下ホーキブロック・炭化物多含、3㎝以下ATブロック少含
3　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり強、1.5㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
4　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、1.5㎝以下ホーキブロック少含、炭化物多含
5　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、1.5㎝以下ホーキブロック・炭化物多含
6　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり弱、微細ホーキブロック・炭化物少含
7　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性強、しまり弱、炭化物少含
8　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり弱、炭化物多含
9　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性強、しまり強
10　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性強、しまり強
11　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、3㎝以下ホーキブロック多含、炭化物少含
12　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強
13　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり弱、炭化物少含
14　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり弱、2㎝以下黄褐色粘土ブロック多含、炭化物少含
15　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、3㎝以下ホーキブロック・炭化物多含、1㎝以下ATブロック少含
16　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり弱、1㎝以下ホーキブロック・炭化物多含
17　暗褐色土（10YR3/3）粘性強、しまり弱、炭化物多含
18　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、1㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
19　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強
20　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり弱、炭化物多含
21　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり弱、炭化物少含

第９図　SI3および出土遺物

本遺構の時期は、出土遺物の特徴から弥生時代後期後葉と考えられる。　（戸羽）

SI6（第13～15図、表３、PL. 15・59）

E23・24・F23・24グリッド、調査区南西側、標高約70.6～71.1mの緩斜面に位置する。

表土剥ぎ後、F24グリッド精査中に、隅丸方形を呈する褐色土の広がりを検出した。サブトレンチによって、ピット、壁溝を確認し、竪穴住居跡として調査を進めた。埋土掘り下げ後、床面から２条にめぐる壁溝、貼床に覆われたピットを検出し、建て替えを伴う竪穴住居跡と判断した。以下、建て替え前をSI6a、建て替え後をSI6bとし、SI6b、SI6aの順に報告する。

SI6b

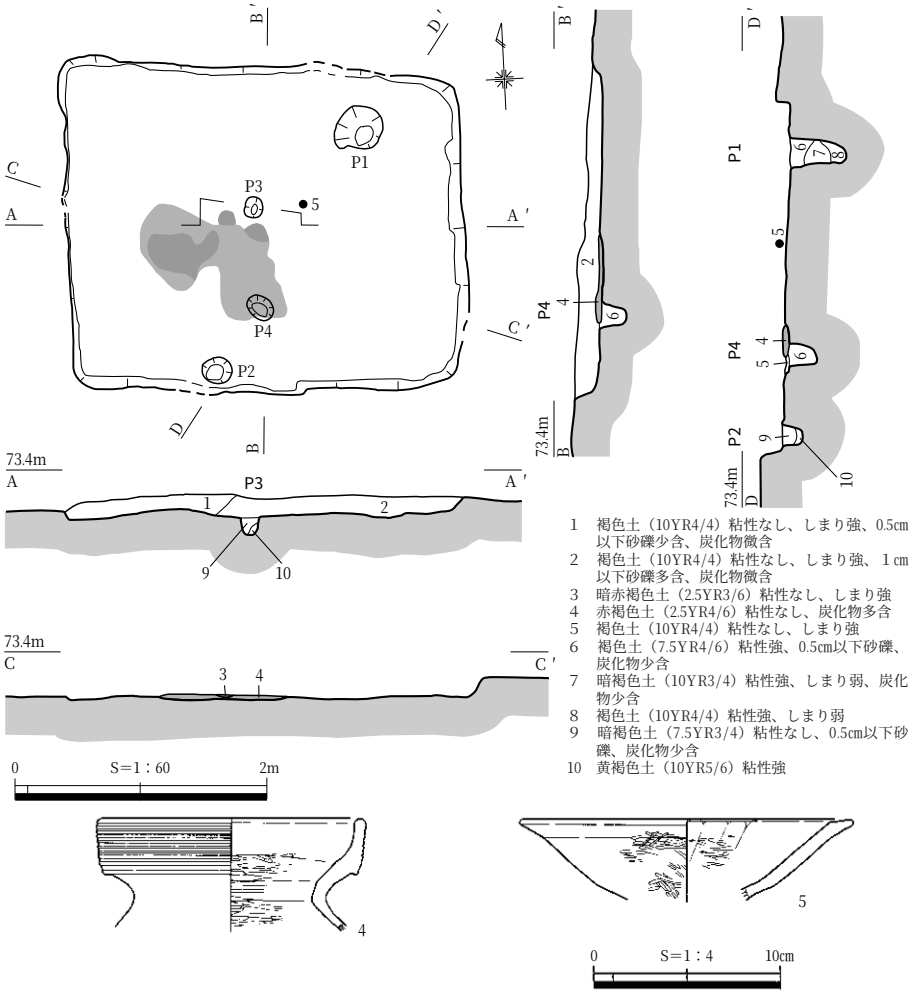
平面形は東西、南北ともに約6.0mを測る円形に近い隅丸五角形を呈し、床面積は23.01㎡である。壁高は南東壁で最大79㎝を測る。壁溝は断面U字形で、幅約５～22㎝、深さは最大９㎝を測る。壁溝は全周せず住居西側で途切れ、C字状を呈する。主柱穴はP1、P3、P4～６の５本柱で、主柱間距離はP1-P6が2.4m、P6-P5が2.6m、P5-P3が3.0m、P3-P4が2.4m、P4-P1が2.5mである。P8は中央ピットであり、建て替え前後で共用していたようである。P8の平面形が不整円形であるため、同じ位置で数回掘られている可能性もある。中央ピット最下の14層は多量の炭化物を含む層であった。

埋土は37層に分けられる。まず中央ピット、主柱穴が埋没し、壁際から床面上に４～９層が堆積する。その後、南東側から流れ込む１～３層が竪穴全体を覆う。なお、P5の15層、P6の16層については、自然堆積した住居埋土上層とは色調、ホーキブロックを含む点で異なっていることから、柱を抜き取った際に埋め戻した土の可能性がある。

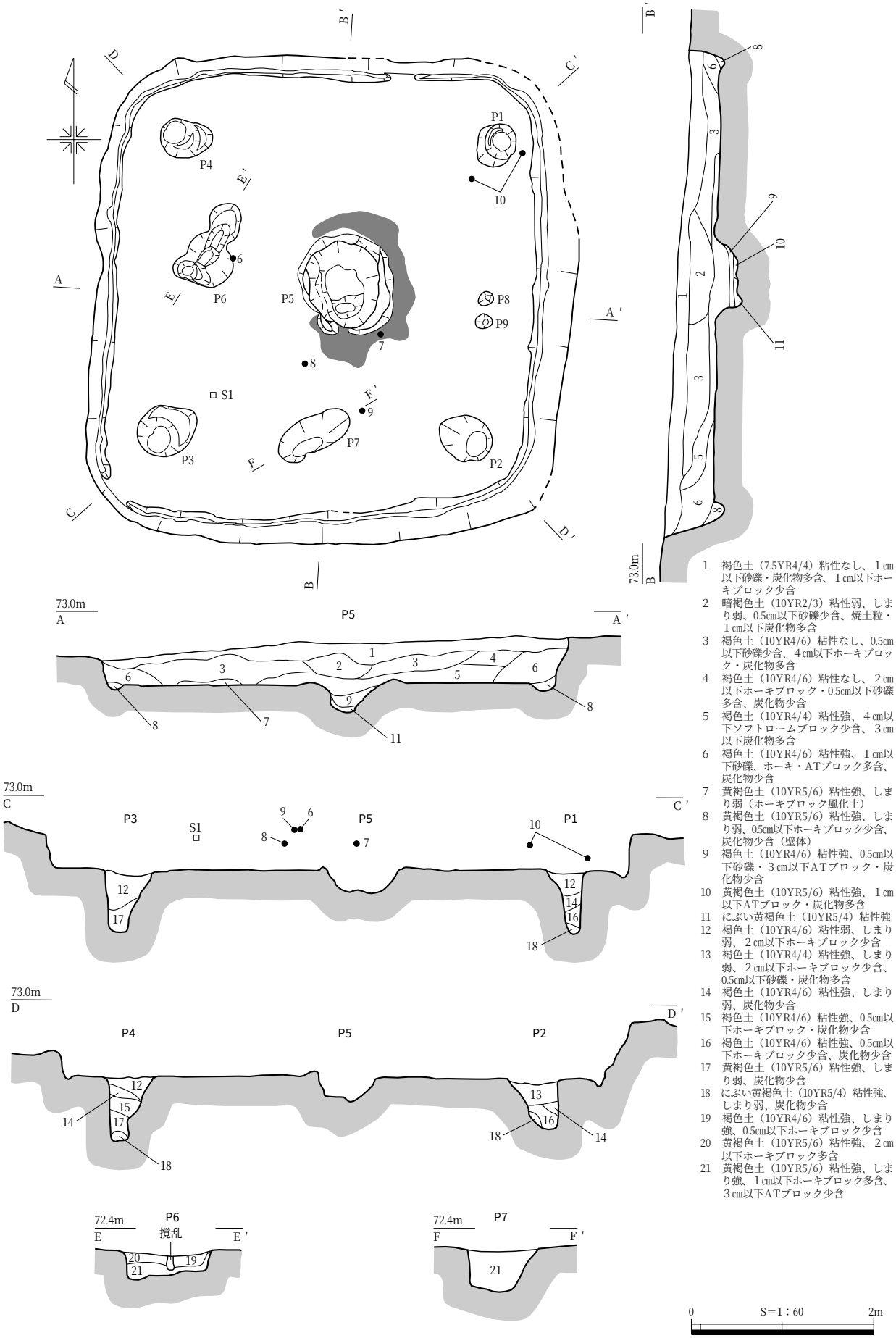
遺物は１～２層といった上層からの出土が多く、下層ではほとんど遺物が出土しなかった。

SI6a

竪穴の拡張を伴うSI6bへの建て替えのため壁はすべて遺存しておらず、建て替え前の正確な平面形は不明である。ただ、床面に残存する壁溝及び柱穴から推定される平面形は、長軸4.6m以上、短軸4.0m以上の円形になるものと推測される。



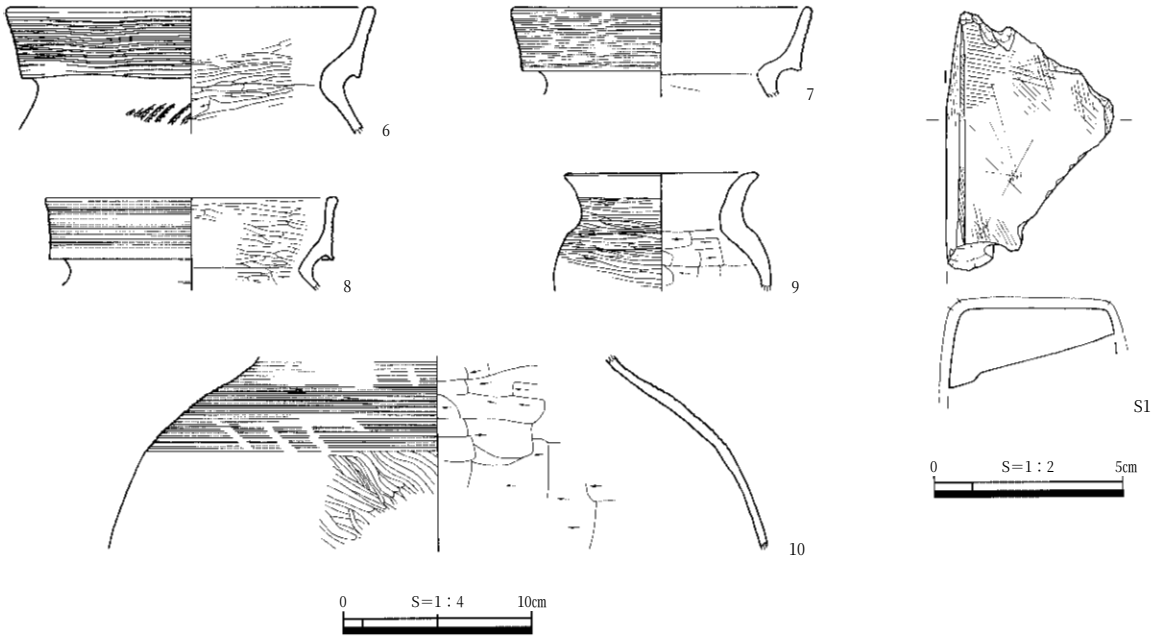
第10図　SI4および出土遺物



1　褐色土（7.5YR4/4）粘性なし、１cm以下砂礫・炭化物多含、１cm以下ホーキブロック少含
2　暗褐色土（10YR2/3）粘性弱、しまり弱、0.5cm以下砂礫少含、焼土粒・１cm以下炭化物多含
3　褐色土（10YR4/6）粘性なし、0.5cm以下砂礫少含、４cm以下ホーキブロック・炭化物多含
4　褐色土（10YR4/6）粘性なし、２cm以下ホーキブロック・0.5cm以下砂礫多含、炭化物少含
5　褐色土（10YR4/4）粘性強、４cm以下ソフトロームブロック少含、３cm以下炭化物多含
6　褐色土（10YR4/6）粘性強、１cm以下砂礫、ホーキ・ATブロック多含、炭化物少含
7　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり弱（ホーキブロック風化土）
8　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり弱、0.5cm以下ホーキブロック少含、炭化物少含（壁体）
9　褐色土（10YR4/6）粘性強、0.5cm以下砂礫・３cm以下ATブロック・炭化物少含
10　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、１cm以下ATブロック・炭化物多含
11　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性強
12　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、２cm以下ホーキブロック少含
13　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり弱、２cm以下ホーキブロック少含、0.5cm以下砂礫・炭化物多含
14　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり弱、炭化物少含
15　褐色土（10YR4/6）粘性強、0.5cm以下ホーキブロック・炭化物少含
16　褐色土（10YR4/6）粘性強、0.5cm以下ホーキブロック少含、炭化物少含
17　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり弱、炭化物少含
18　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性強、しまり弱、炭化物少含
19　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、0.5cm以下ホーキブロック少含
20　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、２cm以下ホーキブロック多含
21　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、１cm以下ホーキブロック多含、３cm以下ATブロック少含

0　S＝1：60　2m

第11図　SI5



第12図　SI5出土遺物

壁溝はSI6bと同様に、西側で途切れるＣ字状を呈する。断面はU字形で幅５～15㎝、深さは最大5㎝である。南東側で一部途切れる。

主柱穴はP2、P7、P9、P10の４本柱で、主柱間距離はP2-P9で2.5m、P9-P10で2.6m、P10-P7で2.5m、P7-P2で2.5mを測る。P2、P7、P9、P10にみられる28、29、32～35、37層はⅥ、Ⅶ、Ⅷ層ブロックを多く含むことから、柱穴の埋め戻し土と考えられる。P7、P9はピット最上層がSI6bの貼床であった。

甕11、石鏃S2、砥石S3を図化した。甕11は１層から出土した口縁部片で、内外面ともに赤彩されている。S2は３層、S3は床面直上から出土している。

甕11はⅤ-３様式に比定されるものであることからSI6bの時期は弥生時代後期後葉と考えられる。またSI6aは建て替えに伴って柱穴の埋め戻しが認められることから、時間差を持たずにSI6bへの建て替えが行われた可能性が高く、ほぼ同時期のものと考えられる。（戸羽）

SI7・8（第16・17図、PL. 38・66）

I22グリッド、標高約73.0mの平坦面にあり、SI9の南側に位置し、SI9によって北側が掘り込まれる。当初SI9の検出段階で１棟の竪穴住居と想定し調査を行っていたが、トレンチ及び埋土の掘り下げを進めていく中で、２棟の竪穴住居跡の存在が確認された。SI7はSI9の埋土を確認するために設けたトレンチにより、当初テラスとして認識していた。埋土掘り下げ中に壁溝の存在を確認したため、改めて竪穴住居跡（SI7）として調査を進めた。またSI8はSI9の壁面を確認するために設けたトレンチによって認識したものである。SI7はSI8・９に埋土、床面が切られており、切り合い関係からSI7→SI8→SI9と変遷する。以下SI8、７の順に報告する。

SI8

SI8は、埋土、床面の北半部をSI9によって削平されており、遺存状態は良くない。規模は長軸4.9m、短軸は推定で3.6mを測る隅丸長方形の竪穴住居跡である。床面積は残存部分で4.50㎡を測る。壁高は南側の残存部分で最大66㎝を測る。壁溝は幅10～12㎝、深さ３㎝を測り、東西、南辺の壁際を

めぐることから本来は全周していたものと想定される。ピットは５基、そのうち主柱穴と想定されるのはP1～４で、P5は中央ピットである。主柱穴の規模はP1（37×34－54）㎝、P2（38×34－67）㎝、P3（39×29－60）㎝、P4（53×36－71）㎝を測る。主柱間距離 はP1-P2間2.8m、P2-P3間3.8m、P3-P4間3.1m、P4-P1間3.3mを測る。埋土は全体で16層に分かれ、２層には炭化物が多く含まれていた。貼床（16層）はP2の西側、P3の北側を中心に施されている。SI8本来の床面はSI9の床面より約３㎝高いことから、P1、４、５の上部はSI9の床面構築時に上部を削平されていることが予想される。甕12～15、砥石S4、赤色顔料付着礫S5を図化した。

表３　SI6ピット一覧表

№	長軸×短軸－深さ（m）
P1	0.65×0.51－0.89
P2	0.4×0.33－0.73
P3	0.52×0.44－0.89
P4	0.6×0.54－0.76
P5	0.69×0.38－0.73
P6	0.8×0.73－0.25
P7	0.57×0.46－0.8
P8	0.99×0.79－0.32
P9	0.48×0.36－0.81
P10	0.58×0.46－0.84

甕13、15は床面直上に堆積する５層から、12、14は埋土中から出土した。13～15は口縁端部をつまみ出すように斜め上方に拡張させ、口縁下端部は斜め下方に突出させている。S4は壁際から、S5は床面直上から出土した。S5は下端部を中心に赤色顔料が付着している。

出土した土器の特徴から弥生時代終末期（Ⅳ-１期）と考えられる。

SI7

埋土の状況は明瞭でない（第109図）。埋土及び床面のほとんどがSI8・９によって切られており、一部の床面とピットを痕跡的に確認したのみである。床面はⅥ層を掘り下げて形成されており、平面形は推定で長軸2.8m、短軸2.4mの不整方形の竪穴住居跡と想定される。壁高は最大で30㎝を測り、床面積は残存部分で0.34㎡である。壁溝は南辺で約1.6mの範囲に認められた。幅は約15㎝、深さは５㎝である。壁溝は一部にしか認められないが、本来は全周していたものと想定される。主柱穴はP6～９の４基と推定される。規模は残存部分でP6（27×25－30）㎝、P7（29×26－33）㎝、P8（24×22－57）㎝、P9（33×33－23）㎝を測る。柱間距離はP6-P7間1.5m、P7-8間1.8m、P8-9間1.7m、P9-6間1.5mを測る。本来存在したであろう中央ピットは、確認できなかった。

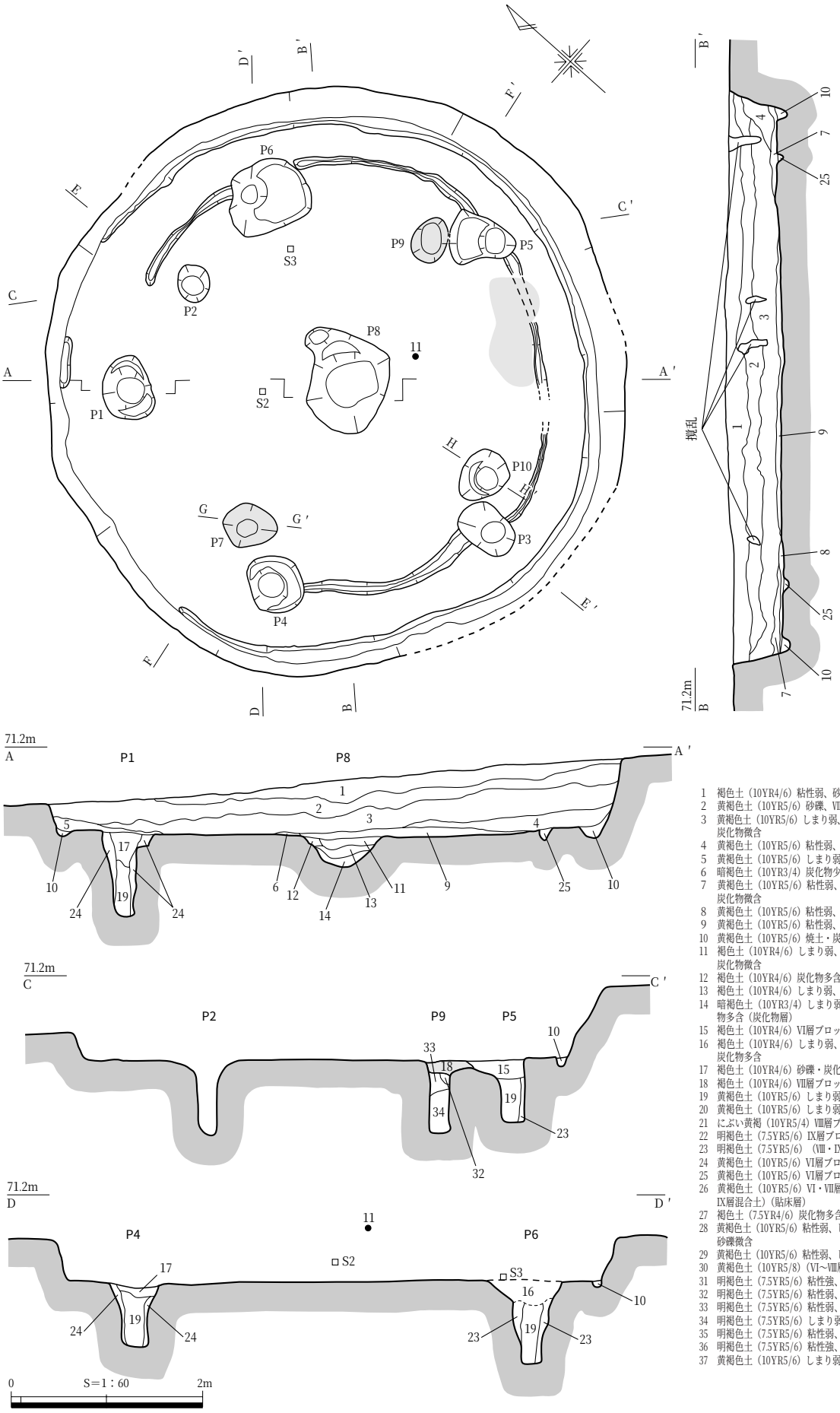
遺物は出土していないが、本遺構を切るSI8が弥生時代終末期に比定されることからそれ以前には廃絶していたものと考えられる。（大川）

SI10（第18～23図、表４、PL.8・10・15・59・67・76）

H21～22グリッド、谷頭に近い標高約72.2～71.6mの緩斜面にあり、SI1、SI2の北西側に近接する。

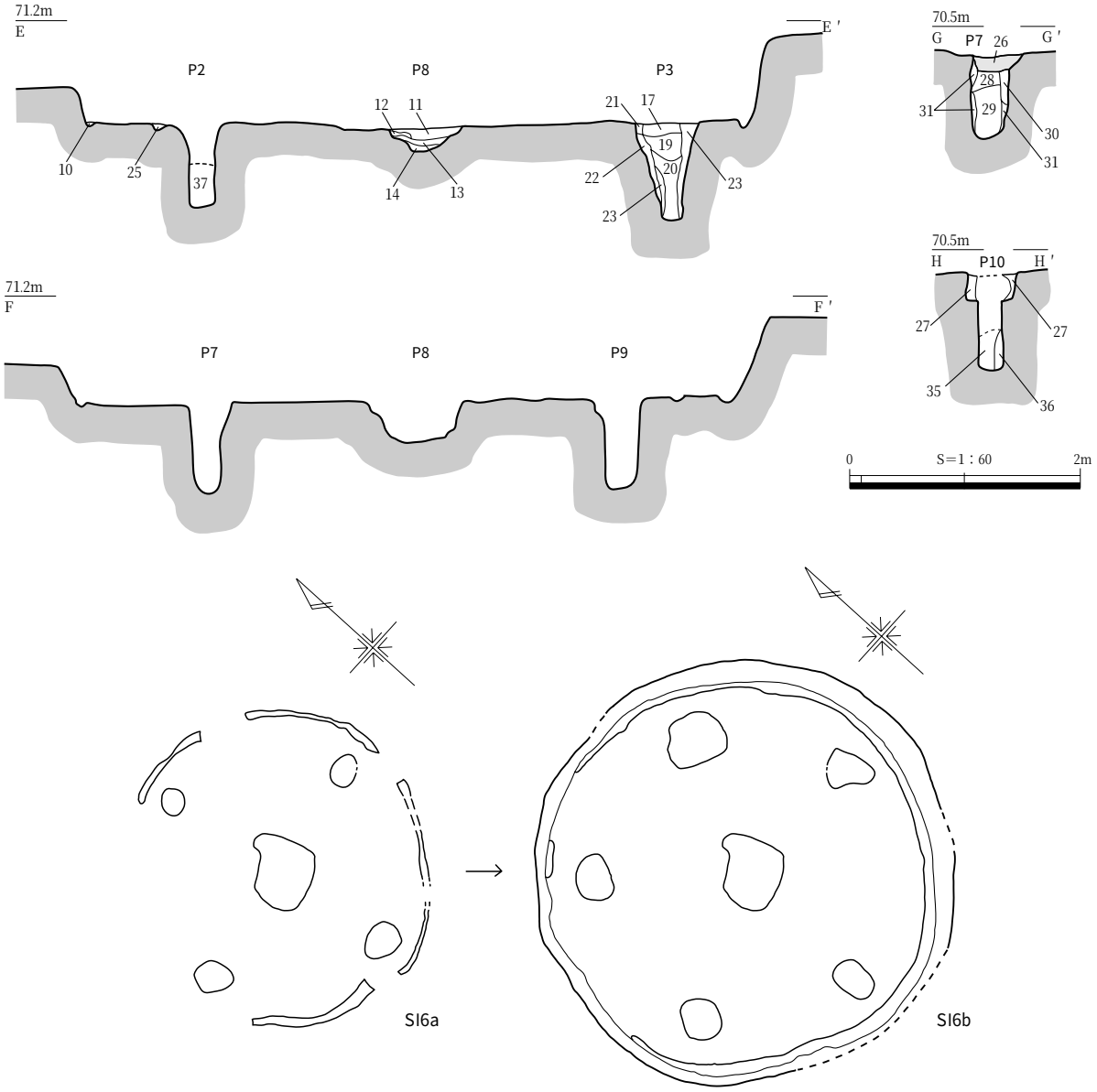
Ⅲ層除去後に、Ⅵ層ブロックと炭化物を多含する暗褐色土の広がりを検出した。トレンチ（A-A′、B-B′）を設定したところ、床面、壁溝及び壁面の立ち上りを確認した。さらに埋土中～下層、床面上に多量の炭化材と土器片を検出したため焼失住居と判断して調査を行った。

検出した規模は平面形が長軸6.6m、短軸5.9mの隅丸方形を呈し、床面積は20.29㎡である。壁高は南東側で検出面から最大92㎝を測る。地形的に低い北側では22㎝と浅い。Ⅶ層を床面とし、ほぼ平坦になっており、南側にはⅧ層とⅨ層からなる貼床が施される。床面上ではピット９基、壁溝２条、焼土面３ヶ所を検出した。焼土面はP5の東側に２ヶ所、南側に１ヶ所形成される。外側をめぐる壁溝の規模は幅７～19㎝、深さ２～６㎝で、断面はU字状を呈する。南西側で２ヶ所途切れる。内側のものは幅９～14㎝、深さ２～３㎝、断面はU字状を呈する。北～西側をめぐる内側の壁溝は貼床で埋



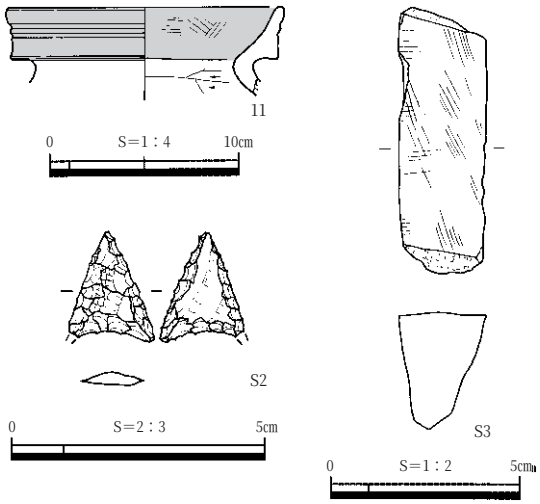
1　褐色土（10YR4/6）粘性弱、砂礫、炭化物多含
2　黄褐色土（10YR5/6）砂礫、Ⅶ層ブロック少含
3　黄褐色土（10YR5/6）しまり弱、砂礫、Ⅵ・Ⅶ層ブロック・炭化物微含
4　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、Ⅶ層ブロック・砂礫微含
5　黄褐色土（10YR5/6）しまり弱、砂礫、炭化物微含
6　暗褐色土（10YR3/4）炭化物少含
7　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱、Ⅶ層ブロック・炭化物微含
8　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱、炭化物微含
9　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、Ⅵ層ブロック・炭化物微含
10　黄褐色土（10YR5/6）焼土・炭化物微含
11　褐色土（10YR4/6）しまり弱、Ⅵ層ブロック・砂礫少含、炭化物微含
12　褐色土（10YR4/6）炭化物多含
13　褐色土（10YR4/6）しまり弱、Ⅵ層ブロック・炭化物少含
14　暗褐色土（10YR3/4）しまり弱、Ⅶ層ブロック微含、炭化物多含（炭化物層）
15　褐色土（10YR4/6）Ⅵ層ブロック少含、砂礫・炭化物多含
16　褐色土（10YR4/6）しまり弱、Ⅵ層ブロック少含、砂礫・炭化物多含
17　褐色土（10YR4/6）砂礫・炭化物少含
18　褐色土（10YR4/6）Ⅶ層ブロック微含（貼床層）
19　黄褐色土（10YR5/6）しまり弱、炭化物少含（柱痕跡）
20　黄褐色土（10YR5/6）しまり弱
21　にぶい黄褐（10YR5/4）Ⅷ層ブロック少含
22　明褐色土（7.5YR5/6）Ⅸ層ブロック少含
23　明褐色土（7.5YR5/6）（Ⅷ・Ⅸ層混合土）
24　黄褐色土（10YR5/6）Ⅵ層ブロック少含（裏込め土）
25　黄褐色土（10YR5/6）Ⅵ層ブロック少含、炭化物微含
26　黄褐色土（10YR5/6）Ⅵ・Ⅶ層ブロック・砂礫少含（Ⅷ・Ⅸ層混合土）（貼床層）
27　褐色土（7.5YR4/6）炭化物多含（Ⅷ・Ⅸ層混合土）
28　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱、黄褐色ブロック・砂礫微含
29　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱（Ⅵ～Ⅷ層混合土）
30　黄褐色土（10YR5/8）（Ⅵ～Ⅷ層混合土）
31　明褐色土（7.5YR5/6）粘性強、しまり強、（裏込め土）
32　明褐色土（7.5YR5/6）粘性弱、（Ⅵ～Ⅷ層混合土）
33　明褐色土（7.5YR5/6）粘性弱、（Ⅵ～Ⅷ層混合土）
34　明褐色土（7.5YR5/6）しまり弱
35　明褐色土（7.5YR5/6）粘性弱、しまり弱
36　明褐色土（7.5YR5/6）粘性強、しまり強、（裏込め土）
37　黄褐色土（10YR5/6）しまり弱（Ⅵ～Ⅷ層混合土）

第13図　SI6（１）



建て替え模式図（S＝1/100）

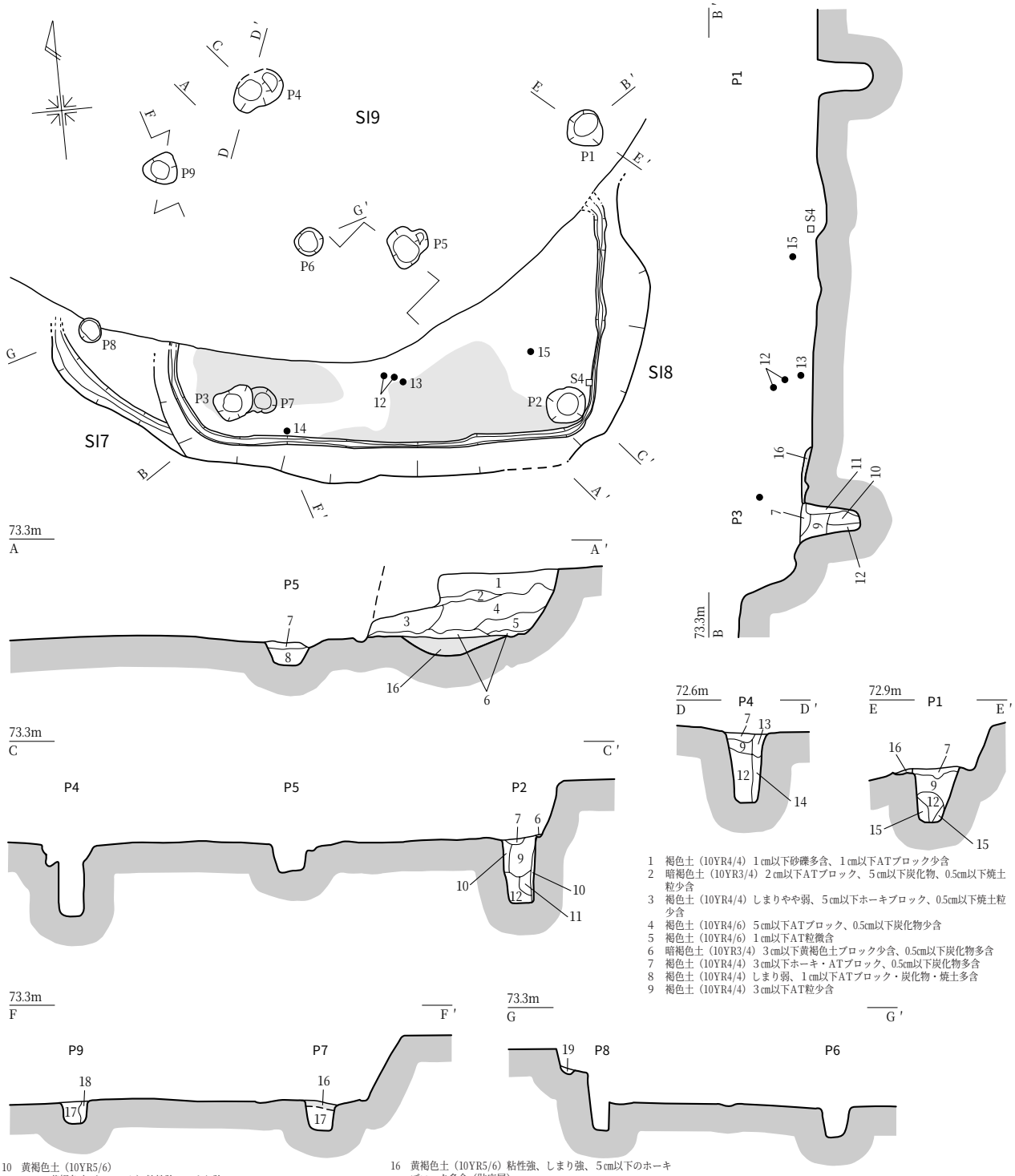
第14図　SI6（２）



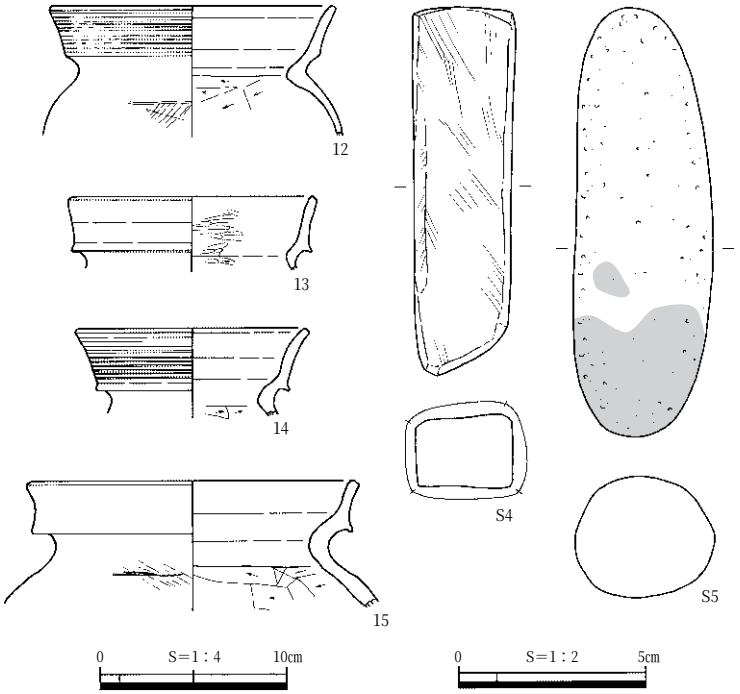
第15図　SI6出土遺物

められていた。また東側の壁溝は埋め戻しの痕跡を確認することは出来なかったものの、底面がW字状になる部分があり、２条存在することが把握できたため、南側を除く３方向に拡張する建て替えが行われていたと考えられる。柱穴には建て替えの痕跡が見られなかったことから、柱位置は替えずに竪穴のみ拡張をしたものと判断した。検出したピットのうちP1～P4が主柱穴である。規模はP1（44×37－37）㎝、P2（54×43－54）㎝、P3（35×32－48）㎝、P4（41×32－55）㎝であり、主柱間距離はP1-P2、P2-P3の順にそれぞれ3.3m、3.1m、3.1m、3.5mを測る。P4では柱痕が確認でき、柱痕部分の径は18㎝である。P5は中央ピットであり、規模は（146

×120－65）㎝を測る。平面形は不整円形、断面形はすり鉢状を呈し、地山から削り出した高さ１～３㎝程度の周堤がピット肩口をめぐる。P5の北東隅からP1の方向へ幅６㎝、深さ２㎝の床溝が１条伸び、P1の手前で収束する。P6は主柱穴とほぼ同じ規模ではあるが、深さが24㎝と浅い。また、P4-P1間のほぼ中央に位置するため、補助的な柱穴としての機能が想定される。P7～９は径19～22㎝、深さは17～20㎝でいずれも規模が小さく、用途は不明である。埋土はともに炭化物粒をわずかに含む褐色土である。



第16図　SI7・８



第17図　SI8出土遺物

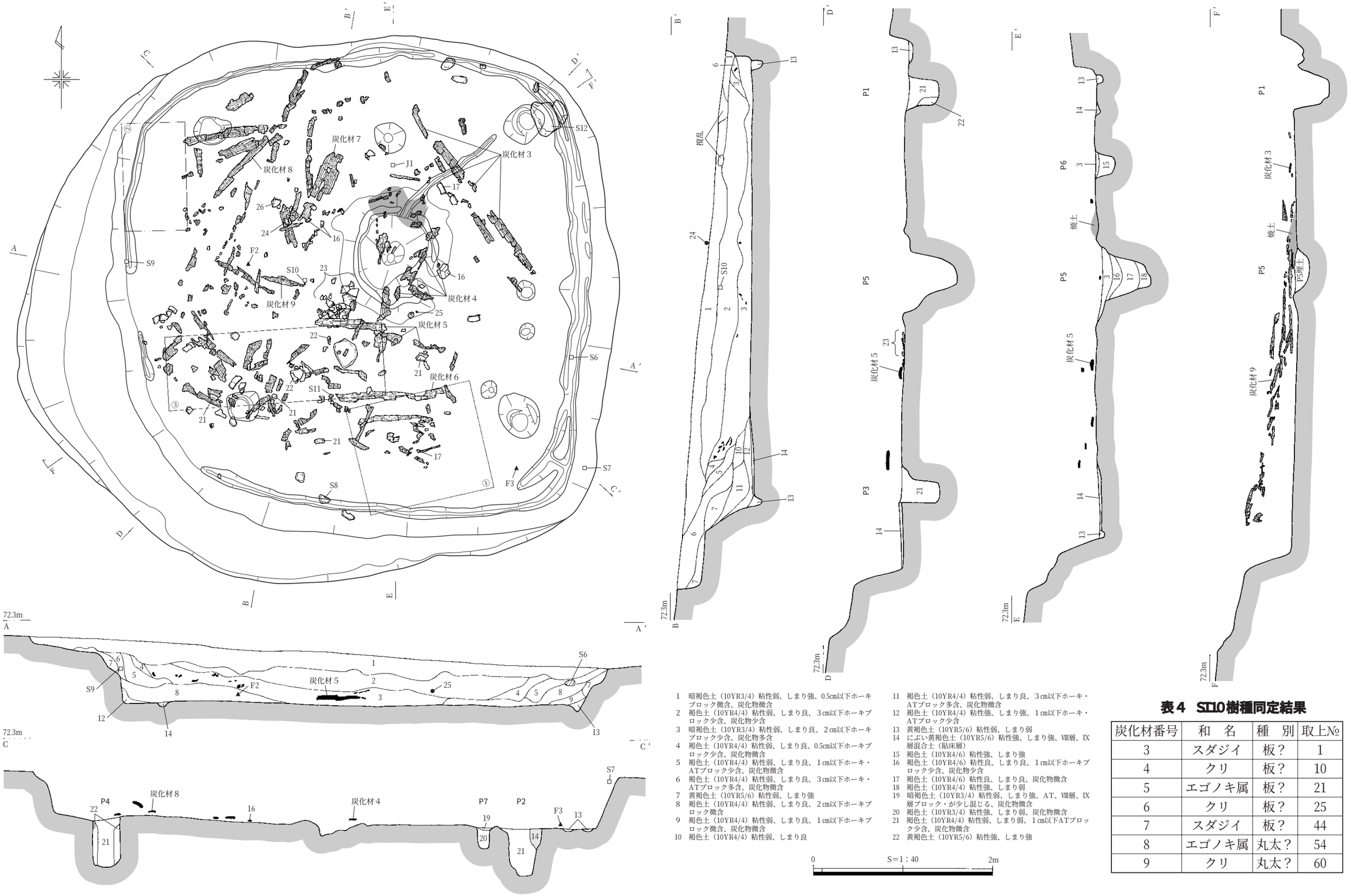
埋土は主に暗褐色土及び褐色土からなる。ピット埋土も含め22層に分層でき、ほとんどの層に炭化物が含まれる。本遺構は炭化材が多量に遺存しており、これらは概ね４、５、８層の上にのり、３層に包含される。床面中央付近から北東側にかけては炭化材が床面のほぼ直上で出土している。P5周辺には床面直上に炭化材があり、北側に焼土集中層が部分的に広がる。焼土は屋根に葺いた土が被熱したことに由来するものと考えられ、本住居は土屋根住居であったことが想定できる。焼土中にも棒状の炭化材が含まれ、全体はブロック状になるほどには硬化していない。炭化した部材が多量に残っていることや、焼土の量や範囲が小さいこと、また床面に燃焼時の熱で赤化した部分が見られないことから、部材が完全燃焼し屋根土までが激しく被熱するような状態ではなく、部材表面が炭化する程度の燃焼であったことが推察できる。

床面南東側において炭化材は埋土上層にあり、ここから北東方向に向かって床面上へ流れ込むように倒れ込んでいる（F-F ｩ）。こうした状況と炭化部材を包含するのが３層のみであることを踏まえると、４層以下の層が堆積するまでは炭化した建築部材が自立しており、４層が堆積した後に倒壊し、３層に覆われながら埋没していったものと思われる。P5の土層断面（E-E ｩ）において、埋土下層には炭化物はあまり含まれておらず、上層が炭化物を多く含む３層で塞がれていることを見ると、こうした状況を裏付けることができよう。

炭化材３は出土状況から扠首と思われ、炭化材５は板状のもので、繊維方向を求心方向に向けることから垂木の可能性が考えられる。炭化材６はP2-P3のラインに沿うことから母屋桁であろうか。炭化材３、５、６は樹種同定を行い、それぞれ炭化材３はスダジイ、炭化材５はエゴノキ属、炭化材６はクリという結果を得た（第４章第２節参照）。

炭化材の他に土器も多く出土している。主に２～３層に含まれ、床面上にも多くみられる。土器には被熱痕跡は顕著ではなかったものの、床面直上のものは住居に伴うもの、埋土中のものは埋没が進行していく途中で流入、もしくは廃棄されたものと考える。第20図①は３層にのる土器群であり、まとまりを持って出土した。３層の堆積に沿って住居中央へ流れ込むように出土していることから、炭化部材が倒壊し、３層に覆われた頃に、窪地状になった部分へ投棄もしくは流入したものであろう。床面付近で管玉が１点、穿孔具と思われる鉄器が２点出土していることが注目されるが、床面を覆う３層及び床面から玉作に伴う剥片や素材となる原石等が見つかっていないことから、これらは埋没初期の段階で流入したものと考えられる。

16～18、21、23は床面直上から出土した。16は口縁下部に７条の平行沈線後上部に７条の波状文を施した後ナデ消す。肩部には７条を一単位とする沈線を３段施す。17は口縁部に17条以上の平行沈線



1　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり強、0.5cm以下ホーキブロック微含、炭化物微含
2　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、３cm以下ホーキブロック少含、炭化物少含
3　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり良、２cm以下ホーキブロック少含、炭化物多含
4　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、0.5cm以下ホーキブロック少含、炭化物微含
5　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、１cm以下ホーキ・ATブロック少含、炭化物微含
6　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、３cm以下ホーキ・ATブロック多含、炭化物微含
7　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり強
8　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、２cm以下ホーキブロック微含
9　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、１cm以下ホーキブロック微含、炭化物微含
10　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良
11　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、３cm以下ホーキ・ATブロック多含、炭化物微含
12　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、１cm以下ホーキ・ATブロック少含
13　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱
14　にぶい黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、Ⅷ層、Ⅸ層混合土（貼床層）
15　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強
16　褐色土（10YR4/6）粘性良、しまり良、１cm以下ホーキブロック少含、炭化物少含
17　褐色土（10YR4/6）粘性良、しまり良、炭化物微含
18　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり弱
19　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり強、AT、Ⅷ層、Ⅸ層ブロック・が少し混じる、炭化物微含
20　褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり弱、炭化物微含
21　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり弱、１cm以下ATブロック少含、炭化物微含
22　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強

0　S=1：40　2m

表４　SI10樹種同定結果

炭化材番号	和　名	種　別	取上№
3	スダジイ	板？	1
4	クリ	板？	10
5	エゴノキ属	板？	21
6	クリ	板？	25
7	スダジイ	板？	44
8	エゴノキ属	丸太？	54
9	クリ	丸太？	60

第18図　SI10（１）

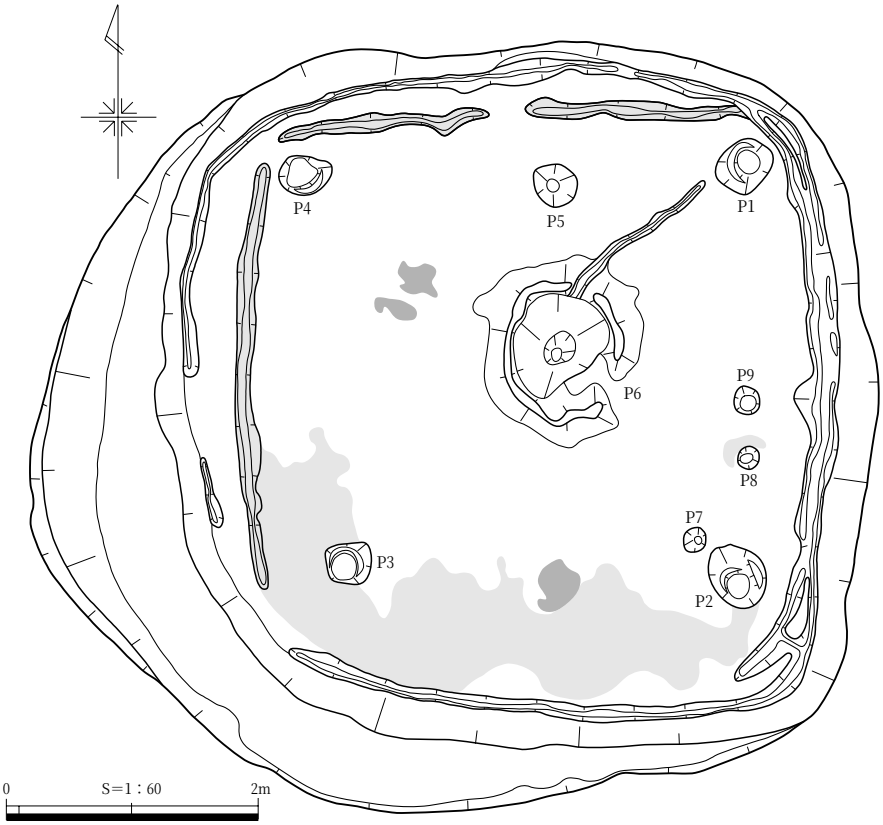
を施し、上部はナデ消している。肩部には貝殻による連続刺突文がめぐる。18は肩部に10条以上の平行沈線後、６条の波状文を施す。23は壺で、床面直上から出土している。20、22は３層から出土している。20は口縁部に10条以上の平行沈線後、中央部をナデ消している。肩部には押引沈線がめぐる。21は口縁部に平行沈線を施した後ナデ消し、後に上部と下部に波状文を施す。肩部にもかすかに波状文が認められる。26は鉢で３層から出土している。内外面ともにミガキ、底面はナデである。24は器台の受け部である。内外面とも赤彩される。25は器台の脚部で、外面が赤彩される。裾部は多条沈線後ナデ消す。27は径2.4㎝ほどの円形の土製品で、内外面ともにハケメ後ナデによって仕上げられ、外周は二次的に成形されている。土器の胴部片を転用した紡錘車の未製品と思われる。１層から出土しており、埋没終了時期の混入であろう。S6、S7は敲石、S8は石杵、S9は砥石、S10、S11は石錘である。S8は床面直上から出土している。上下両端に広い敲打痕を残し、下端には赤色顔料がわずかに付着している。S11は九州型石錘に分類されるものである。S12は台石で、床面直上での出土である。上面に赤色顔料が薄く付着している。S8、S12は共に赤色顔料の付着するものであることから、住居内で赤色顔料を用いた何らかの活動が行われていたことが考えられる。J1は床面付近から出土した硬質緑色凝灰岩製の管玉である。長さ８㎜、径３㎜の大きさで、両側から径１㎜の穴が穿孔されている。F2、F3は鉄製の穿孔具と思われるもので、F3は先端部の破片である。F2は最大長9.2㎝、最大幅５㎜、最大厚７㎜で、先端がヘラ状に薄くなる。

遺構の時期としては、床面上から出土した土器群がⅤ−３期の特徴を示すものであることから、弥生時代後期後葉と考える。（淺田）

SI11（第24〜28図、表５、PL. 16・17・59・75）

F23〜G24グリッド、標高約71.5〜71.7mの尾根部平坦面にあり、SI6の南側4.5mに位置する。

Ⅱ層除去後、Ⅵ層ブロックと炭化物粒を多く含む暗褐色土の径7.2mの円形プランを検出した。トレンチを設定したところ、床面、壁溝、ピット及び壁面の立ち上りを確認したため、竪穴住居として調査を行った。床面を検出した時点で、ピット上面が貼床で覆われているものがあることを確認し、また壁溝もトレンチ（A−A′）の東側部分の断面から、貼床と同じ土



第19図　SI10（２）

で埋められ、造り替えの痕跡が確認できた。さらに南西側では壁溝がピットを切る部分も確認できたため建て替えが行われていたものと考え、貼床の有無で建て替えの前後の判断をし、建て替え後と判断できるものから調査を進めた。以下、建て替え前の住居をSI11a、建て替え後のものをSI11bとして詳述する。

SI11b

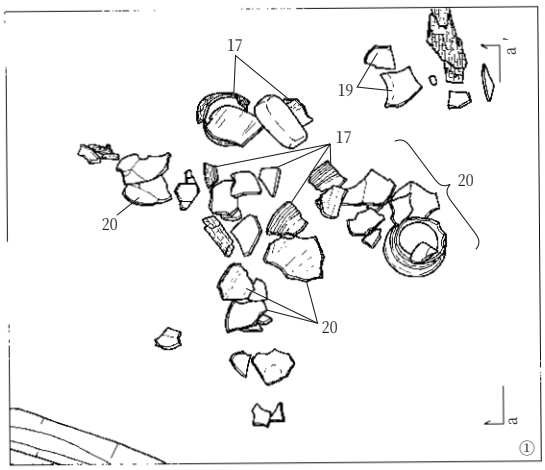
住居の平面形は長軸7.0m、短軸6.8mの円形を呈し、建て替え後の床面積は21.36㎡である。壁高は南東側で検出面から最大74㎝を測る。地形的に低い北側では22㎝と浅い。Ⅶ層を床面とし、ほぼ平坦になっている。床面上でピット18基、壁溝２条、床溝４条、焼土面は中央ピットの北側と東側に１ヶ所ずつ検出した。北側の焼土面は東側のものより赤味がかなり淡くなっていた。建て替えは５本柱から４本柱へと柱数を減らし、床面を南から北側へ20㎝程度ずらす形で行われている。

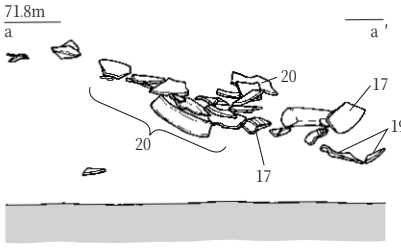
検出したピットの内、P1～P8がSI11bのものである。P1～P4は主柱穴である。規模はP1（57×56－36）㎝、P2（47×45－44）㎝、P3（59×51－50）㎝、P4（41×39－58）㎝を測る。主柱間距離はP1-P2、P2-P3の順に2.2m、2.6m、2.2m、2.6mであり、対辺が揃うようになっている。P5は中央ピットであり、西側肩口が貼床で埋め戻され成形されている。SI11aのものが一部造り替えられ、再利用されたものである。平面形は楕円形を呈し、断面は椀形で段掘りになっている。規模は（93×68－40）㎝を測る。P6は補助的な柱穴であろうか。規模は（33×30－60）㎝である。P7、P8はいずれも規模が小さく、用途は不明である。壁溝はほぼ全周するが、南東隅で部分的にわずかに途切れる。規模は幅５～20㎝、深さ５㎝前後で、断面は椀状を呈する。西側の壁溝からP5に向かって床溝（幅６～18㎝、深さ２㎝）が伸び、P5の手前で収束する。P2の西側にも長さ110㎝、幅10～22㎝、深さ２㎝の床溝が南北方向に伸びる。焼土面はP5の西側、床溝に接するかたちで不整楕円形に45×28㎝の規模で形成される。

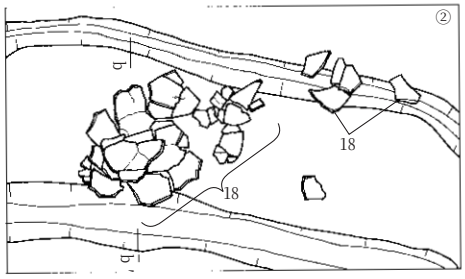
埋土は主に褐色系の土からなり、炭化物粒やⅥ層ブロックを包含する。遺物はおもに１～２層に含まれる。６層は、しまりが強くⅥ層に由来する径５㎝前後のブロックを多量に包含する土である。P10からP11にかけての南側壁面付近のみに見られ、地形的に高い南側から北側へ向かって竪穴内に流れ込むように堆積する。周堤の崩落に伴う堆積と考えられる。また、１～３層は地形に沿って流れるように堆積していることも合わせると、自然堆積による埋没と考えられる。

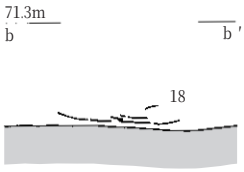
P1の西側で甕の破片がまとまって出土しており（第26図①）、これらは３層の上にのり、２層に覆われる。住居が廃絶した後、３層が堆積し窪地状になったところへ投棄されたものであろう。中にはブロック状に集積するものも見られ、廃棄の単位や廃棄時の地形が推察される。図化まではしていないが、西側壁面付近から中央ピットの方向へ２層の堆積に沿うように径20㎝前後の礫が数個出土している。おそらくこれらの礫も２層の堆積中に投げ込まれたものであろう。

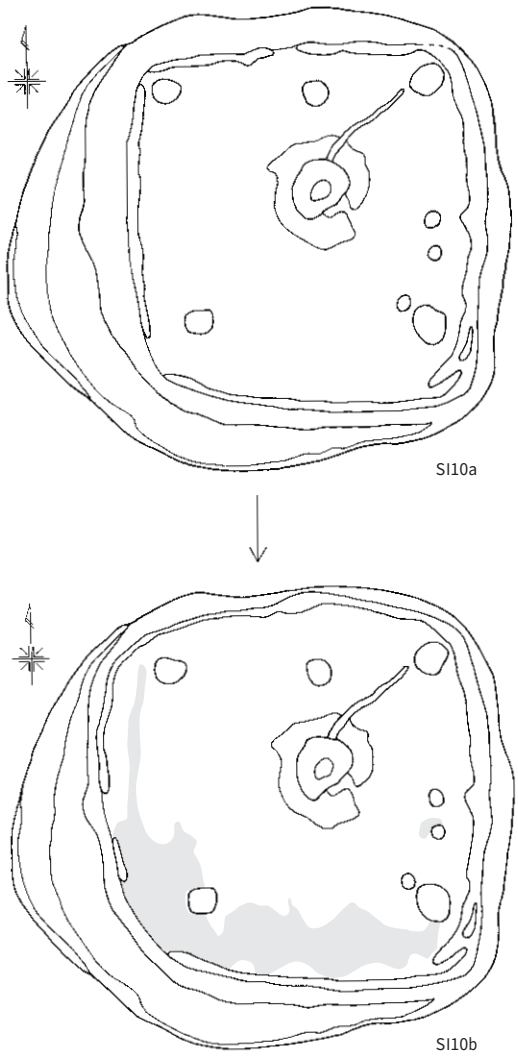
28～29は甕である。28は１、２層からの出土である。肩部に上から７条の平行沈線、９条の波状文、９条の平行沈線が施文される。29は２層、34は１層から出土し、ともに肩部に刺突文がめぐる。30は１～２層で出土している。口縁部に平行沈線施文後ナデ消し、肩部には上から８条の波状文、６条の平行沈線、７条の波状文が順に施される。37は２～３層の出土である。口縁部に平行沈線施文後上部をナデ消している。SI12の１層中から出土したものと接合している。40は甕もしくは壺の底部、41は台付甕の脚台部である。S13、S14は敲石、S15は台石である。S15は２層から出土し、表裏両面に敲打痕や擦痕が見られ、部分的に平滑になっている。作業台として使用されたことが推測される。



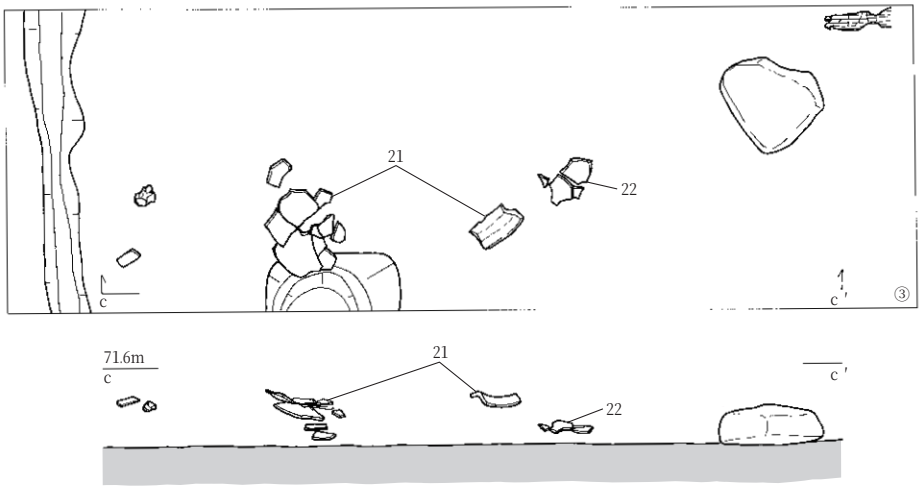


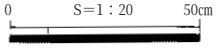




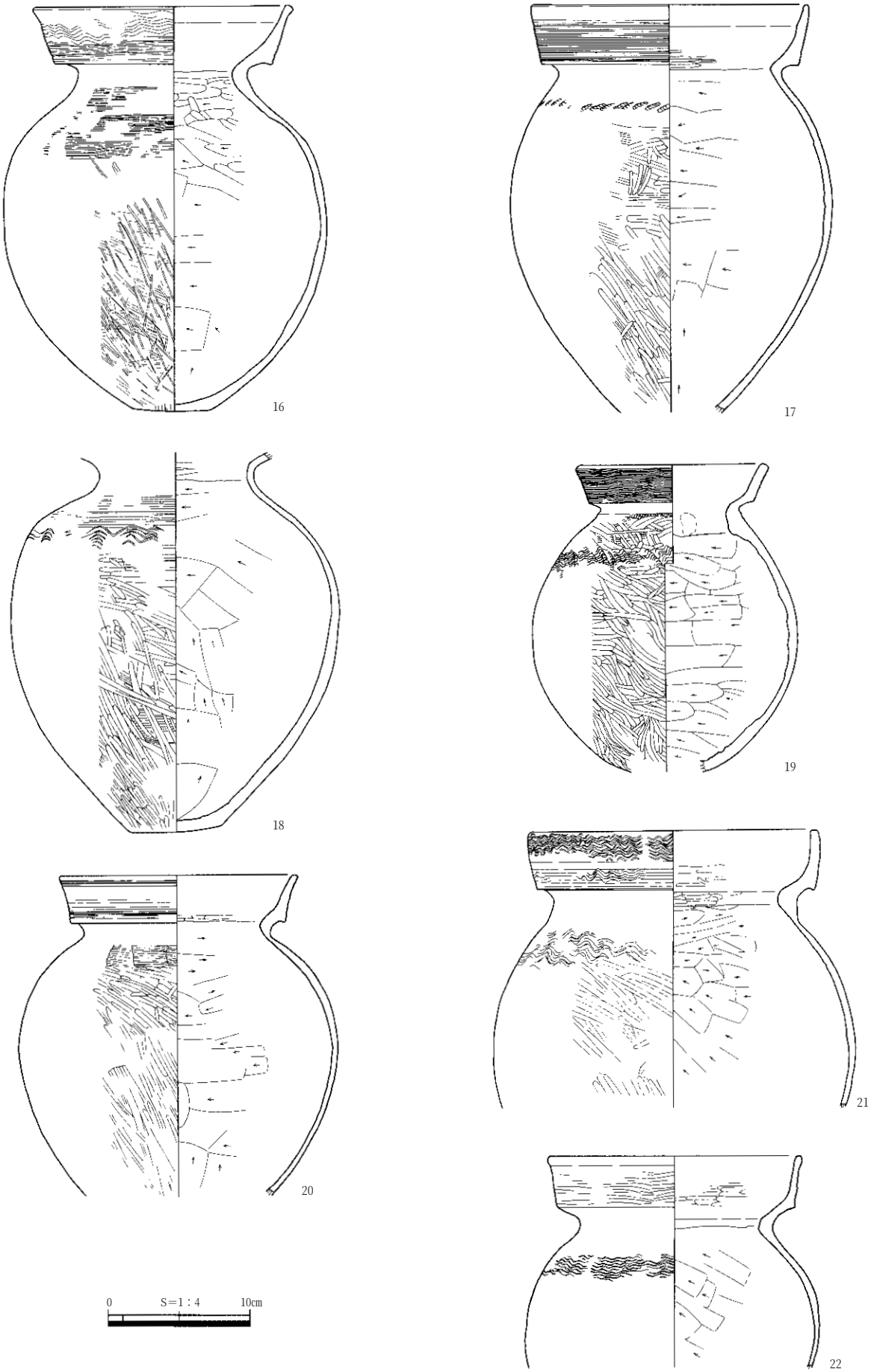


建て替え模式図（S＝1/100）

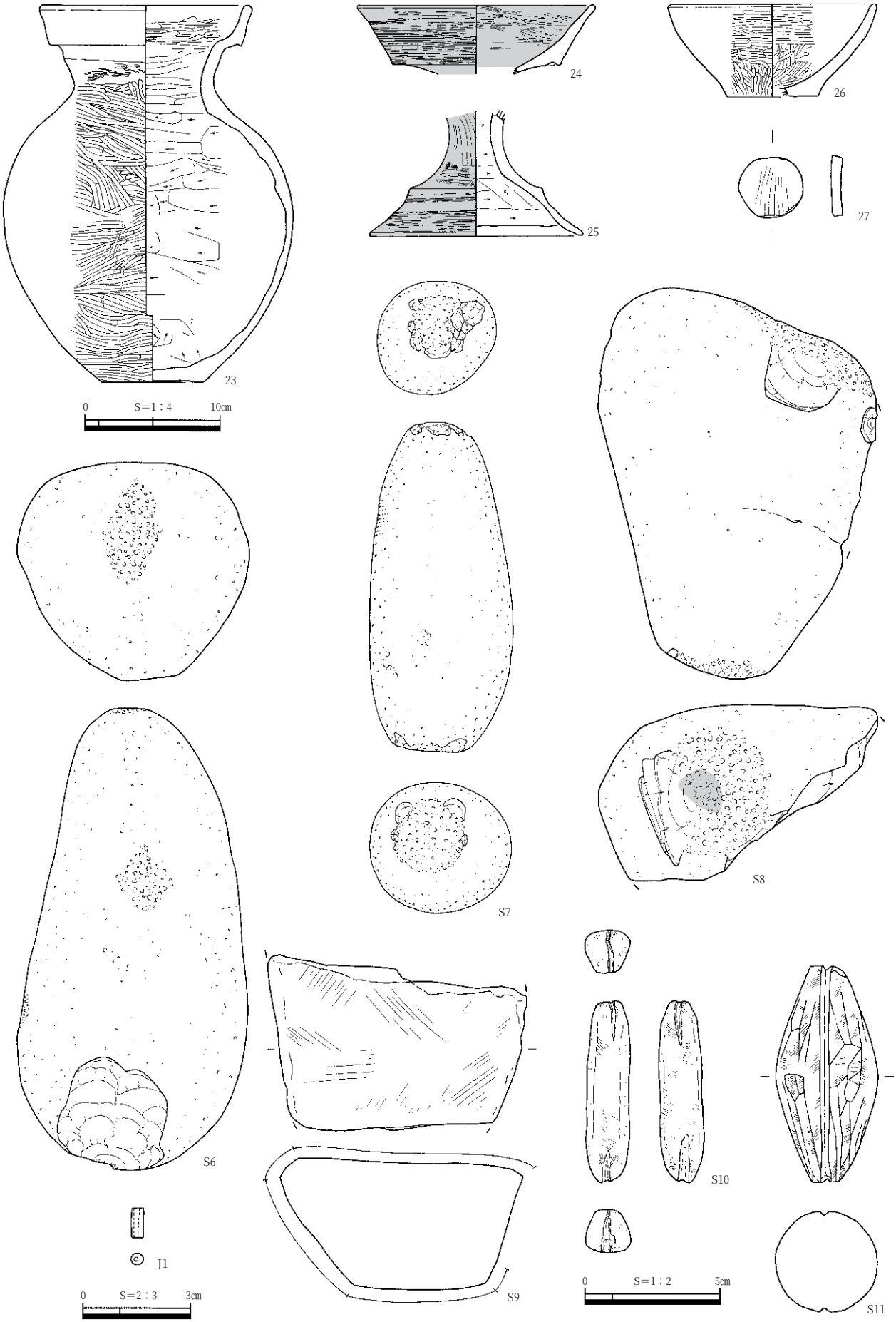




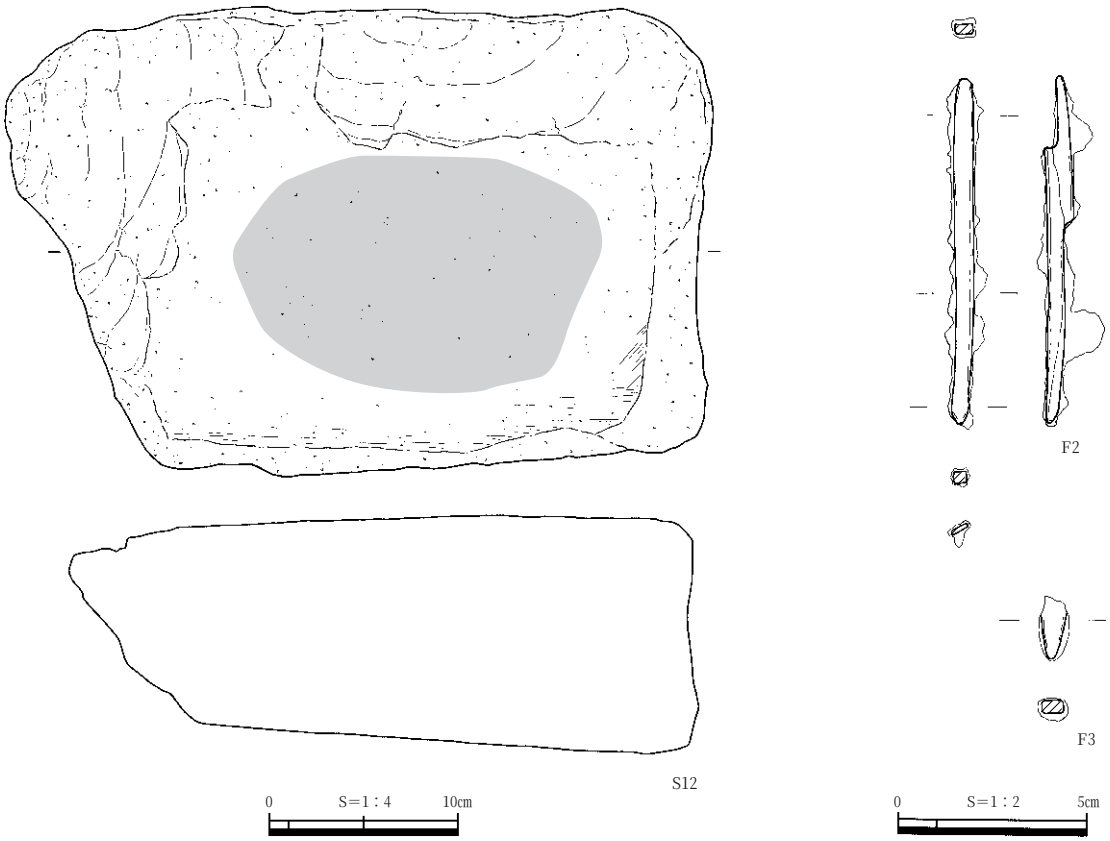
第20図　SI10（３）



第21図　SI10出土遺物（１）



第22図　SI10出土遺物（２）



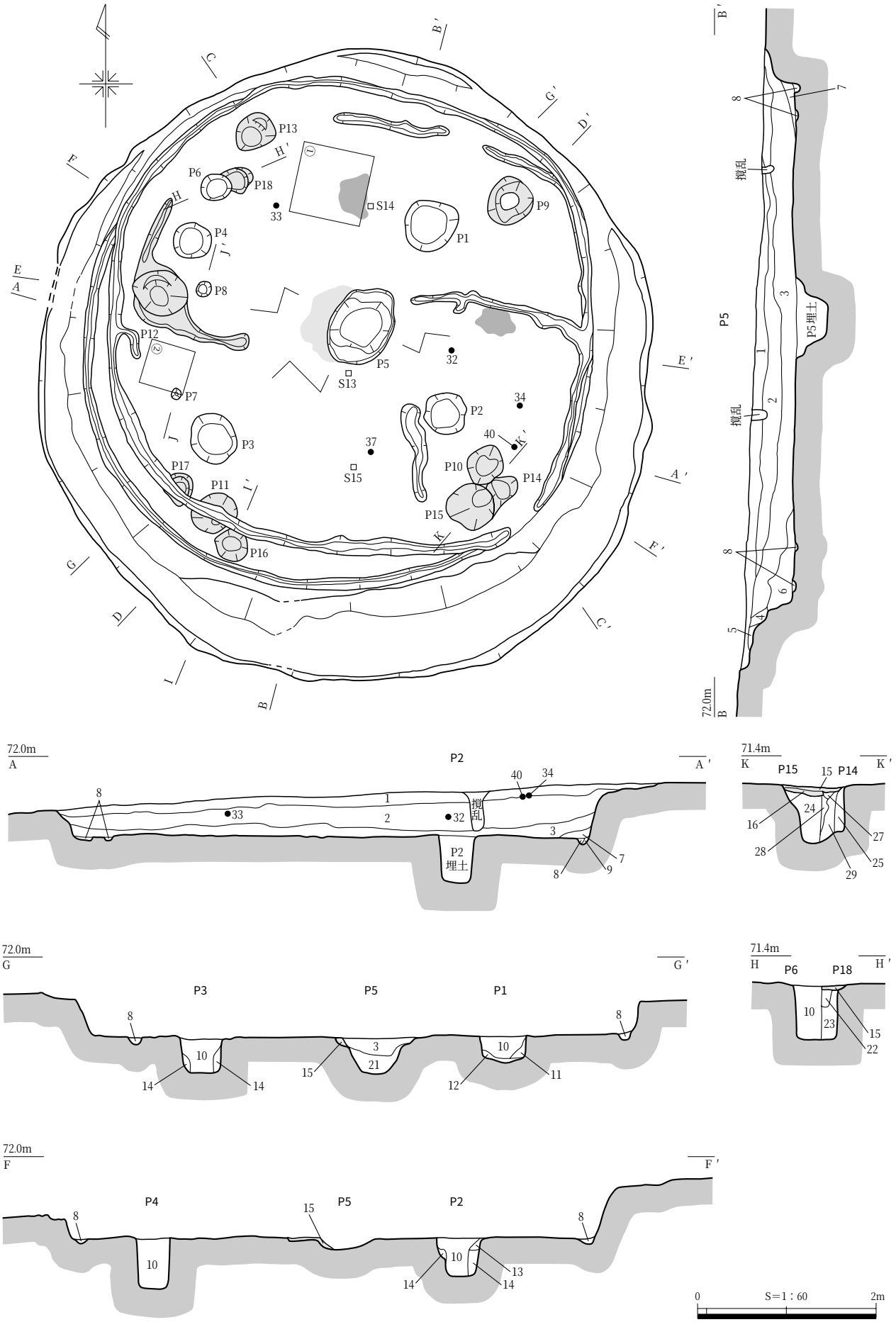
第23図　SI10出土遺物（３）

SI11a

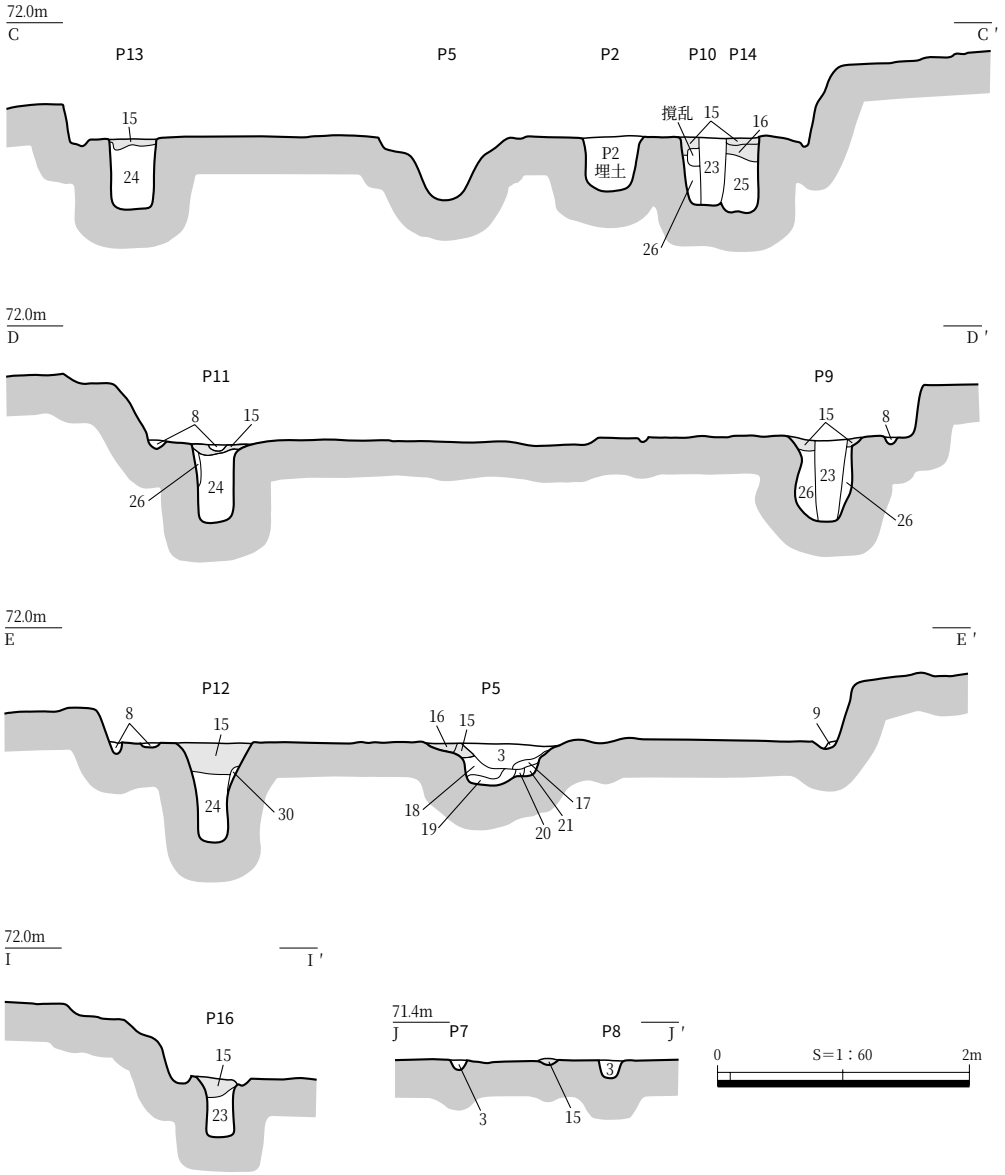
P5、P9～P18が建て替え前のピットである。このうち、P9～P13が主柱穴と考えられる。規模はP9（52×48－65）㎝、P10（45×40－57）㎝、P11（49×39－65）㎝、P12（61×51－81）㎝、P13（46×39－57）㎝である。主柱間距離はP9-P10、P10-P11の順に2.9m、3.1m、2.6m、2.1m、3.0mである。P9とP10においては、柱痕が明瞭に残り、土層断面観察による柱痕の規模はP9で径18㎝、P10で径19㎝である。P5の貼床を除去した段階での平面形は不整方形を呈し、規模は（108×90－40）㎝を測る。P14・P15はP10と一連のものである。土層断面の観察からP14→P15→P10の順に造り直されていることが確認でき、P14・P15は次のピットを造る際にⅧ層・Ⅸ層を主体とする地山土で埋め戻されており、いずれも上面には貼床が施される。P16・P17も同様の地山土で埋め戻されており、その状況からP11と一連をなすものと考えられる。P10、P11には少なくとも２回の造り直しが認められることから、５本柱の段階で２回の柱の建て替えが行われていたことが推測できる。P18の規模は（30×26－59）㎝であり、P14～P17と同様に地山土で埋め戻されている。P6とほぼ同規模であり、かつ接していることから、P6と一連の関係を持つことが予想され、建て替え後の４本柱になった段階での柱穴と考えることもできるが、埋土がP14～P17と同様のものであるため、建て替え前のものとしておく。用途はその位置から支柱穴であろうか。P12からはP5とP13に向かって床溝が２条伸びる。いずれもP12から60㎝伸びたところで途切れており、P12の上面と共に貼床で埋め戻されていた。

SI11aに伴う遺物は出土していない。

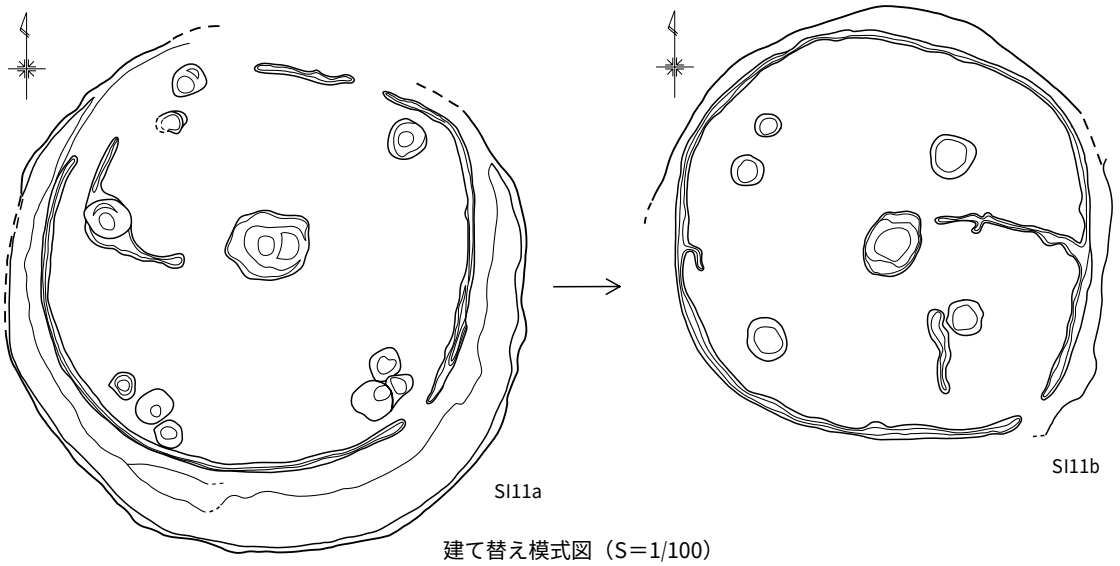
遺構の時期は、出土した土器がⅤ-３期の特徴を示すものであることから、弥生時代後期後葉と考えられる。（淺田）


P13
P6
P18
S14
33
P9
P1
P4
P8
P12
P5
32
S13
P7
34
P2
P3
37
40
P10
P14
P17
S15
P11
P15
P16
撹乱
P5埋土
72.0m
B
A
A'
P2
P2埋土
K
K'
P15
P14
G
G'
P3
P5
P1
H
H'
P6
P18
F
F'
P4
P5
P2
0
S=1：60
2m

第24図　SI11（1）



1　暗褐色土（10YR3/4）しまり強、炭化物少含
2　褐色土（7.5YR4/4）しまり強、１㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
3　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、１㎝以下ホーキブロック微含
4　褐色土（7.5YR4/4）しまり強、炭化物少含
5　褐色土（7.5YR4/6）しまり強、２㎝以下ホーキブロック多含
6　明褐色土（7.5YR5/6）しまり強、５㎝以下ホーキブロック多含
7　褐色土（7.5YR4/4）しまり強、１㎝以下ホーキブロック微含
8　明褐色土（7.5YR5/6）粘性強、しまり弱
9　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、１㎝以下ホーキブロック少含
10　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり強、１㎝以下ホーキブロック少含
11　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、１㎝以下ホーキブロック微含
12　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強
13　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱
14　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり極強（裏込め土）
15　にぶい黄褐色土（10YR6/4）粘性弱、しまり極強、ホーキ～Ⅷ層混合土（貼床層）
16　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり極強、Ⅷ層土多含（貼床層）
17　褐色土（10YR4/4）粘性弱
18　褐色土（10YR4/4）粘性弱、３㎝以下ホーキブロック多含
19　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強
20　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性強、しまり強、Ⅷ層ブロック多含
21　明黄褐色土（10YR6/8）粘性弱、しまり強、５㎝以下ホーキブロック多含
22　褐色土（10YR4/6）粘性弱、Ⅷ・Ⅸ層混合土（埋め戻し土）
23　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり弱、Ⅷ・Ⅸ層混合土（埋め戻し土）
24　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、Ⅷ・Ⅸ層混合土（埋め戻し土）
25　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり弱、Ⅷ・Ⅸ層混合土（埋め戻し土）
26　黄褐色土（10YR5/6）粘性強（裏込め土）
27　橙色土（10YR6/6）粘性強、しまり極強、Ⅷ・Ⅸ層混合土（埋め戻し土）
28　明褐色土（10YR5/6）粘性強
29　にぶい橙色土（10YR6/4）粘性強、しまり極強、Ⅷ・Ⅸ層混合土（埋め戻し土）
30　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強

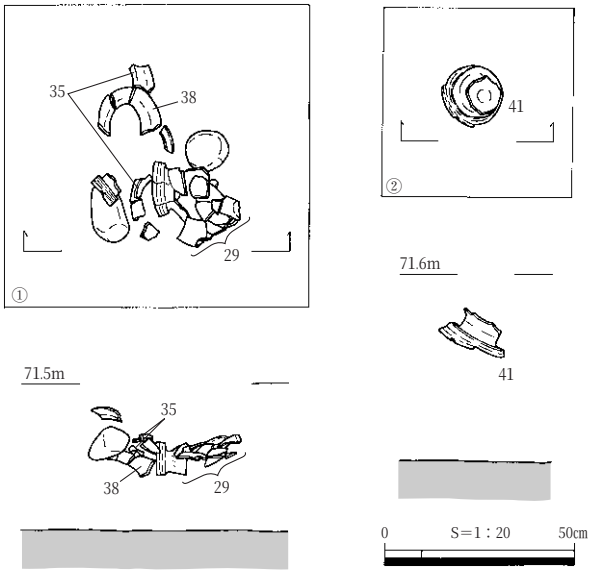


建て替え模式図（S＝1/100）

第25図　SI11（２）

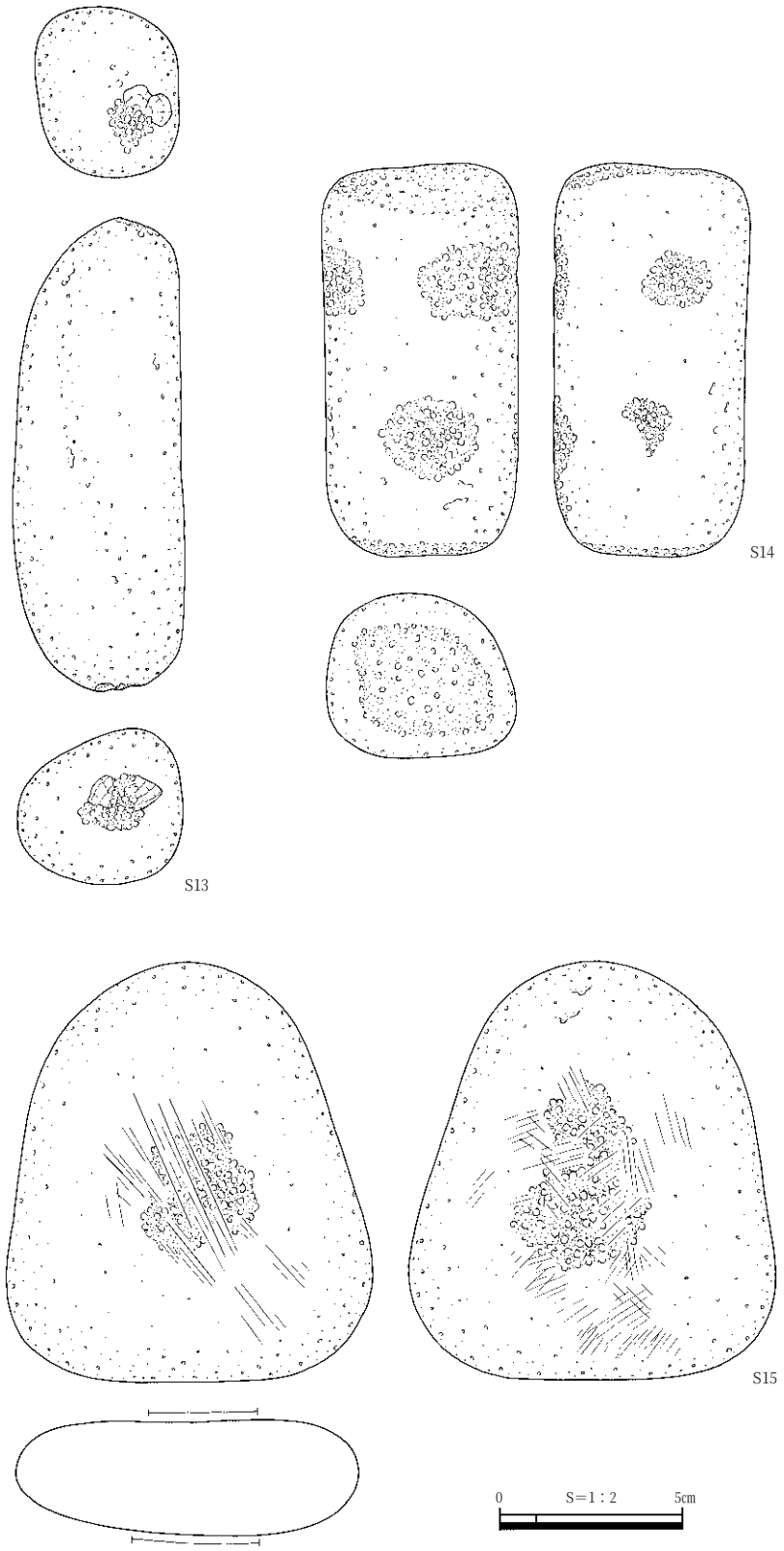
表５　SI11ピット一覧表

№	長軸×短軸－深さ（m）
P1	0.57×0.56－0.36
P2	0.47×0.45－0.44
P3	0.59×0.51－0.5
P4	0.41×0.39－0.58
P5	前1.08×0.9－0.4 後*0.93×*0.68－0.4
P6	0.33×0.3－0.6
P7	0.12×0.1－0.06
P8	径0.15－0.13
P9	0.52×0.48－0.65
P10	0.45×0.4－0.57
P11	0.49×0.39－0.65
P12	0.61×0.51－0.81
P13	0.46×0.39－0.57
P14	△0.32×0.3－0.58
P15	0.5×△0.48－0.67
P16	0.37×0.35－0.5
P17	0.35×0.33－0.15
P18	0.3×△0.26－0.59



第26図　SI11（３）

第27図　SI11出土遺物（１）



第28図　SI11出土遺物（２）

SI12（第29～31図、表６、PL. 17・18・60・75）

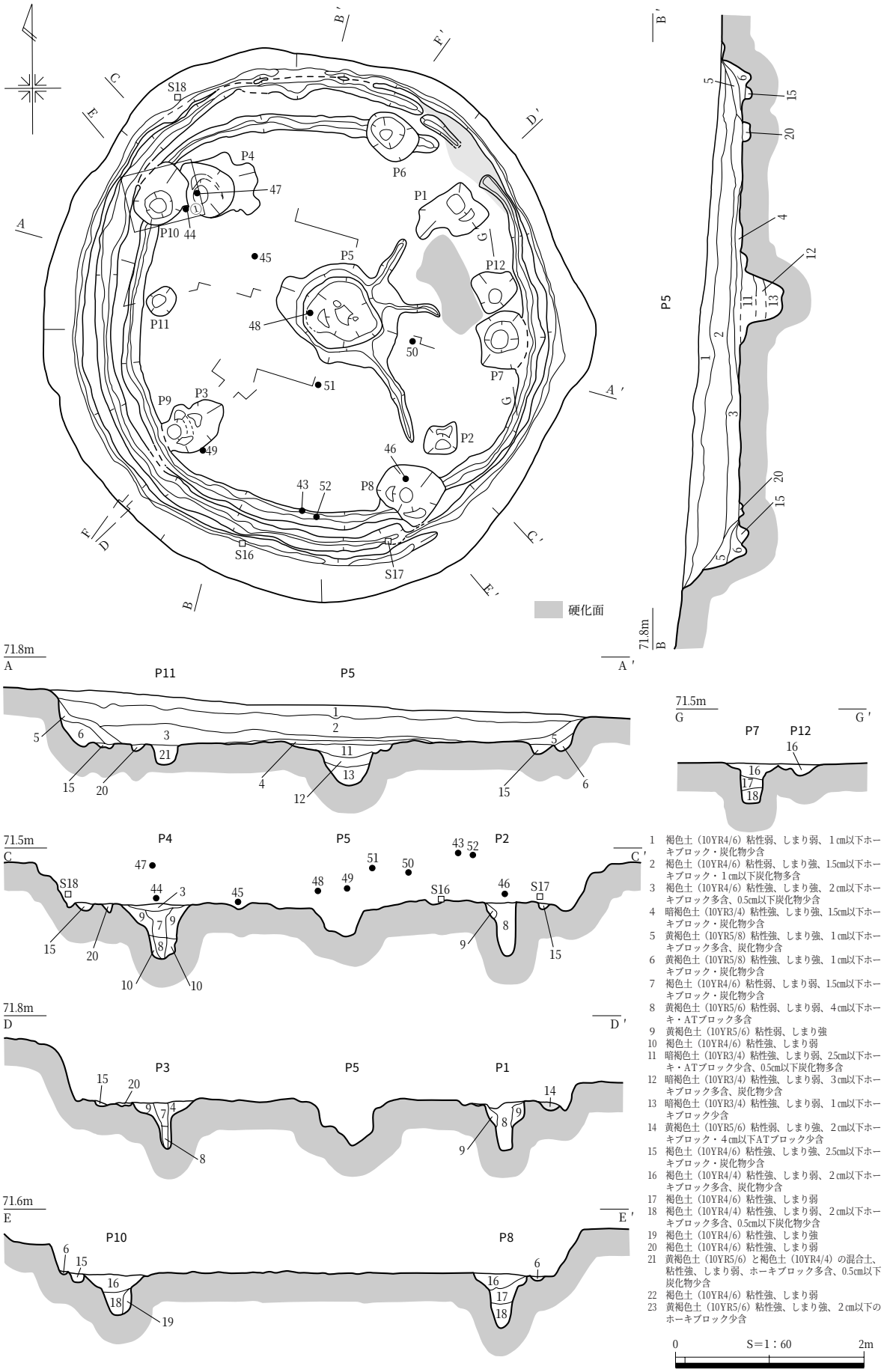
調査区南側、F22・G22グリッド、標高約71.0m～71.5mの尾根平坦面に立地する。床面において、ほぼ全周する２条から３条の壁溝、12基のピット、硬化面１ケ所、中央ピットから伸びる３条の床溝を検出した。本遺構は拡張を伴う建て替えが２回行われている。そのため、新しいものからSI12c、SI12b、SI12aと記述する。

SI12c

径約5.8mの円形を呈し、遺存状況は良好である。検出面から床面までの深さは最大67㎝である。床面積は19.19㎡を測る。壁溝は床面からの深さが３～９㎝を測り、断面はU字形で全周する。主柱穴はP1～４であり、主柱間距離はP1-P2、P2-P3の順に2.6m、2.7m、2.5m、2.8mである。P5は中央ピットで、ここから壁に向かう３条の床溝はいずれも埋土が４層であったことから、SI12cに伴うものと判断した。床面からの深さは最大で北から順に、1.5㎝、１㎝、3.5㎝である。床面北東の壁際には貼床が施されている。1.0m×0.5mの範囲で不整長方形の硬化面があり、そのあたりが入り口であった可能性もある。

埋土は、６層に分けられる。主として褐色土からなり、Ⅵ層ブロックの混入が見られる。土層全体がレンズ状に堆積していることから自然堆積であると考えられる。

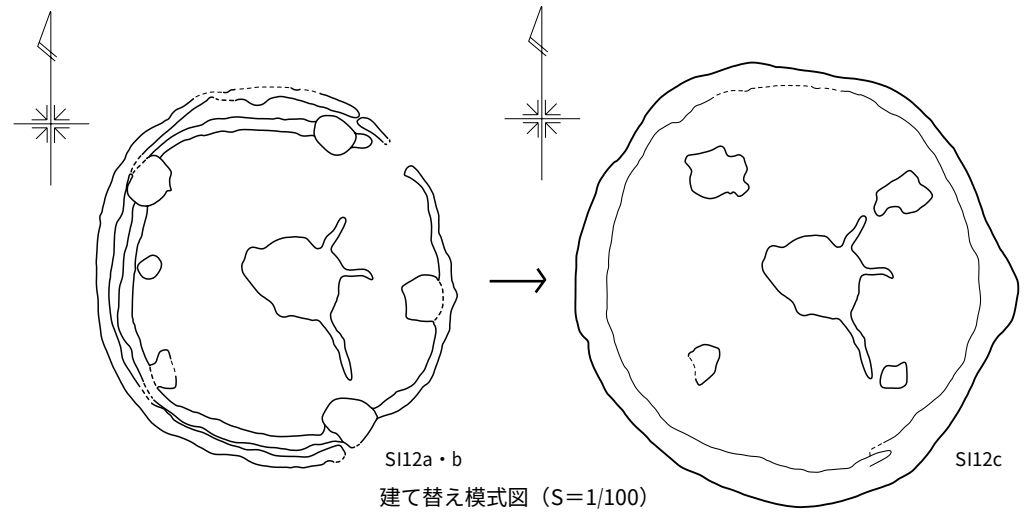
出土遺物は、１層に密に分布し、下層ほど少くなる。埋土中から縄文土器や弥生時代後期中葉～後期後葉の土器が出土しているが、これは本遺構が埋没する過程で流入したものと考えられる。



1　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、１㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
2　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、1.5㎝以下ホーキブロック・１㎝以下炭化物多含
3　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、２㎝以下ホーキブロック多含、0.5㎝以下炭化物少含
4　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり強、1.5㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
5　黄褐色土（10YR5/8）粘性強、しまり強、１㎝以下ホーキブロック多含、炭化物少含
6　黄褐色土（10YR5/8）粘性強、しまり強、１㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
7　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、1.5㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
8　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱、４㎝以下ホーキ・ATブロック多含
9　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり強
10　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり弱
11　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり弱、2.5㎝以下ホーキ・ATブロック少含、0.5㎝以下炭化物多含
12　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり弱、３㎝以下ホーキブロック多含、炭化物少含
13　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり弱、１㎝以下ホーキブロック少含
14　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり強、２㎝以下ホーキブロック・４㎝以下ATブロック少含
15　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、2.5㎝以下ホーキブロック・炭化物少含
16　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり弱、２㎝以下ホーキブロック多含、炭化物少含
17　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり弱
18　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり弱、２㎝以下ホーキブロック多含、0.5㎝以下炭化物少含
19　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強
20　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり弱
21　黄褐色土（10YR5/6）と褐色土（10YR4/4）の混合土、粘性強、しまり弱、ホーキブロック多含、0.5㎝以下炭化物少含
22　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり弱
23　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、２㎝以下のホーキブロック少含

0　S=1：60　2m

第29図　SI12（１）



建て替え模式図（S＝1/100）

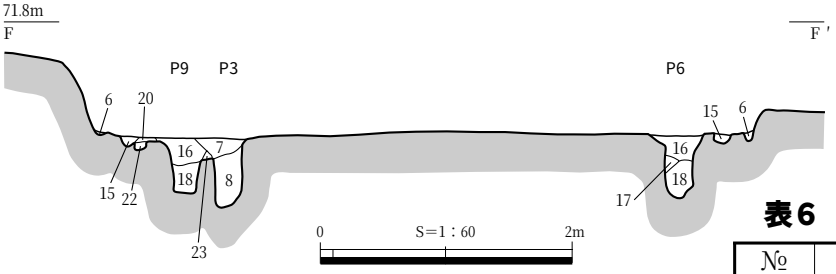
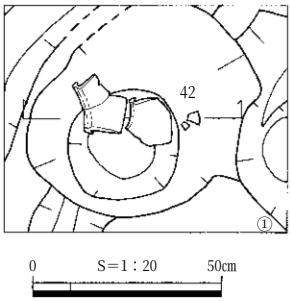
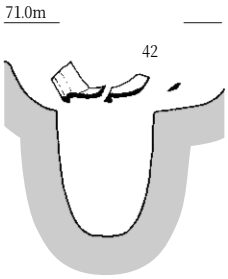
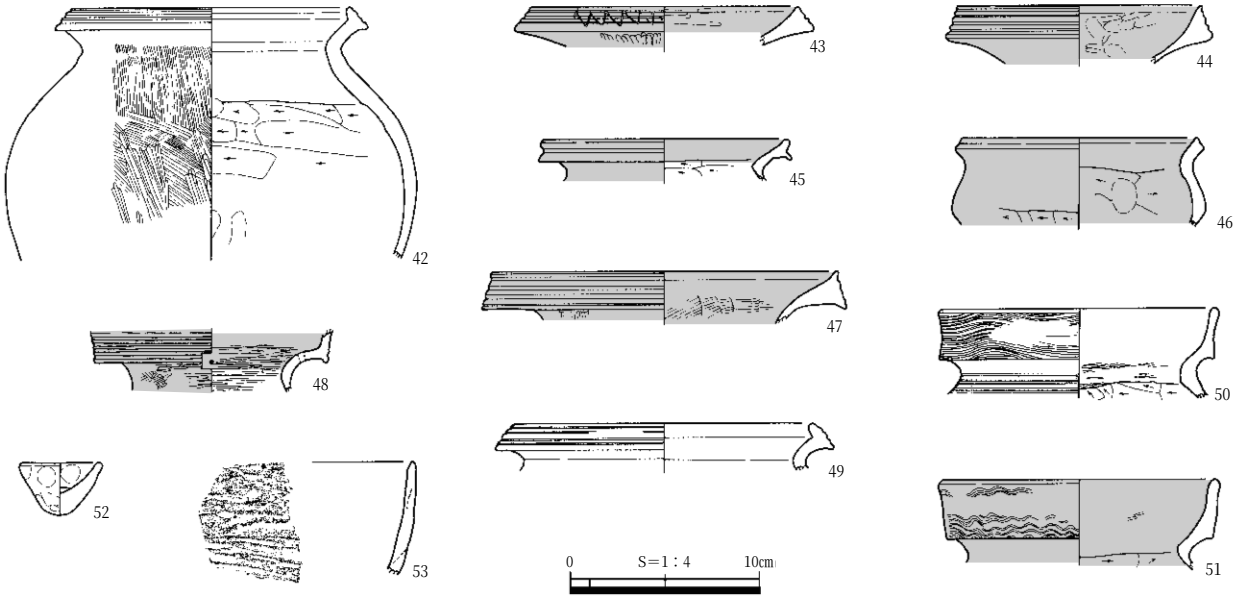


表６　SI12ピット一覧表

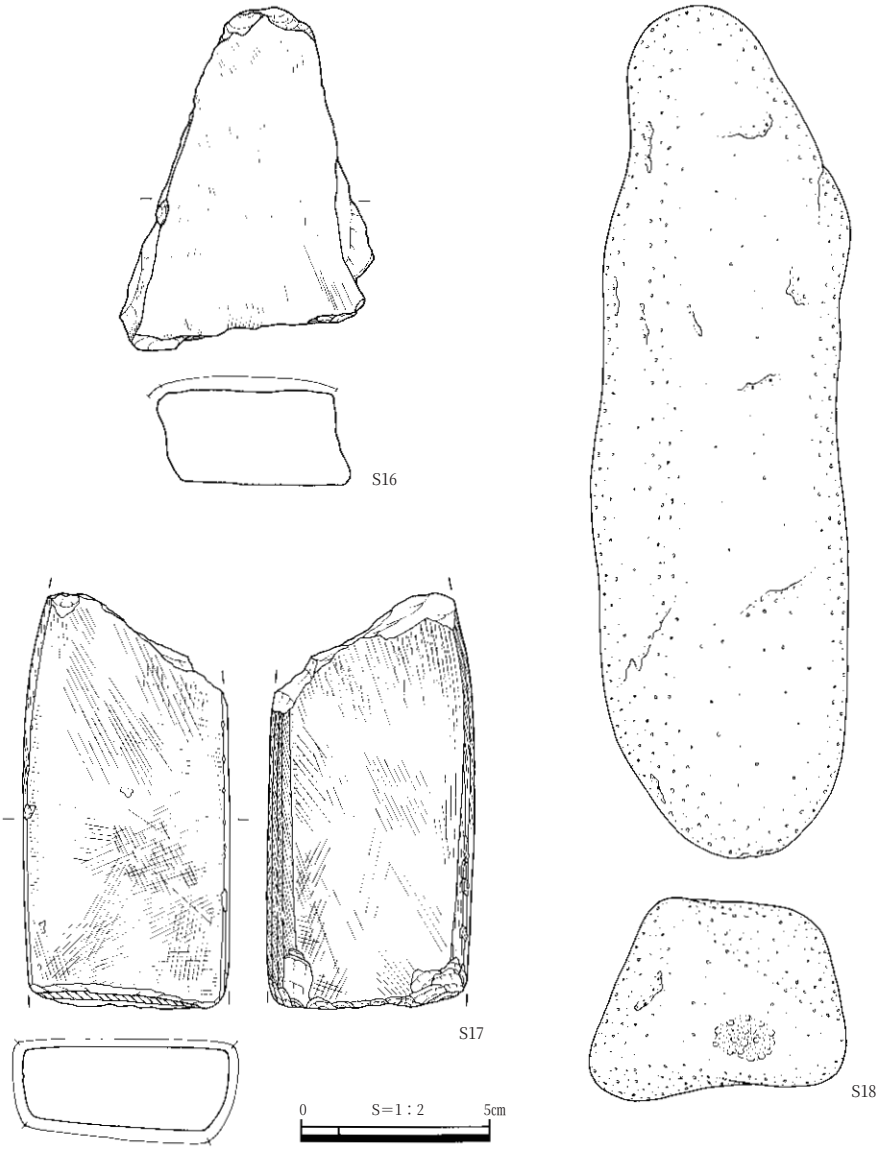
№	長軸×短軸－深さ（m）
P1	0.72×0.5－0.65
P2	0.42×0.36－0.6
P3	0.39×0.38－0.57
P4	0.8×0.6－0.6
P5	1.21×0.88－0.53
P6	0.6×0.43－0.52
P7	0.59×0.5－0.41
P8	0.68×0.64－0.61
P9	0.41×0.28－0.44
P10	0.6×0.5－0.46
P11	0.29×0.26－0.27
P12	0.44×0.43－0.12







第30図　SI12（２）および出土遺物



第31図　SI12出土遺物

甕42・45・46・49～51、壺47・48、器台43・44、手づくね土器52、縄文土器の深鉢53、砥石S16・S17、敲石S18を図化した。３層から出土したのは、甕45・46・49で、45～48は内外面に赤色塗彩痕が認められる。器台43・44は、いずれも受部口縁部片であり、43は口縁部外面に３条の沈線の後、鋸歯文を施し、内外面を赤色塗彩する。48・50・51は上層で出土した。

SI12b

壁溝は西側が２本目、東側が内側のもので、北東側で一部途切れるが、ほぼ全周する。断面形はU字形で、床面からの深さは５～９㎝である。壁溝北東側の一部はSI12cの貼床で埋められていた。主柱穴はP6～10である。主柱間距離はP6-P7、P7-8の順に2.5m、2.0m、2.6m、2.5m、2.5mである。P10には裏込め土が残存していた。中央ピットはP5である。またP11は埋土の状況から、人為的に埋められたと考えられ、P9とP10のほぼ中間地点にあることから補助的な柱穴と考えられる。P12の性格は不明である。SI12aからSI12bへの拡張は柱の位置を変えることなく行われ、壁溝を拡張したものと考えられる。P10の上層から甕42が出土した。

SI12a

SI12aの平面は不整円形を呈する。主柱穴はP6～10である。壁溝の東側はSI12bと共用しており、北東部が一部途切れるが、ほぼ全周していたものと推測される。

埋土の下層から出土した土器がV-１期に比定されることから、本遺構は弥生時代後期前葉の竪穴住居跡と考えられる。（小田）

SI13（第32・33図、PL. 9・18・60）

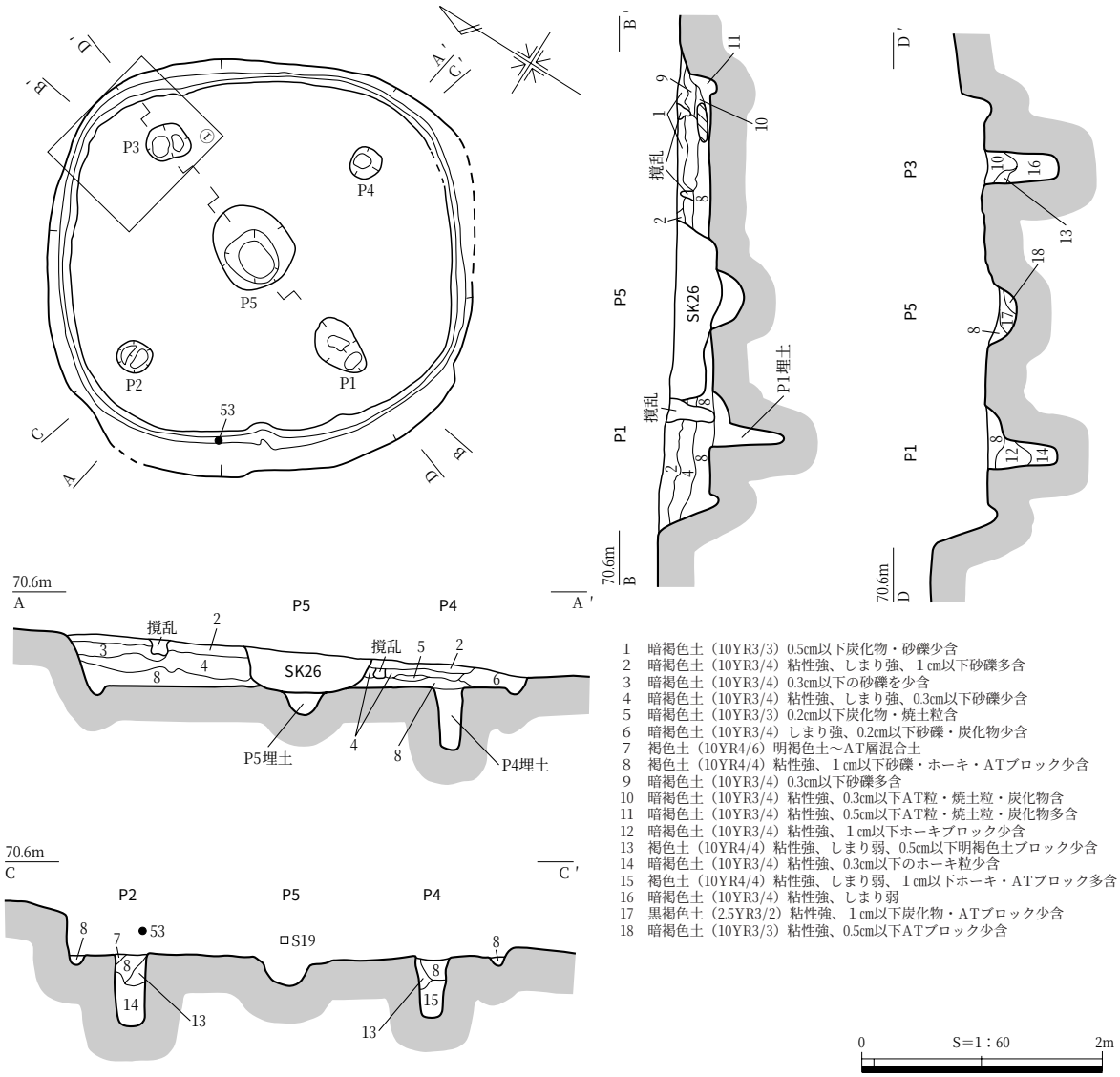
E21・22グリッド、標高69.9～70.3mの緩斜面に位置する。南西側約２mにSB6が近接し、同時期の竪穴住居であるSI18が北西側約７mにある。SK26が本遺構中央部を切る。

平面形は一辺約3.4mの丸みをおびた隅丸方形を呈し、検出面からの深さは西壁で最大51㎝を測

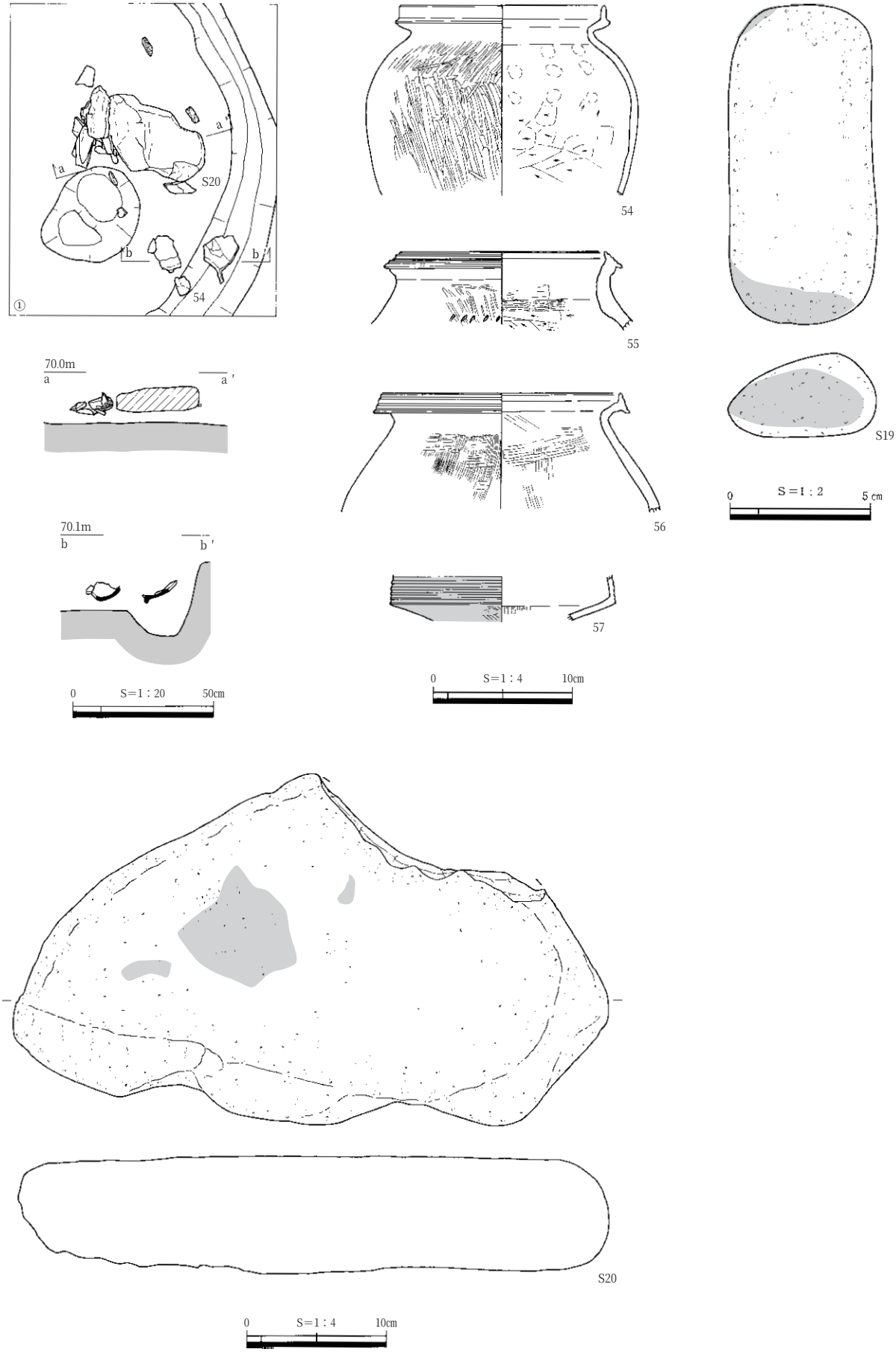
る。Ⅵ層を床面としており、床面積は7.69㎡と小さい。壁際には幅８～17㎝、深さ５～８㎝を測る断面U字形の壁溝がめぐっている。床面でピットを５基検出しており、このうちP1～P4が主柱穴と考えられる。規模はP1（54×33－61）㎝、P2（30×28－60）㎝、P3（36×29－65）㎝、P4（28×27－54）㎝である。主柱間距離はP1-P2間からP4-P1間の順に、1.76m、1.76m、1.68m、1.66mを測る。P5が中央ピットと考えられ、椀状の断面形を呈し規模は（71×60－26）㎝である。

埋土は18層に分けられ、暗褐色土を主体とする。主柱穴下半と壁際に土砂が崩落・流入して間もなく、P3近くに赤色顔料が付着した台石S20が甕54とともに投棄されている（第33図①）。破砕した剥片はP3埋土下層からも出土した。S20は床面付近で出土しており、竪穴の埋没初期に投棄されたことが理解できる。各層ともレンズ状の堆積を示すことから自然堆積によって埋没したと考えられる。柱穴に柱痕は残っておらず、住居廃絶時に柱は抜き取られたのであろう。

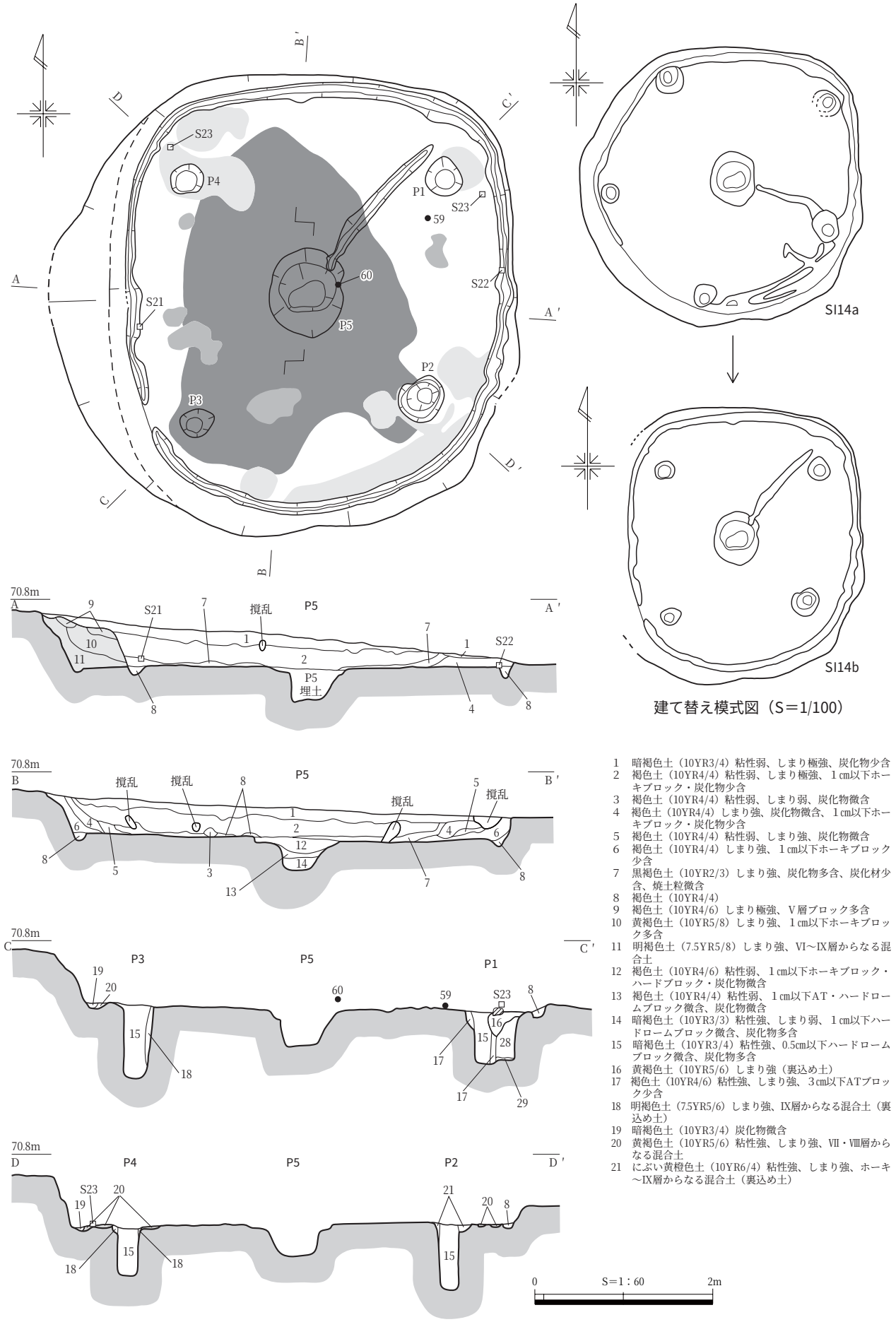
遺物は甕54、台石S20のほか、埋土中で甕55・56、高坏57、石杵S19が出土している。甕54は口縁部の上端が短く拡張・直立するもので、肩が張り、そこから底部にかけて緩やかにすぼまる形態をもつ。口縁部外面に凹線は施されない。Ⅴ-１期に特徴的な甕である。甕56・高坏57はⅣ-３期の土器で、南西側約３mに当該期の竪穴住居SI15が存在することもあり、流れ込んだものである。S19は扁



第32図　SI13（１）

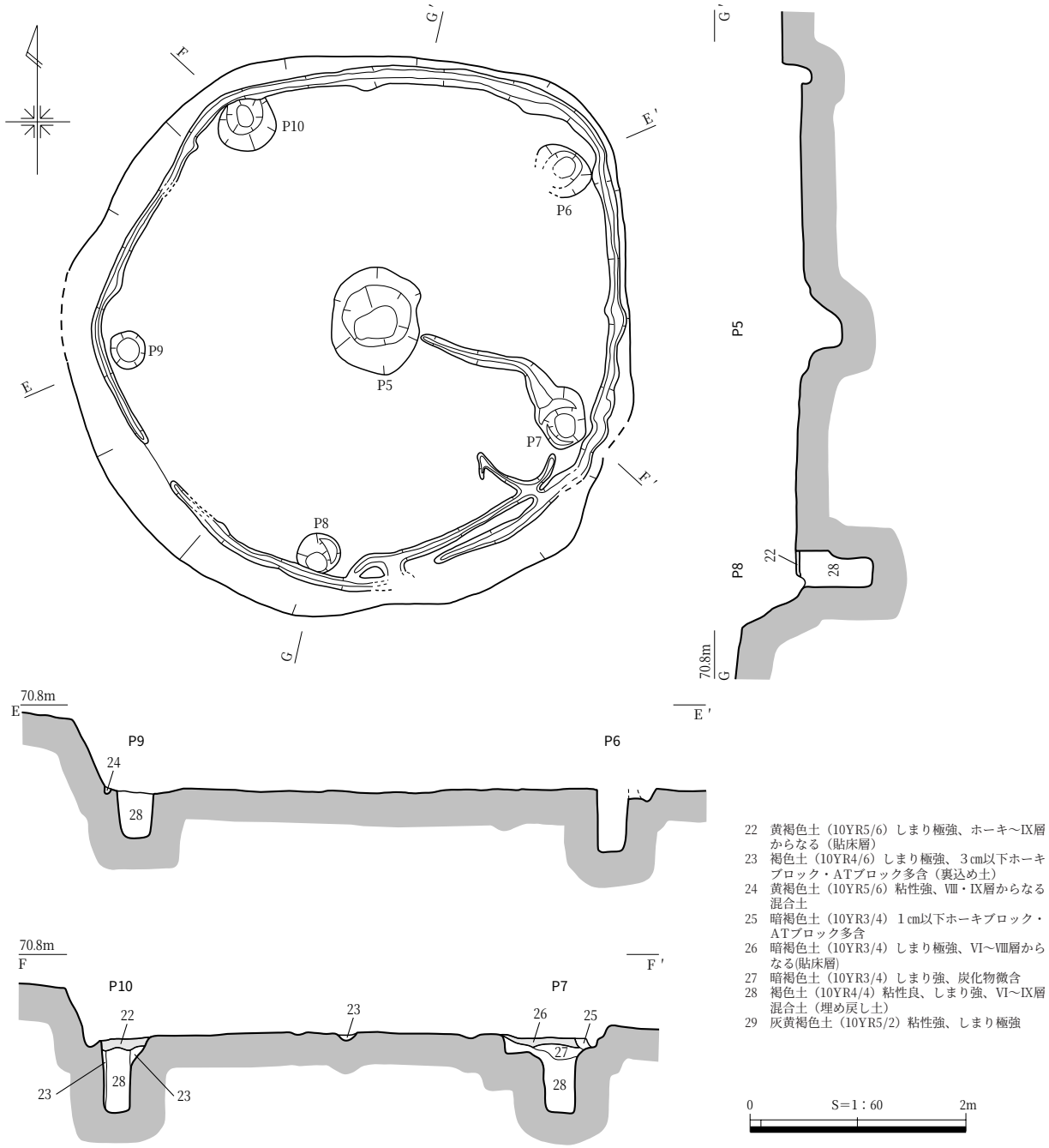


第33図　SI13（２）および出土遺物



1　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり極強、炭化物少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり極強、１cm以下ホーキブロック・炭化物少含
3　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり弱、炭化物微含
4　褐色土（10YR4/4）しまり強、炭化物微含、１cm以下ホーキブロック・炭化物少含
5　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、炭化物微含
6　褐色土（10YR4/4）しまり強、１cm以下ホーキブロック少含
7　黒褐色土（10YR2/3）しまり強、炭化物多含、炭化材少含、焼土粒微含
8　褐色土（10YR4/4）
9　褐色土（10YR4/6）しまり極強、Ⅴ層ブロック多含
10　黄褐色土（10YR5/8）しまり強、１cm以下ホーキブロック多含
11　明褐色土（7.5YR5/8）しまり強、Ⅵ～Ⅸ層からなる混合土
12　褐色土（10YR4/6）粘性弱、１cm以下ホーキブロック・ハードブロック・炭化物微含
13　褐色土（10YR4/4）粘性弱、１cm以下AT・ハードロームブロック微含、炭化物微含
14　暗褐色土（10YR3/3）粘性強、しまり弱、１cm以下ハードロームブロック微含、炭化物多含
15　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、0.5cm以下ハードロームブロック微含、炭化物多含
16　黄褐色土（10YR5/6）しまり強（裏込め土）
17　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、３cm以下ATブロック少含
18　明褐色土（7.5YR5/6）しまり強、Ⅸ層からなる混合土（裏込め土）
19　暗褐色土（10YR3/4）炭化物微含
20　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、Ⅶ・Ⅷ層からなる混合土
21　にぶい黄橙色土（10YR6/4）粘性強、しまり強、ホーキ～Ⅸ層からなる混合土（裏込め土）

第34図　SI14（１）

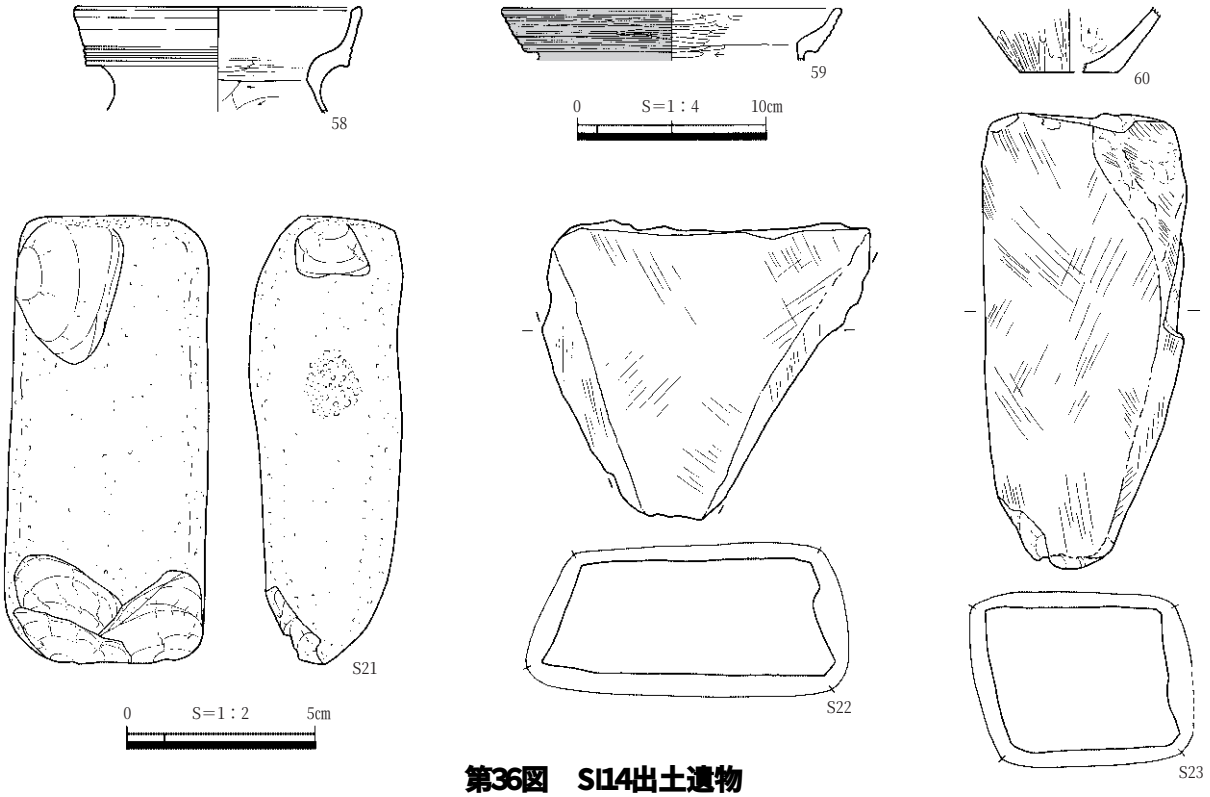


第35図　SI14（２）

平な棒状礫の先端下部に赤色顔料が付着しており、付着範囲に擦痕やつぶれは認めらないが石杵の可能性があろう。大型で扁平な亜円礫を用いた台石S20の表面は平滑で、所々に使用により生じたと思われるつぶれがみられ、赤色顔料も付着している。器体上部には表面を打面とする剥離面があり、使用に伴う割れであろうか。この剥離面を切る割れと、裏面の多くを占める割れははじけ飛んだような面で、薄く黒変していることから被熱によるものと考えられる。出土遺物の特徴から、本遺構の時期は弥生時代後期前葉と考える。（高尾）

表７　SI14ピット一覧表

№	長軸×短軸－深さ（m）
P1	0.42×0.4－0.6
P2	0.38×0.31－0.76
P3	0.36×0.3－0.83
P4	0.35×0.32－0.58
P5	0.99×0.78－0.4
P6	0.54×△0.29－0.54
P7	0.52×0.46－0.67
P8	0.45×0.37－0.74
P9	0.34×0.32－0.44
P10	0.55×0.5－0.68



第36図　SI14出土遺物

SI14（第34～36図、表７、PL. 9、19、60・75）

H21グリッド、標高約70.0～70.7mの傾斜変換点付近にあり、SI3の北側に位置する。

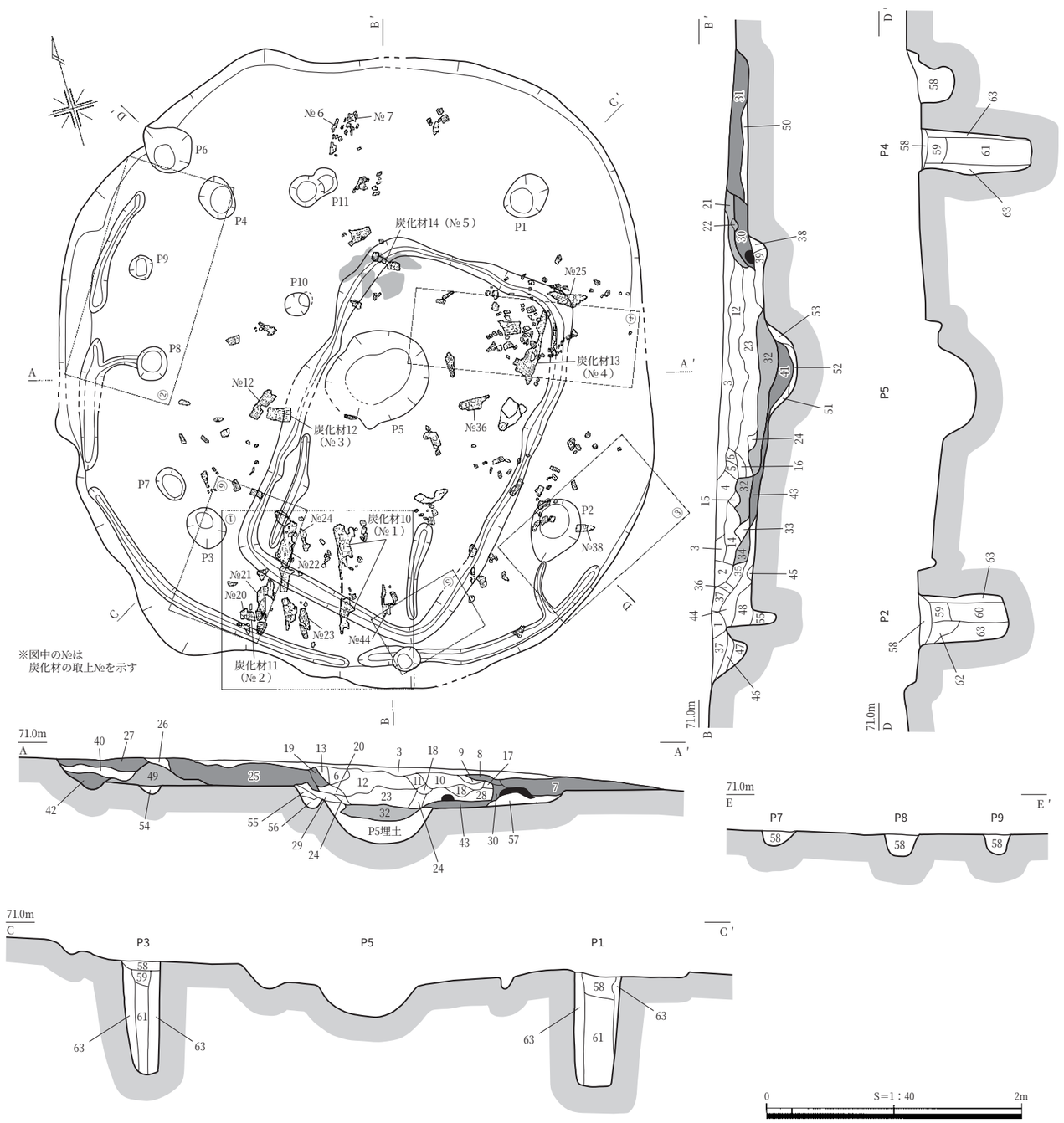
Ⅱ層除去後、円形を呈する炭化物粒を含む暗褐色土の広がりを検出した。トレンチを設定したところ、床面、壁溝及び壁面の立ち上りを確認したため、竪穴住居と判断した。また、床面付近では炭化材や焼土粒を包含する黒褐色土層を確認したため､焼失住居の可能性が高いものとして調査を行った。

床面を検出しベルトを除去したところで、西側壁面が完全に検出できていないことが判明し、トレンチ（A-A ｒ）のラインに沿って壁面が確認できるまでトレンチをさらに延長した。このことによりⅥ～Ⅸ層のブロックを多く含むしまりの強い褐色土が西側壁面周辺に堆積することが確認でき、この堆積の下にはさらに壁溝、ピットが存在することが明らかとなり、住居の縮小が行われていたことが判明した。埋土の掘り下げ段階で、埋め戻しの土も大半が除去されていたため、その分布する範囲を正確につかむ事はできなかった。

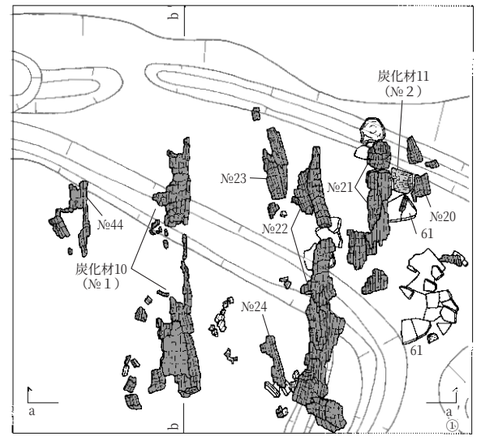
以下、建て替え前の住居をSI14a、建て替え後のものをSI14bとし詳述する。

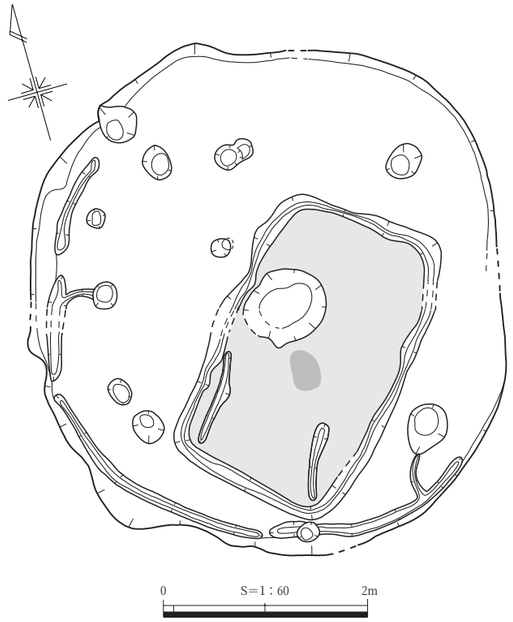
SI14b

平面形は長軸5.2m、短軸5.1mの円形を呈し、床面積は16.42㎡である。壁高は南東側で検出面から最大65㎝を測る。地形的に低い北東側では５㎝と浅い。Ⅵ層を床面とし、ほぼ平坦になっている。ピットは５基検出した。P1～P4は主柱穴である。規模はP1（42×40－60）㎝、P2（54×41－77）㎝、P3（36×30－83）㎝、P4（35×32－58）㎝を測る。主柱間距離はP1-P2、P2-P3の順に2.4m、2.6m、2.7m、2.9mである。P5は中央ピットである。SI14aのものがそのまま利用されたものと考えられる。平面は隅丸方形、断面は逆台形を呈し、一部段掘りとなっている。規模は長軸99㎝、短軸78㎝、深さ40㎝である。P5からP1に向かって床溝が１条伸びる。P1とはつながらずに、やや離れて途切れる。壁溝は南東側で１ヶ所途切れる部分を除き、ほぼ全周する。P1、P2、P4の周辺にはⅥ～Ⅸ層の混合土からなる貼床が施される。焼土面は５ヶ所確認した。



1　黄褐色土（10YR5/6）４cm以下炭化物微含
2　暗褐色土（10YR3/4）１cm以下白色砂礫少含、0.5cm以下炭化物微含
3　褐色土（10YR4/4）しまり強、0.5cm以下白色砂礫・炭化物多含
4　褐色土（10YR4/6）１cm以下白色砂礫・0.5cm以下焼土粒多含
5　褐色土（10YR4/4）３cm以下焼土ブロック多含、0.5cm以下炭化物少含
6　褐色土（10YR4/4）0.5cm以下白色砂礫・炭化物少含
7　褐色土（10YR4/6）１cm以下白色砂礫・0.5cm以下炭化物多含
8　褐色土（10YR4/4）２cm以下炭化物多含
9　褐色土（10YR4/6）0.5cm以下炭化物微含
10　褐色土（10YR4/6）しまり強、５cm以下炭化物、１cm以下白色砂礫少含、0.5cm以下焼土粒微含
11　暗褐色土（10YR3/4）0.5cm以下白色砂礫微含
12　褐色土（10YR4/6）しまり強、１cm以下炭化物、0.5cm以下白色礫少含
13　褐色土（10YR4/4）0.5cm以下白色砂礫微含
14　黄褐色土（10YR5/6）0.5cm以下白色砂礫、焼土粒少含
15　褐色土（10YR4/6）しまり強、0.5cm以下焼土粒少含、0.5cm以下炭化物・白色砂礫微含
16　褐色土（10YR4/6）0.5cm以下焼土粒・炭化物微含
17　暗褐色土（10YR3/3）0.5cm以下焼土粒微含
18　褐色土（10YR4/6）しまり強、0.5cm以下白色砂礫少含
19　褐色土（10YR4/4）１cm以下白色砂礫、0.5cm以下炭化物・焼土粒多含
20　暗褐色土（10YR3/4）0.5cm以下炭化物微含
21　褐色土（10YR4/4）0.5cm以下焼土粒多含、0.5cm以下炭化物微含
22　赤褐色土（5YR5/8）粘性なし、しまり弱
23　褐色土（10YR4/6）粘性弱、0.5cm以下炭化物、ホーキ粒微含
24　褐色土（10YR4/4）0.5cm以下炭化物少含
25　褐色土（10YR4/4）１cm以下白色砂礫、炭化物、0.5cm以下焼土粒多含
26　褐色土（10YR4/4）１cm以下白色砂礫多含
27　褐色土（10YR4/4）しまり強、0.5cm以下白色砂礫、炭化物多含
28　褐色土（10YR4/4）１cm以下炭化物、0.5cm以下焼土粒、白色砂礫微含
29　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり弱、0.5cm以下炭化物・黄褐色土粒微含
30　褐色土（7.5YR4/4）0.5cm以下焼土・炭化物多含
31　暗褐色土（10YR3/4）しまり強、0.5cm以下焼土粒・炭化物多含
32　褐色土（10YR4/4）粘性弱、0.5cm以下焼土粒多含
33　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり弱、0.5cm以下炭化物微含
34　褐色土（7.5YR4/4）0.5cm以下焼土粒多含、１cm以下炭化物少含
35　暗褐色土（10YR3/4）0.5cm以下炭化物少含
36　褐色土（10YR4/6）0.5cm以下白色砂礫微含
37　褐色土（10YR4/6）粘性弱、５cm以下炭化物少含
38　にぶい黄褐色土（10YR5/4）0.5cm以下炭化物少含
39　褐色土（10YR4/6）0.5cm以下焼土粒微含
40　褐色土（10YR4/4）１cm以下白色砂礫、炭化物多含
41　黒褐色土（10YR3/2）粘性弱、しまり弱、２cm以下褐色土粒、３cm以下炭化物多含
42　褐色土（10YR4/4）しまり弱、１cm以下炭化物、0.5cm以下白色砂礫多含
43　黒色土（10YR2/1）１cm以下焼土粒少含
44　にぶい黄褐色土（10YR5/4）0.5cm以下炭化物少含
45　褐色土（10YR4/6）0.5cm以下焼土粒微含
46　褐色土（10YR4/6）１cm以下炭化物少含
47　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、0.5cm以下砂礫多含
48　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、0.5cm以下砂礫・炭化物微含
49　褐色土（10YR4/6）0.5cm以下白色砂礫・焼土粒多含
50　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、0.5cm以下白色砂礫少含
51　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、２cm以下ATブロック・１cm以下炭化物少含
52　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、0.5cm以下炭化物微含
53　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、２cm以下ATブロック少含
54　褐色土（10YR4/6）粘性強、0.5cm以下炭化物微含
55　黄褐色土（10YR5/6）
56　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、0.5cm以下砂礫多含
57　褐色土（10YR4/4）しまり弱、１cm以下白色砂礫、0.5cm以下炭化物少含
58　暗褐色土（10YR4/4）0.5cm以下砂礫・炭化物、３cm以下黄褐色土ブロック多含
59　暗褐色土（10YR3/4）３cm以下炭化物、２cm以下ホーキブロック少含
60　褐色土（10YR4/6）0.5cm以下炭化物微含
61　暗褐色土（10YR3/4）しまり弱、0.5cm以下炭化物少含
62　褐色土（10YR4/6）２cm以下ホーキブロック少含
63　黄褐色土（10YR5/6）２cm以下ATブロック・0.5cm以下炭化物少含



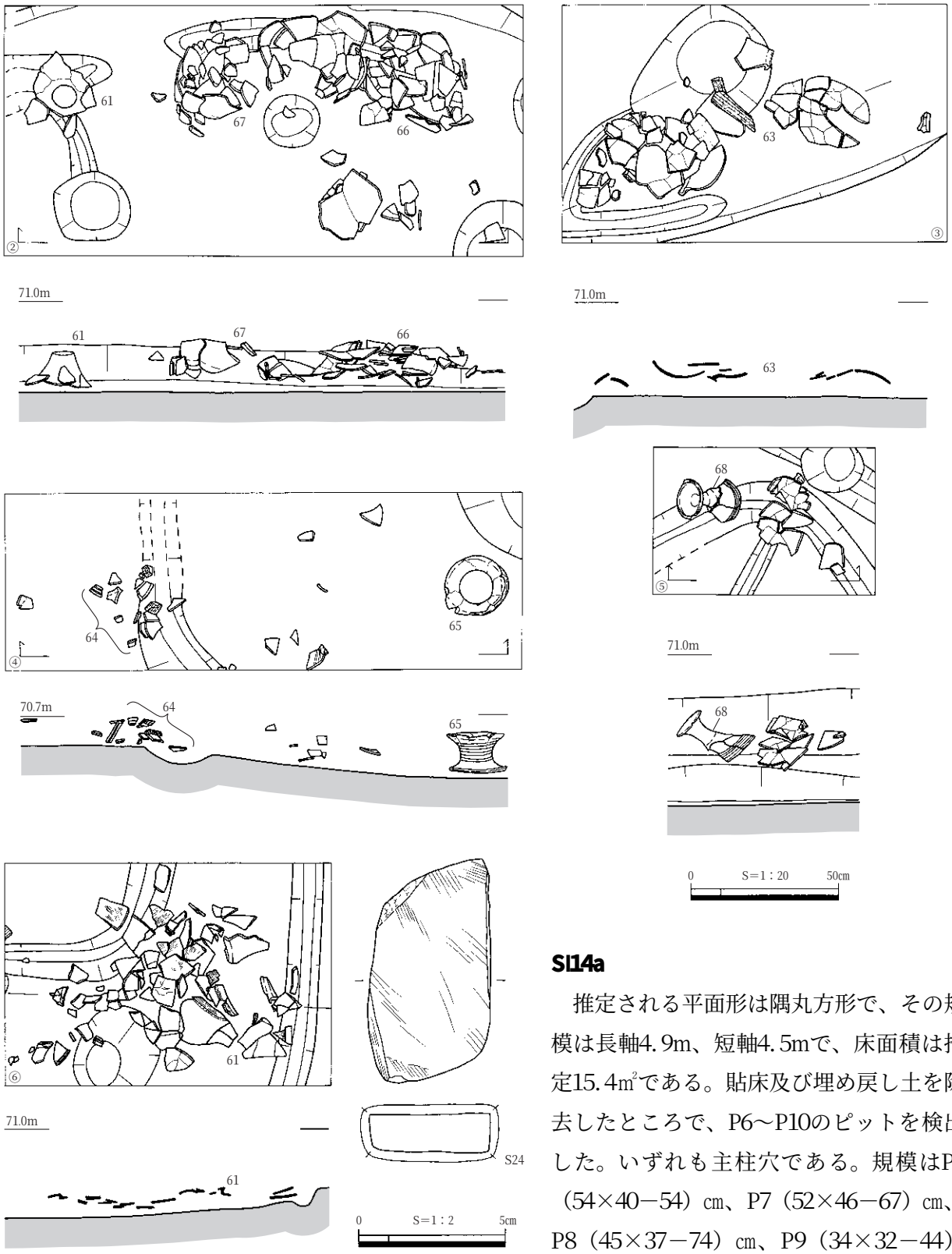


SI15平面図

表８　SI15樹種同定結果

炭化材番号	和　名	種　別	取上№
10	スダジイ	丸太？	1
11	スダジイ	丸太	2
12	スダジイ	丸太	3
13	スダジイ	丸太	4
14	ケヤキ	丸太	5

第37図　SI15（１）

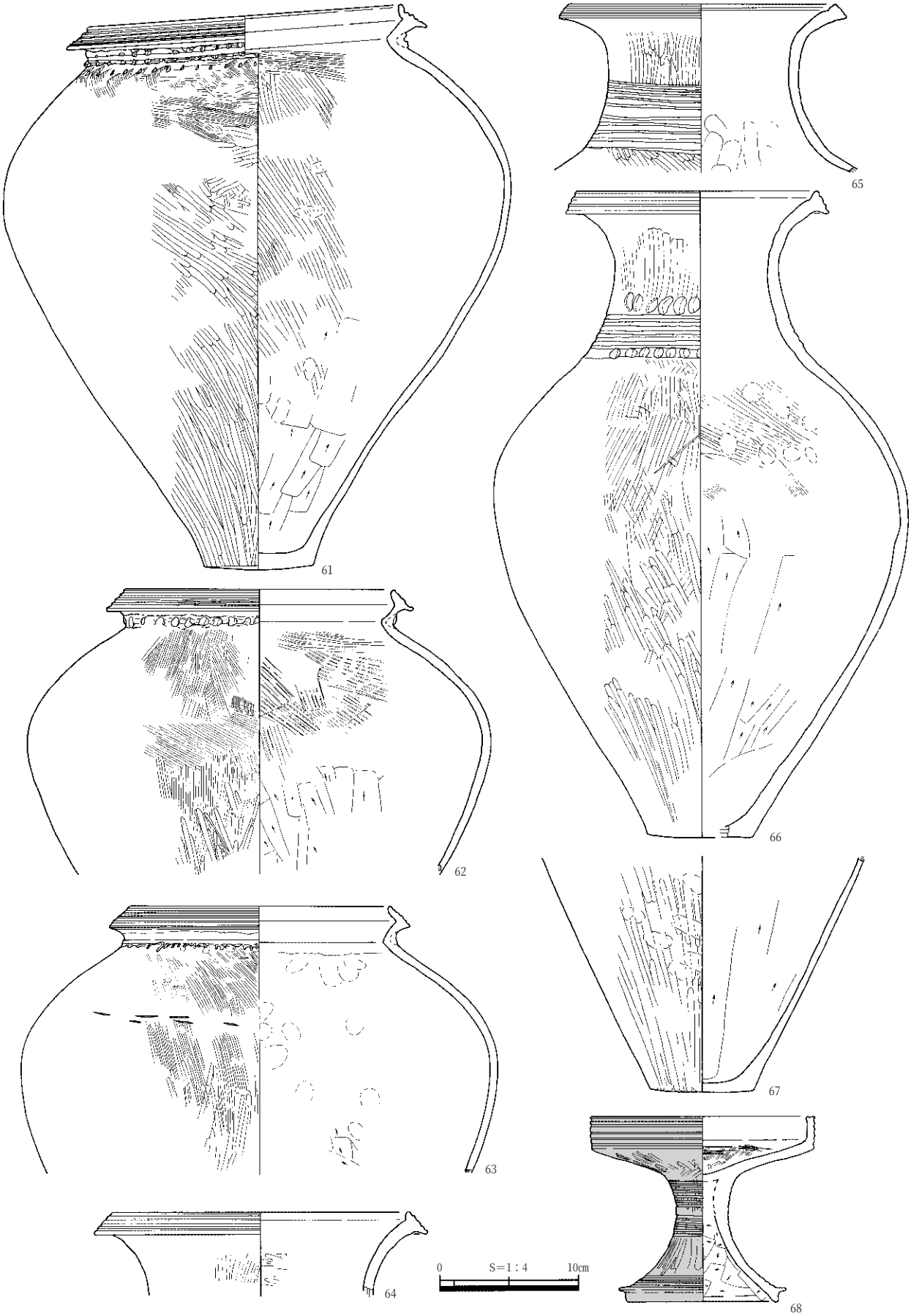


第38図　SI15（２）および出土遺物

SI14a

推定される平面形は隅丸方形で、その規模は長軸4.9m、短軸4.5mで、床面積は推定15.4㎡である。貼床及び埋め戻し土を除去したところで、P6～P10のピットを検出した。いずれも主柱穴である。規模はP6（54×40－54）㎝、P7（52×46－67）㎝、P8（45×37－74）㎝、P9（34×32－44）㎝、P10（55×50－68）㎝であり、どのピットも地山土で埋め戻されていた。主柱間距離はP6-P7、P7-P8の順に2.4m、2.6m、2.6m、2.4m、3.0mを測る。長さ1.3m、幅７～23㎝、深さ１㎝前後の床溝がP7からP5へ伸びる。壁溝は埋め戻し土の下及び、P7-P8間の貼床下から検出した。北側から東側にかけてはSI14bのものと共通する。

埋土は主に褐色系の土からなる。堆積はレンズ状を呈し、上層は地形に沿って西から東側へ流れるように堆積していることから、自然堆積による埋没と考える。遺物の出土はまばらで、主に上層から

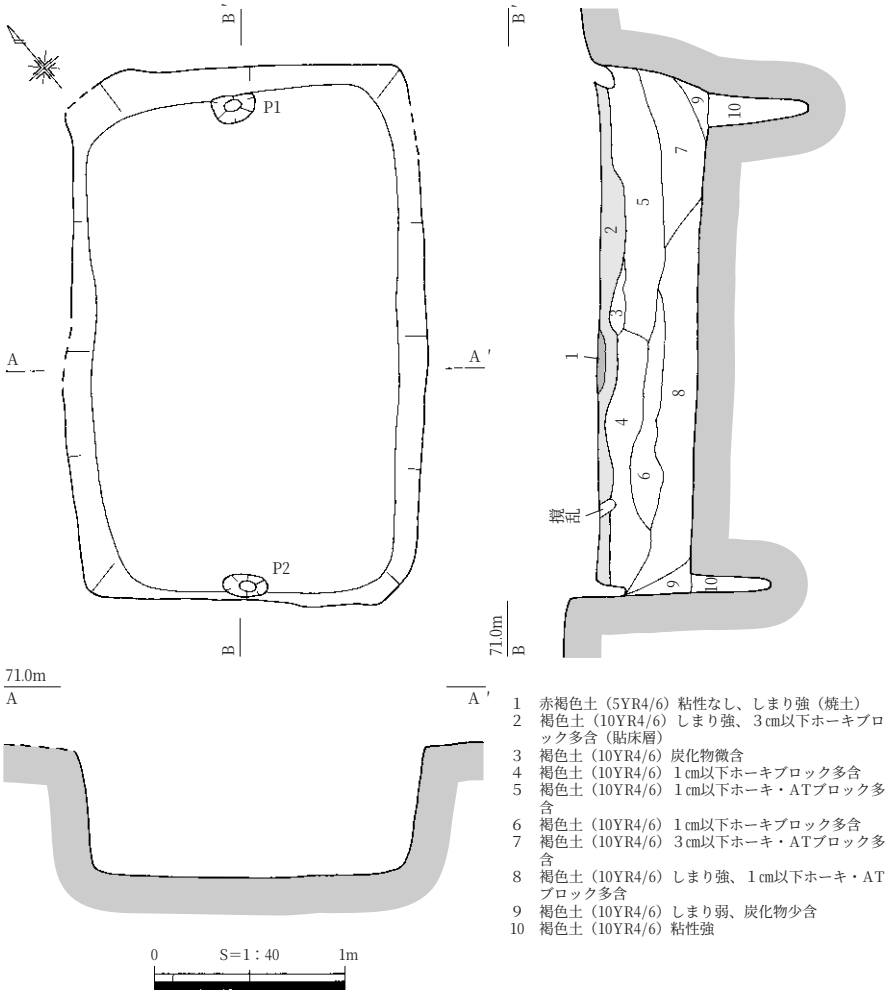


第39図　SI15出土遺物

出土している。床面付近からは石器が数点出土したのみである。

床面上に堆積する７層は、焼土粒や炭化物粒とともに小片化した炭化材を多く包含する層である。この７層は周堤もしくは壁体の崩落に由来すると思われる地山のⅥ層ブロックを含む褐色土（４～６層）の上にのることから、遅くとも７層が堆積する時には、既に住居は廃絶し、埋没が進行していた時期であることが見て取れる。このことから、本遺構は、廃絶後に窪地状になったところへ他の場所で燃焼した炭化材等を廃棄した可能性があるものとして考えておきたい。

土器で図化したものは３点である。59は甕の口縁部である。58は壺の口縁部で、口縁外面は多条沈線後、上部をナデ消している。S21は石斧、S22、S23は砥石である。いずれも床面付近の２層中から出土した。S21は全体の形状から伐採石斧の未製品と思われるが、成形とは異なる局所的な敲打痕が２ヶ所あるため、敲石として利用されたものと考えられる。



第40図　SK35

遺構の時期としては、出土した土器がⅤ-３期に比定されることから、弥生時代後期後葉に廃絶したものと考える。（淺田）

SI15・SK35（第37～40図、表８、PL.４、６、７、20、53）

E・F22グリッド、標高71.0mの平坦面に位置する。

Ⅱ層除去中から土器片、炭化物が多量に出土し、当初から遺構の存在が予想された。Ⅳ層を精査し上面にて長軸約６m、短軸約５mの隅丸方形を呈する褐色土の広がりを検出したため、トレンチを設定し土層堆積を確認した。サブトレンチの西、南側で、炭化材、壁溝を検出したことから焼失住居（SI15）と判断し調査を行った。また、SI15の床面中央が長方形に一段低く成形されていたことから、別の遺構の存在が予見された。サブトレンチで土層堆積を確認した結果、土坑（SK35）の存在が判明した。

以下、SI15、SK35の順に報告する。

SI15

規模は長軸4.8m、短軸4.7mの隅丸方形を呈する。壁高は高位にあたる南西隅で最大25㎝、低位にあたる東側で３㎝を測ることから、東側を中心に竪穴上部は流失しているものと思われる。壁溝の規

模は幅10㎝、深さ５㎝を測り、南西側で一部途切れながら半周する。床面はⅣ層を掘り下げて構築されており、床面標高は70.6m、床面積は16.73㎡である。竪穴中央から南寄りで長軸3.0m、短軸2.0mの範囲で一段床が低くなっている。この部分の埋土は住居内の埋土と連続しており、炭化材が掘り込み内から検出されていること、この部分に施された貼床の上面で中央ピットP5が検出されたことから、本住居に伴うものと判断した。床面から一段低くなる部分の底面までの深さは最大25㎝を測り、壁際には幅約15㎝、深さ５㎝の溝が全周する。また、サブトレンチを設定し、同範囲の下部の状況を確認した結果、後述するSK35を埋め戻しSI15の床として利用していることが明らかとなった。SI15の貼床はこの部分にのみ認められた。

床面で検出したピットは11基あり、そのうちP1～４が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模はP1（37×30－90）㎝、P2（51×40－71）㎝、P3（33×27－92）㎝、P4（33×26－90）㎝を測る。主柱間距離はP1-P2間2.5m、P2-P3間2.7m、P3-P4間2.5m、P4-P1間2.8mを測る。それぞれの柱穴には柱痕跡が認められ、柱痕跡から推定される柱の径は約10～20㎝である。P5が中央ピットであり、長軸74㎝、短軸70㎝、床面からの深さ30㎝を測る。明瞭な掘り方は認められないが、中央ピットの南側に長軸40㎝、短軸30㎝、深さ４㎝を測る被熱面がある。

埋土は全体で66層に分層できた。土層図A-A′、B-B′に示したように粒状またはブロック状の焼土を多く含んだ層（21、22、32、34、49層）、炭化物集中層（７、８、19、25、27、30、31、41～43層）がみられる。炭化物集中層はドーナツ状に堆積しており、住居の中央から縁辺に向けて厚く堆積する。中央部における焼土、炭化物の堆積は中央ピットの埋土中に認められた。焼土粒を多く含む21、22、32、34層は炭化物集中層の上部、49層は下部に堆積しており、焼土を含む層の堆積状況は一様ではない。焼土層の発達は当住居跡について顕著ではないが、炭化物集中層の堆積前後に崩落したものと推定され、当住居跡は土屋根をもった住居の可能性がある。

検出した炭化材は細片が多い。部材と認識できる炭化材は住居跡の南半部に集中する。南端部（第37図①）では壁際から住居中央に繊維方向を向けて伸びる７本の炭化材（取上№１、20、21、22、23、24、44）を検出した。比較的厚みを残した材（№１、21、23、24）は形状から丸太または半截丸太状のものと推測される。住居内における位置関係から、これらの材は垂木材と考えられる。また部分的にしか遺存していないが、取上№６、７、12、25、36、38も壁際から住居中央に繊維方向を向けることから垂木材の可能性を考慮しておきたい。取上№２、４等、繊維方向が垂木と推定される材と直交するものがいくつか認められる。№２はその一部が取上№21の下側で出土したことから母屋桁の可能性がある。他の部材については遺存状態が良好でないため、部材の推定は困難な状況にあるが、取上№４の繊維方向はP1－P2の柱間軸とほぼ揃っており、№２と同様、母屋桁の可能性があろう。

出土遺物には土器、石器等がみられた。床面直上から出土したものが多く、遺存状態は良好であった（第38図②～⑥）。土器は住居の縁辺部に間隔をあけ、数ヶ所まとまった状態で出土しており、住居廃絶時の様相を良くとどめているものと考えられる。出土遺物として甕61～63、壺64～66、甕または壺の底部67、高坏68、砥石S24を図化した。66は住居西側床面から出土し、61は住居西側床面から底部片、それに続く口縁部から胴部片が住居南西側の床面から出土した。破片の一部は炭化材の下に位置していた。また65は住居中央で口縁部から頸部を逆さにした状態で出土し、胴部以下の破片は認められなかった。68は南側から出土し床面から約10㎝程度上方の位置で口縁部を下に向けて出土した。61、62、63の頸部には貼付突帯がめぐる。62、63、66の内面は胴部最大径付近までヘラケズリで

調整される。出土した土器の特徴はⅣ-３期の様相を示しており、本遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられよう。

SK35

規模は長軸2.84m、短軸1.88mで長方形を呈し、SI15の床面からの深さは最大で64㎝を測る。底面の規模は長軸2.65m、短軸1.64mであり、Ⅸ層まで掘削されている。底面の標高は70.4mを測り、ほぼ平坦になる。底面の北東辺、南西辺の中央にはP1、P2がある。P1（24×14－48）㎝、P2（25×12－38）㎝を測る。埋土はSI15の焼土、貼床を含めて10層に分層できた。１層がSI15の焼土、２層が貼床である。10層及びその直上に堆積する９層は自然堆積によるものと考えられるが、３～８層中にはⅥ、Ⅶ層のブロックが含まれており、埋め戻し土と推定される。３層を埋めた後、改めて２層を貼床としてSI15の床面が成形されたものであろう。底面直上から礫、８層中から焼土ブロックを検出した以外、遺物は出土していない。上部に形成されたSI15が弥生時代中期後葉頃と考えられること、本遺構を埋め戻した後にSI15の床面が構築されたことを考慮すると、本遺構の時期は弥生時代中期後葉以前である。（大川）

SI17（第41～43図、表９、PL.９・17・20・61・75）

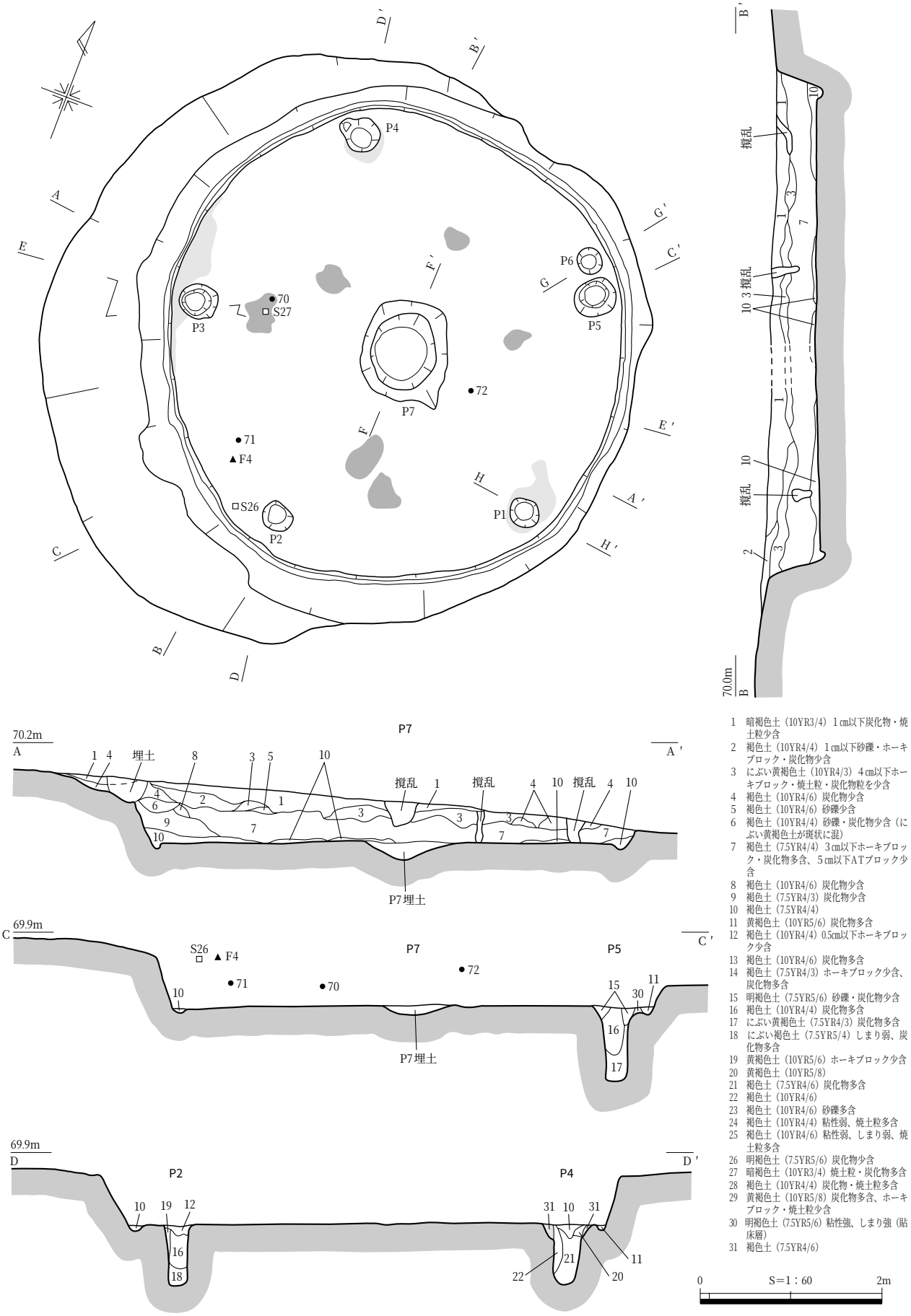
C21・D21～22グリッド、標高69.2～69.9mの緩斜面に位置する。周囲に同時期の遺構はみられないが、西側約２mにSI18が近接する。遺構は試掘調査時に検出されていた。

竪穴の平面形は長軸5.9m、短軸5.6mの円形に近い不整五角形を呈す。斜面高所となる本遺構西側は竪穴の肩部に向って傾斜するように削り込まれており、その部分も含めた遺構の平面形は長軸6.5m、短軸6.4mの不整楕円形となる。壁高は最大で62㎝、検出された遺構肩部の最大高低差は85㎝を測る。床面積は19.46㎡である。床面には幅６～15㎝、深さ４～８㎝の壁溝が全周する。床面でピットを７基検出しており、このうちP1～P5が主柱穴と考えられる。P1・P3・P4周辺には部分的に貼床が施されている。規模はP1（37×31－78）㎝、P2（34×30－68）㎝、P3（42×38－66）㎝、P4（47×37－66）㎝、P5（47×40－84）㎝を測り、底面レベルはP2～P4が68.42～68.45mであるのに対しP1・P5が68.27～68.31mで地形的に低い東側の主柱穴がやや深く掘り込まれている。主柱間距離はP1-P2間からP5-P1間という順に、2.70m、2.48m、2.56m、3.20m、2.48mを測る。径約１mの不整楕円形を呈し断面形が皿状となるP7が中央ピットであり、床面からの深さは28㎝を測る。床面には平面形が不整楕円形を呈す被熱面が中央ピットP7を囲むように計６ヶ所形成されていた。P2北東側のものが長軸54㎝、短軸30㎝を測り最大となる。いずれも床面であるⅥ層上面が被熱し赤く変色したものである。

埋土は褐色土を主体としレンズ状の堆積を示すため本遺構は自然堆積によって埋没としたと推定されるが、７層がⅥ・Ⅶ層ブロックと砂礫を多量に含み破砕した土器片なども伴うことを勘案すれば、埋め戻しによる堆積の可能性が高い。30・31層が貼床層で、粘性・しまりの強いⅦ～Ⅸ層の混合土から成っている。

当初、掘り下げの過程で床面に複数の被熱面が確認されたことから本遺構が鍛冶遺構である可能性も考えて、床面付近の埋土（７・10層）を持ち帰り、鉄片等の微細遺物の抽出を試みた。しかし、鍛冶の痕跡を示すような遺物は回収されず、６ヶ所ある被熱面の性格を明確にできなかった。

遺物の多くは７層から出土しており、床面出土遺物はS27のみである。S27は被熱面の直上で出土



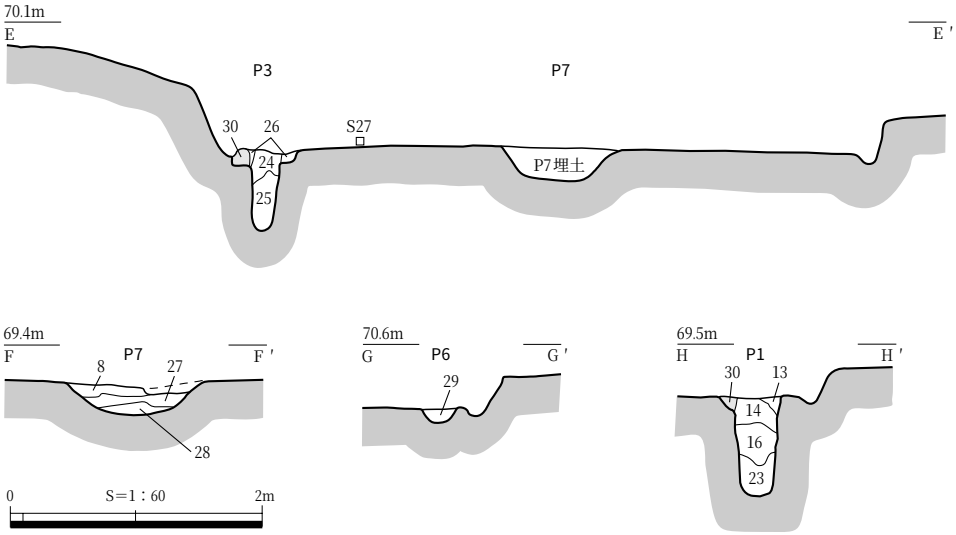
1　暗褐色土（10YR3/4）１㎝以下炭化物・焼土粒少含
2　褐色土（10YR4/4）１㎝以下砂礫・ホーキブロック・炭化物少含
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）４㎝以下ホーキブロック・焼土粒・炭化物粒を少含
4　褐色土（10YR4/6）炭化物少含
5　褐色土（10YR4/6）砂礫少含
6　褐色土（10YR4/4）砂礫・炭化物少含（にぶい黄褐色土が斑状に混）
7　褐色土（7.5YR4/4）３㎝以下ホーキブロック・炭化物多含、５㎝以下ATブロック少含
8　褐色土（10YR4/6）炭化物少含
9　褐色土（7.5YR4/3）炭化物少含
10　褐色土（7.5YR4/4）
11　黄褐色土（10YR5/6）炭化物多含
12　褐色土（10YR4/4）0.5㎝以下ホーキブロック少含
13　褐色土（10YR4/6）炭化物多含
14　褐色土（7.5YR4/3）ホーキブロック少含、炭化物多含
15　明褐色土（7.5YR5/6）砂礫・炭化物少含
16　褐色土（10YR4/4）炭化物多含
17　にぶい黄褐色土（7.5YR4/3）炭化物多含
18　にぶい褐色土（7.5YR5/4）しまり弱、炭化物多含
19　黄褐色土（10YR5/6）ホーキブロック少含
20　黄褐色土（10YR5/8）
21　褐色土（7.5YR4/6）炭化物多含
22　褐色土（10YR4/6）
23　褐色土（10YR4/6）砂礫多含
24　褐色土（10YR4/4）粘性弱、焼土粒多含
25　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、焼土粒多含
26　明褐色土（7.5YR5/6）炭化物少含
27　暗褐色土（10YR3/4）焼土粒・炭化物多含
28　褐色土（10YR4/4）炭化物・焼土粒多含
29　黄褐色土（10YR5/8）炭化物多含、ホーキブロック・焼土粒少含
30　明褐色土（7.5YR5/6）粘性強、しまり強（貼床層）
31　褐色土（7.5YR4/6）

0　S=1：60　2m

第41図　SI17（１）

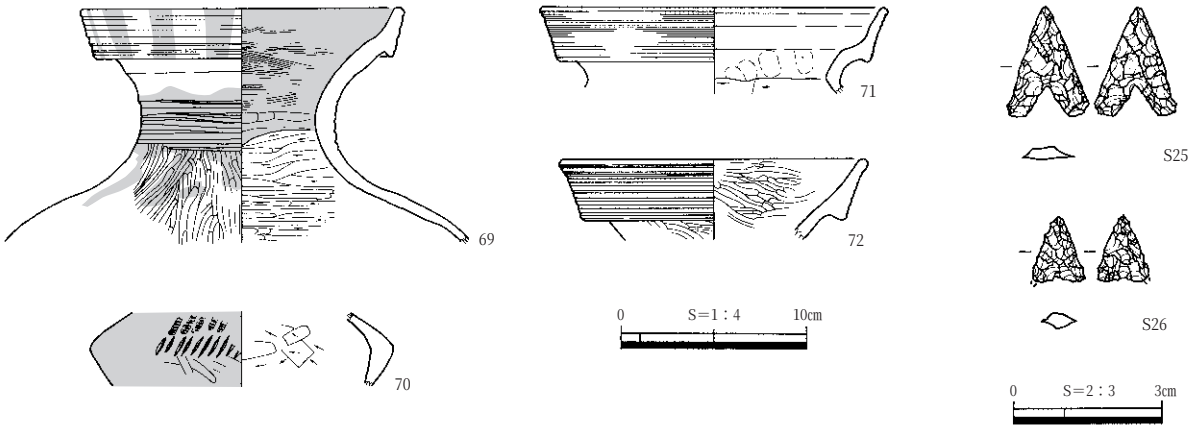
している。外面を連子状に赤彩した壺69は７層に伴う遺物だが肩部破面の一端が床面から少ししか浮いておらず、竪穴中央部の埋没が進んでいない時期に二次的に入り込んだと考えられる。

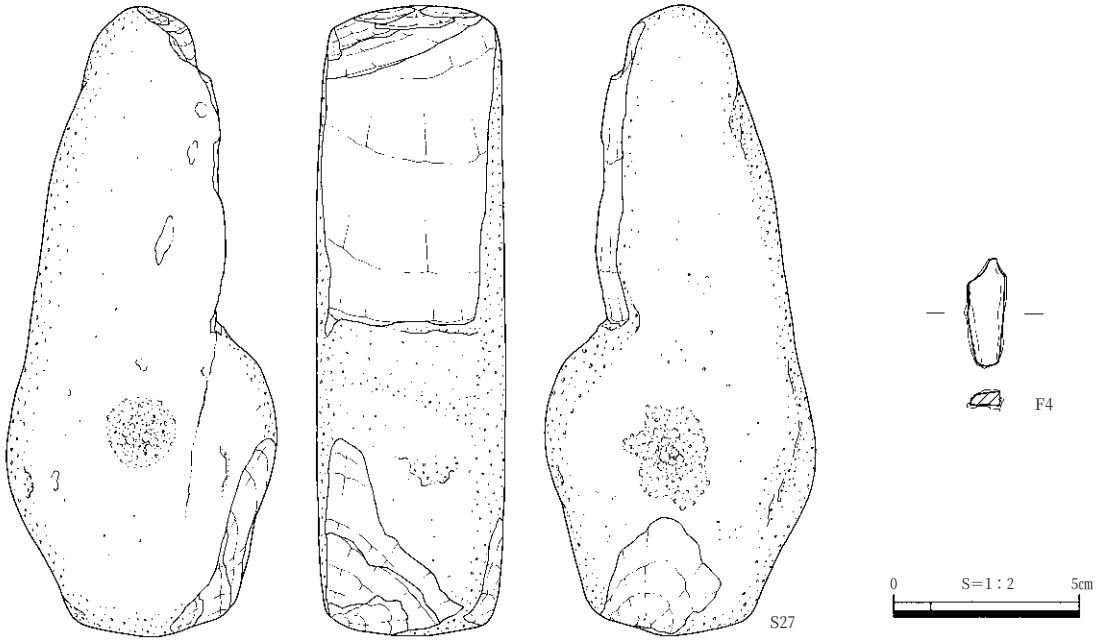
出土遺物のうち、壺69・70、甕71、器台受部72、石鏃S25・26、敲石S27、鉄器片F4を図化した。



第42図　SI17（２）

69は頸部から緩やかに外反して立ち上がる口縁部をもつ壺で、肩が大きく張る。口縁部にはヘラ状工具によるとみられる平行沈線が施され、その後のナデによって部分的に文様が消えている。頸部には口縁部文様と同一原体を用いたと推定される平行沈線が６～７条に





第43図　SI17出土遺物

わたって螺旋状にめぐらされる。内外面は最終的にミガキによって丁寧に仕上げられており、その後に赤色顔料で塗彩している。内面は通有の塗彩方法だが、口縁・肩部の外面は全体が赤彩の有無で連子状に塗り分けられており、特異な外観を呈す。肩部以下が欠失する以外は完存しており、破損ラインも概ね揃っていることなどからすれば、69は意図的に肩部以下を打ち欠いて廃棄されたものと考える。70は胴部中央が大きく張り出して算盤玉状を呈し、台付壺であろう。72は口縁部の拡張がそれほど大きくなく、内面のラインもやや直線的な形状となる。棒状の亜角礫を素材とする敲石S27は表裏それぞれ１ヶ所に円形につぶれた敲打痕が残されている。

表９　SI17ピット一覧表

№	長軸×短軸－深さ(m)
P1	0.37×0.31－0.78
P2	0.34×0.3－0.68
P3	0.42×0.38－0.66
P4	0.47×0.37－0.66
P5	0.47×0.4－0.84
P6	0.29×0.26－0.13
P7	1.11×0.95－0.28

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代後期後葉の竪穴住居跡と考える。（高尾）

SI18（第44図、PL. 21、61）

D22グリッド、標高70.3mの尾根部傾斜変換点付近の平坦面に位置する。

平面形は長軸5.5m、短軸5.1mの隅丸五角形である。検出面から床面までの深さは最大56㎝を測り、遺存状況は良好といえる。地山が緩やかに東に傾斜しているため、竪穴は東側の一部でⅤ層まで、それ以外はⅥ層まで掘り込まれ、床面はほぼ水平が保たれている。床面積は17.5㎡である。

床面で、壁溝、ピット８基を検出した。壁溝は東側の一部でわずかに途切れてＣ字状になり、断面形態はＵ字状で床面からの深さは２～７㎝を測る。主柱穴はP1～P5で５本柱になると考えられ、壁に近接し配される。主柱間距離は、P1-P2～P5-P1の順に2.8m、2.7m、2.6m、2.7m、2.6mとほぼ等間隔である。中央ピットは周堤を伴って床面のほぼ中央に位置し、長軸58㎝、短軸48㎝を測り、ほぼ楕円形である。周堤は床面となるⅥ層を削り出して構築している。

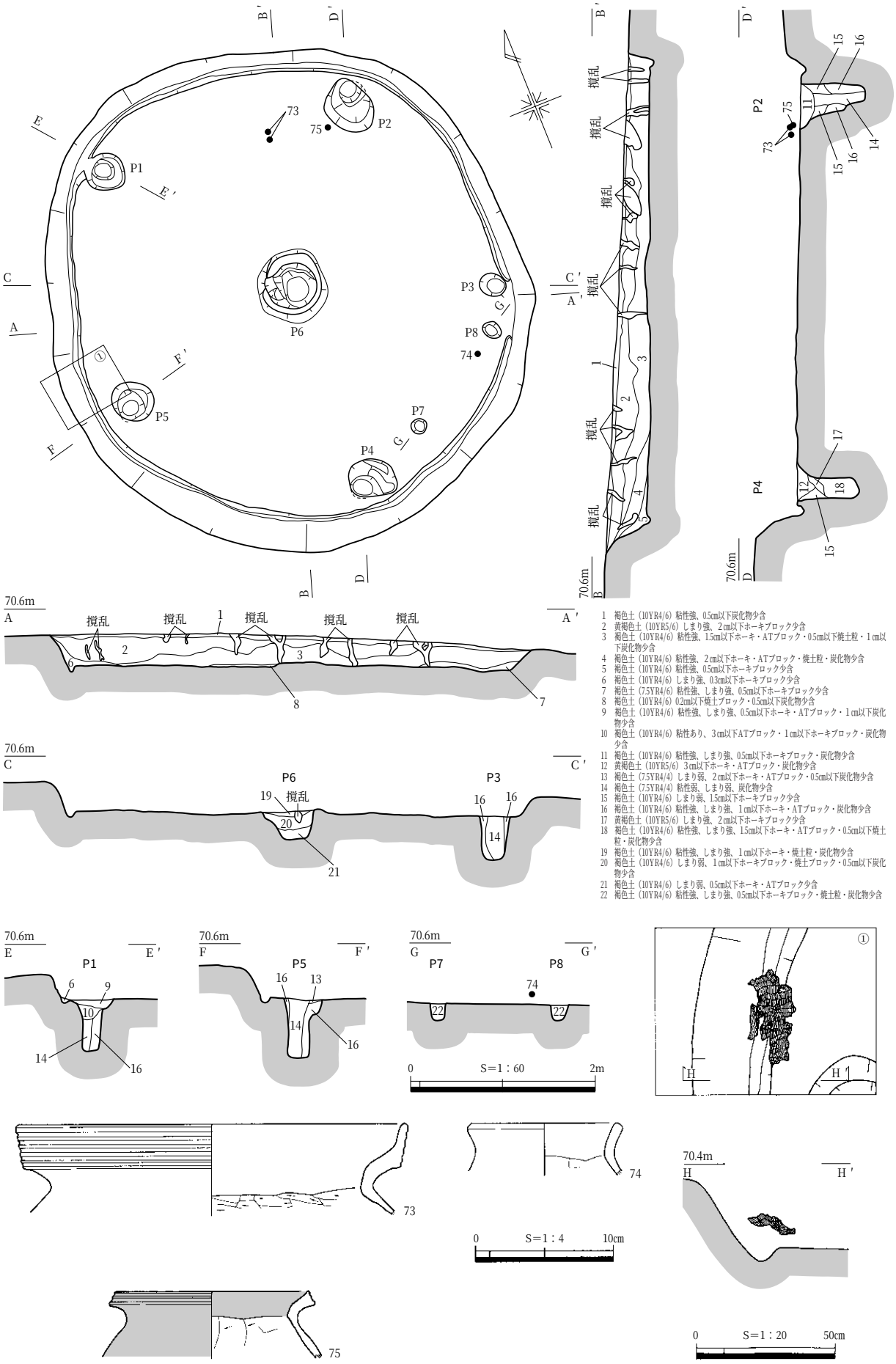
埋土はⅣ層に類似した褐色土が主体をなし、大きく３層に分層できる。１～２層には主にⅥ層ブロックの混入がみられ、３層以下にはⅥ層ブロックに加えてⅦ層ブロック、焼土ブロック、炭化物の混入もみられる。傾斜変換点に近いため、地形的に高い西側から東側へ流れ込むような堆積の様相を示し、自然堆積と考えられる。遺物は３層からの出土が主であり、床面近くからも確認できていることから、埋没開始直後に流れ込んだものと思われる。P5付近の壁際で、状態はよくないものの半截丸太状の炭化材が出土した。他の炭化材や焼土塊、被熱面などが確認されないことから、廃棄されたものであろう。遺物は３層より出土した土器３点を図示した。73、74、75は甕である。75の口縁外面には凹線が施される。

73はⅤ－２期に比定されることから、本遺構の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。（原田）

SI19（第45図、PL. 22・61）

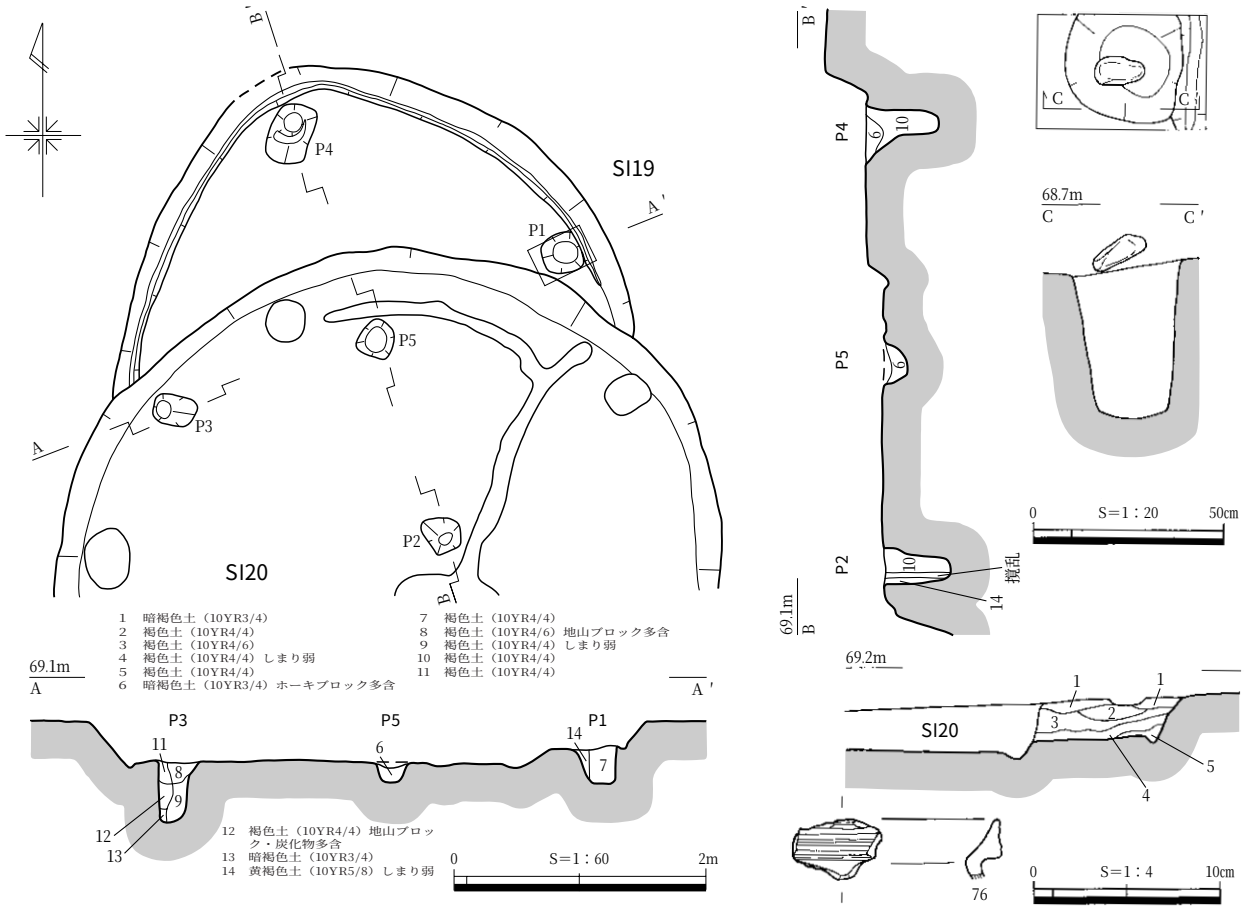
AB20グリッド、傾斜変換点に近い標高68.8mの尾根平坦面に位置する。本遺構は同時期と推定されるSI20と古墳時代中期末葉のSI28に切られる。

竪穴の大部分をSI20とSI28の構築に伴って失っており、残存する範囲から推定される平面形は長軸3.6mを測る隅丸方形である。北東－南西方向の短軸はピット位置から推測して3.1m程度となろう。壁高は北壁で最大39㎝を測る。床面には幅５～８㎝、深さ３～６㎝の壁溝が検出され、本来は壁際を



1　褐色土（10YR4/6）粘性強、0.5cm以下炭化物少含
2　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、2cm以下ホーキブロック少含
3　褐色土（10YR4/6）粘性強、1.5cm以下ホーキ・ATブロック・0.5cm以下焼土粒・1cm以下炭化物少含
4　褐色土（10YR4/6）粘性強、2cm以下ホーキ・ATブロック・焼土粒・炭化物少含
5　褐色土（10YR4/6）粘性強、0.5cm以下ホーキブロック少含
6　褐色土（10YR4/6）しまり強、0.3cm以下ホーキブロック少含
7　褐色土（7.5YR4/6）粘性強、しまり強、0.5cm以下ホーキブロック少含
8　褐色土（10YR4/6）0.2cm以下焼土ブロック・0.5cm以下炭化物少含
9　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、0.5cm以下ホーキ・ATブロック・1cm以下炭化物少含
10　褐色土（10YR4/6）粘性あり、3cm以下ATブロック・1cm以下ホーキブロック・炭化物少含
11　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、0.5cm以下ホーキブロック・炭化物少含
12　黄褐色土（10YR5/6）3cm以下ホーキ・ATブロック・炭化物少含
13　褐色土（7.5YR4/4）しまり弱、2cm以下ホーキ・ATブロック・0.5cm以下炭化物少含
14　褐色土（7.5YR4/4）粘性弱、しまり弱、炭化物少含
15　褐色土（10YR4/6）しまり弱、1.5cm以下ホーキブロック少含
16　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、1cm以下ホーキ・ATブロック・炭化物少含
17　黄褐色土（10YR5/6）しまり強、2cm以下ホーキブロック少含
18　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、1.5cm以下ホーキ・ATブロック・0.5cm以下焼土粒・炭化物少含
19　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、1cm以下ホーキ・焼土粒・炭化物少含
20　褐色土（10YR4/6）しまり弱、1cm以下ホーキブロック・焼土ブロック・0.5cm以下炭化物少含
21　褐色土（10YR4/6）しまり弱、0.5cm以下ホーキ・ATブロック少含
22　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、0.5cm以下ホーキブロック・焼土粒・炭化物少含

第44図　SI18および出土遺物



第45図　SI19および出土遺物

全周していたと想定する。竪穴コーナー部分の床面で２基、一段掘り下がったSI20床面で位置的に本遺構に帰属すると考えられるピットを３基検出し、このうちP1～P4が主柱穴となろう。各主柱穴とも径約30～50㎝の不整楕円形を呈す。P4は掘り方の途中に南側に張り出した三日月状のテラスをもち、段掘りとなる。P1のみ浅いがそれ以外は深さ60㎝程度に掘り込まれ、底面のレベルは67.9m前後に揃う。P5は径が小さすぎる感はあるが、位置的に中央ピットと想定する。

埋土は褐色土を主体とし、風化したⅥ層の粒子を含む。住居中央部に向かって緩やかに傾斜するような堆積を示し、自然堆積による埋没と考えられる。柱穴土層断面で柱痕跡は認められない。

出土遺物はわずかで、土器も多くが小片であった。埋土中から出土した甕口縁部76を図示している。礫がP1上面で出土したが埋没途中での流れ込みで、明確な使用痕はない。

出土遺物の特徴及びSI20との切り合い関係から、本遺構は弥生時代後期中葉の竪穴住居跡と推定される。（高尾）

SI20（第46・47・126図、PL. ９・22・23・61・75）

AB20グリッド、傾斜変換点に近い標高68.8mの尾根平坦面に位置する。本遺構は同時期と推定されるSI19を切り、古墳時代中期末葉のSI28に切られる。南西約３mに同時期のSI25が近接している。長軸約７m以上にわたって不整長楕円形に広がる褐色土を検出し、当初より２棟以上の住居が切り合って存在することが予想できたため、サブトレンチを設定してSI19・20の床面および壁の立ち上がりを確認し、個々の調査に着手した。

平面形は長軸5.8m、短軸5.7mの円形にちかい不整七角形を呈す。本遺構は地形的に高所となる西

壁上部の大半をSI28構築時に失っており、残存する壁高は北～西壁で最大36㎝であった。南東壁の一部は傾斜変換点にかかっており、流失している。床面は切り合いによる撹乱を受けておらず、面積は20.92㎡を測る。Ⅵ層を基盤とし、地形的に低い東側のみⅤ層を床としている。床面には幅４～12㎝、深さ２～６㎝の壁溝が南東部を除きＣ字状にめぐる。P3-P8間の溝は単独で、幅20㎝、深さ１～２㎝と浅い。また、床面には幅10～16㎝、深さ２～６㎝を測る３条の床溝が設けられていた。北東側の床溝はP7から伸びて壁溝に繋がり、壁溝の手前で壁のカーブに合わせたように床溝がもう１条派生している。この床溝の底面レベルは中央ピット側が３㎝程度低い。南西の床溝はピットや壁溝と繋がっておらず独立している。床面で計８基のピットを検出しており、このうちP1～P6が主柱穴と考える。壁際に配された主柱穴のうち、P5・P6は不整多角形を呈す平面プランのコーナー部分に位置していない。主柱間距離はP1-P2間からP6-P1間の順に、2.4m、2.1m、2.8m、2.3m、2.4m、2.8mを測り、P3-P4間・P6-P1間が広く、P2-P3間・P4-P5間が狭い。主柱穴の平面形は径約30～40㎝の不整円～楕円形を呈し、深さは60～80㎝を測る。底面レベルはP3～P6・P8が標高67.82～67.88mにおさまるのに対し、P1・P2が67.62m、67.73mとやや低くなり深く掘り込まれている。P7が中央ピットで、床溝と繋がる部分を除き上縁部から３～４㎝下がったところにテラスがＣ字状に形成され、断面形は有段の逆台形を呈す。地山を削り込んだテラスのレベルは揃っており、蓋受けと想定される。P8は他の主柱穴と同様の規模・配置であることから、移築前の主柱穴もしくは支柱穴と推定する。P7-P8の中間位置に25×20㎝の範囲で床が赤色化した隅丸長方形の被熱面を１ヶ所確認した。焼け方は弱い。

埋土は30層に分けられ、中央部から地形的に低い東側へ緩やかに窪むような堆積が認められ、自然堆積によって埋没したと考える（土層図A-A′ライン及び本章第３節第126図SI28土層C-C′ライン参照）。埋土上層の一部に焼土粒を多分に含むが、床面付近及び埋土中から炭化材片や炭化物集中層は検出しておらず、堆積も乱れていないことなどから上屋の焼失に伴うものではない。埋没過程に付近で焼土が生成される状況があったと推察される。各主柱穴には柱痕が残り、裏込め土も確認できた。推定される柱径は15～18㎝となろう。

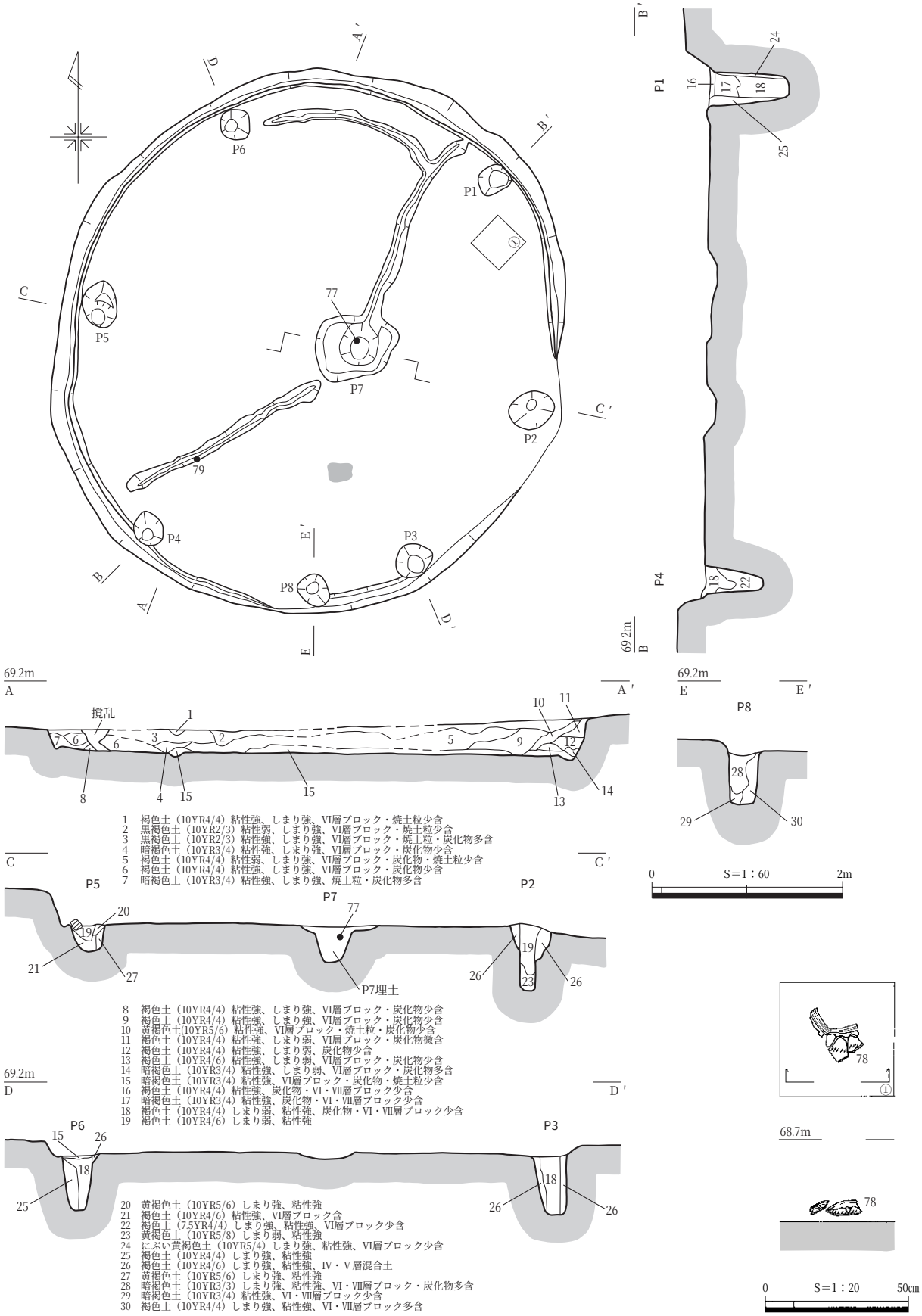
遺物は床面からわずかに浮いた状態で甕78が出土しているほかは埋土中からの出土である。甕77の破片はP7上層で出土しており、埋没初期の段階に廃棄されたと考えられる。出土遺物のうち、甕77・78、鉢？79、赤色顔料が付着した礫S28、砥石S29を図示した。甕77・78ともわずかに外傾して直立する複合口縁外面にヘラ状工具を束ねたような櫛状工具による多条平行沈線が施される。78は口縁部中央が一部ナデ消されている。口縁下端は突出しない。79は鉢状の器形が想定されるもので、残存する口縁端部に１ヶ所の突起を作出しており、そこに円孔を有す。精製された胎土で、内外面とも丁寧に調整されている。S28は卵形の小型円礫の表面２/３程度を除く全体に赤色顔料が付着している。器体に擦痕はみられず、赤色顔料がこの礫を用いた何らかの作業の際に付着したものなのか二次的なものなのか判別できない。S29は細粒な石材を用いた砥石である。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代後期中葉の竪穴住居跡と考える。（高尾）

SI21（第48図、PL. 21）

B22・23グリッド、標高70.1mの尾根平坦面に位置する。

平面形は径4.7mの円形を呈し、床面積は13.9㎡である。検出面から床面までの深さは南側で最大



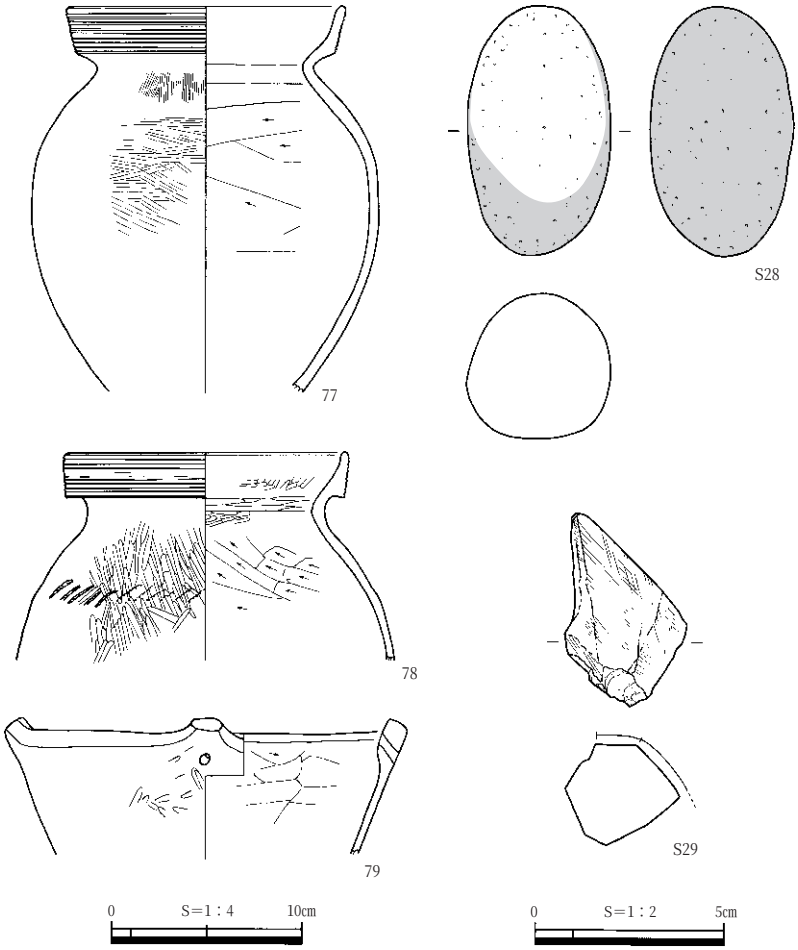
第46図　SI20

26㎝を測る。床面で検出されたピットは５基で、P1～P4が主柱穴と考えられる。主柱間距離はP1-P2間から順に2.0m、2.1m、2.0mを測る。P5は中央ピットである。断面U字形の壁溝は南東部で途切れてC字状となり、幅は10～38㎝、深さは最大で９㎝を測る。P5から東側の床面には被熱

面が２ヶ所形成されており、北から順に18×13㎝の不整な楕円形、37×24㎝の不整形を呈す。いずれも掘り方をもたず、床面が被熱し赤変したもので焼け方は弱い。

本住居廃絶時にP2のすべてとP3、P4の下層に９層が埋まる。P3、P4の上層とP1はⅥ層及びⅦ層ブロックを含む層が堆積している。P5は炭化物を含む12・13層が堆積している。２～７層が薄く堆積した後で１層が遺構全体を埋めている。土層の堆積状況から、短期間に人為的に埋められた可能性も考えられる。

北側中央部の床面直上と南西側の床上５～10㎝のところから出土した土器片のまとまりと東側床上に点在して出土した土器片は接合の結果同一個体に復元できた（甕80）。破砕した後に廃棄されたものと考えられる。



第47図　SI20出土遺物

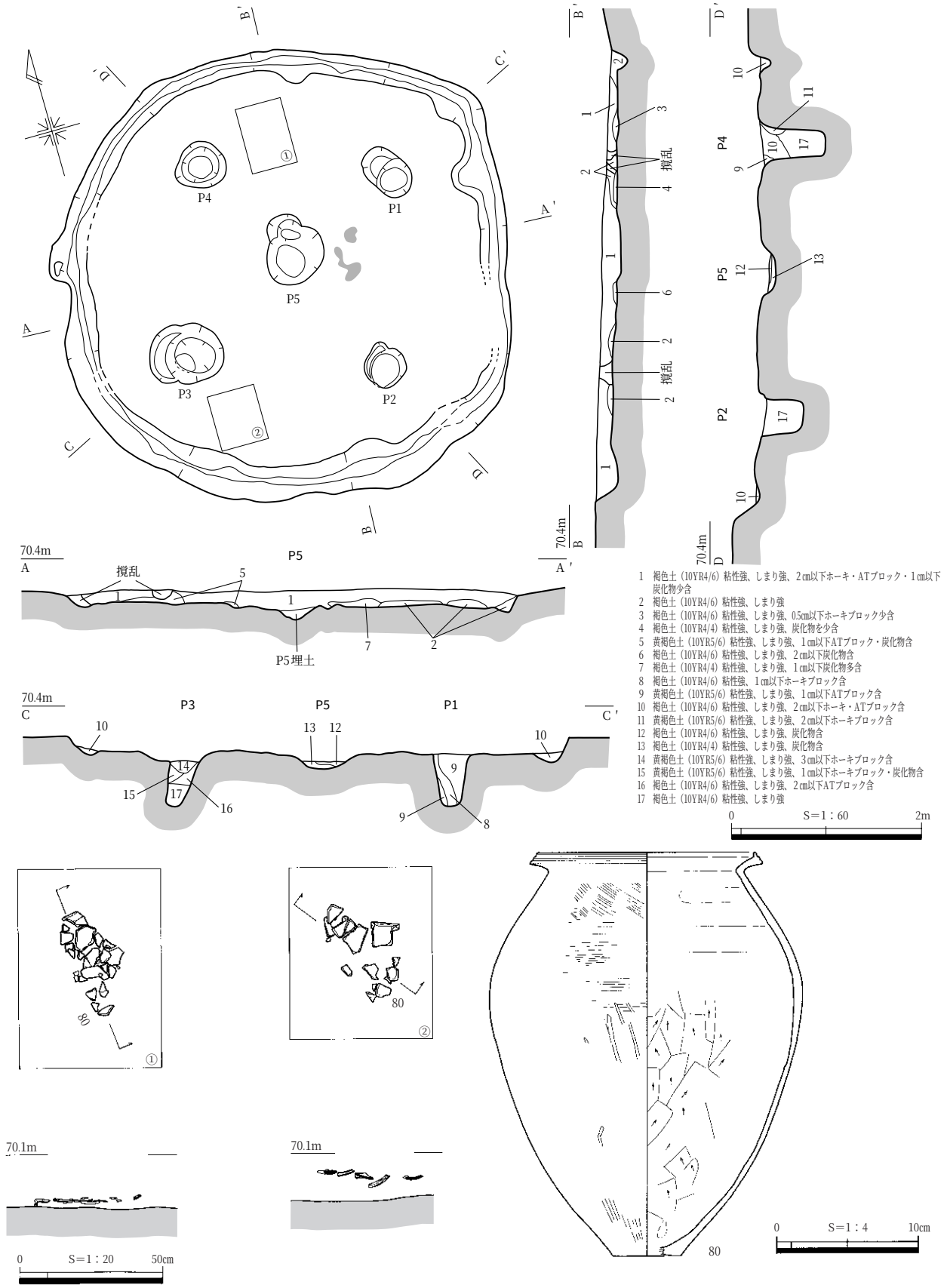
出土した80は口縁部に２条の凹線をめぐらせる。胴部内面下半はケズリ、上半は丁寧なナデによって仕上げている。80はⅣ－３期に比定され、本遺構の時期は弥生中期後葉と考えられる。　（恩田）

SI23（第49・50図、PL. 23・62・67・75）

B21・22グリッド、標高69.7mの尾根部平坦面に位置し、SB14に切られる。

平面形は、長軸4.6m、短軸4.5mの隅丸長方形を呈す。検出面から、床面までの深さは最深部で40㎝を測る。床面では、ピット６基、壁溝、P1から北側に伸びる床溝を検出した。主柱穴はP1～P4と考えられる。主柱穴は、床面から30～40㎝掘り下げられる。主柱間距離は、概ね2.3～2.4mを測る。P5は、長軸70㎝、短軸50㎝、深さ15㎝を測る歪な長方形を呈する中央ピットである。P6はP1を切る。検出段階では判別できず、P1の埋土除去中に確認したため、堆積状況は不明であるが、本遺構に伴わないピットの可能性もある。床面外縁は、深さ約10㎝で断面U字形の壁溝が約半周する。東側は開放状態であるが、本来は東側にも壁が存在し、壁溝も全周していたと考えられる。床面東側は、若干の硬化面と微量の微細炭化物が広がっていたため、その範囲から推定した。推定値ではあるが、床面積15.65㎡を測る。主柱穴の堆積状況から、径15～20㎝程度の柱が使用されていたと想定される。

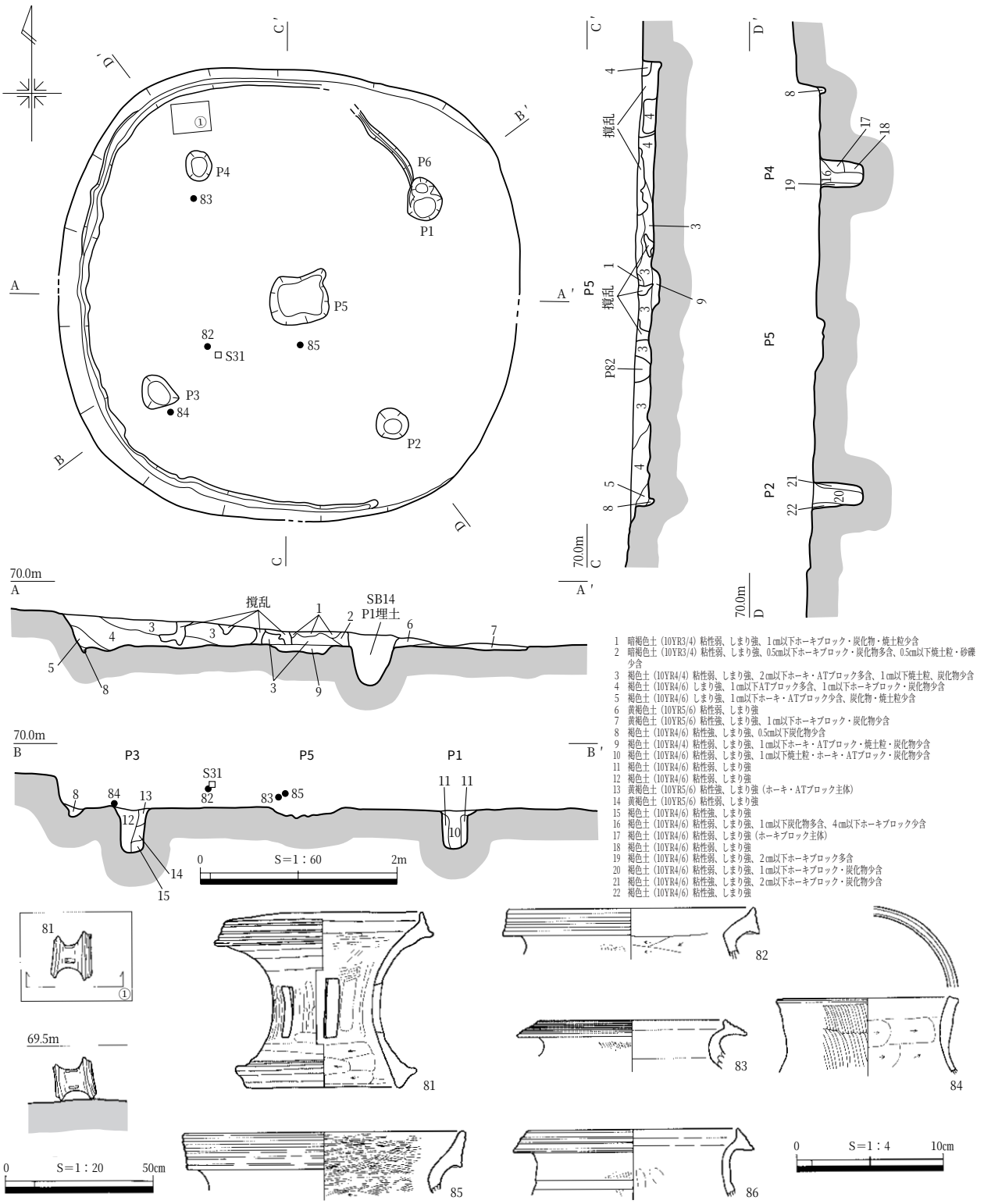
遺構は、壁際から徐々に土砂が流入し、埋没したと考えられる。床面及び埋土中から81・85・83・86、S30～33が出土しており、遺物の出土状況及び土層から、これらは廃絶後短期間で流入したと考えられる。81は、P4の北側の床面直上で横転した状態で出土した。遺物の多くは３層から出土して



第48図　SI21および出土遺物

いる。

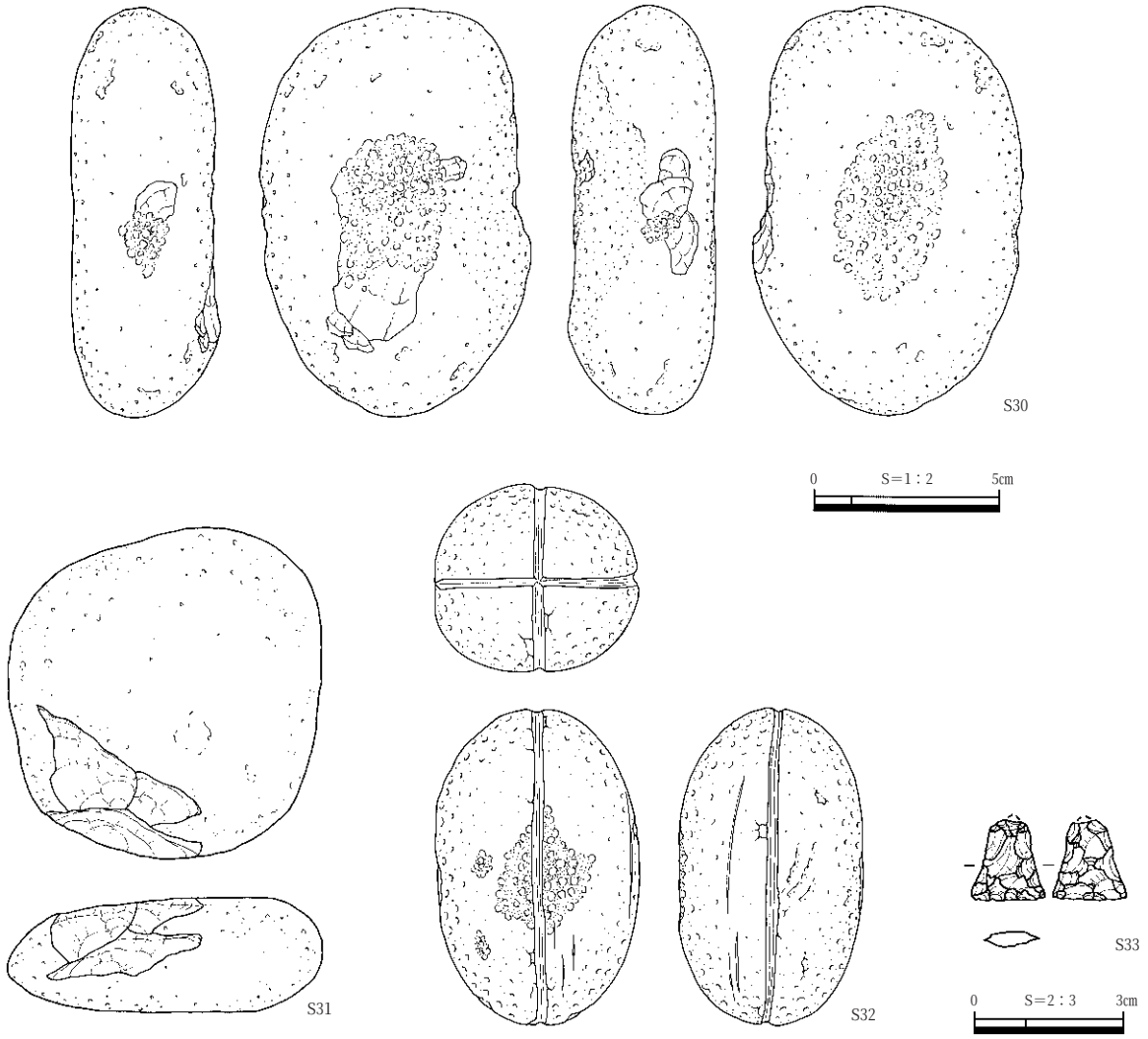
81は器台である。口縁部外面には、３条の凹線をめぐらし、口縁部下端がやや突出する。筒部には方形の透孔を３方向に穿つ。脚端部外面には凹線を１条めぐらせている。82・83・85は、甕の口縁部



第49図　SI23および出土遺物

片である。82は、口縁部の立ち上がりがやや内傾し、83は口縁部の下端が大きく突出する。84・86は壺の口縁部片である。84は、直立する口縁端部に凹線を持つ壺である。86は、長頸の広口壺で、頸部には凹線をめぐらせる。S30・S31は敲石、S32は十字状に溝を刻む有溝石錘である。S33は、石鏃で先端部は欠失している。

本遺構は出土遺物から、弥生時代後期前葉の竪穴住居跡であると考える。（岩垣）



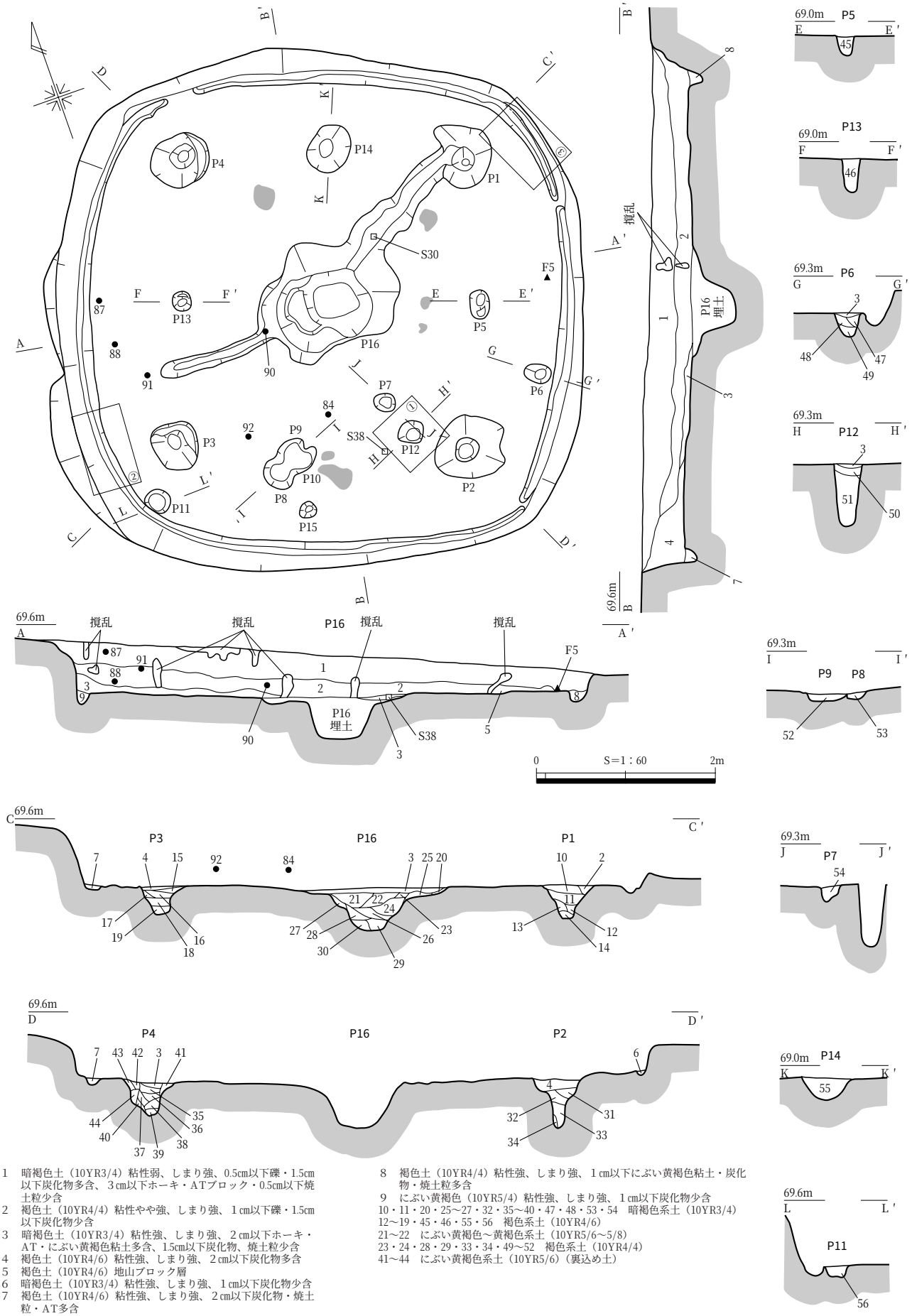
第50図　SI23出土遺物

SI24（第51～54図、表10、PL. ９・23・61・62・75・76）

A21グリッド、標高69.4mの尾根部平坦面に位置する。

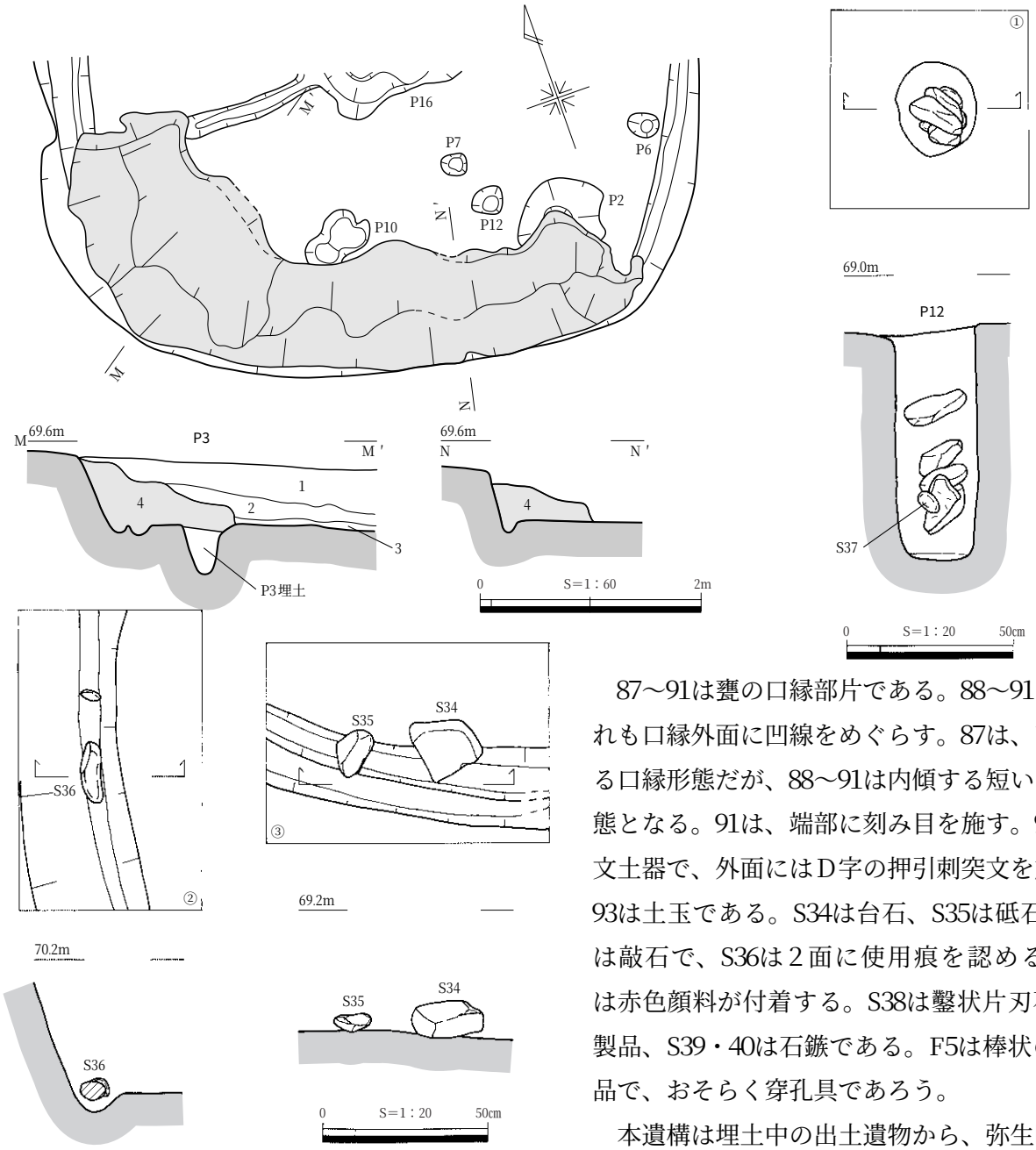
平面形は、長軸6.0m、短軸5.7mの隅丸長方形を呈す。検出面から床面までの深さは最深部で71㎝を測る。床面では、ピット16基、壁溝、被熱面６、中央部に向かって伸びる床溝２条が検出された。P1～P4が主柱穴、P5・13が支柱穴と考えられる。主柱穴は、床面から二段掘りで30㎝～60㎝掘り下げられる。主柱間距離は約3.0mを測り、ほぼ正方形のプランである。P1-P2、P3-P4の主柱間のほぼ中央に径20㎝弱、深さ約40㎝の支柱穴（P5・P13）を配す。当住居跡からは、主柱穴や支柱穴以外にもピットが検出されている。それらは、住居の構造柱穴であろう。床面外縁には、深さ約10㎝で断面Ｕ字形の壁溝が全周する。床面積は、23.42㎡である。

ピットの堆積状況からは柱痕跡が確認できない。P12には、６個の礫が詰め込まれており、その下層から赤色顔料が付着したS37が出土した。南側の壁際からＬ字状に土器や拳大の礫を含む地山土に近い埋土（４層）が確認された。これは住居の周りに盛られた周堤土と考えられ、住居の廃絶にあわせて、竪穴内に廃棄したものと考えられる。その後、壁際から徐々に土砂が流入し、埋没したと考えられる。遺物は、西側壁溝内からS36・S40が出土し、床面では、P12西側からS38、北東隅からS34・S35が出土している。F5は、床面よりやや浮いた状態で出土している。87～93、S39は１～３層の埋土からの出土である。



1　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり強、0.5cm以下礫・1.5cm以下炭化物多含、３cm以下ホーキ・ATブロック・0.5cm以下焼土粒少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性やや強、しまり強、１cm以下礫・1.5cm以下炭化物少含
3　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり強、２cm以下ホーキ・AT・にぶい黄褐色粘土多含、1.5cm以下炭化物、焼土粒少含
4　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、２cm以下炭化物多含
5　褐色土（10YR4/6）地山ブロック層
6　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり強、１cm以下炭化物少含
7　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、２cm以下炭化物・焼土粒・AT多含
8　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、１cm以下にぶい黄褐色粘土・炭化物・焼土粒多含
9　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘性強、しまり強、１cm以下炭化物少含
10・11・20・25～27・32・35～40・47・48・53・54　暗褐色系土（10YR3/4）
12～19・45・46・55・56　褐色系土（10YR4/6）
21～22　にぶい黄褐色～黄褐色系土（10YR5/6～5/8）
23・24・28・29・33・34・49～52　褐色系土（10YR4/4）
41～44　にぶい黄褐色系土（10YR5/6）（裏込め土）

第51図　SI24（１）



第52図　SI24（２）

表10　SI24ピット一覧表

№	長軸×短軸－深さ(m)
P1	0.68×0.57－0.68
P2	0.72×0.7－0.64
P3	0.55×0.49－0.52
P4	0.66×0.56－0.5
P5	0.33×0.2－0.24
P6	0.29×0.22－0.28
P7	0.23×0.2－0.19
P8	0.38×*0.29－0.12
P9	*0.32×*0.24－0.13
P10	0.37×*0.17－0.15
P11	0.28×0.25－0.11
P12	0.27×0.26－0.67
P13	0.23×0.2－0.37
P14	0.57×0.43－0.23
P15	0.19×0.18－0.12
P16	1.45×1.36－0.54

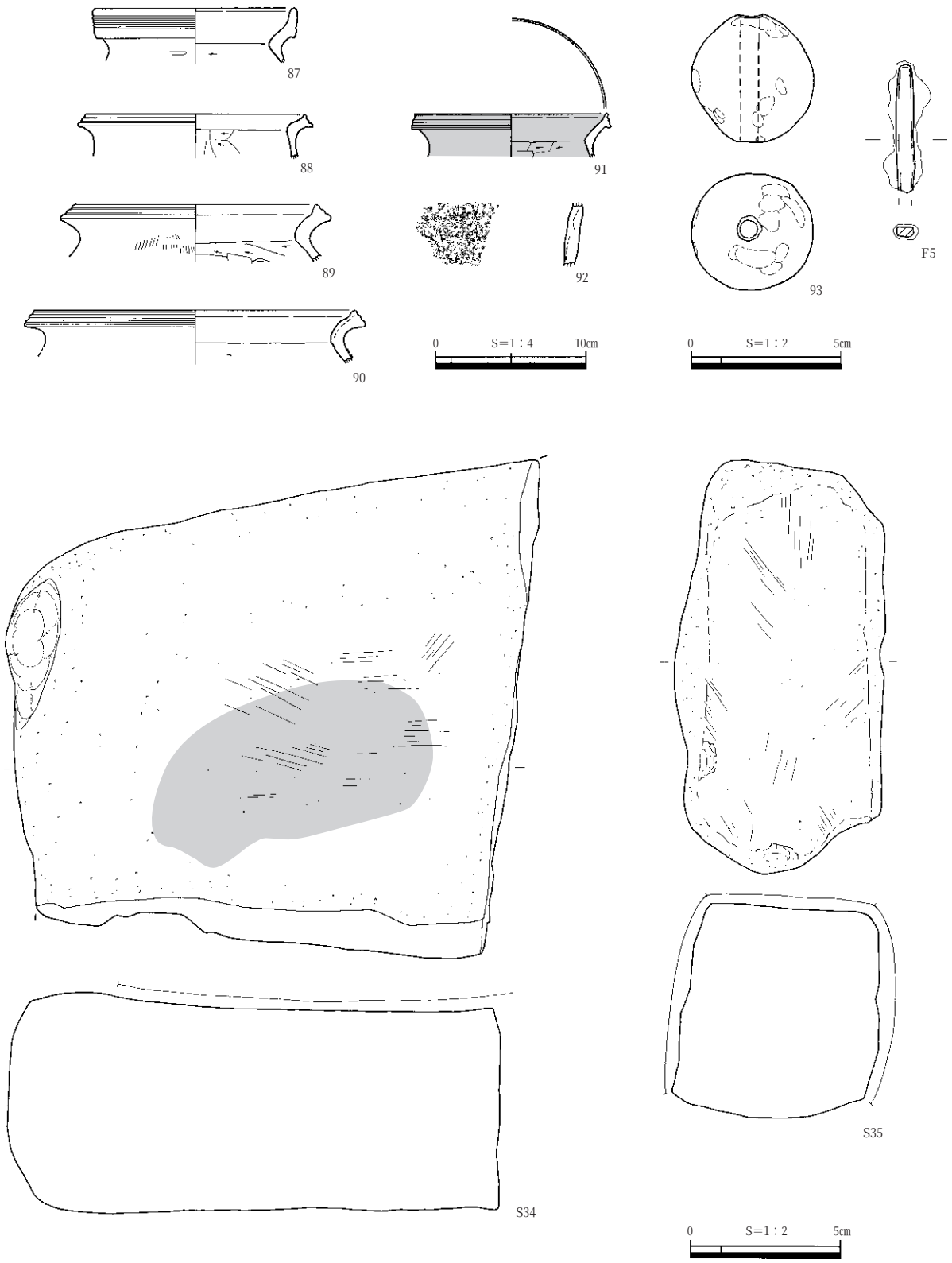
87～91は甕の口縁部片である。88～91はいずれも口縁外面に凹線をめぐらす。87は、直立する口縁形態だが、88～91は内傾する短い口縁形態となる。91は、端部に刻み目を施す。92は縄文土器で、外面にはＤ字の押引刺突文を施す。93は土玉である。S34は台石、S35は砥石、S36は敲石で、S36は２面に使用痕を認める。S37は赤色顔料が付着する。S38は鑿状片刃石斧未製品、S39・40は石鏃である。F5は棒状の鉄製品で、おそらく穿孔具であろう。

本遺構は埋土中の出土遺物から、弥生時代後期中葉の竪穴住居跡であると考える。　（岩垣）

SI25（第55図、PL. 24・61・62・76）

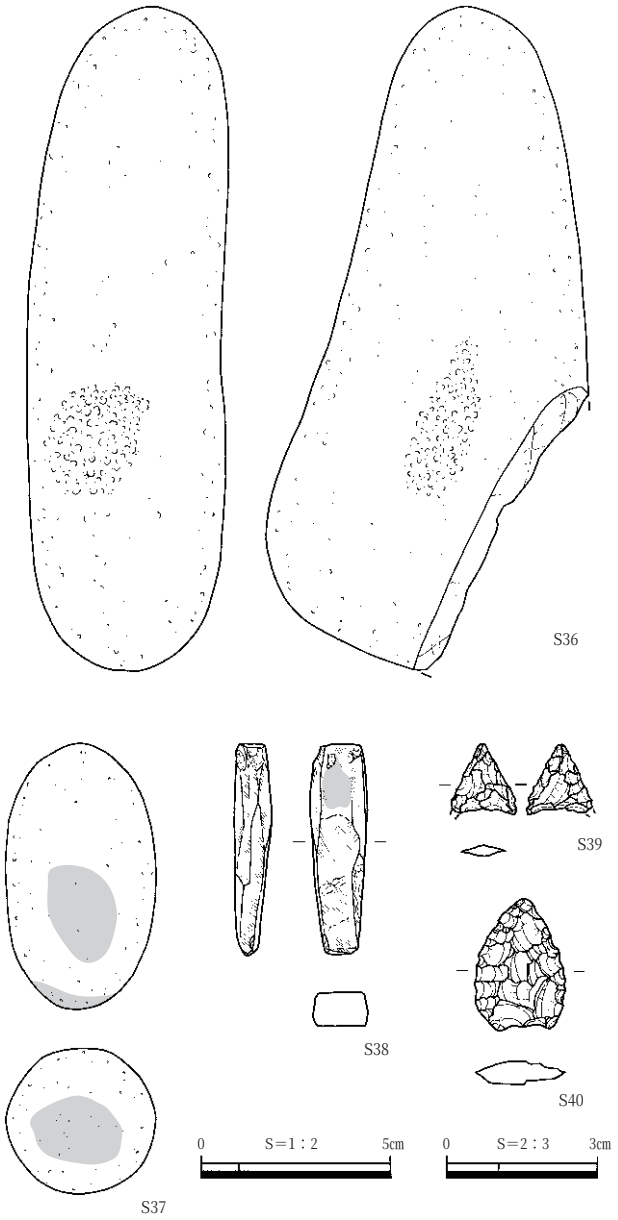
ＡＡ・AB21グリッド、標高69.3mの尾根部傾斜変換点付近の平坦面に位置する。

平面形は長軸5.4m、短軸5.1mの円形である。検出面から床面までの深さは最大62㎝を測り、住居北側と南側の一部で根撹乱を受けているが、遺存状況は比較的良好といえる。床面はⅥ層まで掘り込まれており、床面積は18.74㎡である。床面においては同心円にめぐる壁溝、ピット５基を検出した。壁溝は南東部で大きく



第53図　SI24出土遺物（１）

途切れてＣ字状になり、断面はU字形で床面からの深さは１～10㎝を測る。内側の壁溝も南東部が大きく途切れ、その他の部分でも部分的に途切れるところがある。断面はU字形で床面からの深さは３㎝以下と外側のものよりも浅い。主柱穴はP1～P4で４本柱になると考えられ、壁面から30～60㎝内側に配される。主柱間距離は、P1-P2～P4-P1の順に2.5m、2.5m、2.8m、2.3mを測る。中央ピットP5は床面のほぼ中央に位置し、長軸75㎝、短軸70㎝を測り、不整円形である。内側には幅15㎝程



第54図　SI24出土遺物（２）

度を測るドーナツ状の浅いテラス部分があり、その内側が約40㎝落ち込む形で構築されている。この住居跡は、同心円状に２本の溝がめぐっていることから建て替えが行われたものと思われる。柱穴は４基しか確認されておらず、２本の壁溝との位置関係からみても、建て替え前後で柱位置の変更はなく、中央ピットも共用したものと考えられる。

埋土上層はⅥ層ブロック、炭化物、微量の焼土ブロック、微細砂礫が混入する暗褐色土、下層は上層の含有物に加えてⅦ層ブロックも混入する褐色土が主体をなしている。傾斜変換点に近く、地形に沿って西から東へ流れ込むような堆積の様相を示し、自然堆積と考えられる。

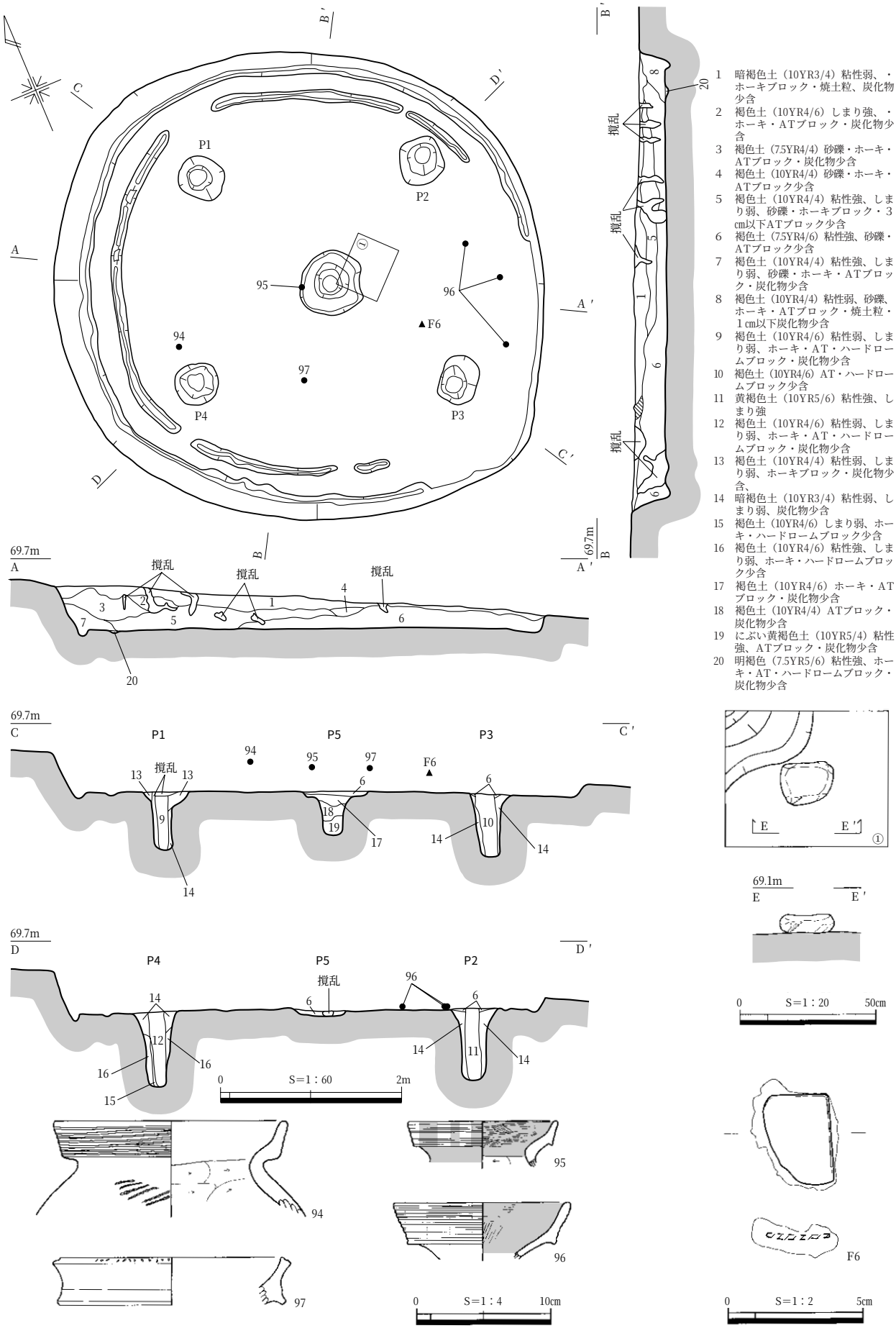
主柱穴に関しては４基とも柱痕跡を有し、微細砂礫が混入した黄褐色土と、微細砂礫、Ⅵ層ブロック、Ⅸ層ブロックが混入した褐色土によって裏込めが行われている。

壁溝については竪穴下層の埋土と同一であり、人為的に埋められた形跡は認められない。内側の壁溝については竪穴埋土とは明らかに違い、径１～２㎝のⅥ層、Ⅶ層、Ⅸ層のブロックを多量に混入し人為的に埋められた可能性が高い。よって、建て替えは同心円状に竪穴を拡張したものと考えられる。

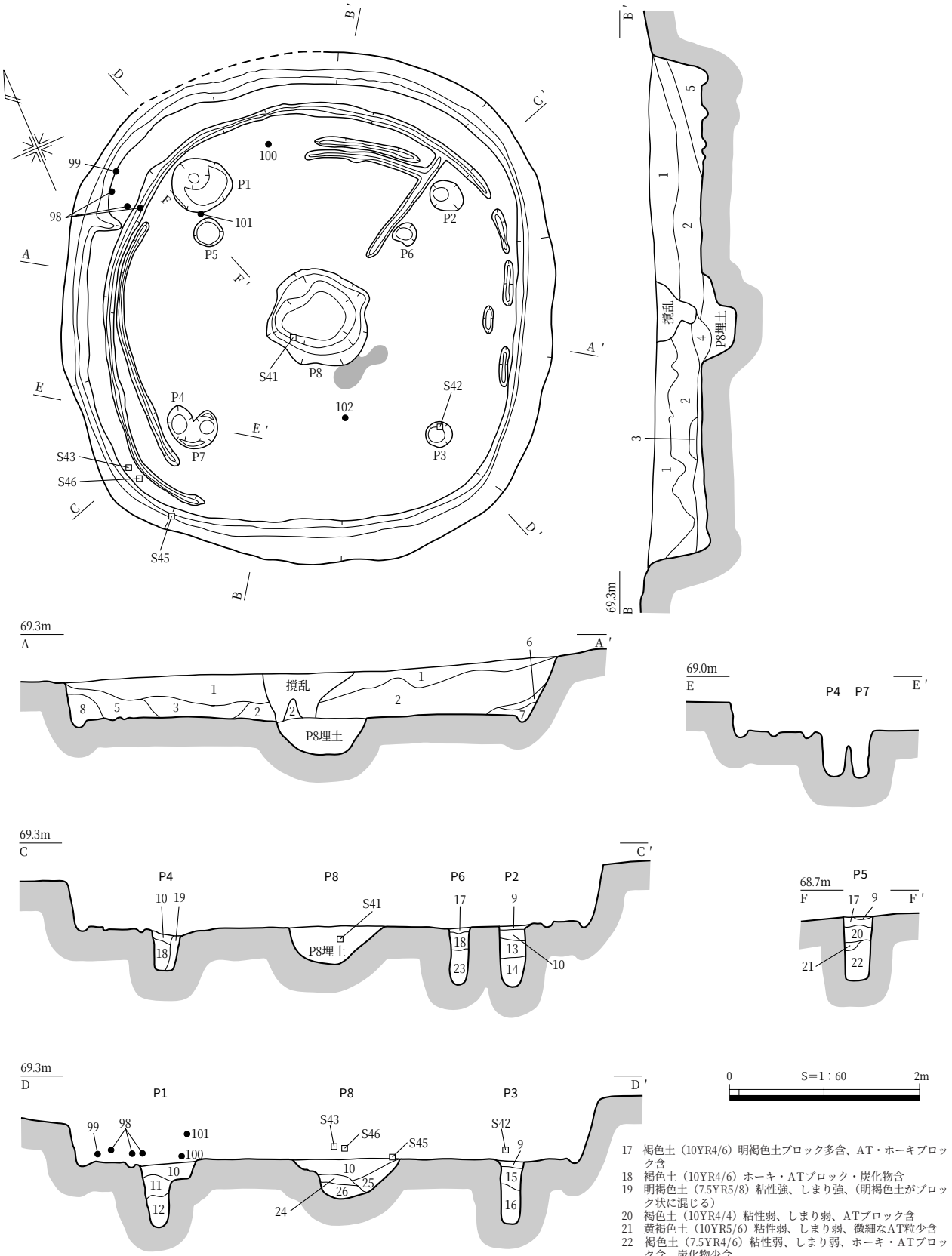
遺物は検出段階で鉄片が１点、検出面から下層まで多数の弥生土器片が出土した。遺物の出土位置はある程度分散しているが、竪穴東側部分から中央部分にかけて遺物が多く出土しており、上層下層ともその傾向は変わらない。

出土遺物のうち土器４点と鉄片１点を図示した。95は甕で、やや外傾する口縁部外面に多条の平行沈線をめぐらせ、赤色塗彩する。94は肩部に櫛状工具による刺突文をめぐらす。97は器台受部と考えられ、口縁端部に刺突文をめぐらす。F6は板状の鉄片である。

遺物はすべて埋土中から出土したものばかりだが、それらはⅤ－２期に比定されるものであり、本住居の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。（原田）

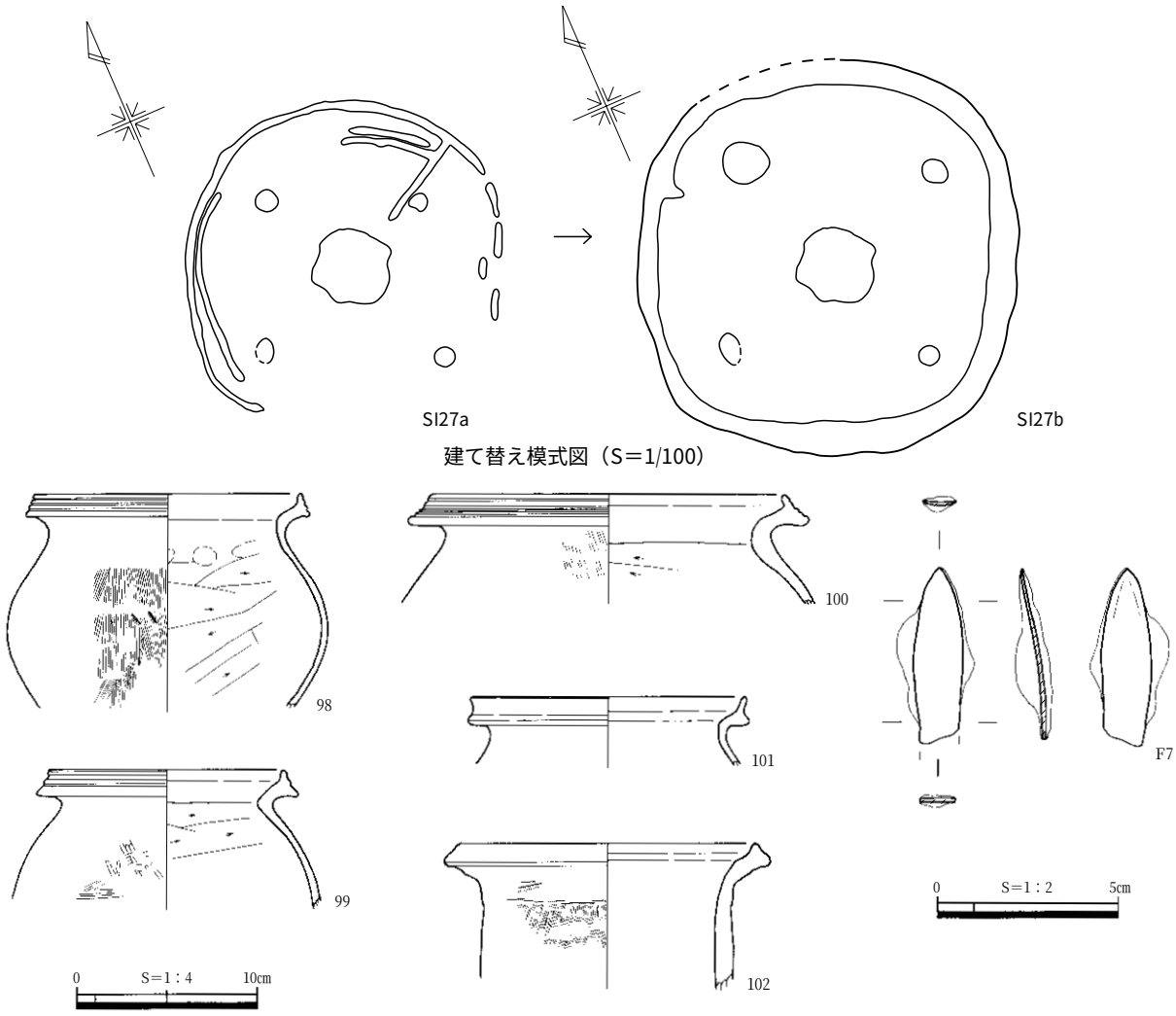


第55図　SI25および出土遺物



1　褐色土（10YR4/4）粘性弱、ATブロック含
2　褐色土（10YR4/6）粘性弱、ATブロック含
3　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、ATブロック含
4　暗褐色土（10YR3/4）ATブロック少含
5　褐色土（10YR4/4）ATブロック含
6　褐色土（10YR4/6）
7　褐色土（10YR4/4）しまり弱
8　褐色土（10YR4/6）粘性弱、ATブロック微含
9　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、AT・ホーキ粒少含
10　褐色土（10YR4/6）ホーキ・ATブロック・炭化物含
11　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、ホーキ・AT粒含
12　褐色土（10YR4/6）ホーキ・ATブロック・明褐色土含
13　褐色土（10YR4/6）しまり弱、ATブロック・炭化物多含
14　褐色土（10YR4/6）しまり弱、明褐色土粒多含
15　褐色土（10YR4/6）しまり弱、微細AT粒含
16　黄褐色土（10YR5/6）しまり弱、AT・明褐色土粒含
17　褐色土（10YR4/6）明褐色土ブロック多含、AT・ホーキブロック含
18　褐色土（10YR4/6）ホーキ・ATブロック・炭化物含
19　明褐色土（7.5YR5/8）粘性強、しまり強、（明褐色土がブロック状に混じる）
20　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり弱、ATブロック含
21　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱、微細なAT粒少含
22　褐色土（7.5YR4/6）粘性弱、しまり弱、ホーキ・ATブロック含、炭化物少含
23　明褐色土（7.5YR5/6）粘性弱、しまり弱、明褐色土と明黄褐色土が混
24　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、ATブロック・炭化物少含
25　褐色土（10YR4/6）粘性弱、焼土粒、ホーキ・ATブロック・炭化物含
26　褐色土（10YR4/4）しまり弱、ATブロック・炭化物・焼土粒含

第56図　SI27（１）



第57図　SI27（２）および出土遺物

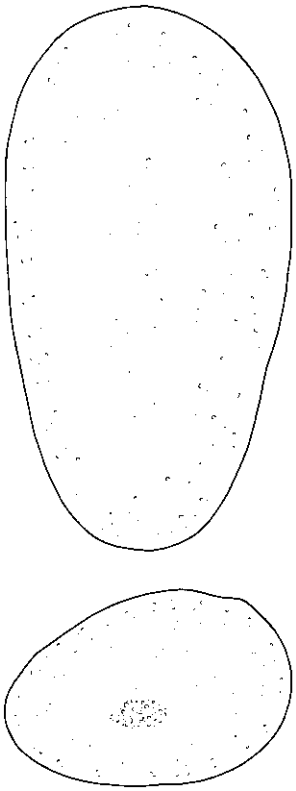
SI27（第56～58図、PL. 24・62・76）

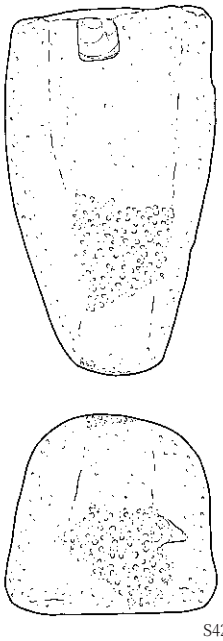
AC22グリッド、標高68.8～69.1mの傾斜変換点付近の平坦面に位置する。

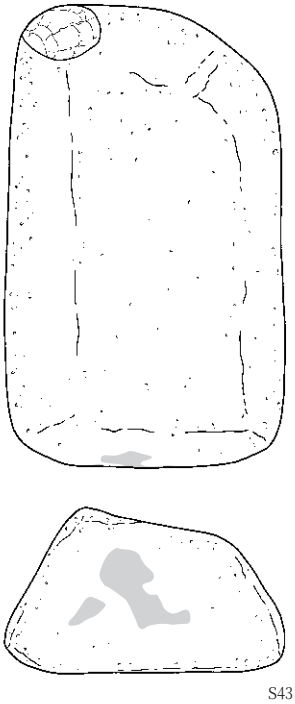
平面形は径5.3mのほぼ円形を呈し、検出面から床面までの深さは南東側で最大75㎝を測る。サブトレンチの床面を精査した結果、壁溝の内側に２条の溝を検出したため建て替えの可能性があると推測し、土層断面を確認したところ建て替え前の壁溝であることが明らかとなった。床面で検出されたピットは当初はP1～6の６基で、P5は床面精査後に設定したサブトレンチによって検出し、また、P7はP4の完掘時に壁体が埋め戻し土によって形成されていると判断して柱穴を検出した。以下、建て替え後の新しいものからSI27b、SI27aの順に報告する。

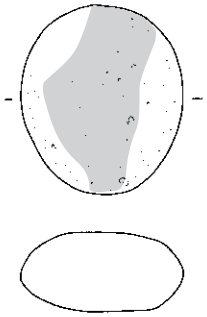
SI27b

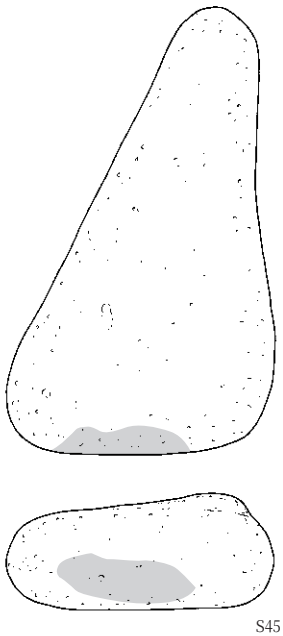
主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間からP4-P1の順に2.6m、2.5m、2.7m、2.6mを測る。断面U字形の壁溝は、幅は６～20㎝、深さは最大で11㎝を測り、ほぼ全周する。P3は建て替え前後で柱穴を共有しているものと考えられる。また、P8も中央ピットとして共有されていたと考える。建て替え前のP5～P7及び溝については、貼床が施されている可能性を考えて精査したが確認できなかった。ただし、P5とP6は17層で硬く蓋をされ、P4とP7の間には19層が詰め込まれていた。P8の南側には被熱面が形成されており、64×20㎝の不整形を呈す。掘り方をもたず、床面が被熱し赤変して

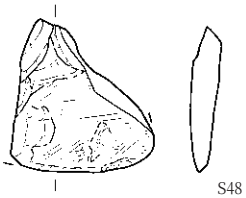


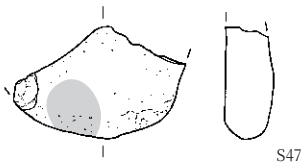


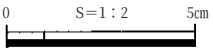










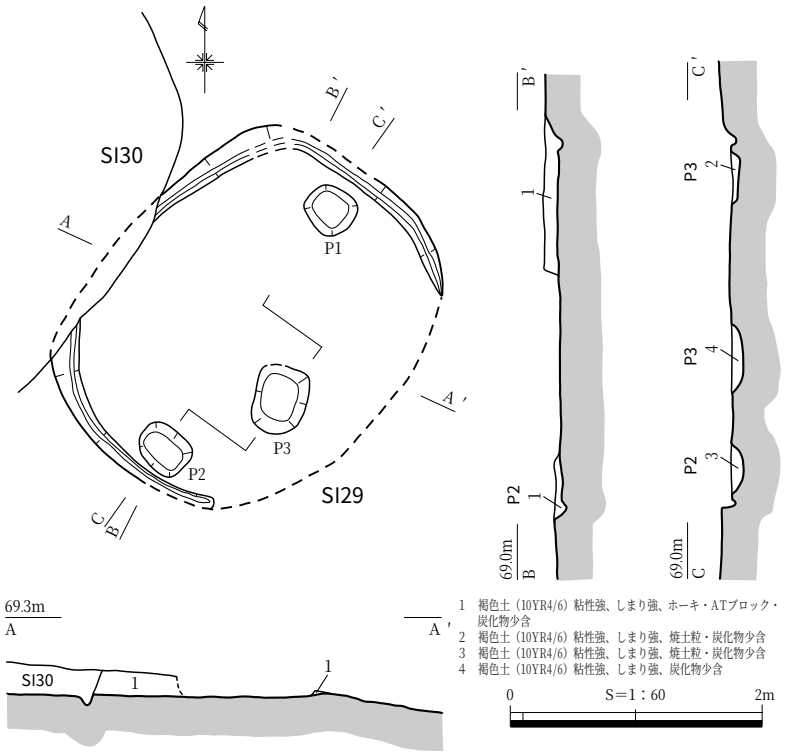


第58図　SI27出土遺物

いた。SI27bの床面積は17.7㎡を測る。

埋土は床面から検出面にかけてほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には甕98～101、壺102、敲石S41・42、石杵S45・46、赤色顔料付着礫S43・44・47、石庖丁S48、鉇F7がある。敲石S42・石杵S45は床面直上から出土している。鉄器はP4埋土中から鉇F7が出土した。98～100はＴ字状に拡張した口縁端部に2～4条の凹線をめぐらせる。内面は頸部直下までヘラケズリが及ぶ。F7は身幅1.3㎝の細身の鉇で、作業部にわずかな裏すきを有する。



第59図　SI29

SI27a

主柱穴はP5、P6、P3、P7で、主柱間距離はP5-P6間、P6-P3間の順に2.0m、2.1m、2.4m、2.0mを測る。P8は中央ピットと考えられる。壁溝と思われる断面U字形の溝が南東側を除いてＣ字状に走っており、幅は５～16㎝、深さは最大で10㎝を測る。さらにその内側に並行していたと思われる断面U字形の溝を１条、北東部から壁溝に直交してP8に向かう床溝を１条検出した。幅はそれぞれ５～10㎝、６～９㎝、９㎝、深さはそれぞれ最大で５㎝、５㎝、２㎝を測る。建て替えによるものかどうかは判断できない。なお、P7埋土中で敲石S41が出土した。

出土遺物からSI27bは弥生時代後期前葉の竪穴住居跡と考えられ、SI27aもその頃のものである可能性が高い。（恩田）

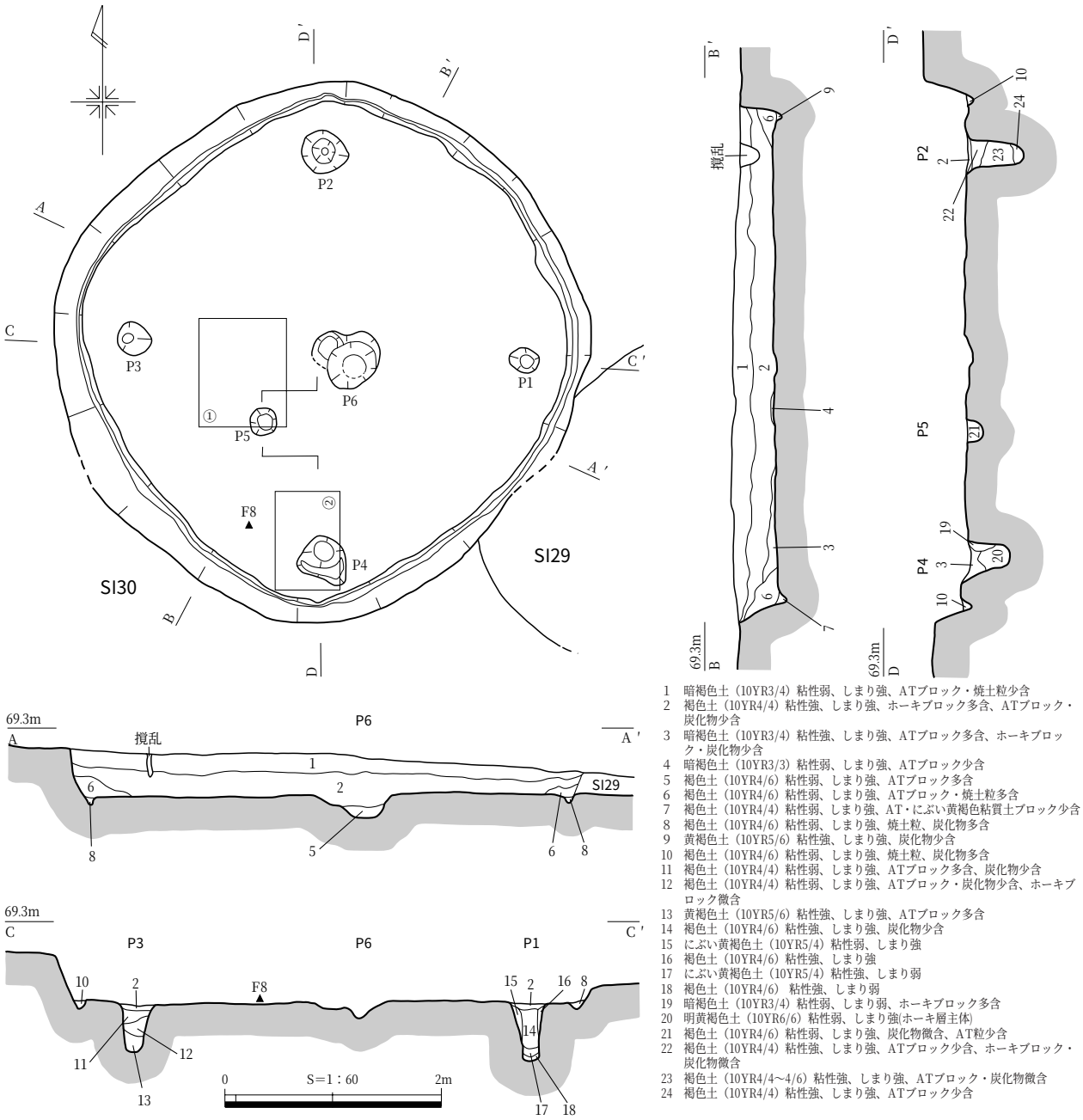
SI29・30（第59～61図、PL. ９・25・76）

AC19・20グリッド、標高68.8m～69.2mの尾根部平坦面に位置する。Ⅳ層を精査中、土器片や炭化物を含む暗褐色土と褐色土の円形・楕円形のプランが重なって確認されたため、サブトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。そして、竪穴住居跡が２棟切り合っている可能性が高いと判断し、東側をSI29、西側をSI30とした。SI29は、SK22に切られる。

SI29

検出時は楕円形のプランと推定していたが、本来の規模・形態は、長軸3.02m、短軸2.42mの隅丸長方形と推定される。検出面から床面までの深さは最深部で18㎝を測り、Ⅴ～Ⅵ層を床面とする。住居東側の壁及び壁溝は残存しないが、南北両側の壁溝の屈曲を基に復元・図示した。床面積は5.5㎡と推定される。

床面では、壁溝、ピット３基を検出した。床面外縁には、断面U字形で深さ３～５㎝の壁溝がコの



1　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり強、ATブロック・焼土粒少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、ホーキブロック多含、ATブロック・炭化物少含
3　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり強、ATブロック多含、ホーキブロック・炭化物少含
4　暗褐色土（10YR3/3）粘性弱、しまり強、ATブロック少含
5　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、ATブロック多含
6　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、ATブロック・焼土粒多含
7　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、AT・にぶい黄褐色粘質土ブロック少含
8　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、焼土粒、炭化物多含
9　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、炭化物少含
10　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、焼土粒、炭化物多含
11　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、ATブロック多含、炭化物少含
12　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、ATブロック・炭化物少含、ホーキブロック微含
13　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、ATブロック多含
14　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、炭化物少含
15　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性弱、しまり強
16　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強
17　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性強、しまり弱
18　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり弱
19　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり弱、ホーキブロック多含
20　明黄褐色土（10YR6/6）粘性弱、しまり強(ホーキ層主体)
21　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、炭化物微含、AT粒少含
22　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、ATブロック少含、ホーキブロック・炭化物微含
23　褐色土（10YR4/4～4/6）粘性強、しまり強、ATブロック・炭化物微含
24　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、ATブロック少含

第60図　SI30（１）

字状に残存する。主柱穴は壁溝に近接して配置されているP1・P2である。P1-P2の主柱間距離は2.4mを測る。中央ピットP3は、主軸ラインより東側に配する。

埋土は１層と考えられるが、遺構中央がSK22に切られているため堆積状況は不明である。埋土中より、甕または壺の胴部と推定される小破片が数点出土したが図化までには至っていない。

正確な時期比定は難しいが、本遺構を切るSI30が弥生時代後期中葉に比定されることから、それ以前のものと考えられる。

SI30

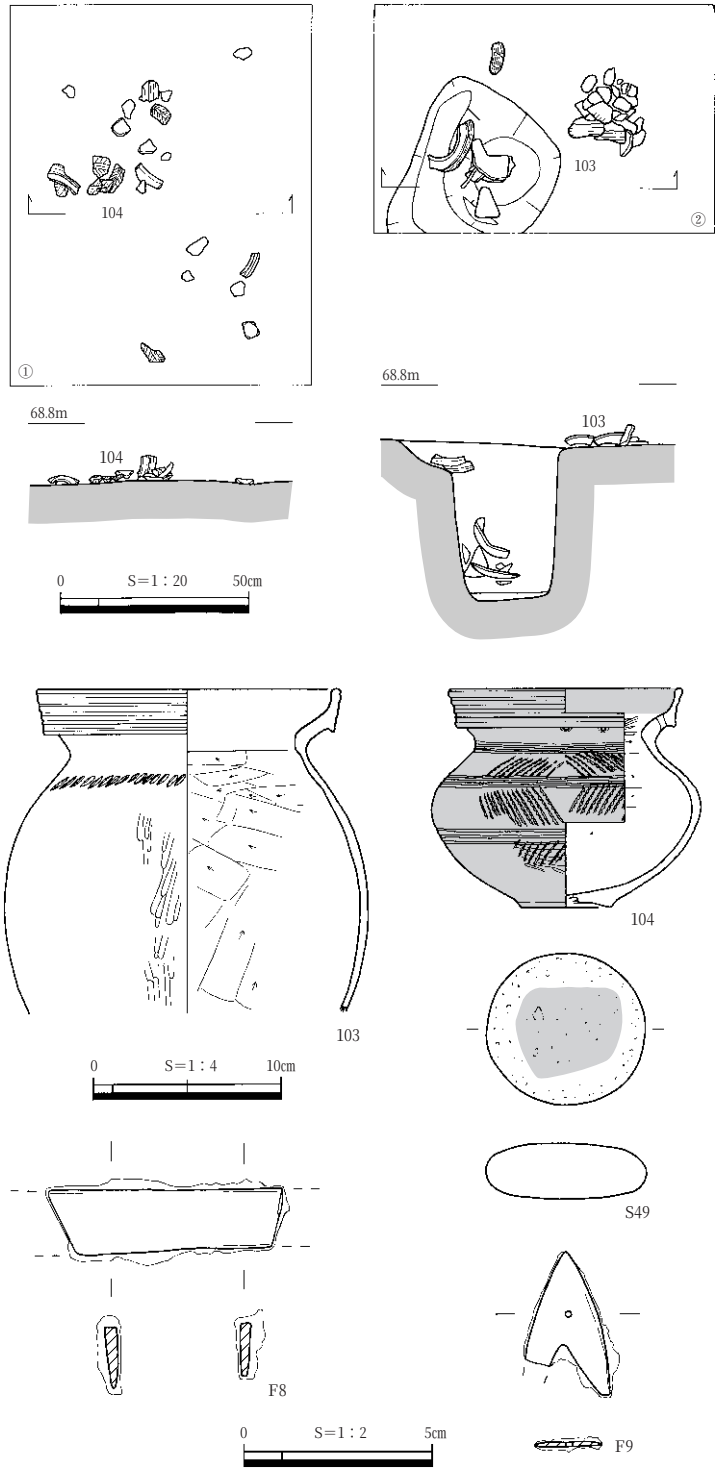
平面形は、長軸4.7m、短軸4.5mの隅丸方形を呈し、床面積は14.2㎡である。検出面から床面までの深さは53㎝を測り、Ⅵ層を床面とする。

床面で検出されたピットは６基で、P1～P4が主柱穴である。主柱間距離はP1-P2間2.7m、P2-P3

間2.6m、P3-P4間2.7m、P4-P1間2.6mを測る。 中央ピットP6は二段に掘り込まれ、床面からの深さは25㎝を測る。P5は径20㎝、深さ10㎝で用途は不明である。床面外縁には幅10～15㎝、深さ約10㎝、断面U字形の壁溝が全周する。

埋土は凹レンズ状の堆積を認める。P1は幅約15㎝の柱痕跡を残す。このことから、本遺構では径約15㎝程度の材を柱としていたと想定される。P5は、埋土が床面のⅥ層と酷似する。遺物の出土位置は大きく二分される。一つは、P4周辺の床面直上及びP4埋土中（103）、もう一つは、住居中央の床面付近（104、F8、F9）である。P4埋土中と床面直上から出土した土器片は同一個体であった。S49は、床面直上から出土した。

103・104はやや外傾する口縁部外面に多条平行沈線がめぐる。103は、頸部下端に刺突文をめぐらす。胴部中位付近に最大径をもつが、底部の形状は不明である。104は、頸部に２個一対の穿孔がみられる。頸部下端から胴部下半にかけ、連続する貝殻腹縁による刺突文をハの字に配し、３条の沈線で区切るように、文様帯を形成している。胴部中位に最大径をもち、扁球形を呈す。F8は、無関の刀子と考えられる鉄製品である。F9は無茎の鉄鏃で鏃身中央に径２㎜の小円孔を穿つ。S49は表面中央付近に赤色顔料の付着が認められる。



第61図　SI30（２）および出土遺物

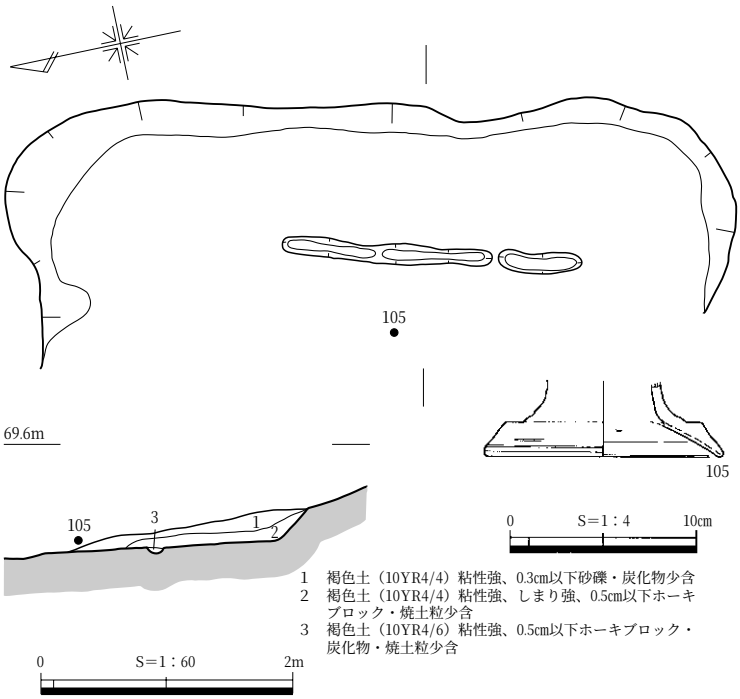
本遺構の時期は、103と104の形態的な特徴から、弥生時代後期中葉と考えられる。（岩垣）

（３） 段状遺構

SS1（第62図、PL. 26・65）

A・B24グリッド、標高68.6～69.1mの尾根西側緩斜面部に位置する。北側約１mにSK13が近接するが同時期の遺構は周囲にみられない。

平面形は北辺がやや広くなる長台形を呈し、長軸5.7m、短軸1.9mを測る。緩斜面をL字にカット



第62図　SS1および出土遺物

するように構築されており、残存する壁高は最大で34cmである。斜面となる床面西側は一部流失している可能性もあるが、現存する床面積は8.06m²である。床面には中心軸を南北方向に伸びる幅10～15cm、深さ２～４cmの床溝が１条設けられている。ピットは存在しない。

埋土は３層で斜面上方から流れ込むような自然堆積によって埋没している。埋土中から遺物がわずかに出土しており、そのうち１層から出土した台付壺脚台部105を図化した。内外面とも風化しているが、複合口縁状となる裾部外面に赤色塗彩痕と平行沈線が確認できる。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代後期後葉以降のものと推定する。（高尾）

SS2（第63図、PL. 26・65）

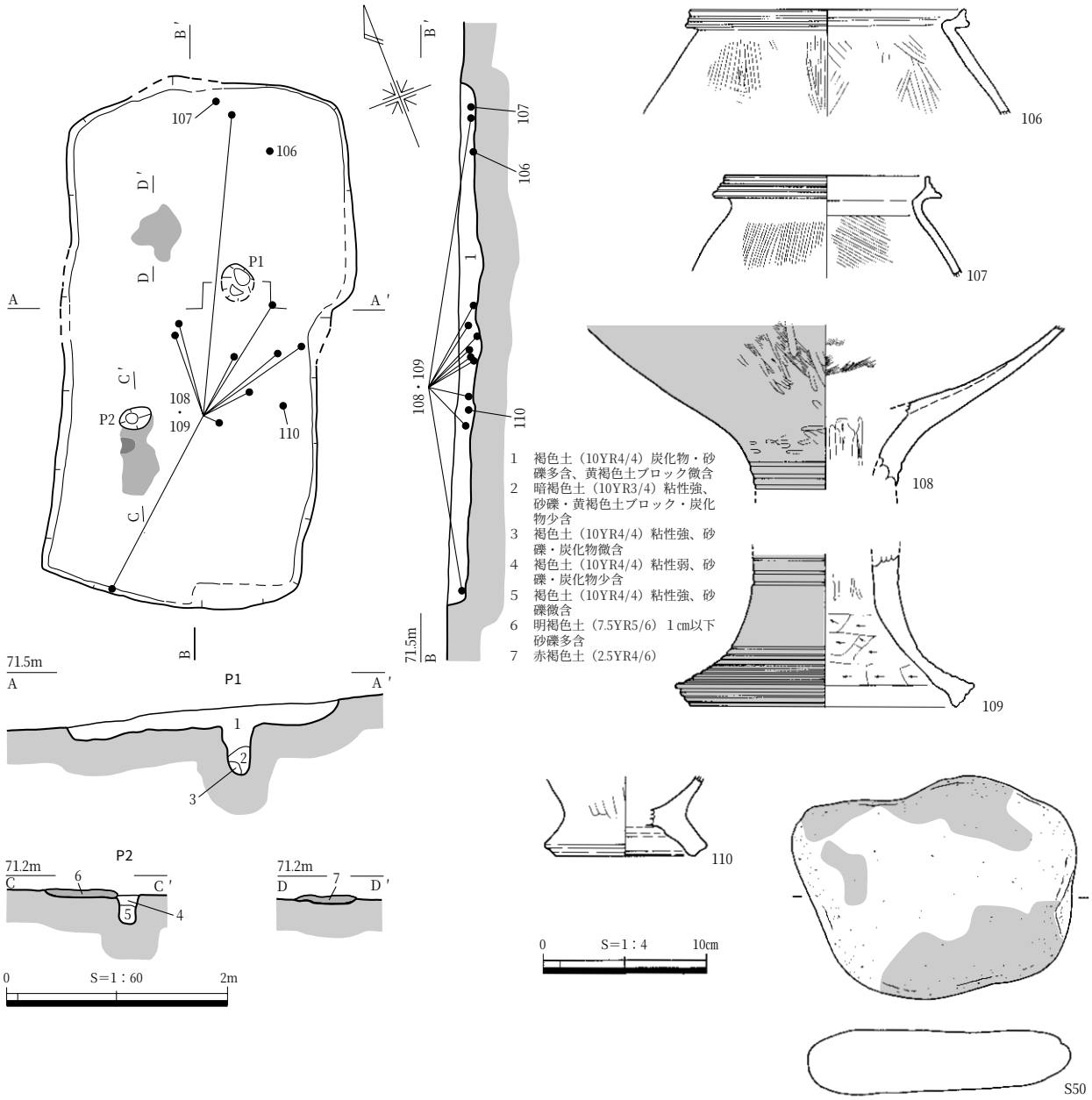
調査区南西側、G24・25グリッド、標高約71.0～71.3mの傾斜変換点付近の緩斜面に位置する。

平面は長方形で北東部分がやや膨らむ。長軸4.7m、短軸2.6m、床面積は9.96m²で、検出面からの深さは最大で23cmを測る。西側の壁面はほぼ流出しており、わずかに壁の立ち上がりを確認した。掘り方中央やや北東側及びP2南側の２ヶ所に被熱面が形成されている。前者は45×35cmの範囲で、後者は60×33cmの範囲に広がっていた。さらに後者は一部炭化物の集中する範囲を持つ。どちらの被熱面も明瞭な掘り込み、被熱による床面の硬化はみられなかった。床面で検出されたピットは２基で、いずれも柱穴の可能性が高い。遺構の埋土は焼土を含め７層に分けられ、P1、P2埋没後、１層が遺構全体を覆う。本遺構は自然堆積によって埋没したと考えられる。

遺物は１層から土器片が多量に出土し、P1、P2の埋土中からも少量であるが土器片が出土している。甕106・107、脚付壺108・109、台付壺110、台石S50を図化した。いずれも１層から出土した。108は脚付壺の胴部下半、109は脚部であり、接合しないが同一個体と考えられる。108・109とも外面が赤彩されている。108・109とも破片となって遺構全体に散在していた。S50は赤色顔料が付着している。本遺構の時期は出土土器の特徴からⅣ-３期、弥生時代中期後葉と考えられる。性格については不明である。（戸羽）

SS3（第64・65図、PL. 27、65）

Ｅ・Ｆ22、23グリッド、標高68.0～69.2mの谷に面して東側へ下る傾斜変換点付近の斜面に位置する。Ⅱ層掘削中に炭化物を含んだ褐色土が南北11m、東西3.5mの範囲にみられ、谷へ流入したⅡ層相当の包含層が広がることが予想された。土層堆積を確認するために設けたサブトレンチでⅣ、Ⅴ層を壁とする掘り方がみられたことから段状遺構として調査を実施した。本遺構は長軸9.4m、短軸3.0



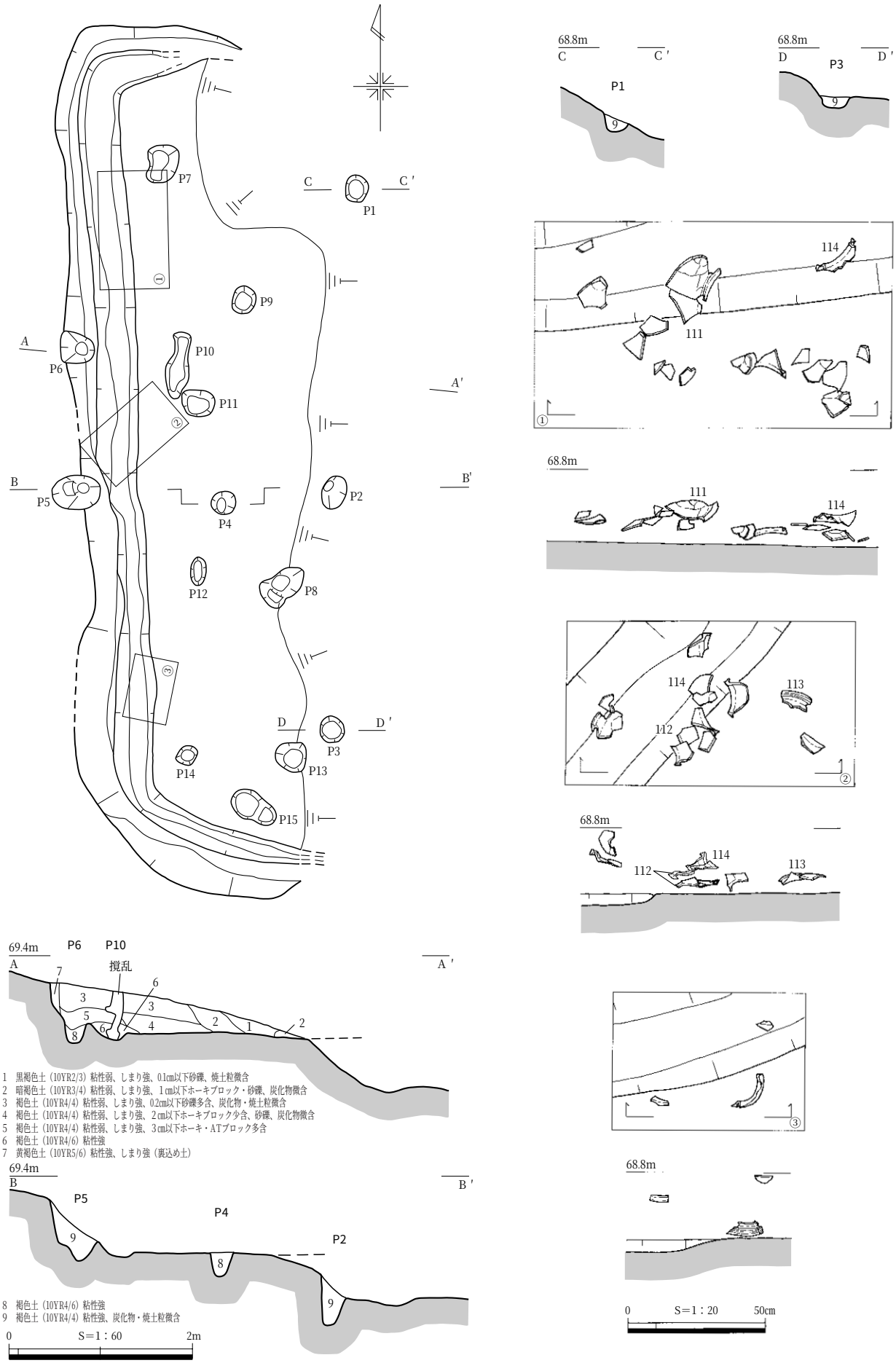
第63図　SS2および出土遺物

mを測り、深さは西壁で最大で0.6mを測る。東を除く斜面の三方をカットして構築され、東辺は南北に走る撹乱溝や耕作に伴う造成により削平を受けている。床面積は12㎡以上になるものと推定される。壁際にめぐる壁溝は幅20～45㎝、深さ３～５㎝を測り、南北辺の東端はそれぞれ流失している。床面の中央部で15基のピットが検出された。P4、P9、P11、P13～15の規模は長径0.25～0.74m、深さ５～30㎝を測り、一様ではない。各ピットの底面の標高は68.3～68.5mでばらつきが見られるが、南北に連なることから主柱穴の可能性がある。P1～３、P8は東側で南北に連なる。底面の標高が67.8～68.1mの間におさまり、床面の北側に位置するP7も同じ底面の標高値におさまることから一連の柱穴と推定される。

埋土は８層に分層され、高所にあたる西側から流入した自然堆積層と考えられる。大半の遺物は壁際付近に集中しており、甕111～114のほか、大型で擦痕を認める台石S51がある。

出土した甕はⅤ－１期に比定されることから、本遺構は弥生時代後期前葉のものと考えられる。

（大川）


P7
C
C′
P1
P9
A
P6
P10
P11
A′
B
P5
P2
B′
P4
P12
P8
D
D′
P3
P14
P13
P15
68.8m
C
C′
P1
9
68.8m
D
D′
P3
9
114
111
68.8m
111
114
114
113
112
68.8m
114
112
113
69.4m
A
P6
P10
A′
7
搅乱
6
3
3
5
2
1
2
8
6
4
1 黒褐色土（10YR2/3）粘性弱、しまり強、0.1cm以下砂礫、焼土粒微含
2 暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり強、1cm以下ホーキブロック・砂礫、炭化物微含
3 褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、0.2cm以下砂礫多含、炭化物・焼土粒微含
4 褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、2cm以下ホーキブロック少含、砂礫、炭化物微含
5 褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり強、3cm以下ホーキ・ATブロック多含
6 褐色土（10YR4/6）粘性強
7 黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強（裏込め土）
69.4m
B
B′
P5
P4
P2
9
8
9
8 褐色土（10YR4/6）粘性強
9 褐色土（10YR4/4）粘性強、炭化物・焼土粒微含
0
S＝1：60
2m
68.8m
0
S＝1：20
50cm

第64図　SS3

SS4（第66図、PL. 26・56・65・67・75）

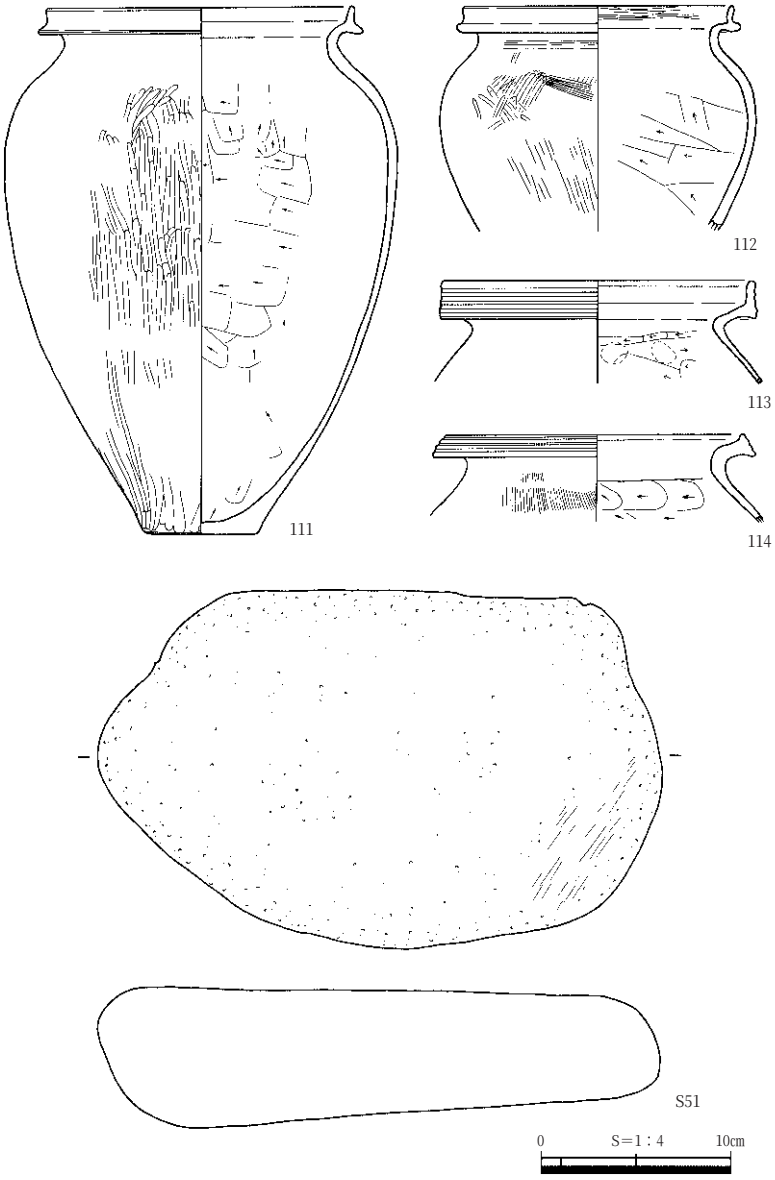
H24・25グリッド、調査区南西側、標高71.6～71.9mの傾斜変換点付近の緩斜面に位置する。SK24に北側を切られ、SK23が西側に隣接する。

北側がSK24に切られているため平面形ははっきりしないが、おそらく長方形であると推測される。長軸は推定約6.2m、短軸2.17m、検出面からの深さは南東側で最大34㎝を測る。

床面からピット１基を検出したが、上面をサブトレンチによって削平したため正確な規模は把握できなかった。床面からピット底面までの深さは推定で30㎝を測り、柱穴の可能性がある。

埋土は２層に分けることができる。ピット下部が２層で埋まり、その後１層が全体を覆うように堆積する。

遺物は検出面、１層で石器と多量の土器片が出土している。いずれも本遺構廃絶後、埋没する過程で流れ込んだものと思われる。出土遺物のうち甕115・116、壺117、石鏃S52、砥石S53を図化した。



第65図　SS3出土遺物

出土土器の特徴からⅣ-３期、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。SS4はSK24に切られているものの、両者の出土土器から時期差は認められず、本遺構埋没後間もなくSK24が掘削されたと推測する。遺構の性格については不明である。（戸羽）

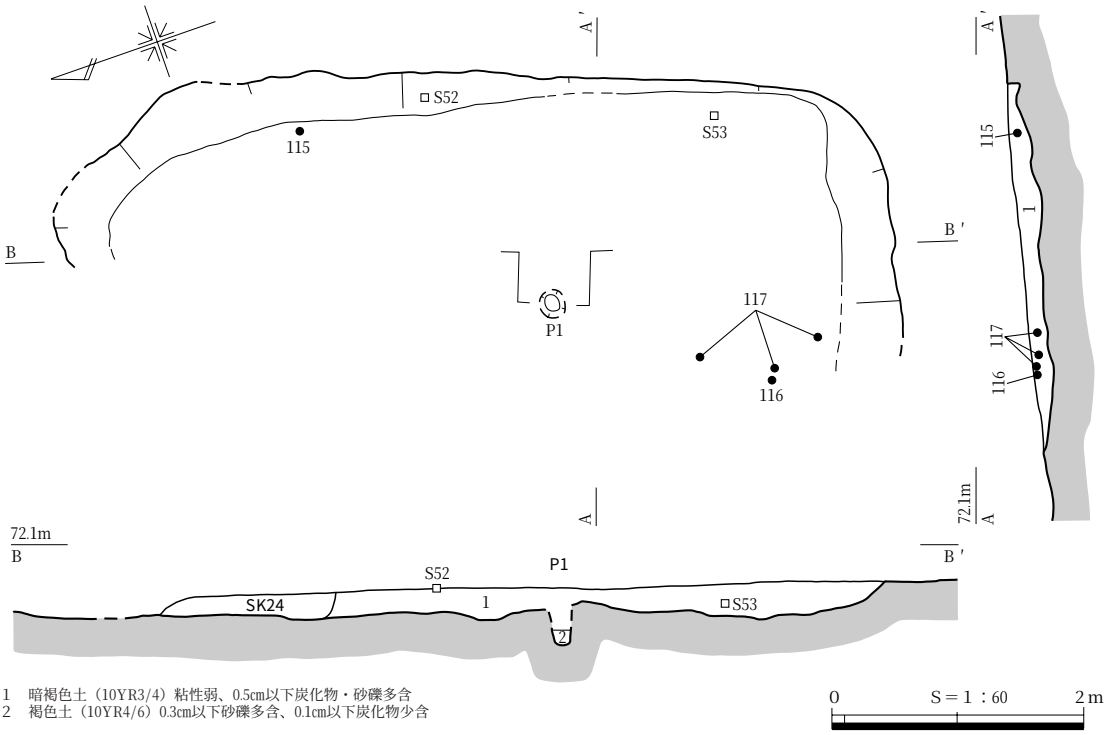
（４）　掘立柱建物跡

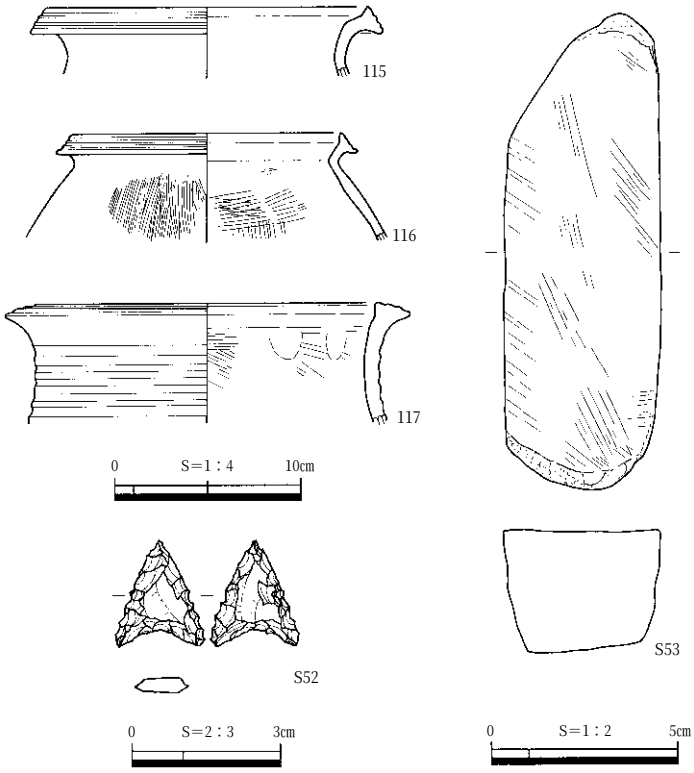
SB1（第67図、PL. 28）

H・I23グリッドにおいて検出した。この周辺は調査区内では最高所にあたり、標高72.7mを測る。尾根平坦面にあり、SI5とSI9の中間に位置する。やや主軸を異にするSB10と南東隅で重複するが、先後関係は不明である。

Ⅱ層除去後に方形に並ぶピット列を検出し、そのうち２基のピットには集石を伴うことを確認した。規模とピットの配置から、掘立柱建物跡と判断して調査を行った。

規模は桁行２間（3.8m）、梁行１間（2.8m）である。主軸はN-28°-Wにとる。柱穴の規模は径37～48㎝の不整円形で、深さは約49～89㎝である。柱穴掘り方は二段掘りになるものがある。P2、P4、





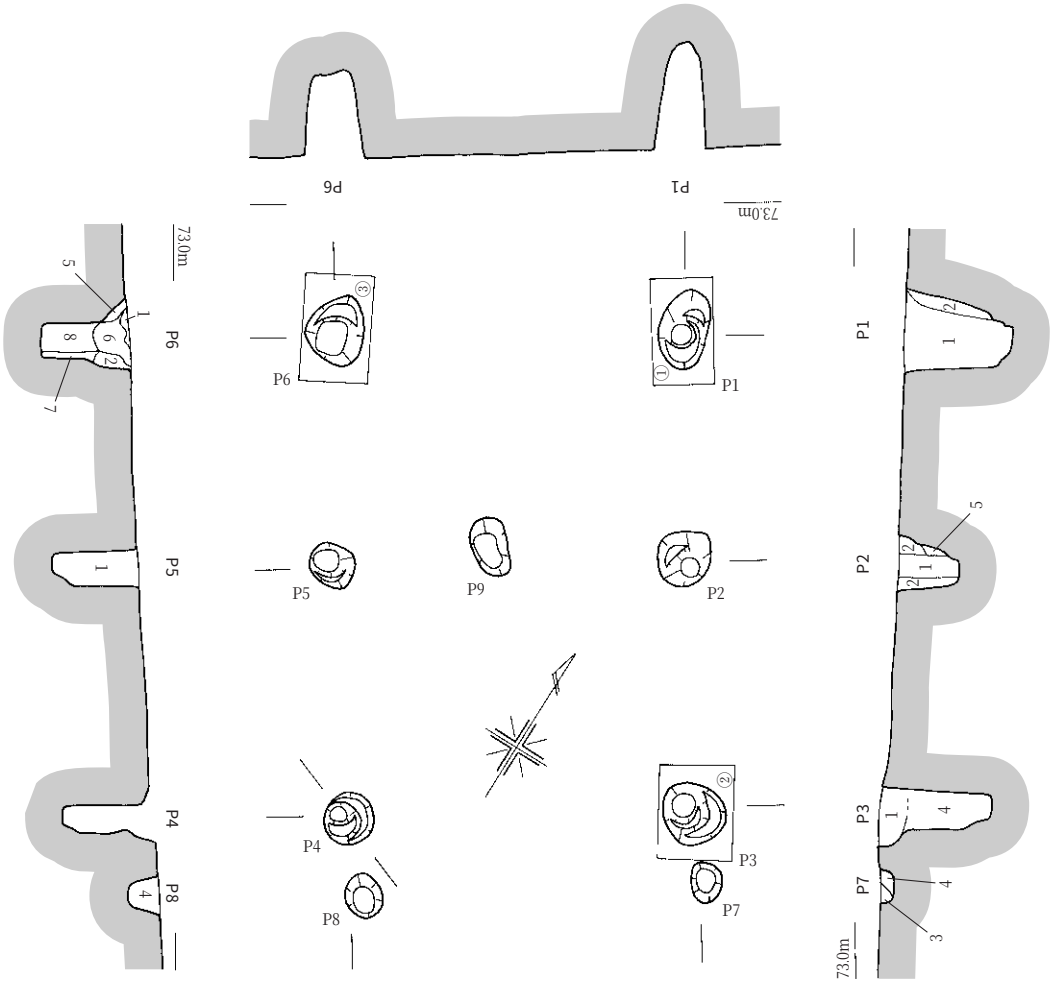
第66図　SS4および出土遺物

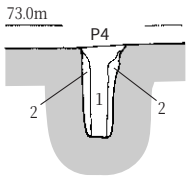
P6において柱痕跡が認められた。柱痕から推定される柱の径はP2で17㎝、P4で15㎝、P6で19㎝である。P1からP6までの柱間距離はP1-P2、P2-P3の順に1.9m、1.9m、2.8m、2.0m、1.8m、2.8mを測る。P2-P7、P5-P7の柱間距離はそれぞれ1.6m、1.2mである。P8、P9は側柱穴と思われ、規模はP8（31×26-11）㎝、P9（32×29-25）㎝で、柱間距離は2.7mである。

P1、P3、P6の検出面及び埋土中（１層）からは礫が出土している。P6の検出面では２個の礫が重なって出土している。柱痕部分には幅９㎝、長さ25㎝の棒状の礫が縦位で出土した。P3では上面をふさぐようにして13個の礫が詰め込まれている。P3・P6の礫の出土状況から、柱を抜き去った後に柱穴内に入れられたものと思われる。

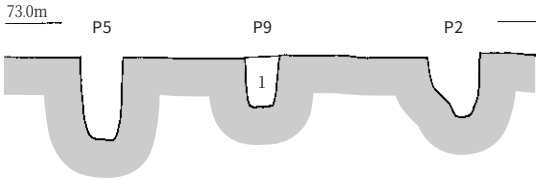
P6の検出面で出土した２個の礫にはさまれるように、甕もしくは壺の口縁部片が１点出土している。図化するまでには至らなかったものの、口縁の立ち上がりが外反する形態をとることからⅤ-３期の特徴を示すものである。このことから本遺構は、弥生時代後期後葉の掘立柱建物跡と考えられる。

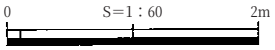
（淺田）

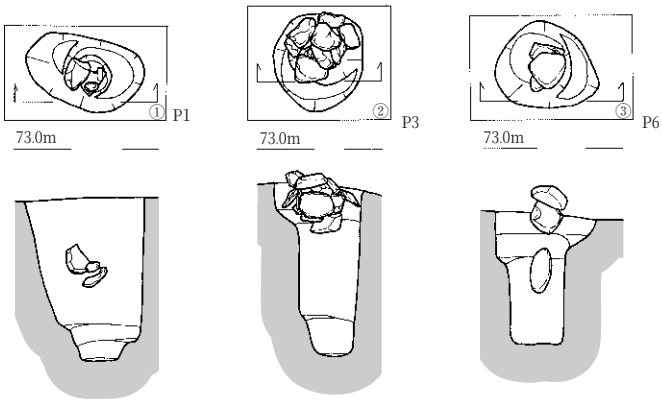


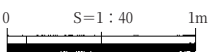


1　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり強、炭化物少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強（裏込め）
3　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり弱
4　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり強、炭化物少含
5　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強（裏込め）
6　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良
7　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強（裏込め）
8　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり良、径１cmホーキブロック少含









第67図　SB1

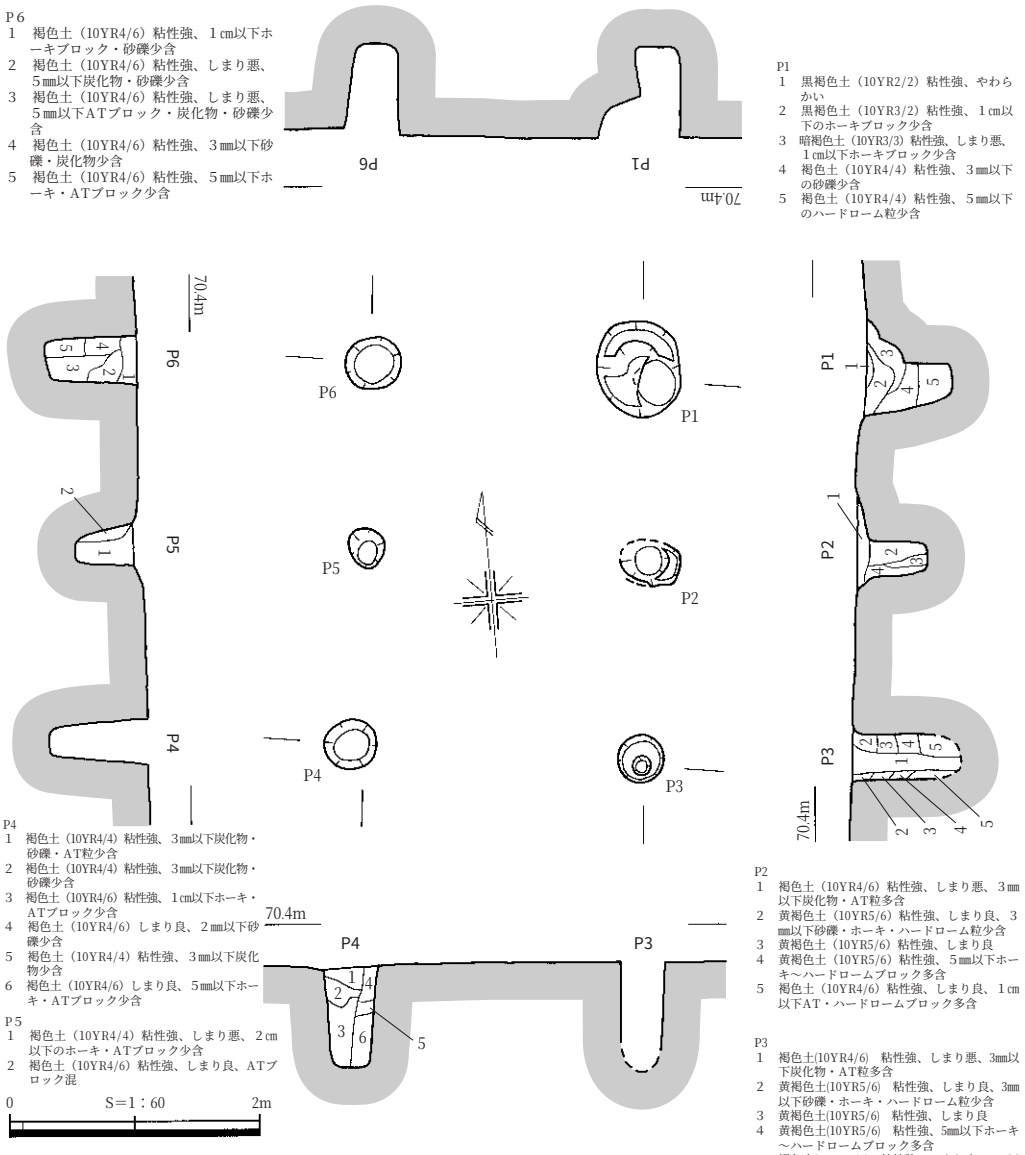
SB3（第68図、PL. 28）

B23～24グリッド、標高70.1mの尾根平坦面に位置する。北側はSB9と重複し、東側にSB12がある。Ⅳ層上面を検出面とする桁行２間（3.1m）、梁行１間（2.3m）の掘立柱建物跡である。主軸をN－５°－Eにとる。各柱穴の平面形は不整円形を呈し、柱穴の規模はP1を除き、概ね径31～47㎝で、検出面からの深さは48～72㎝を測る。底面の標高は四隅に配置されるP1、3、4、6が標高69.2～69.3m、主軸の中央にほぼ位置するP2、5で69.5mを測る。P2、5は四隅に配されるピットより、掘り方が小さく浅い。補助柱穴であろうか。柱穴間距離はP1-P2間1.4m、P2-P3間1.6m、P3-P4間2.3m、P4-P5間1.5m、P5-P6間1.5m、P6-P1間2.3mを測る。

埋土は６層に分層され、柱痕跡はP2、3、4、6にみられる。柱痕跡から推定される柱径は10～15㎝である。P5埋土中から土器片が出土した。図化し得なかったが、弥生時代後期のものであり、本遺構の時期もその頃と考えられよう。（大川）

SB4（第69図、PL. 28）

F23グリッド、標高71.2～71.4mの尾根平坦面に位置する。北側にSB5、西側にSI13、南西にSI11がある。遺構検出中にⅣ層上面に方形に配置されるP1～4の並びを確認し、P1、4の北側に掘り込みの小さなP5、6を検出した。桁行１間(2.6m)、梁行１間（2.1m）の掘立柱建物跡として報告する。主軸 をN-14°-Wにとる。各柱穴の平面形はほぼ円形を呈する。柱穴の規模は長径33～44㎝を測り、検出面からの深さは46～78㎝を測る。底面の標高は70.5～70.7mにおさまる。柱穴間距離はP1-P2間2.65m、P2-3間2.15m、P3-4間



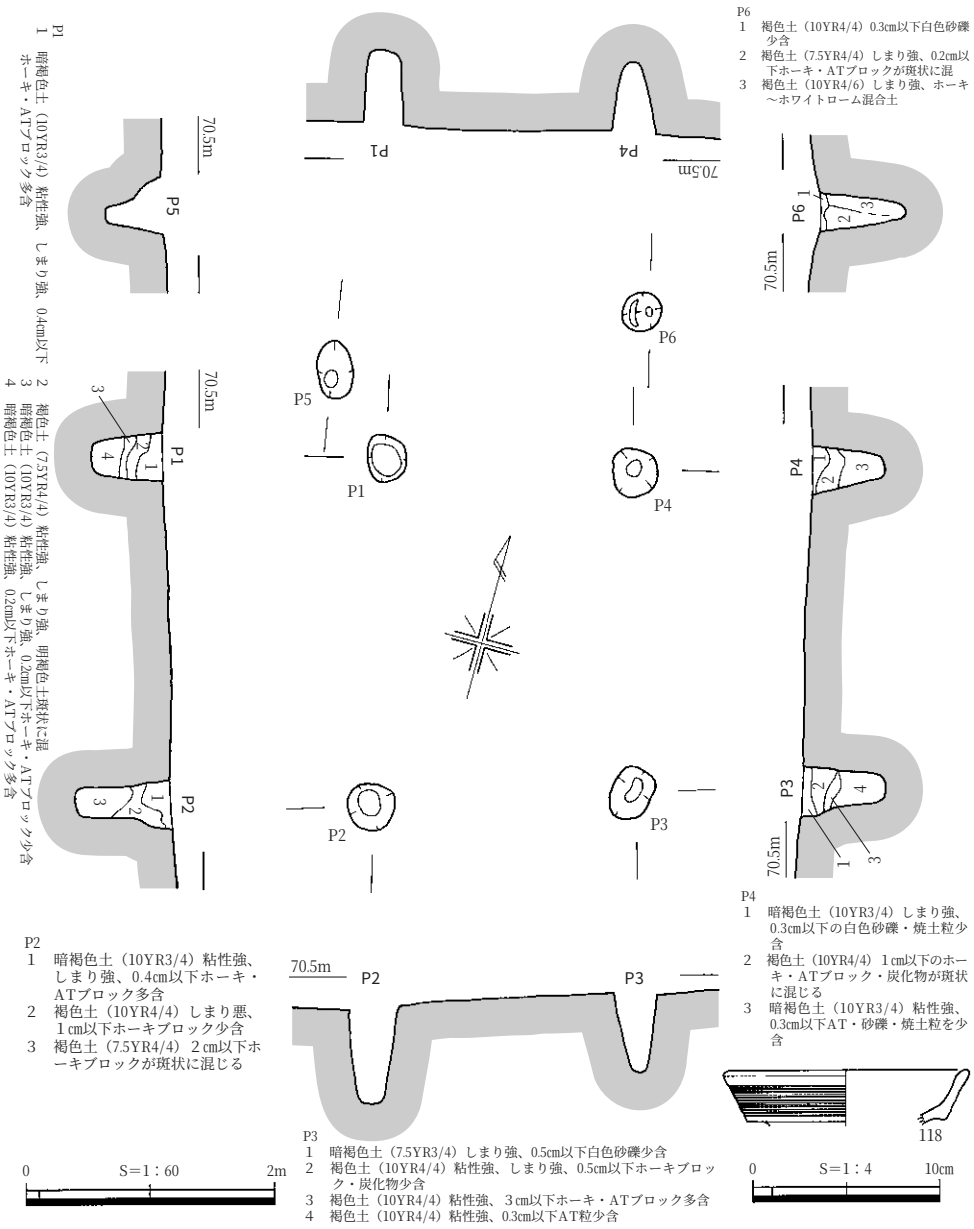
第68図　SB3

2.65mを測る。P1-P5間、P4-P6間はそれぞれ0.78m、1.25mを測る。P5、6は構築位置からすればそれぞれP1、P4に伴う補助柱穴と考えられる。柱痕跡は明瞭ではない。遺物はP1の埋土中から甕118が出土した。本遺構の時期は弥生時代後期後葉頃と考える。

（大川）

SB13（第70図）

G・H21～22グリッド、標高71.4～71.9m、尾根から谷へ続く緩斜面に位置する。南端はSK14と重複し、北にSI3、12、北東にSI6があり、南側はSI10と隣接する。遺構検出作業を行い、Ⅳ層上面でP2を確認した。その後P1、P3を確認し、周辺の精査、包含層の掘り下げによってP5、P6と南側に連なるP4の痕跡をSK14の底面において確認した。P4の掘り方、埋土の確認はできていない。桁行２間（5.4m）、梁行１間（4.4m）の掘立柱建物跡として報告する。主軸をN-21°-Wにとる。各柱穴の平面形は長楕円形を呈し、長径は39～55㎝、検出面からの深さは60～100㎝を測る。底面の標高は71.4～71.8mの間におさまる。周辺の地形は南北方向にやや傾斜しており、南側が高所となっている。柱穴間距離はP1-P2間2.8m、P2-3間3.0m、P3-4間4.5m、P4-5間2.6m、P5-6間2.8m、P6-1間4.4mを測る。

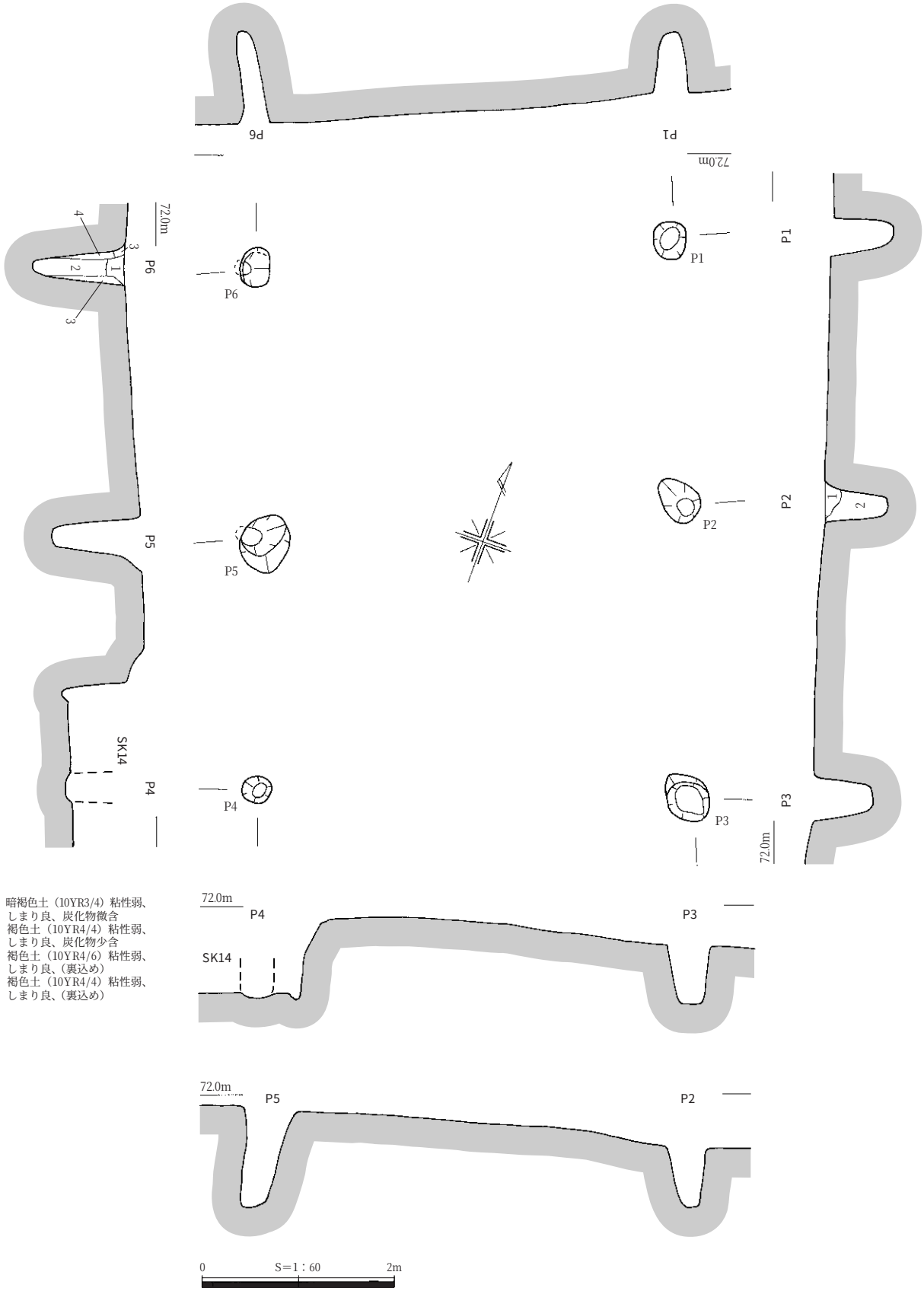


第69図　SB4および出土遺物

埋土は４層に分層できた。P6に柱痕跡が認められ、柱痕跡から推定される柱の径は15㎝である。図化し得なかったが、 P6の埋土中から弥生時代後期前葉に比定される甕の口縁部片が出土している。

弥生時代後期前葉に埋没したSK14の埋土を掘り込んでいたことが推測されることから、本遺構の時期は後期前葉以降と考えられる。

（大川）


P6
P1
72.0m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
SK14
1
2
3
4
1　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり良、炭化物微含
2　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、炭化物少含
3　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり良、（裏込め）
4　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、（裏込め）
0
S＝1：60
2m

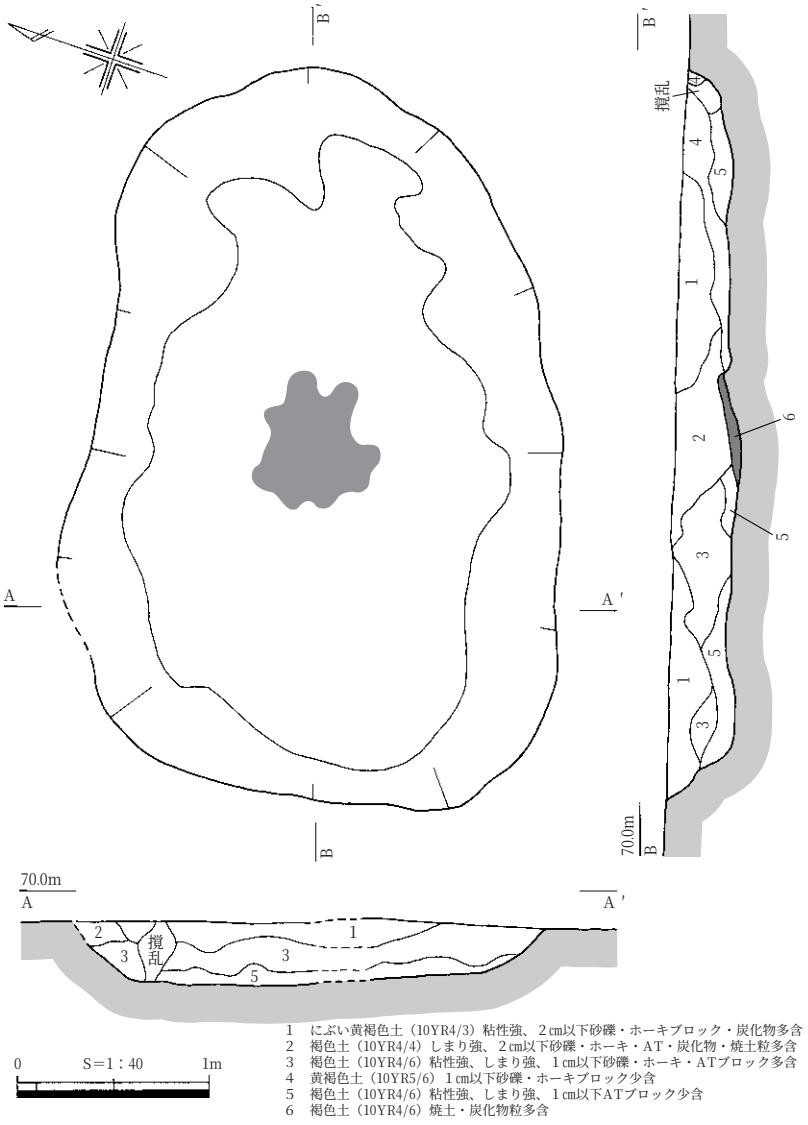
第70図　SB13

（５） 土坑

SK1（第71図、PL. 29）

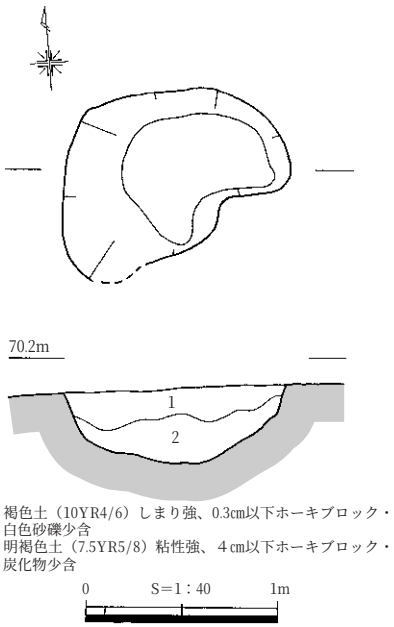
A22グリッド、標高69.8mの尾根平坦面に位置し、東側約４ｍにSI24が近接する。

平面形は長軸3.9m、短軸2.7mの不整長楕円形を呈す。断面形は浅い逆台形となり、検出面から底面までの深さは最大で34㎝を測る。埋土は６層に分けられ、６層は炭化物と焼土粒を多量に含む。底面は被熱しておらず、他所より土坑内に廃棄されたと推測される。土坑中央の４層上面に炭化物が広がっており、完全に炭化していない材が土壌化したものである可能性が高い。埋土はしまりが良いが、６層を除く各層ともⅥ・Ⅶ層の小ブロックや焼土粒を含み、堆積が不自然であることから、本遺構は人為的に埋め戻されたと考える。埋土中から礫などとともに少量の土器片が出土したが図化できたものはない。出土した土器片の特徴から、本遺構の時期は弥生時代後期と推定する。（高尾）

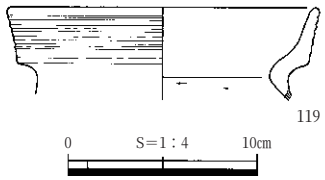


1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）粘性強、２㎝以下砂礫・ホーキブロック・炭化物多含
2　褐色土（10YR4/4）しまり強、２㎝以下砂礫・ホーキ・AT・炭化物・焼土粒多含
3　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、１㎝以下砂礫・ホーキ・ATブロック多含
4　黄褐色土（10YR5/6）１㎝以下砂礫・ホーキブロック少含
5　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、１㎝以下ATブロック少含
6　褐色土（10YR4/6）焼土・炭化物粒多含

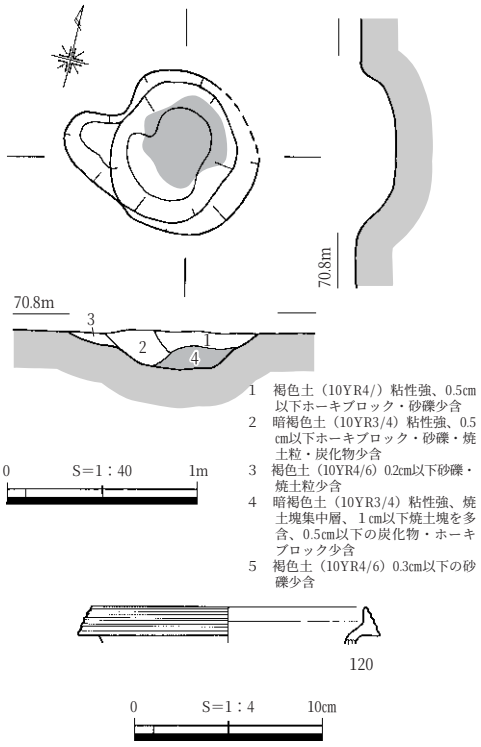
第71図　SK1



1　褐色土（10YR4/6）しまり強、0.3㎝以下ホーキブロック・白色砂礫少含
2　明褐色土（7.5YR5/8）粘性強、４㎝以下ホーキブロック・炭化物少含

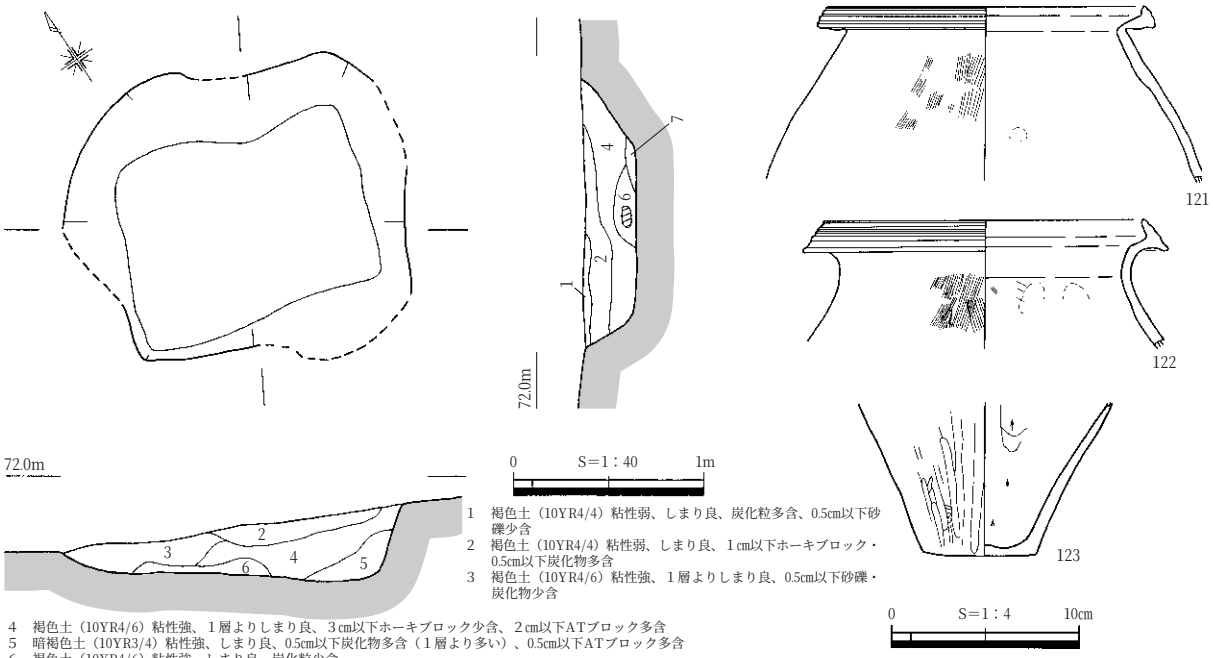


第72図　SK4および出土遺物



1　褐色土（10YR4/）粘性強、0.5㎝以下ホーキブロック・砂礫少含
2　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、0.5㎝以下ホーキブロック・砂礫・焼土粒・炭化物少含
3　褐色土（10YR4/6）0.2㎝以下砂礫・焼土粒少含
4　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、焼土塊集中層、１㎝以下焼土塊を多含、0.5㎝以下の炭化物・ホーキブロック少含
5　褐色土（10YR4/6）0.3㎝以下の砂礫少含

第73図　SK5および出土遺物

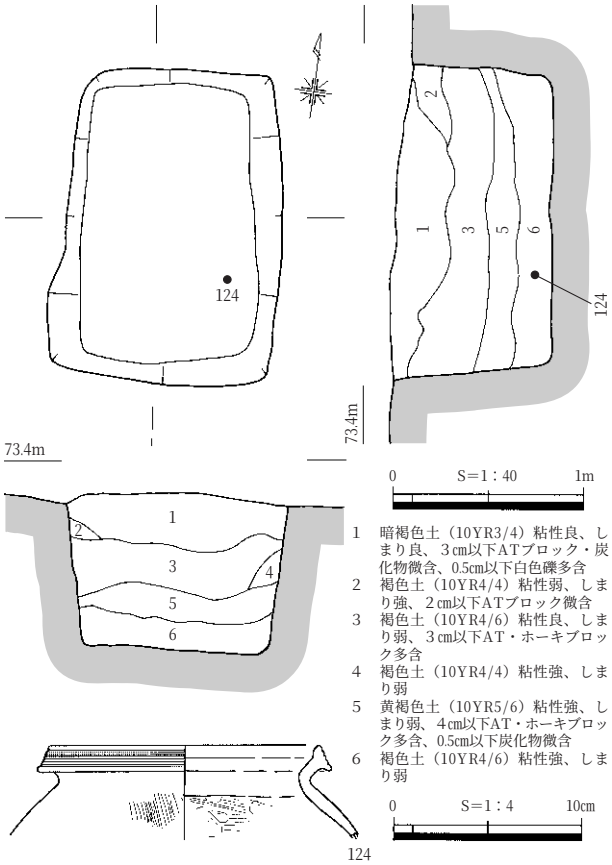


第74図　SK6および出土遺物

SK4（第72図、PL. 29・63）

C22グリッド、標高70.2mの尾根平坦面に位置する。

平面形は長軸1.3m、短軸0.9mの歪な楕円形で、断面形は皿状を呈す。検出面から底面までの深さは最大で42cmを測る。埋土は２層に分けられ、中央部がレンズ状に窪んでおり、自然堆積によって埋没していると考える。埋土中から甕口縁部119が出土している。口縁部外面には櫛状工具による多条平行沈線が施された後に中央部がナデ消される。出土遺物の特徴から、本遺構の時期は弥生時代後期後葉と考える。（高尾）



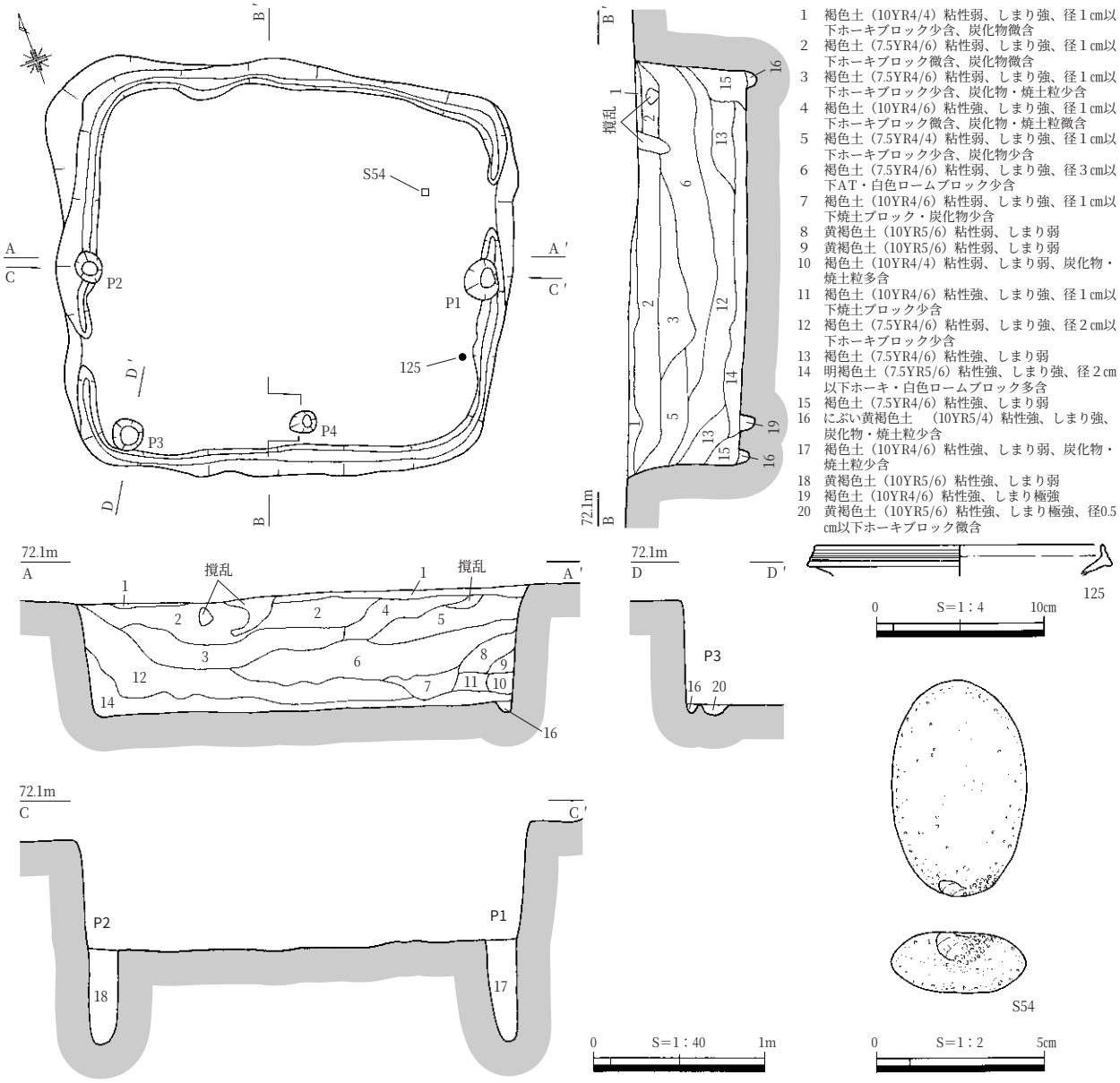
第75図　SK7および出土遺物

SK5（第73図、PL. 29・63）

E23グリッド、標高70.7mの尾根平坦面に位置する。平面形は長軸104cm、短軸87cmの西側に張り出しをもつ歪な円形を呈し、検出面から底面までの深さは最大で19cmを測る。断面形は張り出し部分で低い段を有すものの全体としては皿状を呈す。埋土は４層に分けられ、このうち４層は少量の炭化物・Ⅵ層粒子と多量の焼土を含んでいた。焼土は径１cm大の小塊状であった。底面に被熱痕跡はなく、他所から廃棄されたものであろう。４層中から出土した甕120を図示した。出土遺物の特徴から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉と考える。（高尾）

SK6（第74図、PL. 29・56・63）

H・I25グリッド、標高71.4～71.8mを測り、西側に沿って緩やかに下る緩斜面に位置し、北側には



第76図　SK9および出土遺物

SD1、SS4がある。Ⅲ層上面を検出面とし、平面形は長軸2.6m、短軸2.1mの歪な長方形を呈する。深さは南東側で最大70㎝を測り、北西側は15㎝と浅くなる。埋土は７層に分層され、炭化物を含んだ褐色土、暗褐色土からなる。土層の堆積状況からして、高所にあたる南東側から流入した土が自然堆積したものと考える。遺物は２～６層を中心に出土した。床面直上から出土した甕122、底部片123、５層から出土した甕121を図化した。121は口縁部外面に３条の凹線をめぐらせる。122は口縁外面に４条の凹線をめぐらせ、内面胴部上半はハケ目後ナデが施される。

出土土器から本遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（大川）

SK7（第75図、PL. 29・63）

I22グリッドの南側、標高73.1～73.2mの尾根平坦面に位置し、北西側にSB11、北東側にSI7～9がある。Ⅳ層上面を検出面とする。平面形は長軸1.6m、短軸1.1mの不整長方形を呈する。検出面からの深さは南側で最大85㎝を測る。底面は長軸1.5m、短軸1.0mを測り、ほぼ平坦である。埋土は６層に分かれる。褐色系土を中心とし、いずれの土層もⅦ層のブロックを含んでいる。遺物は３～５層に

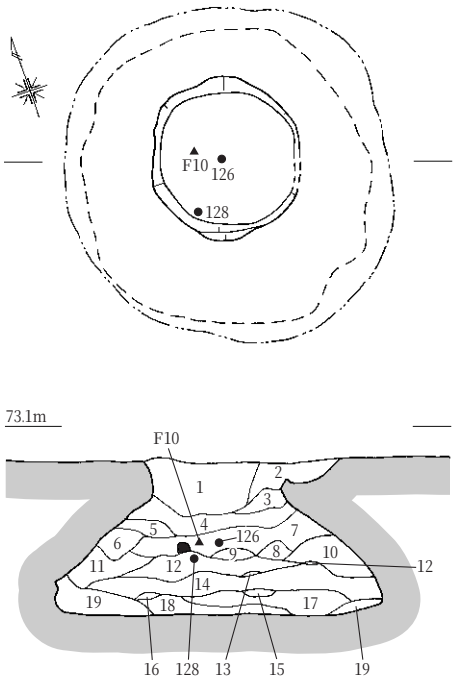
かけて出土し、５層から出土した甕124を図化した。124は口縁部に４条の凹線をめぐらせるものでⅣ－３期に比定されることから、本遺構は弥生時代中期後葉の貯蔵穴と考えられる。　（大川）

SK9（第76図、PL. 30・63）

G23・24グリッド、標高約71.9mの尾根部平坦部に位置する。SI11の南約２mにある。

Ⅱ層を除去したところで、Ⅵ層ブロックと炭化物粒を包含する褐色土の広がりを検出した。トレンチにより、底面、壁溝、壁面の立ち上がりを確認した。

検出した規模は長軸2.7m、短軸2.5mで、深さは最大75㎝である。底面はⅧ層で平坦になっている。底面でピット４基、壁溝を検出した。P1、P2は柱穴と考えられ、規模は径15～25㎝、底面からの深さは約57㎝である。P3（19×18－６）㎝、P4（15×14－10）㎝は掘り方が浅く、用途は不明である。壁溝は北東側と南西側で１ヶ所ずつ途切れる。貼床は確認されなかった。形態的特徴から、貯蔵穴と考えられる。



1　褐色土（10YR4/4）粘性良、しまり良、１㎝以下黄褐色・白色の砂礫・炭化物少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、0.5cm以下白色砂礫・炭化物・焼土粒少含
3　褐色土（10YR4/4）粘性良、しまり弱、0.5cm以下白色砂礫・炭化物・焼土粒少含
4　褐色土（10YR4/4）粘性良、しまり良
5　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘性弱、しまり弱、0.5cm 以下炭化物微含
6　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱
7　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱、しまり良、10㎝大の炭化物少含、１㎝大の炭化物を多含
8　褐色土（10YR5/6）粘性良、しまり弱、0.2㎝以下黄褐色土粒を含み、やや黄色みを帯びる炭化物少含
9　褐色土（7.5YR4/4）粘性良、しまり弱、焼土粒を含むため赤色を帯びる
10　暗褐色土（10YR3/4）粘性良、しまり弱、0.5cm 以下炭化物微含
11　暗褐色土（10YR3/4）粘性良、しまり弱、0.5cm 以下炭化物少含
12　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり良、0.5cm 以下の白色・青灰色の風化砂礫少含
13　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり弱
14　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり良
15　褐色土（10YR4/4）粘性良、しまり良
16　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、１㎝以下黄色・白色砂礫少含
17　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり強、10㎝大の黄褐色土ブロック含
18　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり強、１㎝以下炭化物微含
19　黄褐色土（10YR5/6）

0　S＝1：40　1m

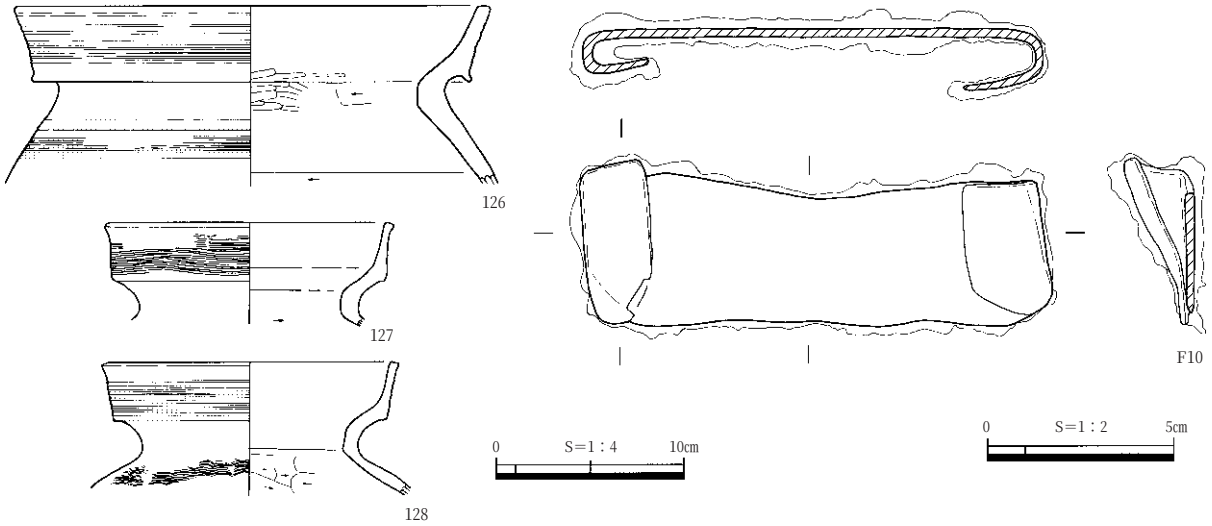
第77図　SK10

埋土は褐色系の土からなり、20層に分層できる。レンズ状の堆積を呈することから、自然堆積による埋没と思われる。遺物は床面上で出土しており、埋土中には含まれていない。

125は甕の口縁部で、口縁外面に３条の凹線を持つ。S54は敲石である。出土した土器がⅣ－３期の特徴を示すものであることから、本遺構の時期は弥生時代中期後葉である。　（淺田）

SK10（第77・78図、PL. 30・63・76）

I23グリッド、標高72.9mの尾根平坦部に位置する。北側にSI4、西側にSI5がある。開口部及び床面の形態は円形を呈し、



第78図　SK10出土遺物

規模は長軸0.87m、短軸0.76m、深さは最大で0.84mを測る。底面の規模は長軸1.7m、短軸1.7mを測る。断面はくびれが目立つフラスコ状を呈し、底面は平坦である。遺存状態は良好であった。

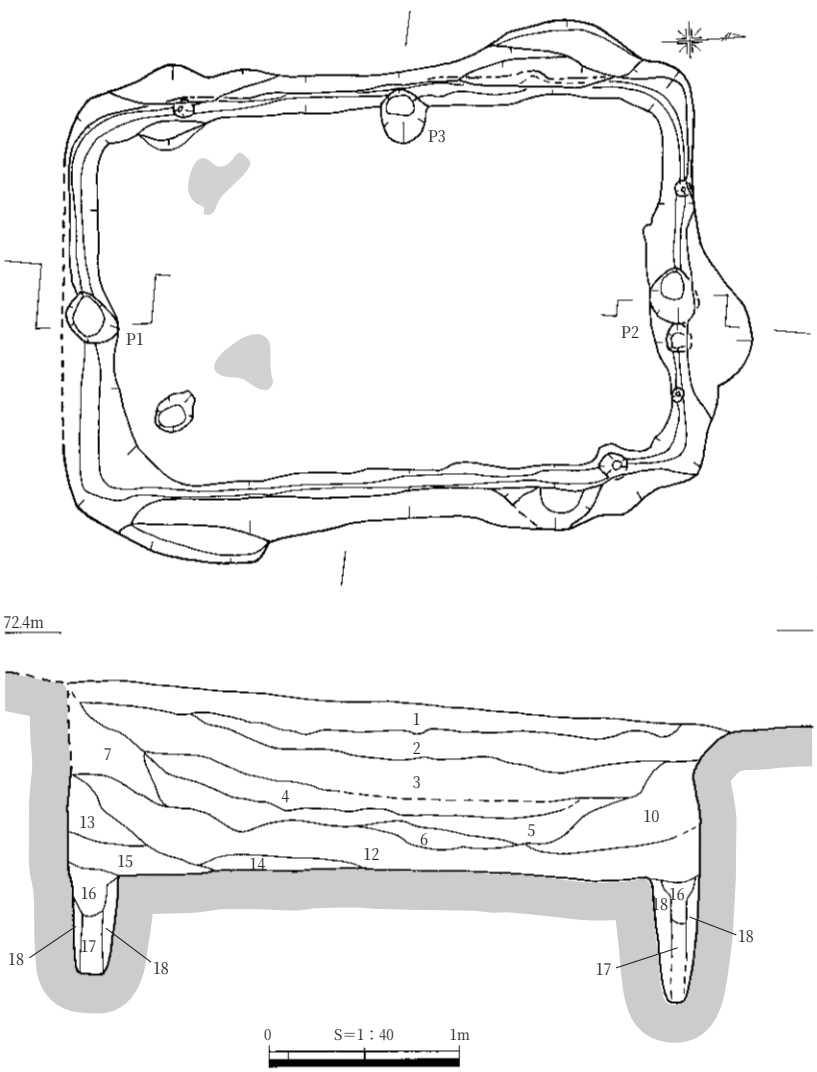
埋土は19層に分層できた。12層は中央が盛り上がるように堆積しており、人為的に埋められた可能性がある。遺物は７層以下から顕著に出土し、甕126～128、鋤先F10を図化した。127は底面に近い19層から、126、128は７層から出土した。７層から出土したF10は刃部の磨耗が著しく、右折り返し部は鍛打により変形している。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代後期後葉頃の貯蔵穴と考えられる。（大川）

SK14（第79～83図、PL.５・６・31・64・75）

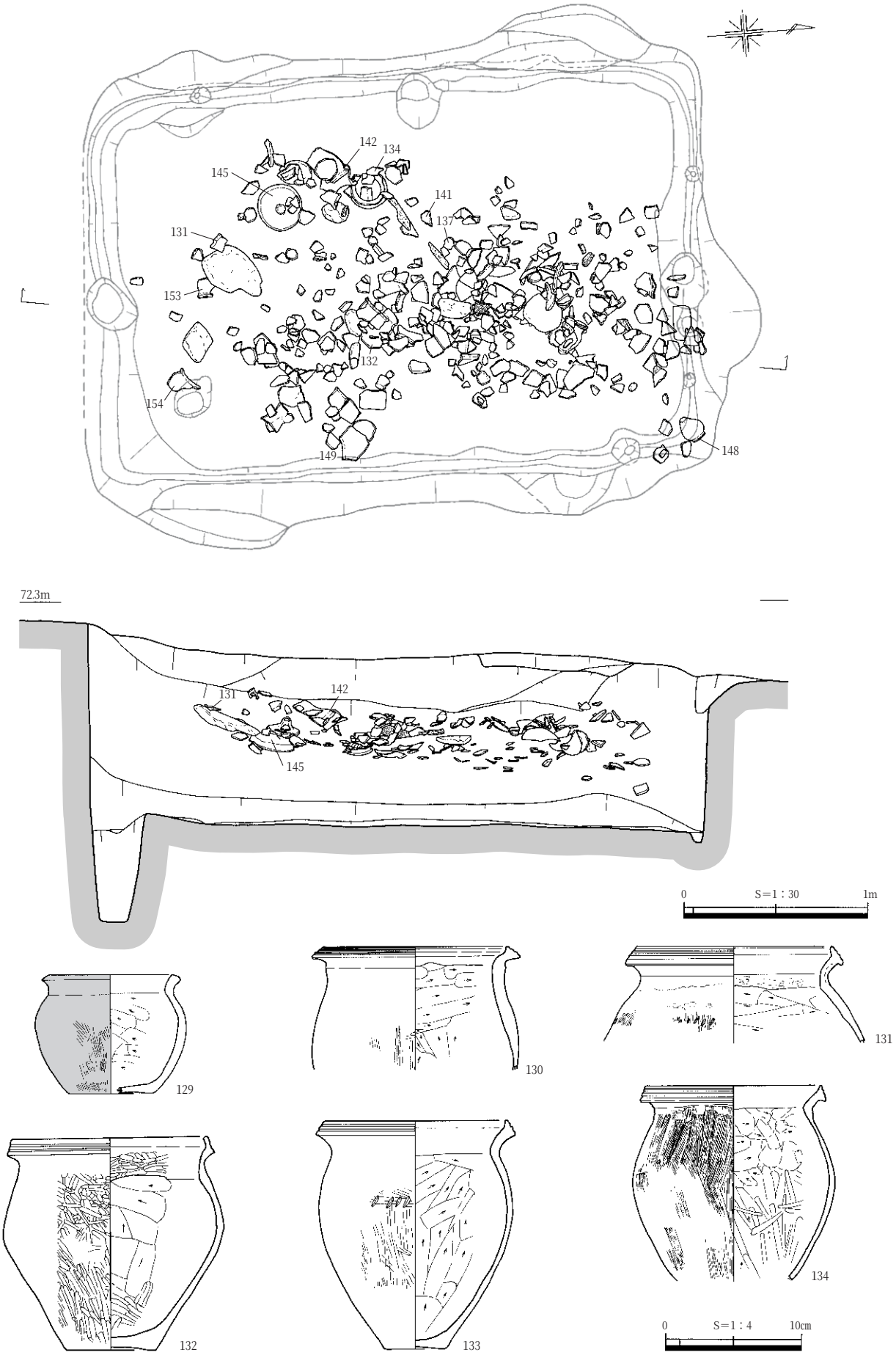
H22グリッドの北側、標高71.9～72.1mの尾根平坦面に位置し、東側にSI10が隣接し、SB13と重複する。SI10周辺の遺構面検出中にⅣ層上面で褐色土の広がりを確認した。サブトレンチを設けて遺構の状況を確認したところ、埋土中から多量の土器片が出土し、東西南北端でⅣ、Ⅴ層を掘り方とする壁面を確認したことから、土坑を想定し調査を行った。

平面形は長軸3.3m、短軸2.2mの隅丸長方形を呈し、深さは最大で１mを測る。掘り方は箱形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦となり長軸2.8m、短軸1.9mを測る。壁際には幅13～35㎝、深さ３～11㎝の壁溝が全周する。壁溝の南、北、西辺の中央にはP1～P3が掘削されてい

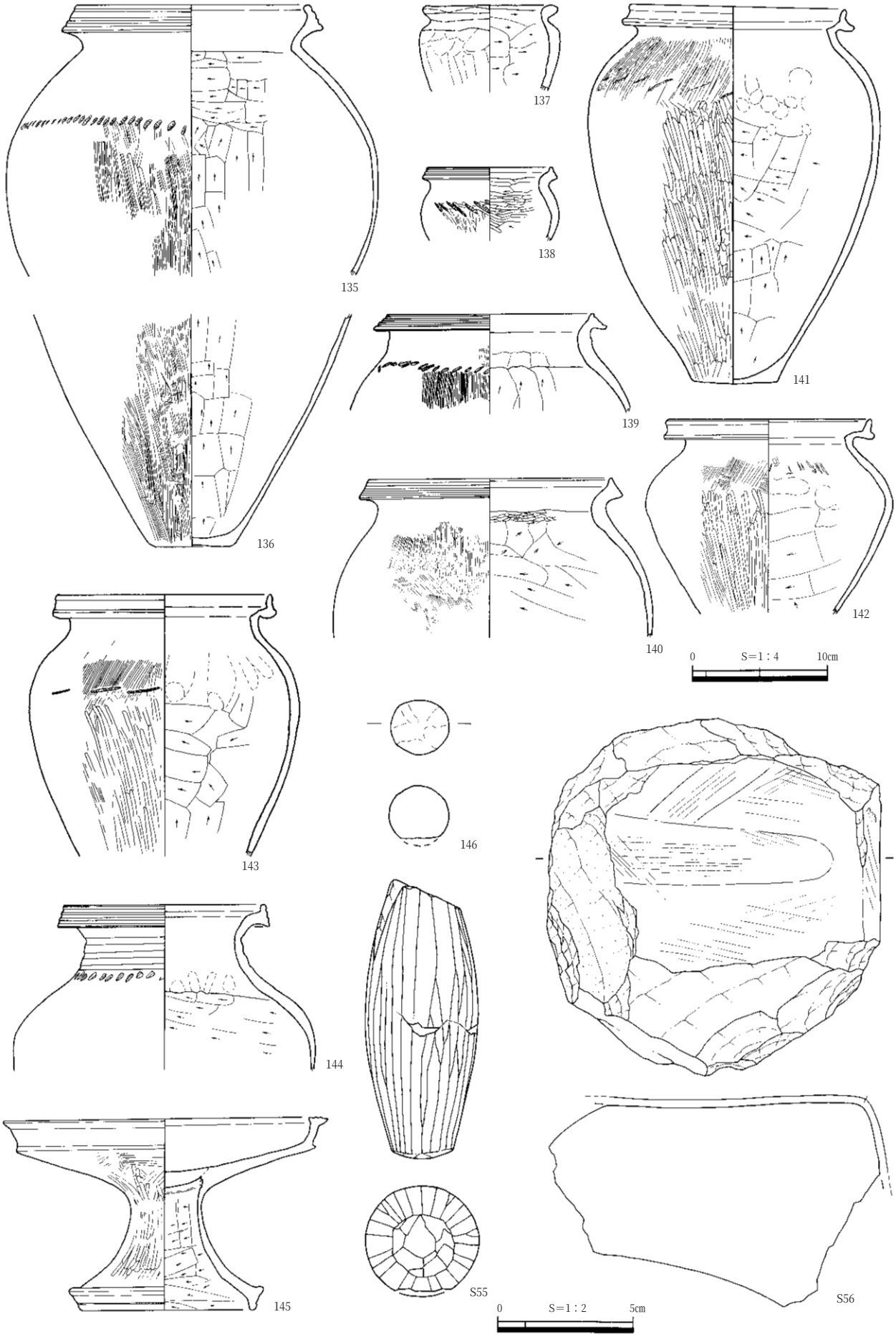


1　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、径２㎝以下白色砂礫多含、１㎝以下炭化物少含
2　暗褐色土（10YR3/4）粘性強、しまり良、径１㎝以下白色砂礫、５㎜以下炭化物・焼土粒、３㎝以下ホーキブロック少含
3　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり良、径１㎝以下ホーキブロック少含、５㎜以下炭化物・焼土粒微含
4　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり良、径５㎜以下炭化物多含、２㎝以下ホーキブロック少含
5　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり良、径５㎝以下ホーキ・ATブロック多含、５㎜以下の炭化物微含
6　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり良、径２㎝以下ホーキブロック少含
7　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり良、径５㎜の炭化物・白色砂礫少含
8　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり良、径５㎜以下白色砂礫微含
9　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまり良、径５㎜以下ATブロック微含、径５㎜以下白色砂礫少含
10　黄褐色土（10YR5/6）粘性やや強、しまり良、径５㎜以下炭化物微含、５㎝以下のホーキ・ATブロック少含
11　黄褐色土（10YR5/6）粘性弱、しまりやや良、径３㎝以下ATブロック少含
12　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり不良、径２㎝以下ATブロック・白色砂礫少含
13　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり不良、径５㎜以下炭化物微含
14　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり良
15　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり良、径５㎜以下炭化物微含
16　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり不良、径３㎝以下黄褐色土ブロック含
17　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり不良、径５㎜以下褐色土ブロック多含
18　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり良、17層よりやや暗い。径５㎜以下褐色土ブロック多含

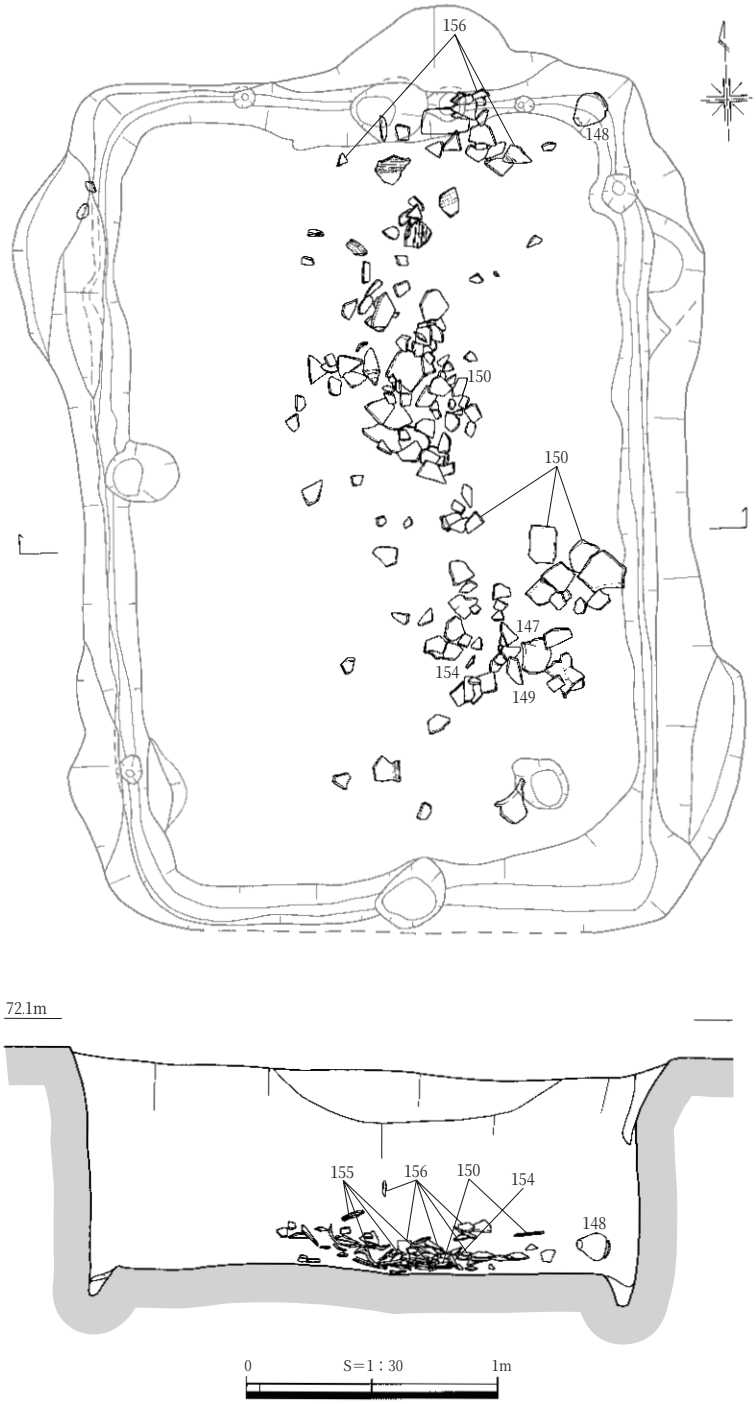
第79図　SK14



第80図　SK14上層遺物出土状況および出土遺物



第81図　SK14上層出土遺物



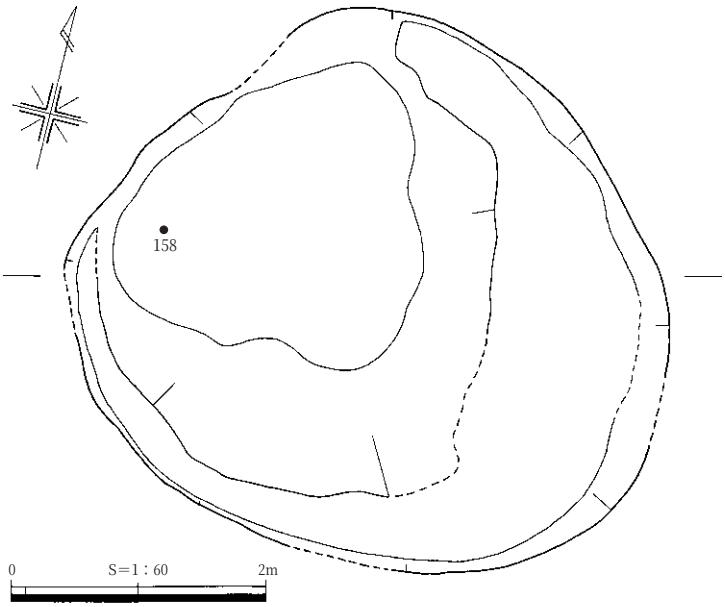
第82図　SK14下層遺物出土状況

る。P1（31×25－66）㎝、P2（28×23－56）㎝が柱穴と考えられ、P1、2の埋土には柱痕跡が認められる。柱痕跡から推定される柱径は12～16㎝を測る。その他P3（36×24－19）㎝は掘り込みがP1、2と比較して浅く、性格は不明である。埋土は全体で18層に分かれる。埋土の堆積状況はP1～3の埋没後、黄褐色系の土（10～15層）が床面全体を覆い、凹地状となった後、上層に褐色、暗褐色を呈する土（１～６層）が堆積する。出土遺物は４層から６層にかけて出土する一群と、床面直上と床面を覆う12、14層に伴って出土する一群に分けることができ、前者を上層出土遺物、後者を下層出土遺物として報告する。上層出土遺物はほぼ４層を中心として、その上下にかけて土層の堆積に沿うようにレンズ状に集積していたことから、土杭の埋没過程で凹地となった場所に投棄されたものと考えられる。

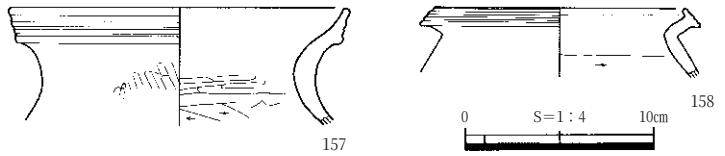
上層から出土した遺物には甕129～143、壺144、高坏145のほか土玉146、石錘未製品S55、台石S56がある。130、132～134、138、140は口縁部に１～３条の凹線がめぐる。141、142、143は頸部を屈曲させ、口縁部両端部を突出させる。137は口縁端部を丸くおさめる。内面調整は主に頸部直下までヘラケズリで調整する。144は口縁部、頸部に３条の凹線をめぐらし、その下に刺突文が施される。145は口縁端部を水平に拡張させ、端部上面に３条の凹線をめぐらせる。調整は脚部内面をヘラケズリする。145は内外面の色調が明るい橙色を呈し、坏部の形態も在来の土器と異なることなどから、吉備系のものである可能性が高い。

床面直上から12層にかけて出土したものが下層出土遺物である。甕147～150、壺153～156、ミニチュア土器151が出土した。152は埋土中出土の縄文土器である。甕147～150は口縁部に３～４条の凹線をめぐらせ、内面は主に胴部下半部にヘラケズリ、上半部にハケ目、ナデ、外面の胴部下半にヘラ

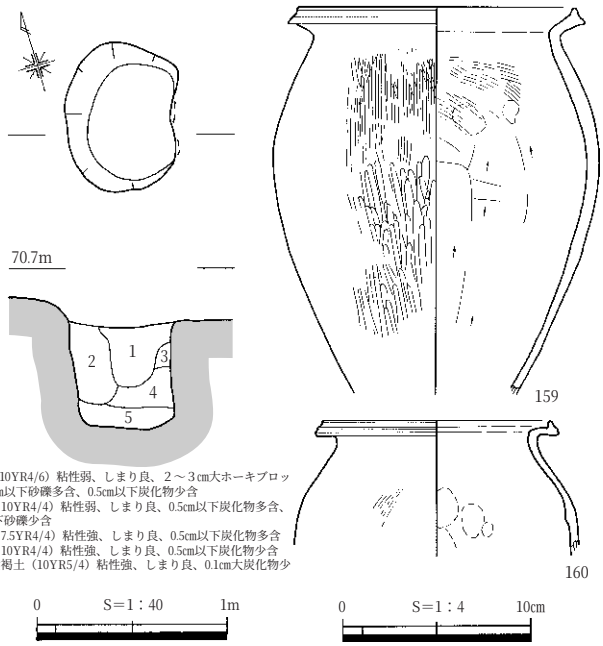
第83図　SK14下層出土遺物



1　褐色土（10YR4/4）しまり良、径２㎜以下砂礫・ホーキブロック、１㎝以下炭化物含
2　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、径２㎜以下砂礫、３㎝以下ホーキブロック・ＡＴブロック含
3　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、径５㎜以下砂礫・炭化物、２㎝以下ホーキブロック・ＡＴブロック含、色調２層よりやや暗い
4　褐色土（10YR4/6）粘性強、径２㎜以下砂礫含
5　明褐色土（7.5YR5/6）粘性強、しまり弱、径２㎜以下砂礫含
6　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり良、径５㎜以下砂礫、２㎜以下ホーキブロック含
7　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり良、径２㎜以下砂礫含
8　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、しまり良、径２㎜以下砂礫含
9　褐色土（10YR4/6）径5㎜以下砂礫、３㎝以下ホーキブロック、１㎝以下ＡＴブロック、２㎜以下炭化物含
10　黄褐色土（10YR5/6）粘性強、径２㎜以下砂礫、１㎝以下ホーキブロック・ＡＴブロック含



第84図　SK18および出土遺物



1　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり良、２～３㎝大ホーキブロック、0.1㎝以下砂礫多含、0.5㎝以下炭化物少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、0.5㎝以下炭化物多含、0.1㎝以下砂礫少含
3　褐色土（7.5YR4/4）粘性強、しまり良、0.5㎝以下炭化物多含
4　褐色土（10YR4/4）粘性強、しまり良、0.5㎝以下炭化物少含
5　にぶい黄褐土（10YR5/4）粘性強、しまり良、0.1㎝大炭化物少含

第85図　SK19および出土遺物

ミガキ、上半部にハケ目を施す。155、156は口縁部に１、３条、頸部に４、８条の凹線をめぐらせる。内面は胴部下半をヘラケズリし、胴部上半部にハケ目、ナデを施す。

上層から出土した土器はⅤ-１期、下層から出土した土器はⅣ-３期の特徴を示す。上層、下層の遺物はそれぞれ一括性が高い。本遺構は弥生時代中期後葉のものと考えられ、ある程度堆積が進み、凹地となった場所を利用して廃棄土坑として後期前葉の遺物群が捨てられたものと想定される。　（大川）

SK18（第84図、PL. 63）

B23～C23グリッド、標高70.2mの尾根平坦面に位置する。

平面形は北東側がやや直線的となる不整円形で、長軸4.5m、短軸4.3m、底面は長軸2.7m、短軸2.3mを測る。断面は逆台形状の浅い土抗で、検出面からの深さは最大50㎝である。

埋土は全体的にしまりがよく、含有する地山ブロックの粒、密度ともに大きい。遺構内東側から中央にかけてブロック状の堆積が広く認められることから、廃絶後に人為的に埋め戻されたものと推測される。

遺物は、１層西側の２層に近い部分からⅤ-１期に比定される甕口縁部が１点と、検出面からⅤ-２期に比定される壺の口縁部が１点出土している。１層中の土器については、人為的に埋め戻された際に混入したものと考えられる。検出面の土器は遺構埋没後に流れ込んだものであろう。埋め戻された土から出土した土器及びSK18を掘り込むP160の埋土中で出土した土器がⅤ-３期のものであることから、本遺構は弥生時代後期前葉以降に廃絶し、後期後葉までには埋没が完了したと考えられる。　（原田）

SK19（第85図、PL. 31・56・64）

H24グリッド、標高約71.4mの尾根平坦面に位置する。SS4の床面で検出した。

SS4北東部サブトレンチ掘り下げ中、床面上で掘り方の一部が検出された。SS4埋土掘り下げ後、不整楕円形を呈する褐色土の広がりを検出し、確認のため半截したところ、土杭と判断された。

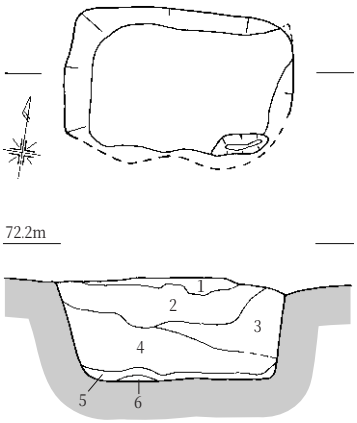
平面は不整楕円形で東側が少し内湾する。上部をSS4によって切られているが、残存部分で長軸80㎝、短軸56㎝、検出面からの深さ70㎝を測る。底面は東側でややオーバーハングしており、長軸60㎝、短軸40㎝を測る。断面形は方形を呈する。

埋土は５層に分けられる。３～５層は自然堆積と考えられる。１、２層はSS4の埋土と異なると認識しているが、SS4構築時に掘削された後で堆積した土の可能性がある。

遺物は１、２、４層から土器片が出土し、１、２層に集中する。いずれも流れ込みによるものである。

甕159、160を図化した。159は検出面からまとまった状態で出土した。160は検出面、１層から出土した。いずれもⅣ-３期の土器と考えられる。

本遺構の時期については断定できない。SS4に切られているため、SS4が構築される前、弥生時代中期後葉以前のものと考えておきたい。（戸羽）



1　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり良、１㎝以下ホーキブロック少含
2　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり良、0.5㎝以下炭化物微含
3　褐色土（10YR4/4）粘性弱、しまり弱（２よりしまりやや弱）、４㎝以下ホーキブロック少含
4　褐色土（10YR4/6）粘性強、しまり強、0.5㎝以下焼土粒・炭化物微含
5　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、３㎝大ホーキブロック微含
6　褐色土（10YR4/6）粘性弱、しまり弱、0.5㎝以下炭化物微含

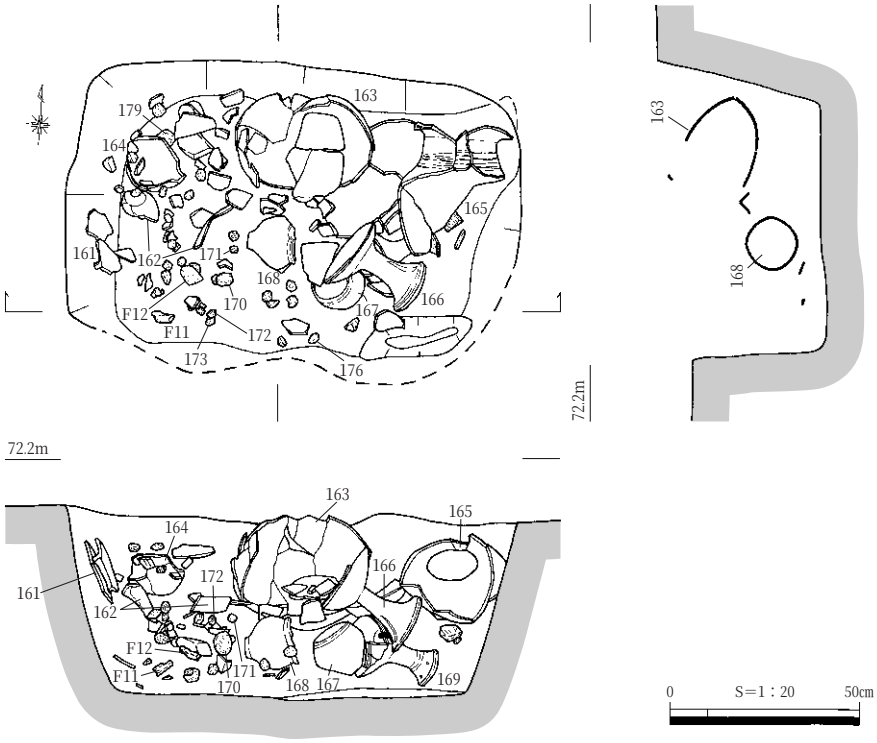
0　S＝1：40　1m

第86図　SK20

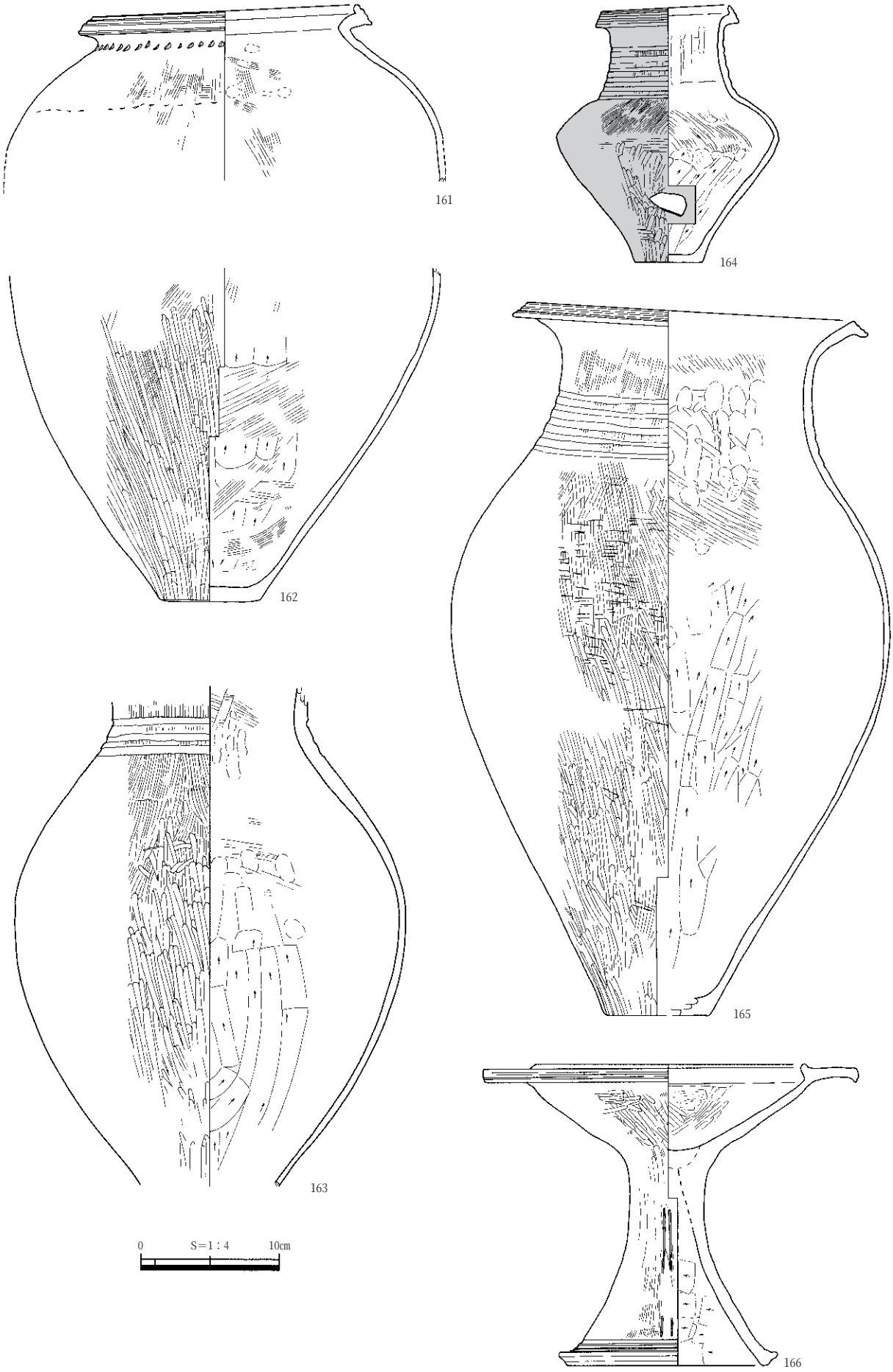
SK20（第86～89図、PL. 5・32・56・66・76）

H23グリッド、標高72.1mの平坦面に位置し、東側にSK14がある。Ⅱ、Ⅲ層を掘り下げ、Ⅳ層上面を精査中に上面から土器片が出土したため、遺構の存在が予想された。東西方向にサブトレンチを設けて遺構の状況を確認したところ、東西端部で掘り方を確認し、埋土中から比較的まとまった状態で土器などがみられたため、遺構として調査を行った。

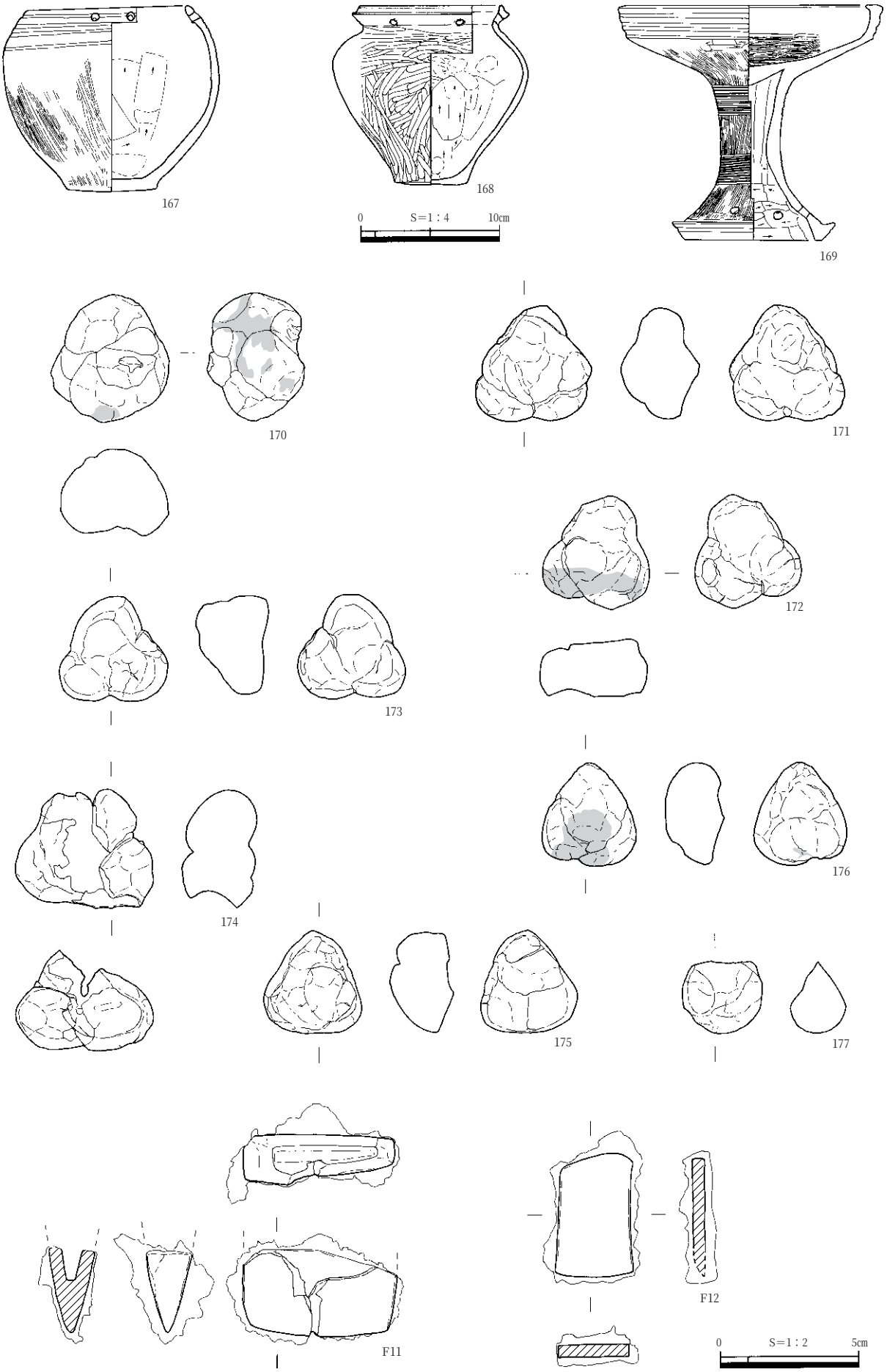
規模は、ほぼ東西を軸とする長軸1.20m×短軸0.77mを測り、検出面からの深さは最大で53㎝を測る。平面形は隅丸長方形を呈する。底面の南東隅には30㎝×10㎝、深さ３㎝の浅



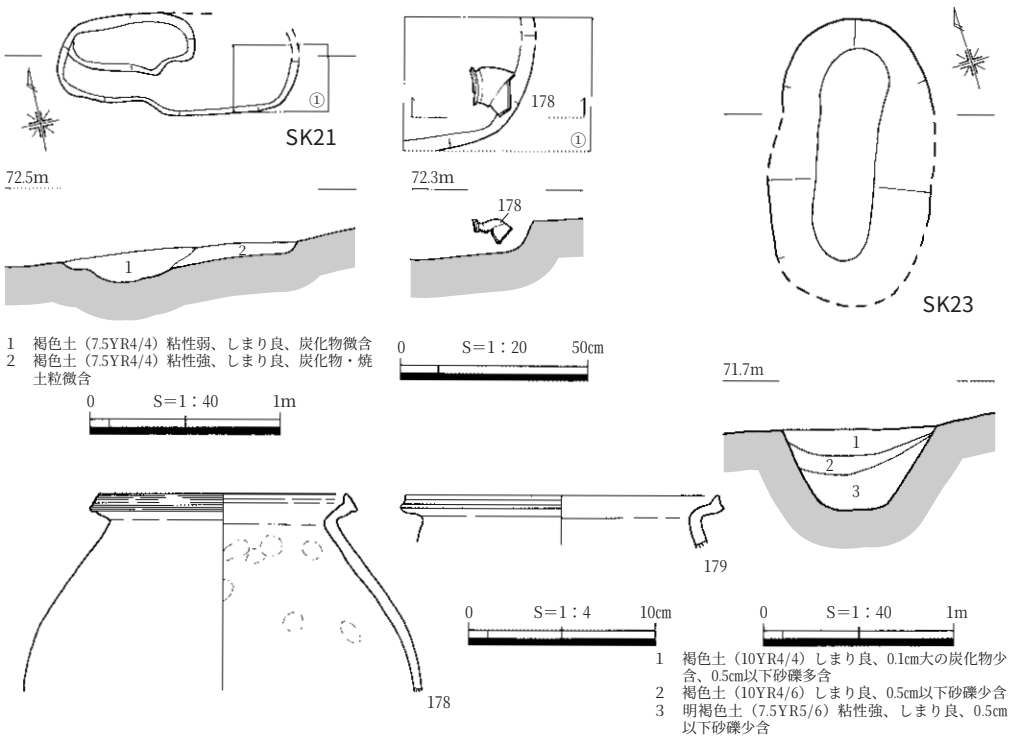
第87図　SK20遺物出土状況



第88図　SK20出土遺物（１）



第89図　SK20出土遺物（２）



第90図　SK21・23および出土遺物

い凹みがある。底面の標高は71.6mを測り、遺構はⅥ層まで掘り込まれている。埋土には褐色系の埋土が堆積し、全体で６層となる。出土した遺物の大半は２層から床面直上に及ぶ。

出土遺物には甕161、162、壺163～165や、無頸壺167、短頸壺168、高坏166、168のほか粘土塊170～175、鋳造鉄斧刃部片F11、板状鉄斧F12がある。

161は口縁外面に３条の凹線を頸部、肩部にそれぞれ一列の刺突文をめぐらし、内外面ともにハケを施す。162と同一個体である。163は口縁部、底部が欠損しており、頸部には３条の凹線をめぐらし、内面は頸部付近までヘラケズリ、外面はハケ後ナデで調整される。164は外面を赤彩し、口縁外面に３条、頸部外面に６条の凹線をめぐらす。内面は胴部下半をヘラケズリし、胴部上半部をハケで調整する。外面を丁寧なヘラミガキ後、ハケによって仕上げる。165は口縁部を大きく外反させるもので、口縁端部に３条、頸部に６条の凹線をめぐらし、内面は胴部最大径付近までをヘラケズリし、胴部上半から頸部にかけてハケ後、ナデ調整する。166は水平に拡張した口縁外面の端部に２条、脚部に４条の凹線をめぐらせ、脚部外面には縦方向の線刻を施す。坏部内面はハケによる調整後、丁寧にヘラミガキ、ナデ調整し、脚部内面は左方向のヘラケズリで調整する。167は胴部上半に４条の凹線をめぐらし、口縁直下に２個を１単位とする紐とじ孔が２ヶ所みられる。内面はヘラケズリ、外面はハケで調整される。168は頸部に４ヶ所の穿孔がみられる。内面はヘラケズリ、外面は丁寧なヘラミガキで仕上げる。169は口縁部外面に３条の凹線をめぐらし、脚部上半、下半にそれぞれ11条、12条の沈線をめぐらす。坏部内面は丁寧にヘラミガキする。脚部下部には、５ヶ所の穿孔が認められる。

粘土塊は30点以上出土しており、そのうち８点を図化した。いずれも177のような粘土片数個を合わせて成形したものであり、外面には指押さえの痕跡が残るもの、黒斑が認められるものがある。170、172、176には赤色顔料がわずかに残っている。遺物は一括性が高く、まとまった出土状況を示すことから、祭祀行為に関連するものと考えられる。

出土した土器から本遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（大川）

SK21（第90図、PL. 31・64）

H24グリッド、標高71.2mの尾根部平坦面に位置する。SK12と北側で接する。SS4の東側にある。

Ⅱ層除去後、SK12と接するかたちで炭化物を包含する褐色土の広がりを検出した。半裁したところ、壁面の立ち上がりを確認し、土坑として調査した。

規模は長軸127㎝、短軸54㎝、検出面からの深さは６～25㎝である。埋土は２層に分層できた。１・２層とも褐色土で炭化物を含む。２層からは甕の口縁部が出土している。

178は甕の口縁～胴部にかけてのものである。口縁部外面に３条の凹線が施される。

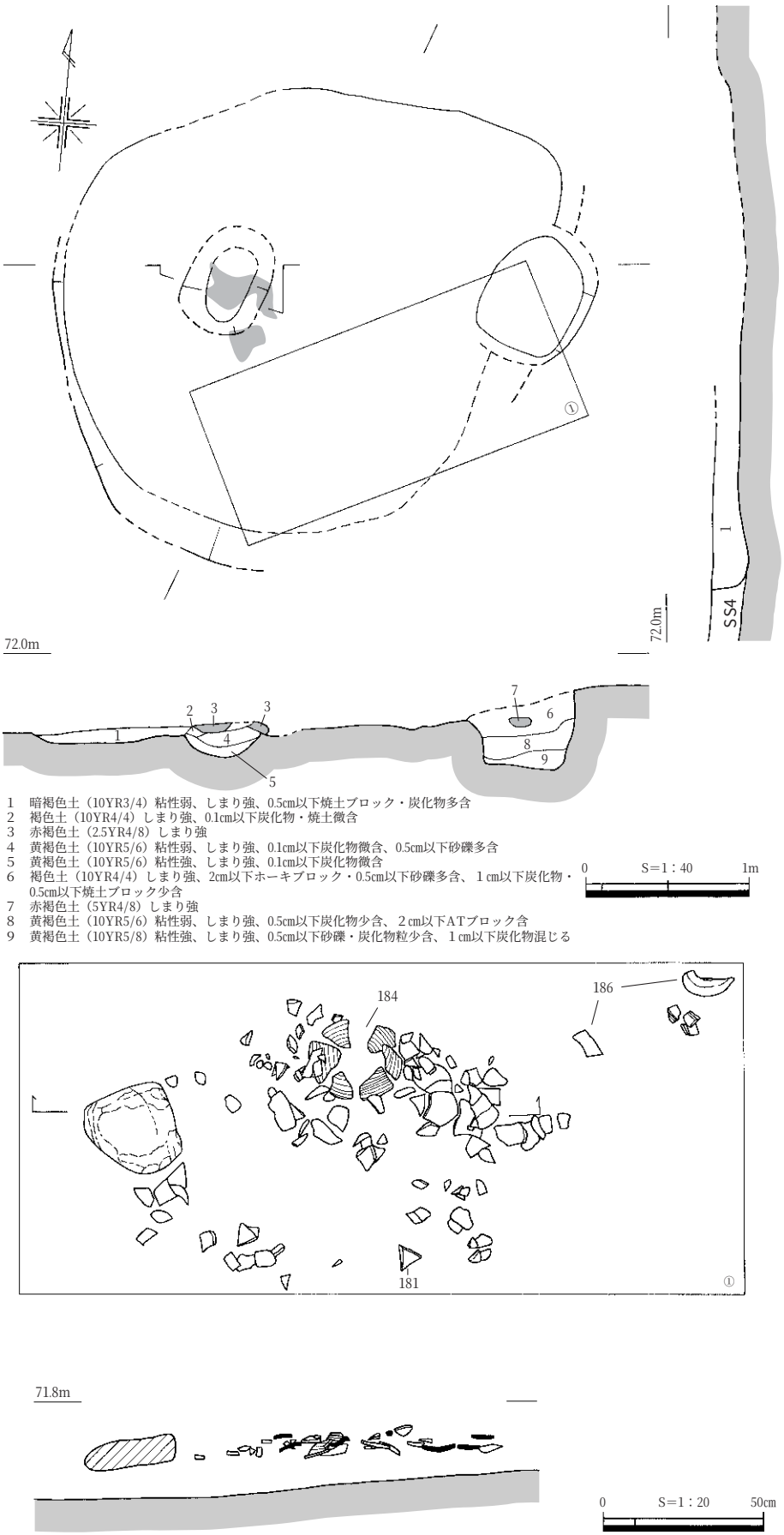
時期としては、178がⅣ－３期のものであることから、弥生時代中期後葉である。　　（淺田）

SK23（第90図、PL. 32・64）

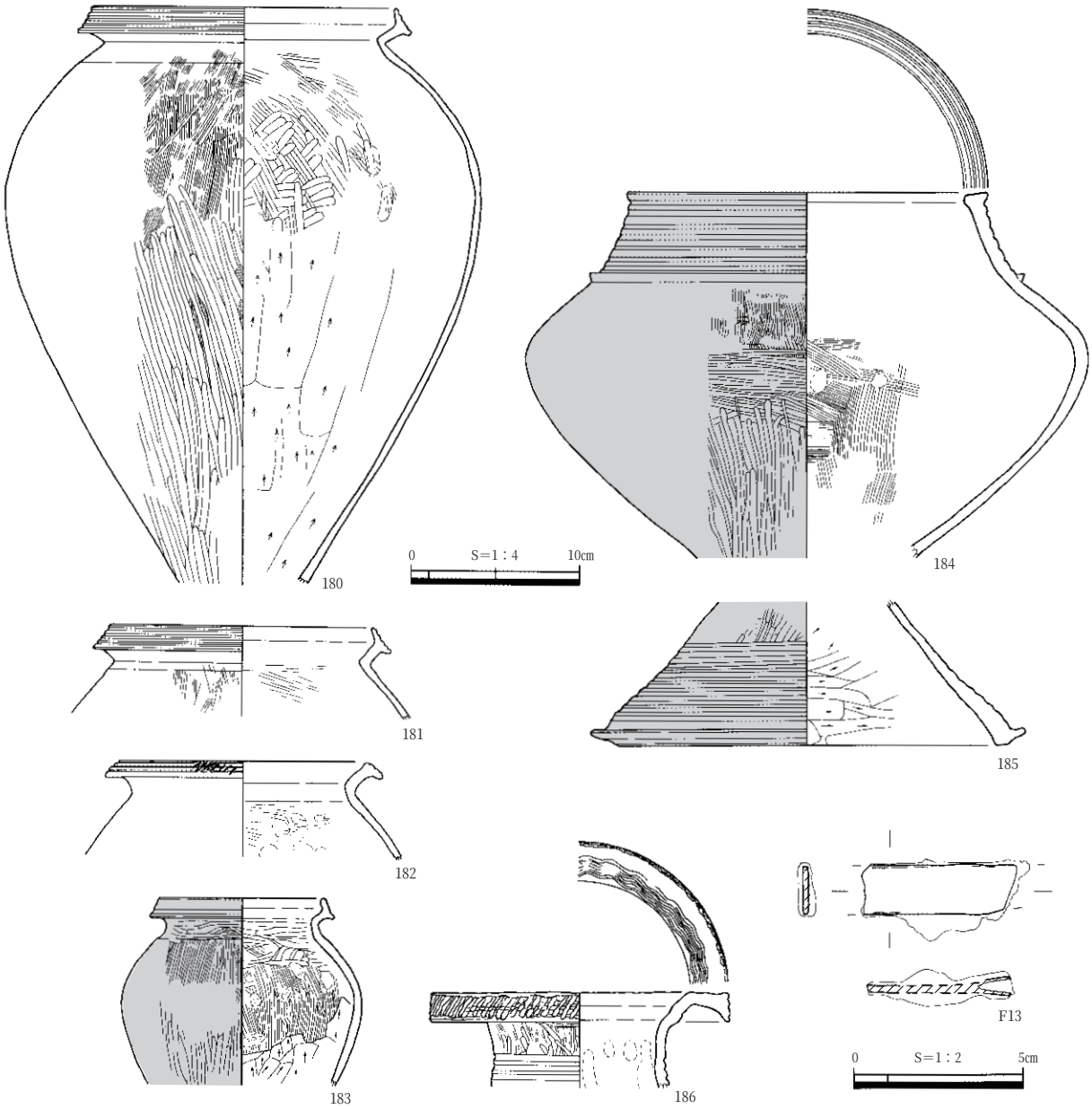
H24・25グリッド、標高71.5mの傾斜変換点に位置する。SS4が東側に隣接する。

SS4周辺を精査中に楕円形を呈する褐色土の広がりを検出した。サブトレンチを設定し、掘り下げを行ったところ、立ち上がりが確認されたため、遺構と判断した。

平面は楕円形で、長軸



第91図　SK24



第92図　SK24出土遺物

の南側はSS4のサブトレンチによって削平したため、推定長軸1.5m、短軸0.87m、検出面からの深さは最大で47㎝を測る。底面は長軸1.1m、短軸0.36mを測る。断面は逆台形を呈し、上部に向かうにしたがって広がる。埋土は３層に分けられ、自然堆積と考えられる。

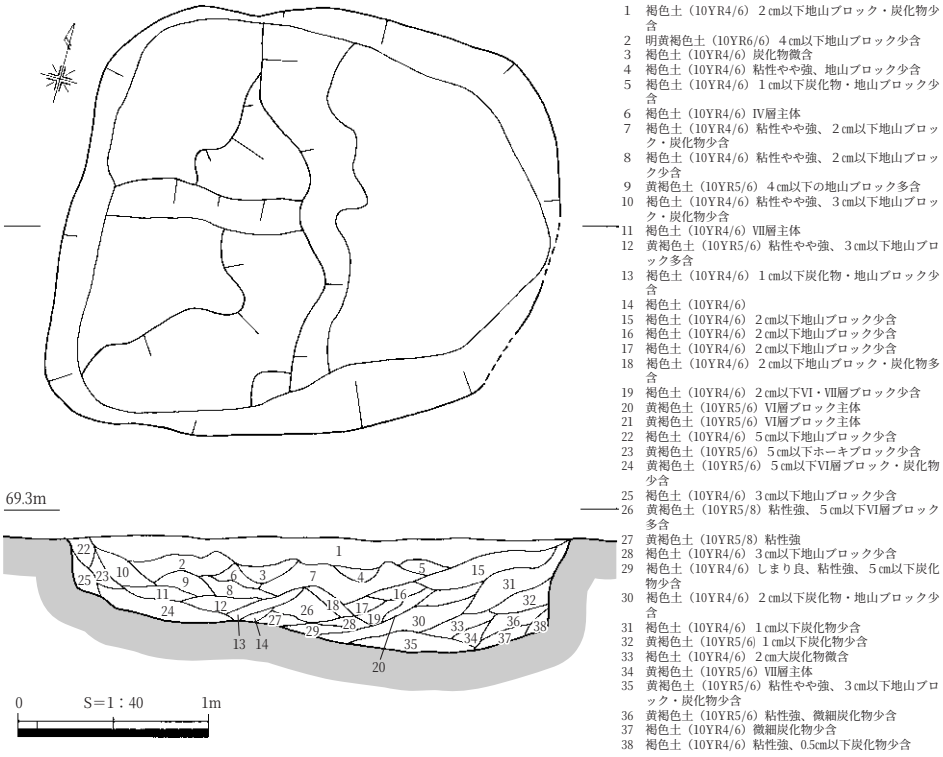
遺物は１～３層で出土しているが、流れ込みであると思われる。１層出土の甕179を図化した。本遺構は出土土器の特徴からⅣ-３期、弥生時代中期後葉と考えられる。性格については不明である。

（戸羽）

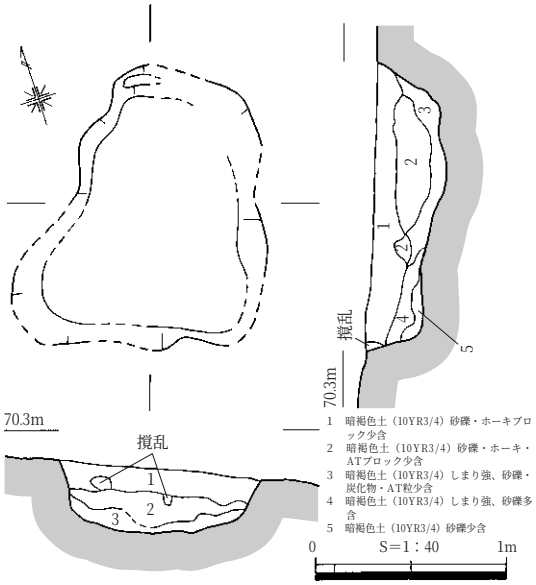
SK24（第92図、PL. 32・33・57・65・76）

H24グリッド、調査区南西側、標高72.3～72.7mの傾斜変換点付近に位置する。SS4を切る。SS4サブトレンチ（B-B′）掘り下げ中、北側に土器片など遺物の集中部分が検出された。当初はSS4に伴うものと考え調査を進めたが、遺物の分布度、サブトレンチ（A-A′）による土層断面観察により別遺構と判断した。

後世の撹乱溝によって遺構中央部を東西方向に削平されていたため北半分はほぼ埋土がなく、また一部SS4埋土と誤認して掘り下げたことから正確な平面形は不明である。おそらく不整円形を呈すると推測される。断面は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の西側、東壁の中央の２ヶ所にピットが掘り込まれる。P1の平面形は不整方形と想定される。推定で長軸87㎝、短軸70㎝以上で、深さは残存する部分で、最大49㎝を測る。P2の平面形は楕円形が想定される。推定で長軸66㎝以上、短軸55㎝で、SK24底面からの深さは最大20㎝を測る。



第93図　SK25



第94図　SK26

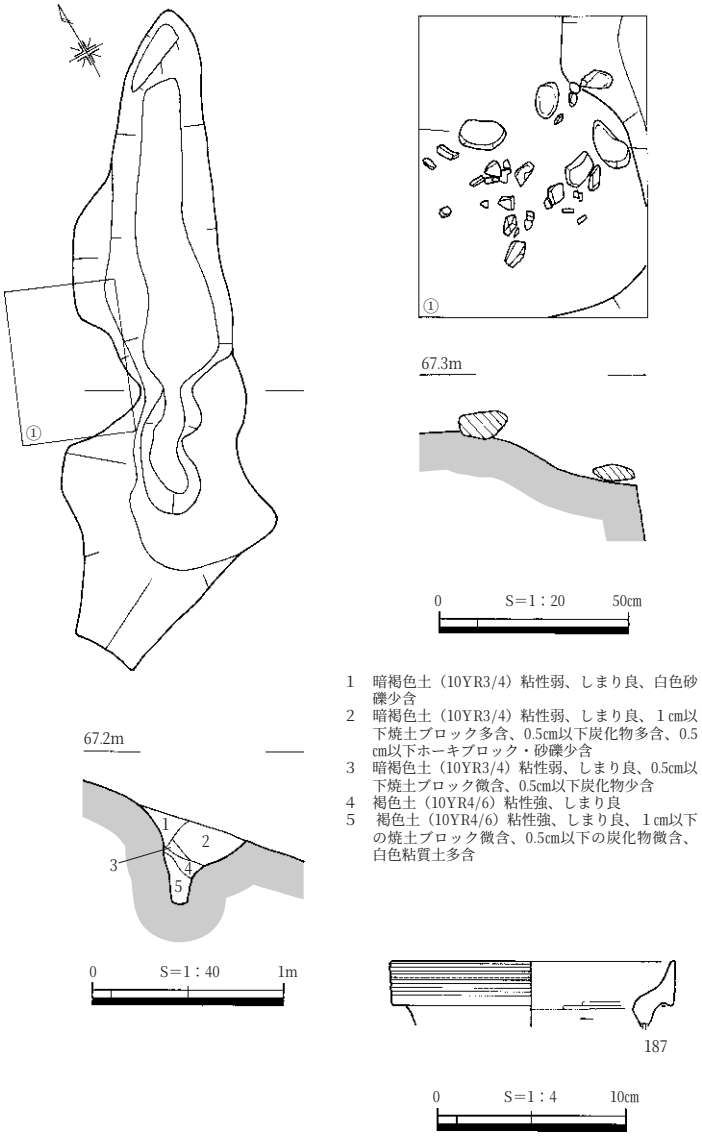
埋土は９層に分けられる。P1、P2の上層から焼土塊が出土した。両者とも底面から浮いた状態にあるため、焼土塊は投棄されたものと考えられる。

遺物は１層、８層から出土している。甕180、脚付壺184、185はまとまった状態で出土しており、一括廃棄されたものと考えられる。甕180～183、脚付壺184、185、壺186、鉈F13を図化した。いずれも１層からの出土である。

183は小型の甕である。184は口縁部から胴部片、185は脚部片であり、接合しないが同一個体と考えられる。183～185は外面全体に赤彩されている。186は口縁上部に８条の波状文が施される。残存する頸部以下に凹線が続くと考えられる。F13は鉈の身部片である。遺構の時期は出土土器の特徴から、弥生時代中期後葉である。（戸羽）

SK25（第93図、PL. 32）

AC20グリッド、標高69.1mの尾根平坦面に位置する。東側にSI30、南西側に鍛冶炉、SK27がある。Ⅳ層上面で検出し、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸2.99m、短軸2.38m、検出面からの深さは東側で最大55㎝を測る。底面は長軸2.28m、短軸2.07mを測り、北西から東にかけて傾斜す



第95図　SK38および出土遺物

る。高所となる北西側と低所にあたる東側では、高低差27㎝を測る。

埋土は38層に分層でき、人為的に埋め戻されたものと推測される。遺物は図化していないが、出土遺物から本遺構の時期は、弥生時代後期前葉頃のものと考えられる。（大川）

SK26（第94図）

E21グリッド、標高69.9～70.3mの緩斜面に位置する。本遺構は埋没した竪穴住居SI13の中央部を掘り込んで構築されている。平面形は長軸1.5m、短軸1.0mの不整台形を呈し、検出面から底面までの深さは最大で34㎝を測る。

埋土は３層に分けられ、主に壁体とするSI13埋土の崩落・流入に起因する自然堆積によって埋没していると推定される。SI13埋土との色調・含有物の差異は大きくない。

埋土中から土器片が少量出土したが、図化できるものはない。出土遺物及びSI13との切り合い関係から、本遺構は弥生時代後期前葉以降に構築・廃絶したものと考える。（高尾）

SK38（第95図、PL. 33・65）

調査区北端のAC19グリッド、東側の谷に向かい急斜面となる傾斜変換点に位置する。長軸3.5m、短軸1.1mの蛇行する溝状の形態で、土坑の肩から底面までの最大高低差は53㎝を測る。西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁は溝状の最深部から緩やかに開くように立ち上がる。

埋土は立木の根撹乱を受けており判然としないが５層に分けられ、４層を除き炭化物・焼土粒を含む。土坑西肩で２㎝大から径12㎝に至るまでの大小様々な焼土塊が集中しており、性格は不明だが埋土に焼土粒を多分に含むことから遺構に関連するものと捉えている。

埋土中から出土した甕187を図示した。埋没途中の混入品であろう。本遺構は弥生時代後期中葉以降に廃絶したと考えられる。（高尾）

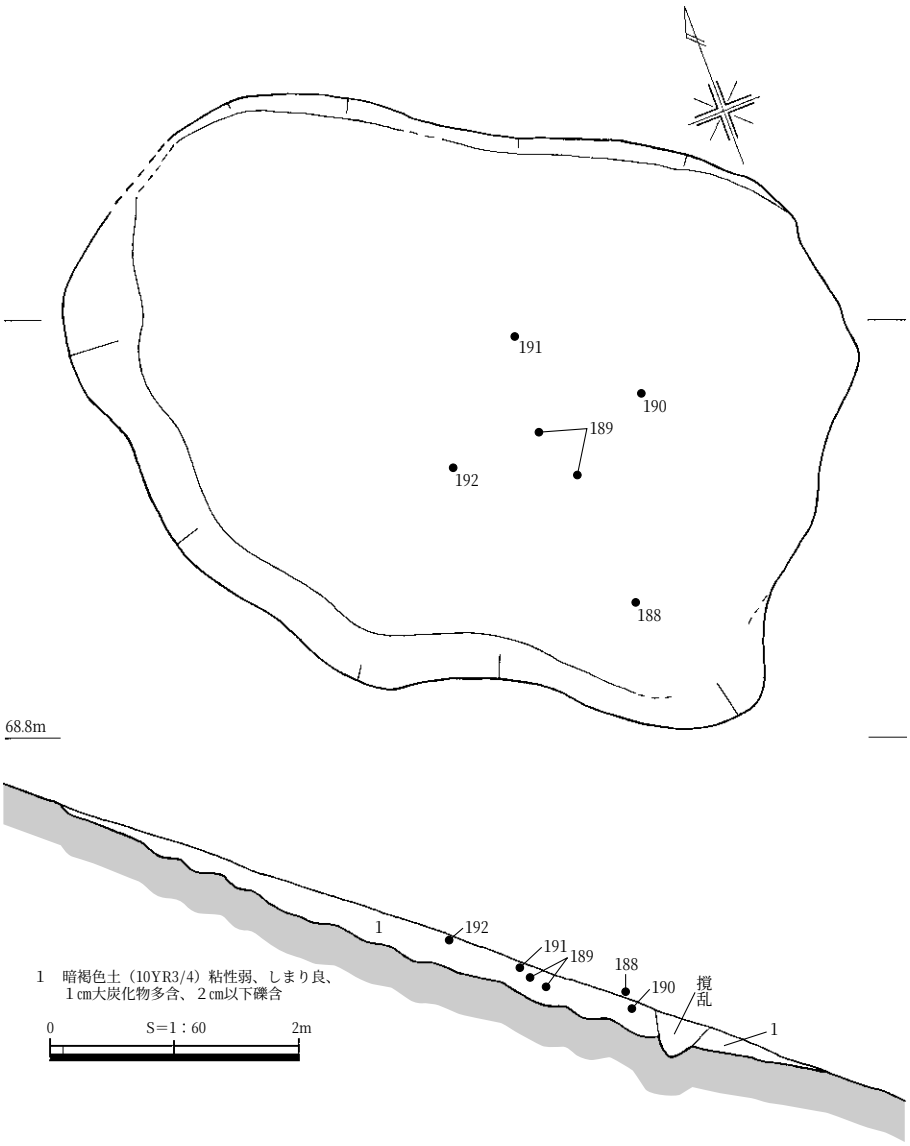
SK39（第96図、PL. 34・56・66）

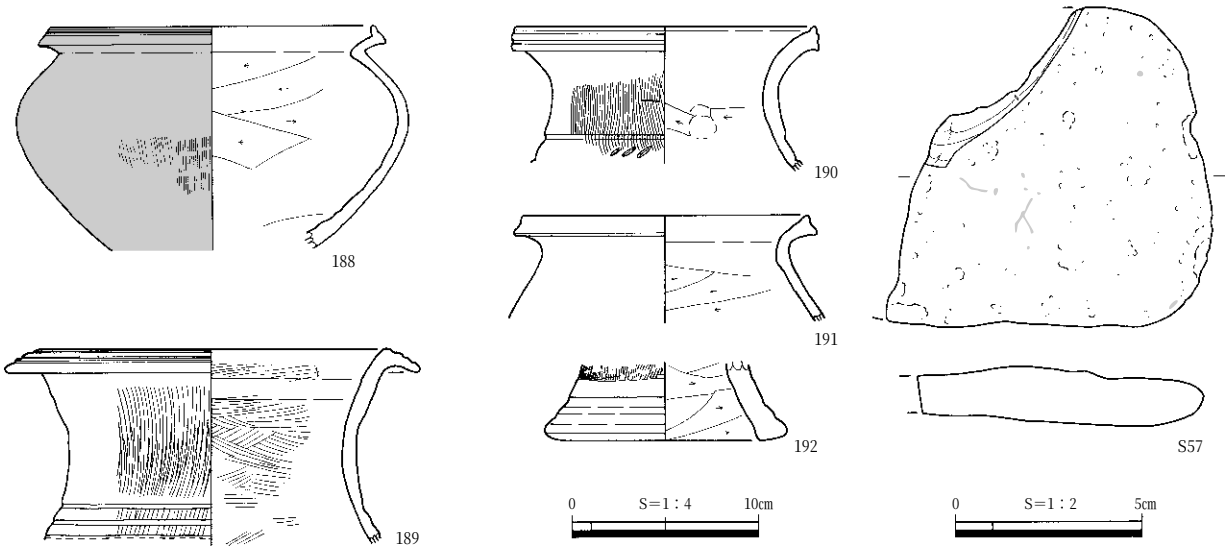
A20・AA20グリッド、西から東へ下る標高68.3m～66.1mの谷部西斜面に位置する。

Ⅳ層を精査中、土器を包含する暗褐色土の広がりを確認した。自然地形に沿うように、東西にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、土器や礫が多く確認された。長軸6.1m、短軸4.4mの不整形を呈し、検出面からの深さは約30㎝を測る。明確な掘り方は見られない。遺構の高低差は約2.2mを測り、西側が高く、東側が低い。

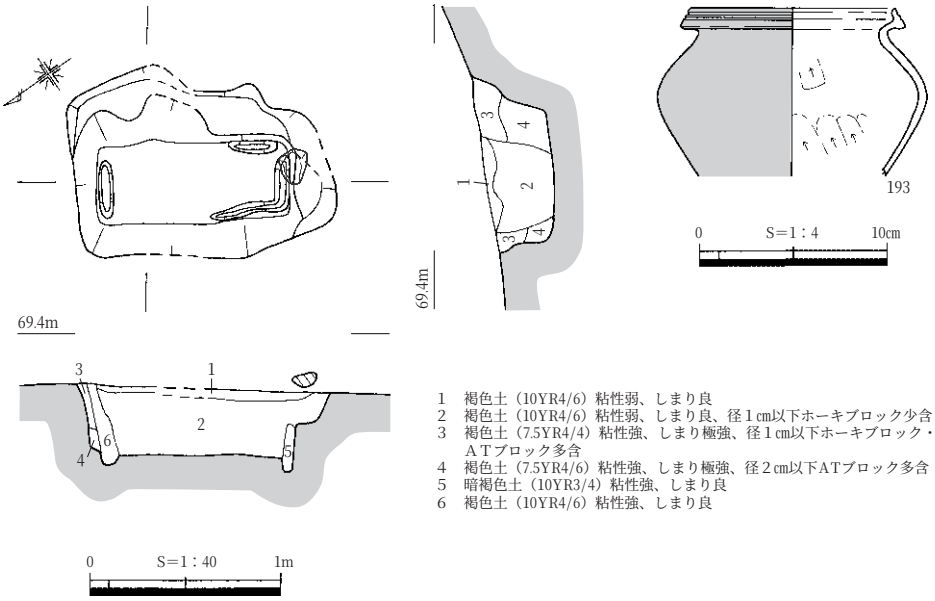
埋土は単層で粘性が弱く、遺物を多く含んだ暗褐色土が堆積する。遺構が斜面に位置しているために、遺物の多くが東側から出土した。図示できたものは６点で、188・191は甕、189・190が壺、192が高坏である。188～191は、Ⅴ－１期の特徴を有し、192はⅣ様式の特徴を有す。S57は２面に赤色顔料の付着が認められる。遺構の性格は不明だが、自然に形成された窪地に、上方からの流入土と遺物が二次的に堆積した可能性もあり、本遺構の時期は、弥生時代後期前葉以降と考える。

（岩垣）





第96図　SK39および出土遺物



第97図　SX1および出土遺物

（６）　木棺墓

SX1（第97図、PL. 34・67）

E25グリッド、標高69.2mの西側斜面に位置し、SA4の東側にある。

斜面部の遺構の有無と土層の堆積を確認するためにトレンチを設定したところ、土坑状の落ち込みと底面を確認した。そこで新たにトレンチを設定し、トレンチ断面の精査を行ったところ、裏込め土の存在と、小口痕と思われる土層断面を確認した。検出面の精査を行ったところ、方形を呈する褐色土の広がりも検出できた。埋土上面には角礫（19×12－８）cmがあり、その周辺から赤彩土器が出土していることから墓として調査を行った。

本遺構が確認されたため、遺構の希薄な範囲であった調査区南部の西側斜面にさらに墓が存在することが想定された。そこでE25～G25グリッドの斜面部をⅥ層まで面的に下げ、精査を数回行ったが、本遺構以外に墓を検出することはできなかった。

平面規模は長軸1.35m、短軸0.88mであり、検出面から底面までの深さは東側で最大38cm、地形的に低い西側では32cmである。墓壙主軸は等高線に対してほぼ平行になっている。底面は方形（1.03m×0.42）mで、南北両端に長さ30cm、幅７cm、底面からの深さ７cmの小口穴がある。南側の東西両壁沿いの底面に側板痕が確認でき、その規模は長さ27～35cm、幅６cm、底面からの深さ1.5～２cmである。小口穴・側板痕の存在から木棺墓と推定される。木棺内法の規模は推定で（86×27－30）cmである。規模が小さいことから、小児墓と思われる。

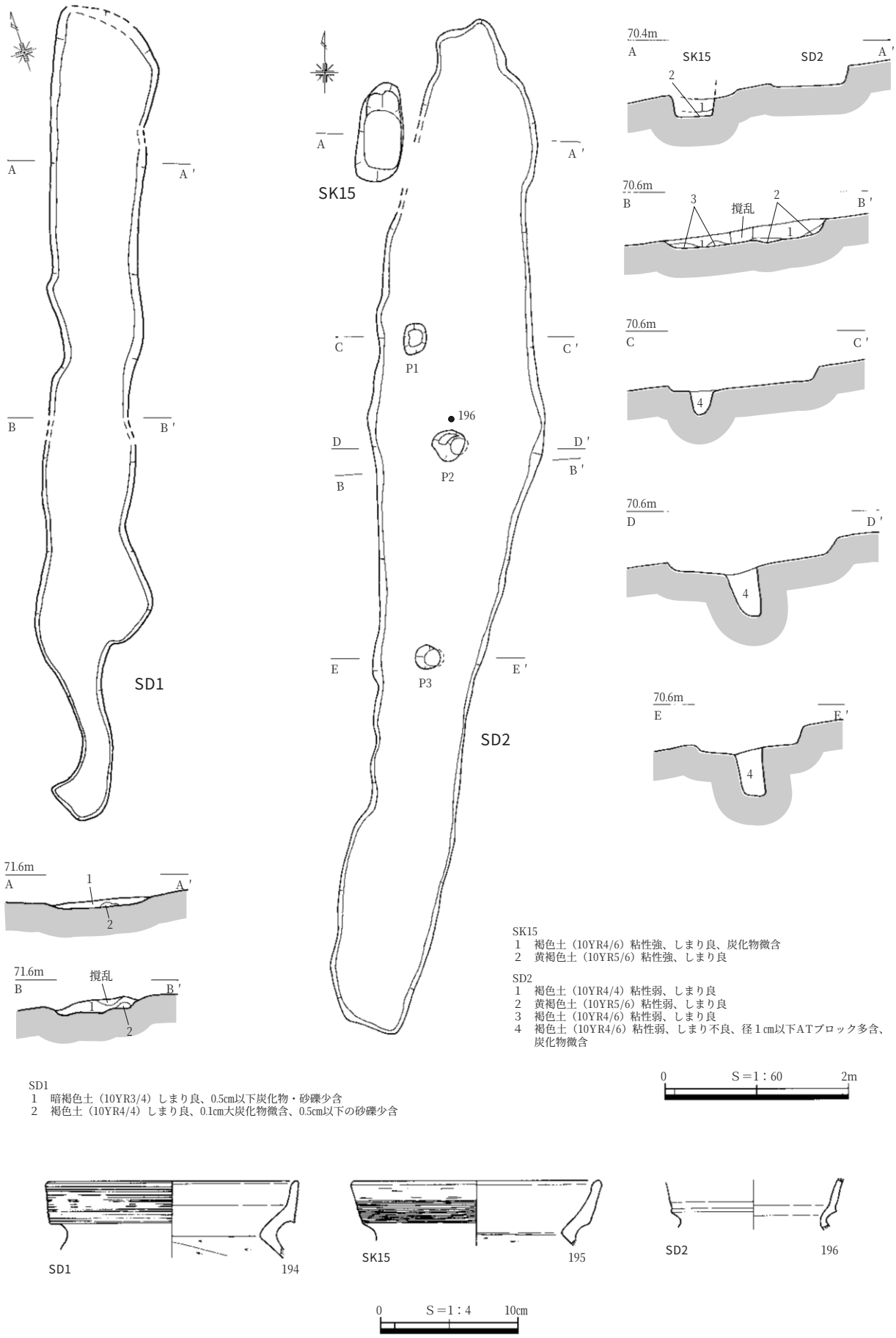
埋土中から遺物は出土していない。193は小型の甕で検出面からの出土である。口縁部外面に２条の凹線を施す。胴部は風化のため、調整は不明である。胴部内面はケズリ後、上半を丁寧にナデてケズリの単位を消している。Ⅳ-３期の特徴を示すものである。遺構の時期は、出土土器から弥生時代中期後葉と思われる。（淺田）

（７）　溝状遺構

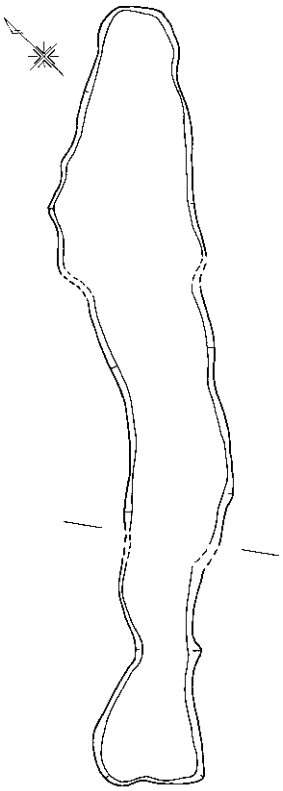
SD1（第98図、PL. 35・65）

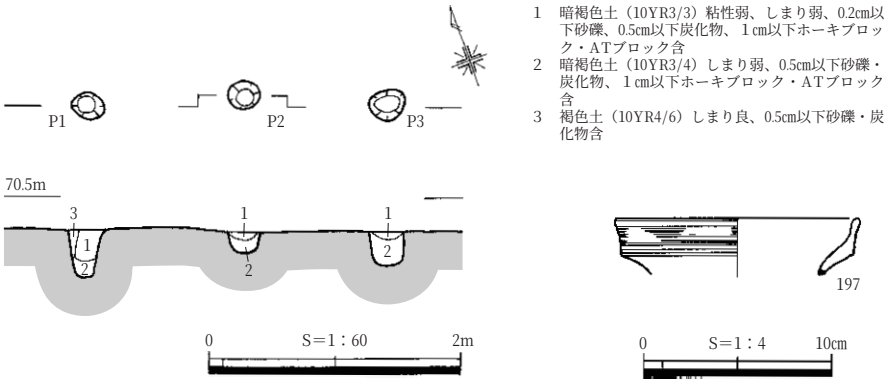
調査区南西側、G～H24・25グリッド、標高約71.3～71.4mの傾斜変換点付近を等高線に沿うように走る。東側にSS4、西側にSA2が隣接する。

北側は後世の撹乱溝によって切られており、現存で長さ8.86m、幅0.3～1.25m、深さは最大17cmを測る。主軸は北東－南西方向であり、南西端部は細くすぼまり、湾曲する。断面は逆台形状で東から西に傾斜を持ち、北東－南西に向かって溝底面の標高が高くなる。



第98図　SD1、SD2、SK15および出土遺物

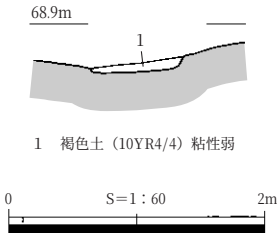




第100図　SA3および出土遺物

埋土は２層に分けられる。１層の暗褐色土が主体であり、その下に２層の褐色土が少量堆積する。埋土の状況から自然堆積と考えられる。

遺物は少量であるが、１層から出土している。埋没する際に、流れ込んだものと思われる。甕194を図化した。出土遺物から弥生時代後期後葉と考えられる。遺構の性格は不明であるが、SA2と主軸方向を同じくし、隣接するように築かれていることから、両者は一連の遺構であった可能性がある。（戸羽）



第99図　SD3

SD2・SK15（第98図、PL. 35・63・65）

SD2

F25グリッド、標高70.0～70.5mの調査区西側の傾斜変換点に位置する。SA4の南端部東側にある。

Ⅱ層除去後、南北方向に伸びる幅1.5m前後の褐色を呈する帯状の広がりを検出した。規模は長軸11.0m、幅0.9～1.9mで、検出面から底面までの深さは南東側で最大20㎝、地形的に低い西側では４～７㎝と浅い。Ⅵ層を底面とし、ほぼ平坦になっている。底面上において、ピットを３基を検出した。規模はそれぞれP1（35×23－25）㎝、P2（34×33－52）㎝、P3（28×24－50）㎝を測る。掘り方はいずれも斜面の傾斜に沿って西側にやや傾く。ピットの性格は不明である。

埋土は褐色土と地山に由来すると思われる黄褐色土からなる。遺物は１層下部から弥生土器片が数点出土している。196は甕の口縁部である。天神川Ⅰ期の範疇に収まるものである。

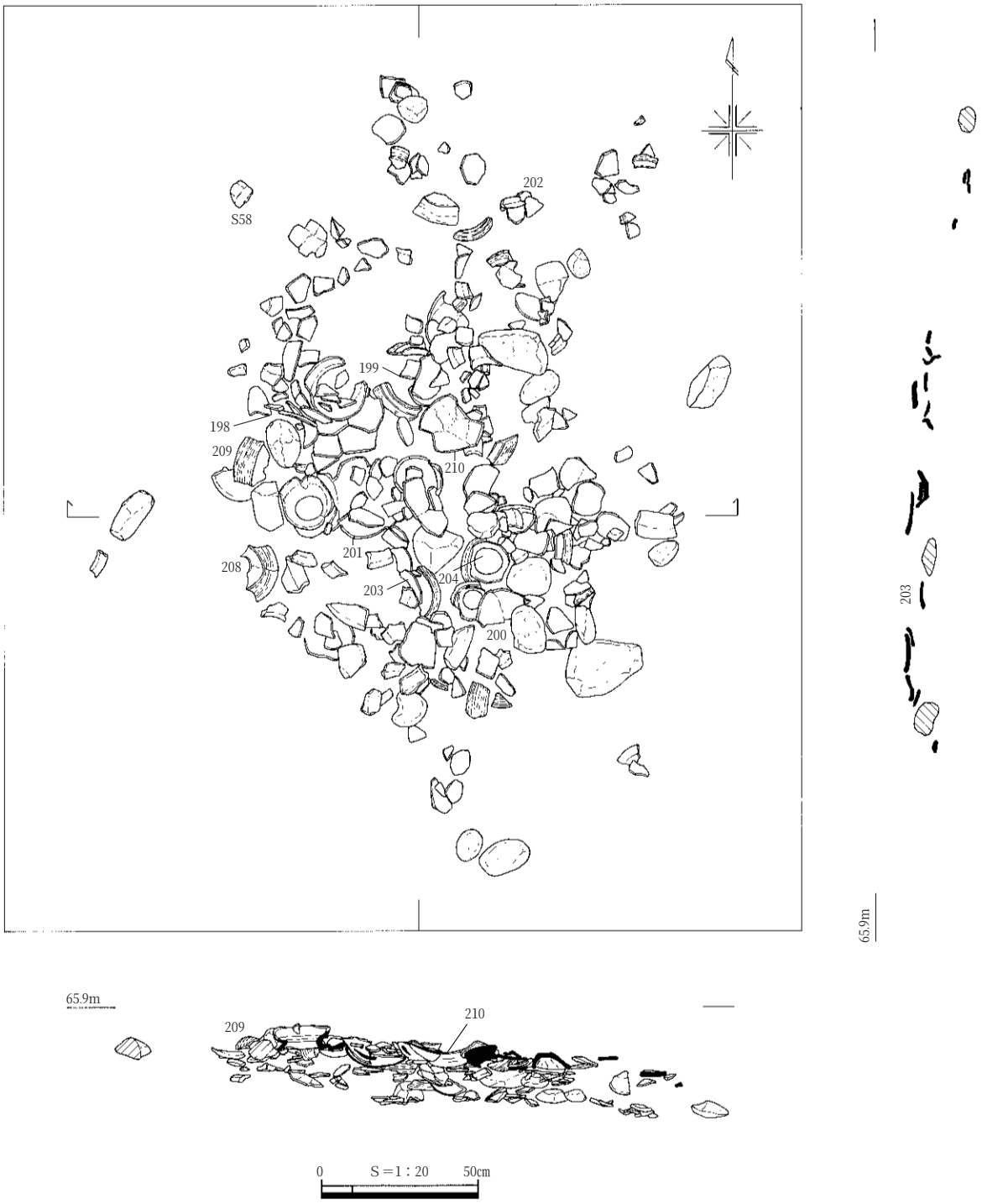
本遺構の時期としては、出土遺物から古墳時代初頭である。溝の用途は不明である。

SK15

F25グリッド、標高69.8mの西側斜面部に位置する。SD2の北端部西側にある。

Ⅱ層除去後、SD2に相当する南北方向に伸びる褐色土の広がりを検出した。検出当初はSD2と本遺構の埋土が酷似しており、SD2の一部分としてとらえていた。埋土を掘り下げてSD2の底面を検出したところで、本遺構が存在することが判明した。本遺構とSD2は近接しているものの、土坑と溝の掘り方肩口が互いに離れる位置にあることから、SD2に伴わない単独の土坑と判断して調査を行った。

規模は長軸106㎝、短軸48㎝であり、検出面からの深さは東側で最大27㎝である。底面はほぼ平坦で、掘り方断面は方形を呈する。



第101図　土器溜り遺物出土状況

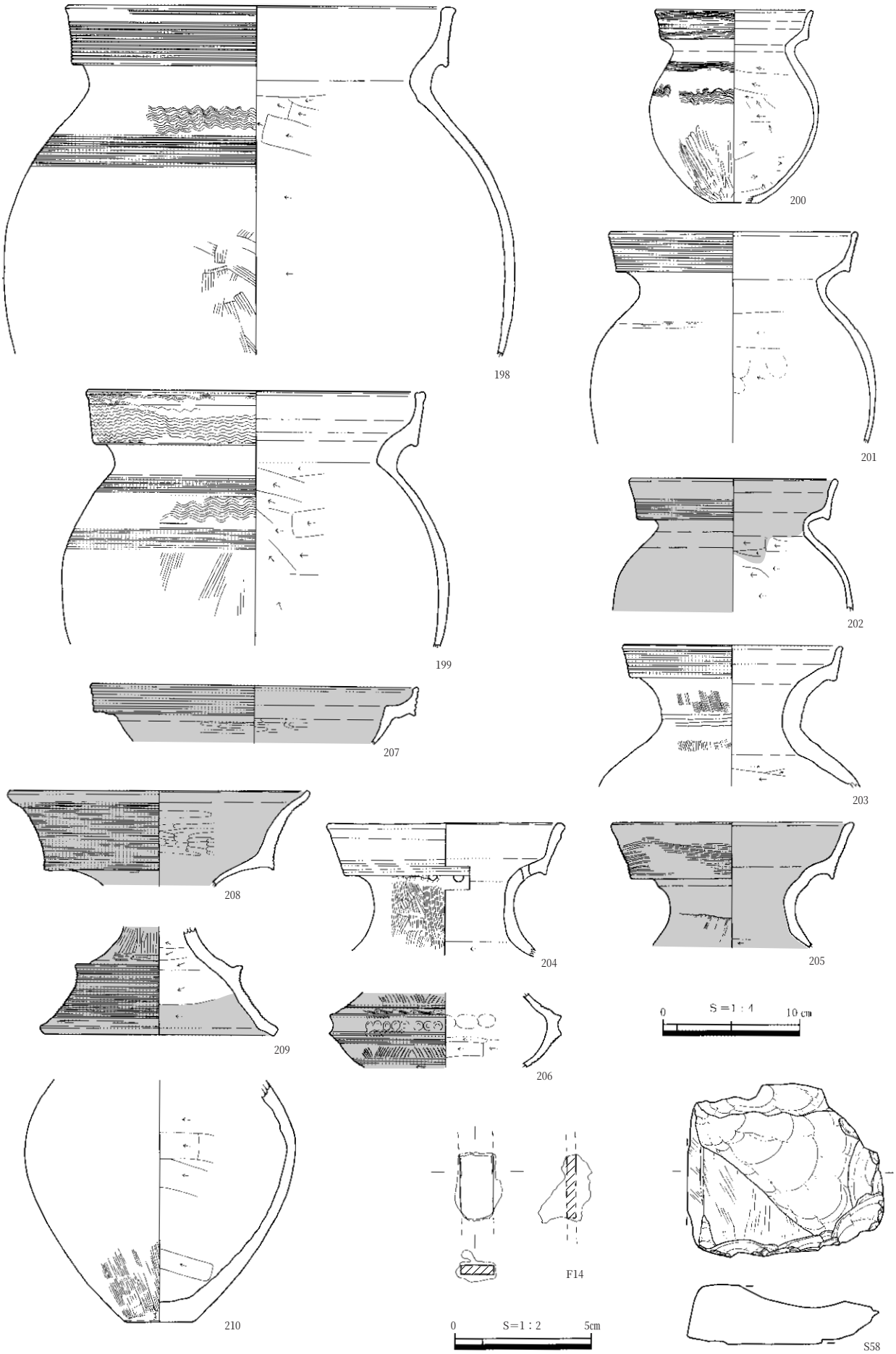
埋土は２層からなり、レンズ状の堆積を呈することから自然堆積によるものと考えられる。遺物は甕の口縁部を含む弥生土器片が５点出土した。いずれも２層上面から出土している。埋没当初に流入したものであろうか。本遺構の用途については不明である。

出土遺物は１点のみ図化している。195は口縁部に７条以上の平行沈線をめぐらせ、口縁上部はナデ消している。本遺構の時期は、出土土器がⅤ－３期の特徴を示すことから、弥生時代後期後葉である。

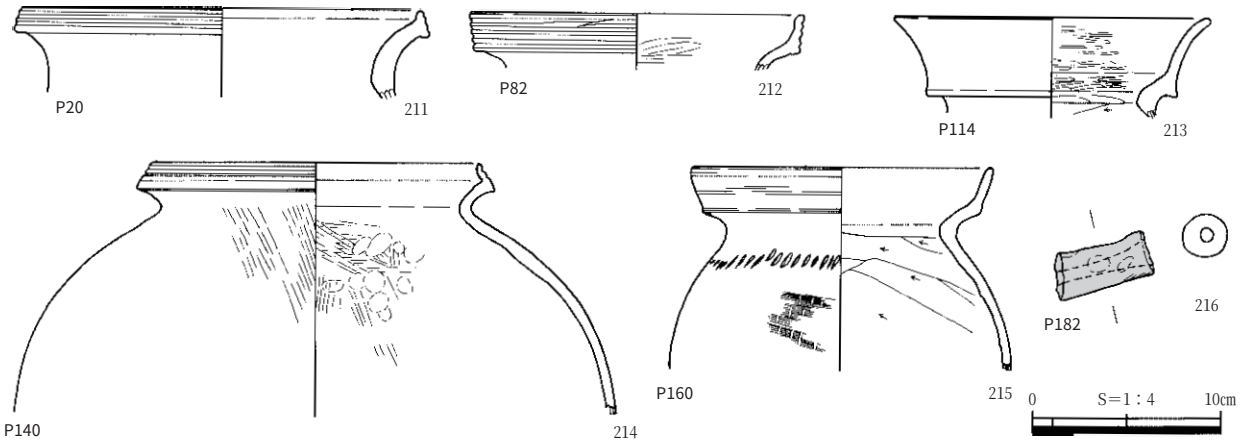
（淺田）

SD3（第99図、PL. 35）

調査区の北西部AD～AC22グリッド、標高68.5～68.7mの傾斜変換点付近に位置する。



第102図　土器溜り出土遺物



第103図　ピット内出土遺物

北東―南西方向に軸をとり、長さは6.1m、幅は最大で1.15m、深さは最大で21㎝を測る。埋土は単層で自然堆積によるものと考えられる。図化できなかったが、埋土中から弥生時代後期後葉とみられる土器片が出土しており、その頃の遺構である可能性が高い。（恩田）

（８） 柵列・土器溜り

SA3（第100図）

C23グリッド、標高70.2mの尾根平坦面に位置し、西側にSB12が近接する。SB12南側堀方の軸に揃うように南東側に位置し、柱穴３基が東西方向に並ぶ。北側に平行するような位置で直線的に並ぶピットが確認されているが、ピット底面のレベルが著しく不均一で、埋土も明らかに違っていることから、掘立柱建物とはならず柵列と認識した。P1については柱痕跡が確認できたが、P2～3については確認できなかった。

遺物はP2の１層からⅤ－２期に比定される甕口縁部が１点出土している。この遺物は、遺構廃絶後ピットが埋まる段階で流れ込んだものと考えられる。

本遺構の時期は出土遺物から、弥生時代後期中葉以降と考えられる。（原田）

土器溜り（第101・102図、PL.54・57・58・67・75・76）

D19グリッド、谷底に向かい傾斜が緩やかになった場所に形成された土器溜りで、南北2.6m、東西2.0mの範囲に広がる。土器が集積する底面レベルは標高65.55～65.75mを測り、地形に沿って東側がわずかに低くなるが、土器を集積した時点ではほぼ平坦であったと推定される。本遺構は谷部⑤層（第５節参照）上面近くに形成されており、上部の土器は谷部③層に被覆されていた。土器溜りを構成する遺物は、甕198～202・210・壺203～205・台付装飾壺206・高坏207・器台208・209・扁平片刃石斧を転用した砥石S58、鉄器片F14のほか径10～25㎝の円礫・角礫などである。いずれも破損した状態で、完形に復元できるものはなかった。

図示したものは出土遺物のうちの一部である。甕198は大型品で、口縁部外面に二枚貝の腹縁による多条平行沈線をめぐらせ、上端が口縁端部調整時のナデによって消されている。口縁端部はわずかに外方につまみ出される。199の口縁端部の仕上げも同じである。肩部には多条平行沈線が２段にめぐらされ、その間に波状文を施す。200は上下２段に幅狭の板状工具を用いたとみられる多条平行沈線をめぐらせた後に中央部をナデ消している。そのナデ消しによって口縁部は外反する。底部は小さ

な平坦面をもつ。201・202は複合口縁を薄く幅広に拡張し、口縁上端はやや肥厚して丸みをもち、下端はわずかに下方へ突出している。202は多条平行沈線施文後上半をナデ消す。壺203は頸部に浅い幅広の沈線を螺旋状にめぐらす。204・205とも外傾する複合口縁上部を大きく拡張しており、上半の多条平行沈線はナデ消される。204は2個一対となる蓋留めの孔を２ヶ所に配す。205は複合口縁下端及び頸部の成形にともなって頸部上半に段が生じている。206は台付装飾壺の胴部破片で、算盤玉状を呈す胴部外面には、突帯の上下に３条一単位の平行沈線で上下を画された内側に二枚貝腹縁による連続刺突文をハの字に配した文様帯が形成されている。突帯には二重圏の同心円スタンプ文が連続して押圧され、突帯の上位には同一原体によるスタンプ文間を貝殻腹縁の刺突でつないだ連続渦文をめぐらせている。外面は赤彩されている。207は内外面が赤彩された高坏で、坏口縁部が複合口縁状を呈すタイプのものである。内外面とも横方向の丁寧なミガキによって仕上げられている。器台208・209も内外赤彩されており、筒部を欠くが同一個体である。受部・脚部とも複合口縁状で大きく拡張・外反している。それぞれ端部付近で屈曲の稜が生じている。S58は石材及び断面形等の特徴から扁平片刃石斧の破損品と推察され、側面が再加工され全体として不整な平行四辺形状となること、表面に筋状の窪みが認められることなどから砥石に転用されたものと考える。F14は断面方形の鉄器片で両端を欠く。錆膨れによる変形が著しい。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代後期後葉に形成されたと考える。赤彩土器の多さ、台付装飾壺の存在、そして図化できなかったが赤彩された注口土器片の出土等を総合すれば、祭祀後に破砕した不用品を廃棄したものと想定する。（高尾）

（９）　ピット出土遺物

P20・82・114・140・160・182（第103図、PL. 66）

調査区内では、尾根部を中心に、約360基のピットを検出した。個別に半裁、土層断面の確認を行い、柱列として軸を揃えるものについては掘立柱建物跡の柱穴、柵列として報告した。それ以外にも柱痕跡が残るもの、中には遺存状態の良好なものがあり、土器等の遺物が出土している。

J22グリッドにあるP20の埋土中からは口縁部外面に３条の凹線をめぐらせた甕211が出土した。B21グリッド、SI23の埋土を掘り込むP82の埋土中からは甕の口縁部212が出土している。212は口縁部を直立する口縁部の外面に４条の凹線が施される。I23グリッドに位置するP114はSB1に隣接しており、規模は長軸40㎝、短軸35㎝、深さ28㎝を測る。埋土中から出土した甕213は口縁端部を外反させ、口縁下端部を斜め下方に突出させる。P140はSS2の西隣に位置し、長軸30㎝、短軸18㎝、深さ12㎝と比較的小規模なものであるが、埋土上面から甕214が出土している。口縁部外面に２条の凹線をめぐらせる。P160はB23グリッド、SK18の西隣に位置し、長軸44㎝、短軸28㎝、深さ20㎝を測る。埋土中から甕215が出土した。215の口縁部はやや外傾しながら立ち上がり、頸部直下には一列の刺突文が施される。P182は柱痕跡が明瞭に認められ、規模は長軸38㎝×短軸35㎝のほぼ円形を呈し、深さ43㎝を測る。埋土中から注口216が出土した。外面全体を赤色塗彩する。（大川）